
狭山市

戸張 / 中原

県道所沢堀兼狭山線（狭山市地内）埋蔵文化財発掘調査報告

1999

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



中原遺跡調査区全景



中原遺跡調査区全景

序

埼玉県では、地域社会の中で県民がゆとりと安らぎのある生活ができるように、豊かな彩の国づくりをめざしています。

この国づくりの中では、環境との調和を図りながら、生活者重視の立場にたって、利便性や快適性を高める生活基盤の整備や福祉の充実などを進め、真に豊かさを実感できる質の高い県民生活の実現を目指しています。

人口の増加が続く中で、県民の生活を支えるための道路網の整備も、新しい発展と豊かな生活を支える基盤づくりのためには欠かせないものであり、県道所沢堀兼狭山線の建設もこの施策の一つとして計画されたものです。

県道所沢堀兼狭山線の道路事業用地内には、下向沢遺跡、中原遺跡、戸張遺跡など複数の遺跡の所在が確認され、その取扱いについては、関係機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむをえず記録保存の措置を講じることになりました。そのための発掘調査は、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、当事業団が埼玉県の委託を受けて実施いたしました。

遺跡の所在する狭山市は、埼玉県の南西部にあって、工業団地を中心とした近代的な工業都市であると共に、入間川によって育まれた肥沃な土地をもとにした野菜などの産地でもあります。また、交通の利便性からベッドタウンとしても発展しております。

この豊かな農地を生みだした入間川は、旧石器時代から現代に至るまでの長い間、地域生活のさまざまな基盤を支えており、流域には数多くの遺跡が残されています。

今回報告いたします戸張遺跡、中原遺跡も、入間川右岸に位置する遺跡であります。

発掘調査の結果、戸張遺跡では平安時代の集落が検出され、墨書土器や須恵器の硯をはじめとするさまざまな遺物が発見されました。中原遺跡から発見された縄文時代の落とし穴や住居跡などは、五千年以上前の人々の生活をうかがい知ることができるものです。

これらの成果をまとめた本書を、埋蔵文化財の保護・普及の資料として、また、学術の基礎資料として、広く御活用いただければ幸いと存じます。

刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただいた埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、埼玉県土木部道路建設課、川越土木事務所、狭山市教育委員会並びに地元関係者各位に深く感謝申し上げます。

平成11年8月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例言

1. 本書は下記の遺跡の発掘調査報告書である。
遺跡名：戸張遺跡（注記略号 TBR）
所在地：埼玉県狭山市狭山537他
指示通知
平成9年10月23日付け 教文第2-125号
遺跡コード番号：22-026
遺跡名：中原遺跡（注記略号 NKHR）
所在地：埼玉県狭山市沢746他
指示通知
平成10年9月17日付け 教文第2-102号
遺跡コード番号：22-038
2. 発掘調査は県道所沢堀兼狭山線建設事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県の委託により、埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
3. 発掘調査は当事業団の栗島義明、鈴木孝之、吉田稔、大屋道則が担当して、平成9年11月1日から平成10年1月31日、平成10年7月1日から平成10年9月30日まで実施した。
整理報告書作成作業は大屋が担当し、平成11年4月8日から平成11年10月31日まで行った。
4. 基準点測量と航空写真は、戸張遺跡をアスコエン지니어リング株式会社に、中原遺跡を朝日航洋株式会社に、木製品・炭化種子・人骨・胎土の分析は株式会社第四紀地質研究所にそれぞれ委託した。
5. 写真は発掘調査時の撮影を各発掘担当者が行い、遺物の撮影は大屋が行った。
6. 出土遺物の実測は大屋が行った。
7. 墨書の判読は、さいたま文学館の宮瀧交二氏に、金属器の実測は瀧瀬芳之氏に依頼した。
8. 本書の執筆は、I-1を埼玉県生涯学習部文化財保護課が、中原遺跡の石器を栗島義明が、縄文時代の遺物を君島勝秀が、他を大屋が行った。
9. 本書の編集は、資料部資料整理第1担当の大屋が行った。
10. 本書にかかる資料は平成11年度以降県立埋蔵文化財センターが保管する。
11. 本書の作成にあたり下記の方々から御教示、御協力を賜った（敬称略）。
粕谷仁一郎 狭山市教育委員会

凡例

1. X・Y座標による表示は、国家標準直角座標第IX系に基づく座標値を示し、方位は全て座標北を表す。
2. 縮尺は原則として以下のとおりである。
全測図 1：600 住居跡 1：60 土壌 1：60
井戸跡 1：60 ピット 1：60
溝跡 1：80 1：120 掘立柱建物跡 1：60
縄文土器拓影図 1：3
その他の遺物実測図 2：3 1：2 1：4
3. 全測図等に示す遺構の略号は以下のとおりである。
住居跡 S J 土壌 SK 井戸跡 SE
ピット P 溝跡 SD 掘立柱建物跡 SB
4. 遺物観察表の凡例は、以下の通りである。
計測値が（）で囲まれたものは、推定値を示す。
胎土は、以下の記号で示した。
A石英 B白色粒子 C長石 D角閃石
E赤色粒子 F黑色粒子 G雲母 H片岩
I白色針状物質 J砂粒 Kチャート L小礫
焼成を、風化具合から次のように判断した。
1硬質 2良好 3普通 4不良 5軟質

目次

口絵	(3) 土壌	44
序	(4) 井戸跡	48
例言	(5) 溝	48
凡例	(6) 金属遺物	49
目次	(7) 石器	50
挿図目次	(8) グリッド取り上げ遺物	51
図版目次	IV 中原遺跡	52
表目次	1. 遺跡の概要	52
I 調査の概要	2. 遺構と遺物	53
1. 発掘調査に至る経過	(1) 縄文時代の住居跡	53
2. 発掘調査・報告書作成の経過	(2) 平安時代の住居跡	53
3. 発掘調査、整理・報告書作成の組織	(3) 掘立柱建物跡	59
II 遺跡の立地と環境	(4) 土壌	60
III 戸張遺跡	(5) 溝跡	73
1. 遺跡の概要	(6) 遺構外出土遺物	75
2. 遺構と遺物	(7) 調査区周辺採集遺物	76
(1) 住居跡	V 結語	77
(2) 掘立柱建物跡		

挿図目次

第1図 埼玉県の地形図	4	第15図 第5号住居跡	18
第2図 周辺の遺跡	5	第16図 第6号住居跡出土遺物	19
第3図 遺跡周辺の地形図	7	第17図 第6号住居跡	20
第4図 戸張遺跡調査区全体図	8	第18図 第7号住居跡出土遺物	21
第5図 第1号住居跡	9	第19図 第7号住居跡	22
第6図 第1号住居跡出土遺物	10	第20図 第8号住居跡	23
第7図 第2号住居跡	11	第21図 第8号住居跡出土遺物	23
第8図 第2号住居跡出土遺物 (1/2)	12	第22図 第9号住居跡	24
第9図 第2号住居跡出土遺物 (2/2)	13	第23図 第9号住居跡出土遺物	25
第10図 第3号住居跡	14	第24図 第10号住居跡出土遺物	26
第11図 第3号住居跡出土遺物	15	第25図 第10号住居跡	27
第12図 第4号住居跡出土遺物 (1/2)	15	第26図 第11号住居跡出土遺物	28
第13図 第4号住居跡・出土遺物 (2/2)	16	第27図 第11号住居跡	28
第14図 第5号住居跡出土遺物	17	第28図 第12号住居跡・出土遺物	29

第29図	第13号住居跡出土遺物	29	第53図	遺構外・表土出土遺物	51
第30図	第13号住居跡	30	第54図	中原遺跡調査区全体図	52
第31図	第1号掘立柱建物跡(1/2)	31	第55図	第5号住居跡	53
第32図	第1号掘立柱建物跡(2/2)	32	第56図	第5号住居跡出土遺物	54
第33図	第2号掘立柱建物跡	33	第57図	第1号住居跡出土遺物	54
第34図	第3号掘立柱建物跡	34	第58図	第1号住居跡	55
第35図	第3号掘立柱建物跡出土遺物	35	第59図	第2号住居跡出土遺物	55
第36図	第4号掘立柱建物跡	36	第60図	第2号住居跡	56
第37図	第5号掘立柱建物跡出土遺物	37	第61図	第3号住居跡	56
第38図	第6号掘立柱建物跡出土遺物	37	第62図	第4号住居跡	57
第39図	第5号掘立柱建物跡	38	第63図	第4号住居跡出土遺物	58
第40図	第6号掘立柱建物跡	39	第64図	第1号掘立柱建物跡	59
第41図	第7号掘立柱建物跡・出土遺物	40	第65図	第1～11号土壌	61
第42図	第8号掘立柱建物跡	41	第66図	第12～22号土壌	63
第43図	第8号掘立柱建物跡出土遺物	42	第67図	第23～34号土壌	65
第44図	第9号掘立柱建物跡	42	第68図	第35～45号土壌	67
第45図	第10号掘立柱建物跡	43	第69図	第46～55号土壌	69
第46図	第1～9号土壌	44	第70図	第56～64号土壌	70
第47図	第4号土壌出土遺物	45	第71図	第65～71号土壌	71
第48図	第10～16号土壌	46	第72図	第72～78号土壌	73
第49図	第9号土壌出土遺物	47	第73図	第1・2号溝跡	74
第50図	第1号井戸跡・第1号溝跡	48	第74図	遺構外・表土出土遺物	75
第51図	金属製品	49	第75図	調査区周辺採集遺物	76
第52図	石器・石製品	50			

図版目次

図版1	戸張遺跡一区全景(南東より)	図版3	第4号住居跡遺物出土状況
	戸張遺跡一・二区全景(北西より)		第4号住居跡出土遺物
図版2	第1号住居跡		第5号住居跡
	第1号住居跡出土遺物		第5号住居跡出土遺物
	第2号住居跡		第6号住居跡
	第2号住居跡遺物出土状況		第6号住居跡出土遺物
	第2号住居跡遺物出土状況		第7号住居跡
	第2号住居跡出土遺物		第7号住居跡出土遺物
	第3号住居跡	図版4	第8号住居跡
	第4号住居跡		第8号住居跡出土遺物

	第9号住居跡	図版18	中原遺跡調査区全景（北より）・（東より）
	第10号住居跡	図版19	第1号住居跡
	第10号住居跡出土遺物		第1号住居跡遺物出土状況・出土遺物
	第11号住居跡		第1号住居跡カマド
	第12号住居跡		第2号住居跡
	第13号住居跡		第2号住居跡カマド
図版5	第1号掘立柱建物跡		第3号住居跡
	第2号掘立柱建物跡		第3号住居跡カマド
	第3・4号掘立柱建物跡	図版20	第4号住居跡
	第5号掘立柱建物跡		第4号住居跡遺物出土状況
	第6号掘立柱建物跡		第4号住居跡カマド
	第7号掘立柱建物跡		第4号住居跡カマド出土遺物
	第8号掘立柱建物跡		第5号住居跡
	第9・10号掘立柱建物跡		第5号住居跡張出部
図版6	第4号土壌遺物出土状況		第5号住居跡出土遺物
	第5号土壌		第5号住居跡炉
	第1号井戸跡	図版21	第1・2・3・4・5・6・7・8号土壌
	第1号井戸跡土層断面	図版22	第9・10・11・12・16・17・18・19号土壌
	一区全景（南東より）	図版23	第20・21・22・23・24・25・27・28号土壌
	一区全景（北西より）	図版24	第29・30・31・32・33・34・35・36号土壌
	二区全景（北西より）	図版25	第37・38・39・40・41・42・44・45号土壌
	二区全景（南東より）	図版26	第46・47・48・49・50・51・53・54号土壌
図版7	第1・2号住居跡出土遺物	図版27	第55・56・57・58・59・60・61・64号土壌
図版8	第2・3・5号住居跡出土遺物	図版28	第66・67・68・69・70・71・72・73号土壌
図版9	第5・6・7号住居跡出土遺物	図版29	第74・75・76・77・78号土壌
図版10	第7・8・9・10号住居跡出土遺物		第1号掘立柱建物跡
図版11	第10・12号住居跡出土遺物		第1号溝跡
図版12	第1・2・4号住居跡出土遺物		第2号溝跡
図版13	第2・4・5・10号住居跡出土遺物	図版30	第1号住居跡出土遺物
図版14	第7・8・10号住居跡出土遺物		第4号住居跡出土遺物
図版15	第4号土壌出土遺物・遺構外出土遺物		第5号住居跡出土遺物
図版16	戸張・中原調査区内出土鉄製品・石器・石製品	図版31	第5号住居跡出土遺物
図版17	第4号住居跡出土羽口・鉄滓		遺構外出土遺物

表 目 次

表1 戸張遺跡検出住居跡一覧表…………… 30

表2 戸張遺跡検出掘立柱建物跡一覧表…………… 32

I 調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では、多様化する県民の生活圏の拡大への対応や、高度化する産業活動の円滑化などを図るため、体系的な道路網整備を行っているところである。県道の整備促進については、県内1時間道路網構想を目指した道路網整備を図るとともに、県内地域間の連携を高めることを主要な目的としている。これらの道路網整備構想のもと、県道所沢掘兼狭山線の建設事業が計画された。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課では、このような施策の推進に伴う文化財の保護について、従前より関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

平成5年7月26日付け道建第196号で、土木部道路建設課長より、建設事業地内における埋蔵文化財の所在及び取扱いについての照会を受けた。これに対し、文化財保護課では平成5年5月29日付け教文第802-1号「道路事業地（県道堀兼根岸線）内における埋蔵文化財の所在及び取扱いについて」で、道路建設課長あて次のとおり回答した。

1 埋蔵文化財の所在

名称	種別	時代	所在地
戸張遺跡 (22-026)	集落跡	縄文・奈良 平安	狭山市上奥富 字 戸張他
中原遺跡 (22-038, 039)	集落跡	縄文・奈良 平安	狭山市入間川 字 中原他

2 取扱い

上記の埋蔵文化財包蔵地は、現状保存するのが望ま

しいが、事業計画上やむを得ず現状を変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づき文化庁長官あての発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施してください。

なお、発掘調査の実施については、別途協議してください。

なお、遺構分布の状況を明瞭にするため、平成9年9月26日に戸張遺跡の、平成10年2月3日に中原遺跡の範囲確認調査を行っている。

発掘調査については、実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と道路建設課、文化財保護課の三者により、調査方法、期間、経費等の問題を中心に協議が行われた。その結果戸張遺跡は平成9年11月1日から平成10年1月31日まで、中原遺跡は平成10年7月1日から平成10年9月30日の期間で、発掘調査を実施することとなった。

発掘調査に先立って、事業者側から文化財保護法第57条の3の規定に基づく発掘通知が、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から同法第57条第1項の規定に基づく発掘調査届が提出された。

発掘調査に係る通知番号は次のとおりである。

戸張遺跡 平成9年10月23日付け
教文第2-125号
中原遺跡 平成10年9月17日付け
教文第2-102号

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 戸張遺跡の調査

戸張遺跡の調査は、平成9年11月1日から平成10年1月31日にわたって実施した。調査対象に関わる面積は3,500㎡であった。

11月上旬、重機による表土除去を行った。表土の除去と平行して遺構の確認作業を進めて行った。

11月中旬、遺構の確認作業とともに個別遺構の発掘作業を開始した。

11月下旬、掘りあがった遺構から、順次写真撮影を進め図面作成を行った。

12月中旬、写真撮影を進めるとともに、遺構の平面図を作成していった。

1月上旬、積雪により数日間作業が困難となった。

1月中旬、調査が終わり、航空写真撮影を行った。

1月下旬、埋め戻しを行い、機材を撤収して平成9年度の調査を終了した。

(2) 中原遺跡の調査

中原遺跡の調査は、平成10年7月1日から平成10年9月30日にわたって実施した。調査対象に関わる面積は4,000㎡であった。

7月上旬、重機による表土除去を行った。表土除去にあたっては、調査区の北側に西武新宿線の線路が隣接していたので、影響を考慮して、調査区の最北端にトレンチを入れ、遺構がないことを確認して、直ちに埋め戻した。その後、遺構が出現した地点から、面的に表土剥ぎを行った。

廃土は、隣接した事業用地内に、ダンプを使用して運搬した。途中、雨などによる廃土の流出を防ぐために、何度か重機による展圧を行った。

表土除去を行った後の確認面は、牛蒡掘りのトレンチャーによる攪乱が著しかった。攪乱が甚だしい地点では、地山の残存率が50%以下であった。従って、一般的に遺構の残存状態は良好ではなかった。

重機による表土の除去終了後に、補助員による手作業での遺構の確認作業を進めて行った。

7月下旬、調査区の南側から順次、手作業による個別遺構の発掘を行った。個別遺構の調査では、初めに覆土の半分を除去し、堆積状態の記録を作成したうえで残りの覆土を除去し完掘した。

8月上旬、発掘作業の終わった遺構から、順次写真撮影を行い、写真撮影が終わったグリッドから、平面図の作成に取りかかった。

8月中旬、平面図の作成が終わったグリッドから、順次標高の測定を行い、記載をした。また、廃土置き場に雑草が茂ったために、近隣農地への影響を考慮して、草刈り機による除草作業を行った。

9月中旬、調査が終わり、航空写真撮影を行った。

9月下旬、埋め戻しを行い、機材を撤収して平成10年度の調査を終了した。

(3) 整理・報告書作成

整理作業は平成11年4月8日から平成11年10月31日にわたって実施した。

4月当初から遺物の水洗と注記を行った。

4月中旬から図面の整理と遺物の接合に分かれて、平行しておのおの作業を進めていった。

4月下旬には遺構の第二次原図の作成を始めた。

5月上旬には接合が終わった遺物から、順次実測作業を行った。

5月下旬には戸張遺跡から出土した金属器をまとめて、洗浄作業とエックス線撮影作業を行った。

6月上旬には遺構図面のトレース作業を開始した。

6月中旬には遺物実測図のトレース作業を開始した。

7月上旬には遺構図面の仮版組を行い、本文の執筆を開始した。

7月中旬には遺物図版の仮版組を行い、観察表の作成をトレースと遺物の写真撮影を行った。

8月には編集作業を進めた。

8月末に入札、9月の校正作業を経て、10月末に報告書を印刷した。

3. 発掘調査・整理・報告書作成の組織

主体者 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査 (平成9年度)

理事長 荒井 桂
 副理事長 富田 真也
 専務理事 塩野 博
 常務理事兼管理部長 稲葉 文夫
 理事兼調査部長 梅沢 太久夫

管理部

専門調査員兼経理課長 関野 栄一
 主任 江田 和美
 主任 福田 昭美
 主任 菊池 久
 庶務課長 依田 透
 主任 西沢 信行
 主任 長滝 美智子
 主任 腰塚 雄二

調査部

調査部副部長 今泉 泰之
 調査第三課長 浅野 晴樹
 主任調査員 栗島 義明
 主任調査員 吉田 稔

(2) 発掘調査 (平成10年度)

理事長 荒井 桂
 副理事長 飯塚 誠一郎
 常務理事兼管理部長 鈴木 進

管理部

専門調査員兼経理課長 関野 栄一
 主任 江田 和美
 主任 福田 昭美

主任 菊池 久
 庶務課長 金子 隆
 主任 田中 裕二
 主任 長滝 美智子
 主任 腰塚 雄二

調査部

調査部長 谷井 彪
 調査部副部長 水村 孝行
 調査第二課長 杉崎 茂樹
 主任調査員 鈴木 孝之
 主任調査員 大屋 道則

(3) 整理事業 (平成11年度)

理事長 荒井 桂
 副理事長 飯塚 誠一郎
 常務理事兼管理部長 広木 卓

管理部

管理部副部長兼経理課長 関野 栄一
 主任 福田 昭美
 主任 腰塚 雄二
 主任 菊池 久
 庶務課長 金子 隆
 主任 田中 裕二
 主任 江田 和美
 主任 長滝 美智子

資料部

資料部長 高橋 一夫
 専門調査員兼資料部副部長 石岡 憲雄
 主任調査員 大屋 道則

II 遺跡の立地と環境

戸張遺跡・中原遺跡は、埼玉県狭山市の狭山と沢に所在し、両遺跡は、西武線を挟んで500mほどの距離にある。

遺跡の所在する狭山市は、埼玉県の西部にあり、市の北西部には、南西から北東に向かって入間川が流れている。入間川は上流では名栗川と呼ばれ、外秩父山地の伊豆ヶ岳、武川岳などを源流として、幾つかの小河川と合流して山間部を南東に流下したのち、北東に流路を変えて狭山市に至り、川越付近で荒川に合流している。

狭山市は、入間川によって大きく二分されており、左岸は入間台地、右岸は武蔵野台地となっている。この台地の縁辺には、入間川が河岸段丘を形成しており、この段丘となっている台地の縁辺部に多くの遺跡が立地している。

戸張遺跡・中原遺跡が所在する入間川右岸には、久

保川、不老川といった河川が流れており、遺跡は、入間川の河岸段丘の縁辺部や、河川の流域にそって分布している。

戸張遺跡・中原遺跡は、これらの河川の中で、久保川流域に位置している。

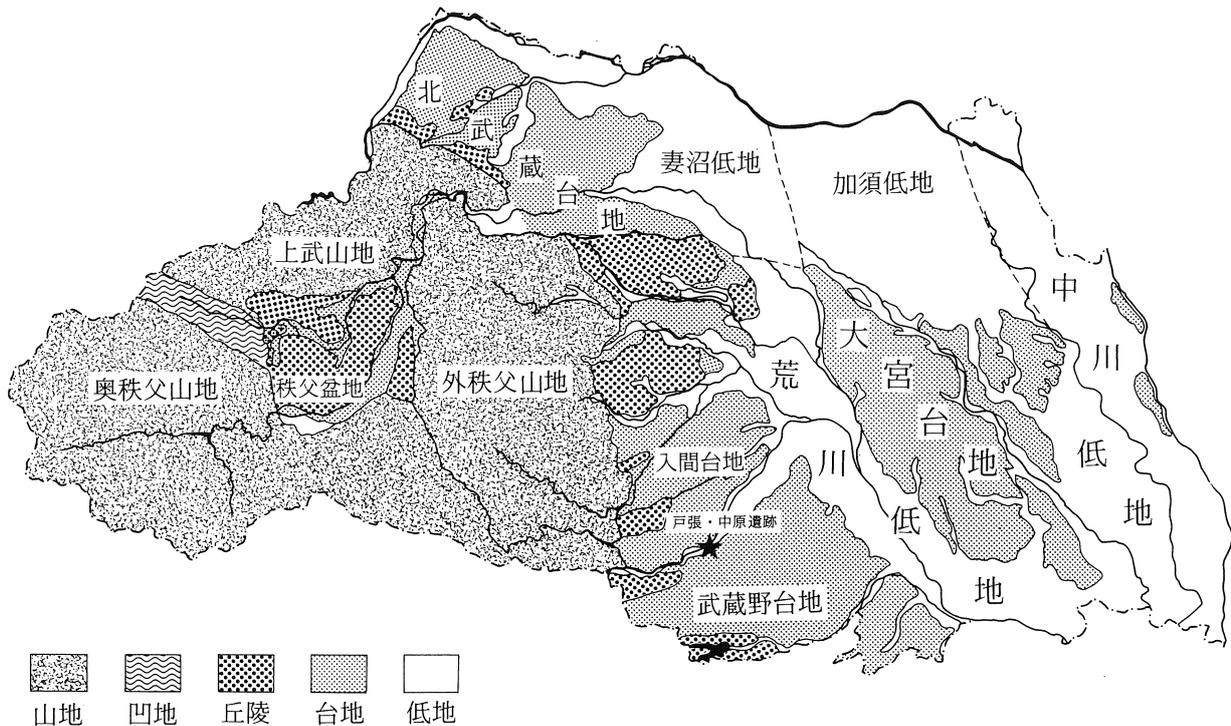
久保川は、狭山市のほぼ中央部を東西方向に流れる川で、狭山市立入間川東小学校付近、狭山市駅東口付近、第二老人福祉センター「寿荘」付近のそれぞれに水源を持ち、川越市に至って不老川と合流している。戸張遺跡・中原遺跡ともに、この久保川左岸に立地している。

以下に周辺の遺跡について概述する。

旧石器時代では、久保川流域の上中原遺跡からナイフ形石器が、入間川左岸の西久保遺跡からは、ナイフ形石器などの石器集中や礫群が検出されている。

縄文時代草創期には、入間川右岸の上広瀬上ノ原遺

第1図 埼玉県の地形図



第2図 周辺の遺跡



0 2 km
1:50000

- | | | | | | |
|------------|----------|-----------|-----------|-------------|----------|
| 1 下向沢遺跡 | 2 中原遺跡 | 3 上中原遺跡 | 4 沢台遺跡 | 5 沢久保遺跡 | 6 下向遺跡 |
| 7 台遺跡 | 8 吉原遺跡 | 9 稻荷上遺跡 | 10 坂上遺跡 | 11 揚櫃木遺跡 | 12 戸張遺跡 |
| 13 峰遺跡 | 14 滝祇園遺跡 | 15 富士見北遺跡 | 16 富士見西遺跡 | 17 石無坂遺跡 | 18 上諏訪遺跡 |
| 19 稻荷山公園遺跡 | 20 字尻遺跡 | 21 丸山遺跡 | 22 宮原遺跡 | 23 高根遺跡 | 24 下双木遺跡 |
| 25 森ノ上西遺跡 | 26 森ノ上遺跡 | 27 今宿遺跡 | 28 西久保遺跡 | 29 上広瀬上ノ原遺跡 | 30 金井上遺跡 |
| 31 宮地遺跡 | 32 八木上遺跡 | 33 八木遺跡 | 34 八木前遺跡 | 35 向山遺跡 | 36 宿東遺跡 |

跡、下双木遺跡で有舌尖頭器が採集されている。

早期では、入間川左岸の高根遺跡、小畦川流域の日高市向山遺跡で、押型文土器が出土している。

入間川左岸の今宿遺跡、西久保遺跡、入間川右岸の中原遺跡などからは、条痕文系の土器群が検出されている。

前期については、中葉から遺跡数の増加が認められ、入間川右岸では揚櫃木遺跡や稻荷上遺跡から、左岸では、八木上遺跡、八木遺跡、八木前遺跡から、黒浜期の住居跡などが検出されている。

久保川流域では、台遺跡から、黒浜期や諸磯期の土器が採集されている。八木上遺跡や金井上遺跡からは、前期終末の土器群も検出されている。

中期では、最も遺跡数が増加している。

入間川右岸では下向沢遺跡、稻荷上遺跡、左岸では宮地遺跡、丸山遺跡などから、住居や遺物が検出されている。

後期では、遺跡数の顕著な減少が認められる。

入間川右岸では、下向沢遺跡、中原遺跡、左岸では、八木前遺跡、高根遺跡、宮原遺跡等が知られているにすぎない。

晩期の遺跡は、周辺では確認されていない。

弥生時代から古墳時代にかけての遺跡は、当該地域では、きわめて少ない。

奈良・平安時代になると、入間川流域に遺跡数が多く、左岸では、宮地遺跡、今宿遺跡、城ノ越遺跡、宮ノ越遺跡等が、右岸では、揚櫃木遺跡等の存在があげられる。

この中で、揚櫃木遺跡は、戸張遺跡と非常に近い位置にあり、関係が想定される集落である。

揚櫃木遺跡は、新狭山駅から西に800m程度の距離にあり、国道16号線が北東から南西にかけて、遺跡範囲の中央を横断している。

地形的には、武蔵野台地の縁辺に位置し、眼下には、入間川による広大な沖積地が広がっている。

揚櫃木遺跡からは、該期の竪穴住居跡が79軒、掘立柱建物跡が12棟検出されており、緑釉陶器、灰釉陶器、

鋤先、鎌、刀子、紡錘車、砥石、土錘、和同開珎、富寿神宝などが出土しており、墨書土器や、金属器が比較的豊富に検出されたことで有名である。

この揚櫃木遺跡については、仲山英樹氏による詳細な分析があり、8世紀後半のⅠ期から、11世紀初頭のⅤ期に分けられている。

竪穴住居跡については、お互いに重複するものが少なく、ある程度のまとまりを持ちながら散在的に分布しており、カマドの方向に一定の規制が認められ、時期の新しい住居跡ほど掘り込みが浅く、平地化の進展が見られるとされている。

掘立柱建物跡については、時期を明確にできるものが少ないとしながらも、高床形態の倉庫が、三つの住居跡群中に、一棟ずつ存在するとしている。

そして、Ⅱa期からⅢa期にかけて、住居跡群には倉庫が伴い、集落共有の倉庫が見いだし得ないとし、ある程度の個別経営の存在を想定している。

また、住居跡群単位の居住地域が限定されていたことが考えられ、居住地域に対する土地の明確な私有権は未だ確立されていなかったとしている。

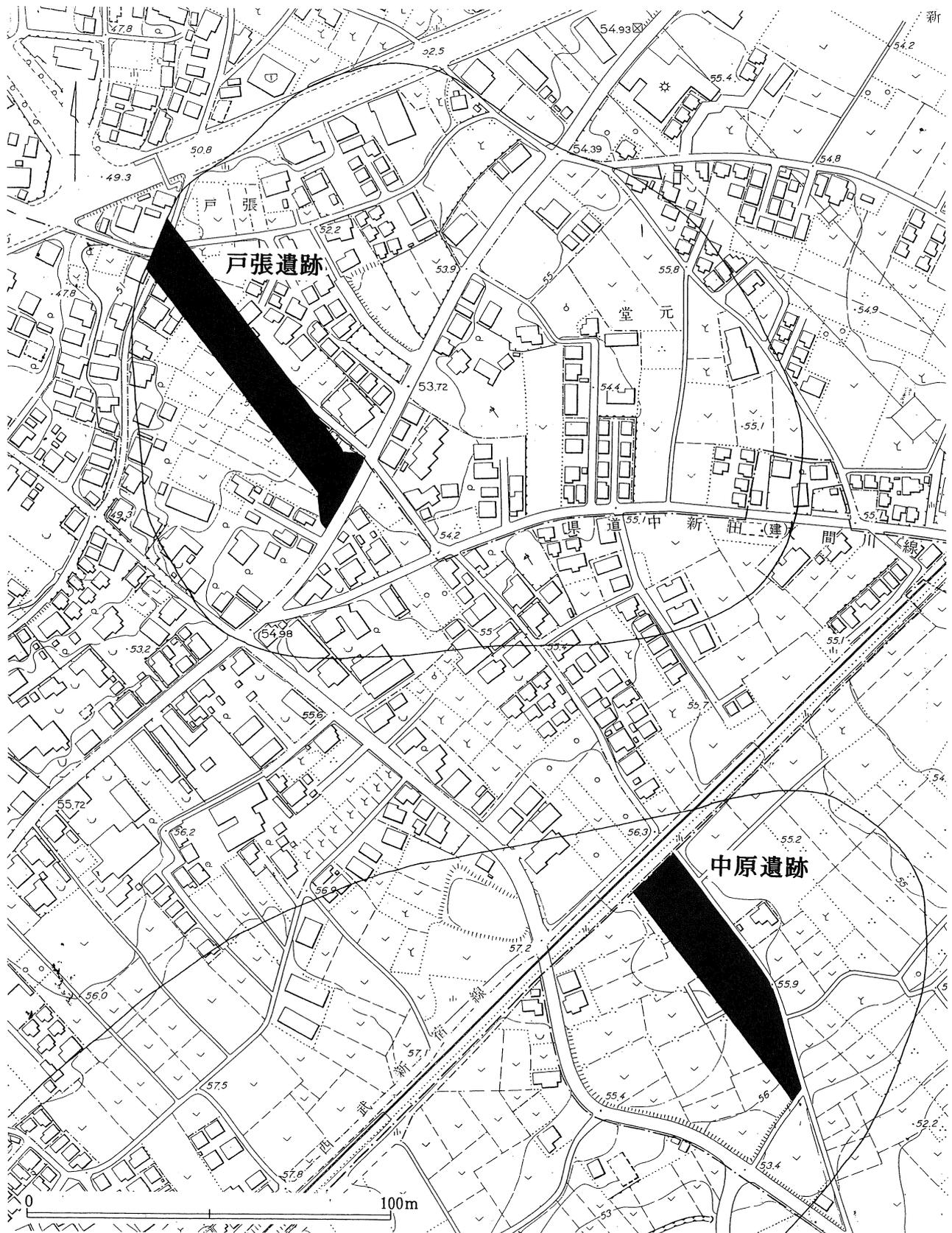
金属器の出土状態の分析については、鎌と比べたときの鋤先の出土点数の少なさに注目し、住居跡群の労働過程における集落からの自立の度合いの弱さを指摘している。

そして、最終的に、揚櫃木遺跡の性格について、入間川沖積面の開墾を目的として、8世紀後半以降に形成された農耕集落であるとしている。

このような問題は、同様な立地環境にある戸張遺跡・中原遺跡を、今回調査して行く上でも、重要な視点であると考えられた。

従って、竪穴住居跡の分布状況と掘立柱建物跡の分布状況、そして両者の分布状況の関係、鉄製品の出土状況と出土比率、あるいは、墨書土器の出土傾向とその内容など、揚櫃木遺跡の分析を契機に提起された問題について、あるいは、揚櫃木遺跡との有機的な連関について、戸張遺跡や中原遺跡の調査時には、検討を進めながら調査を行った。

第3図 周辺の地形図



Ⅲ 戸張遺跡

1 遺跡の概要

戸張遺跡は、狭山市の西北西で、西部新宿線新狭山駅から西へ1 km、国道16号線沿いに位置している。

立地は、入間川右岸の狭山台地上であり、入間川は、台地の西南西から東北東に向かって流れている。飯能丘陵からつながる段丘面の中位段丘にあり、沖積低地との比高差は、およそ15m程度である。

調査区の標高は、52m程度で、調査区の中央には、東方向に開析する浅い谷が入っている。

戸張遺跡の周辺には、中原遺跡、稻荷上遺跡、坂上遺跡、楊櫨木遺跡等が存在し、楊櫨木遺跡は、戸張遺跡と連続すると考えられる。

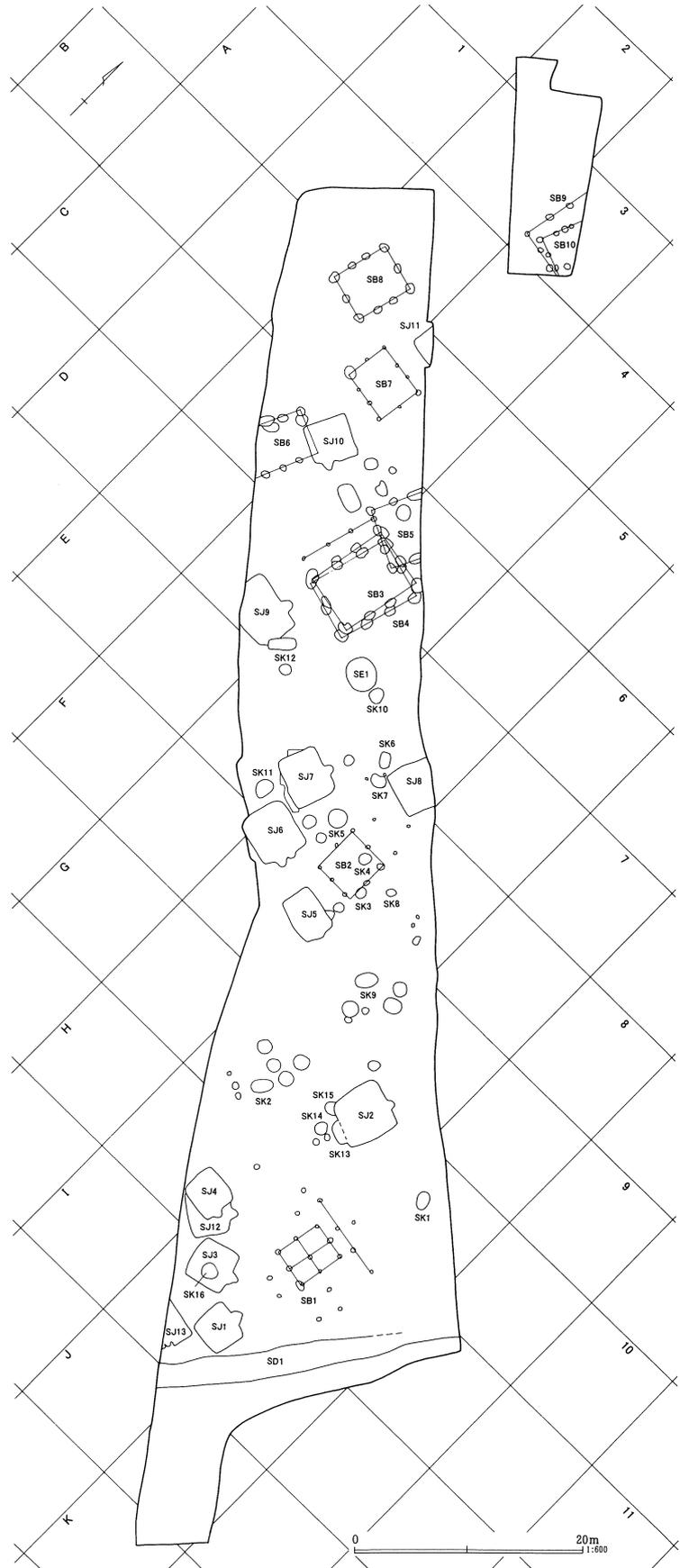
遺構確認面の基盤は、ローム層であり、その直上に堆積した黑色土中からも遺構の存在は辛うじて確認できたが、実際の作業にあたっては、ローム層まで地山を掘削して、確認を行った。

今回の調査では、平安時代の竪穴住居跡13軒、掘立柱建物跡10棟、井戸跡1基、土壇12基、溝1条が確認できた。

もっとも古い遺構は、縄文時代前期の土壇で、大部分の遺構は、平安時代のものであった。

遺物は、須恵器坏、土師器甕の他に、水瓶、円面硯、鉄製紡錘車、鎌、刀子、釘、羽口、墨書土器、灰釉陶器等で、一般集落とは、やや異なった様相がうかがえた。

第4図 戸張遺跡調査区全体図



2 遺構と遺物

(1) 住居跡

戸張遺跡の調査区内からは、住居跡が13軒検出できた。検出した住居跡の中で、8軒は完掘し、1軒は重複のため、4軒は調査区外にかかっていたために、完掘できなかった。

住居跡の主軸方位は、北方向をとるものと東方向をとるものに分かれていた。

調査区が狭いために、断定はできないが、調査範囲内では、住居跡と掘立柱建物跡が、一定の組み合わせのもとに、大きく三つの群に分かれて分布しているように見えた。

第1号住居跡 (第5・6図)

第1号住居跡は、I-7・8グリッドから検出した。形態は方形で、主軸方位はN-5°-Eであった。

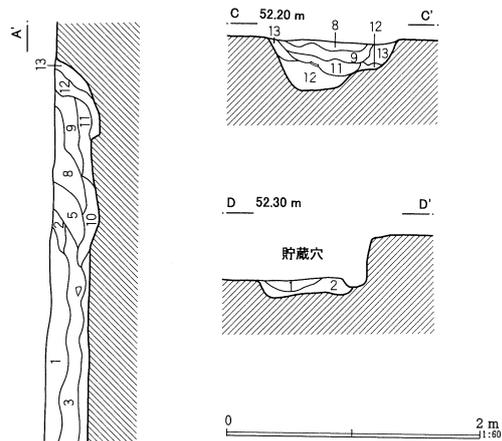
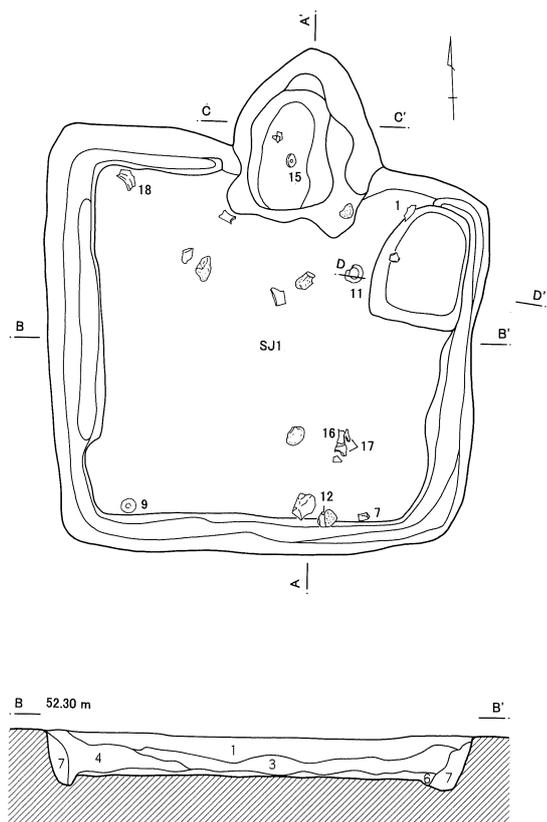
規模は、主軸長3.3m、副軸長3.4m、深さ35cm程度であった。

壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。貯蔵穴は、カマドの右側から検出できた。床面は明瞭で、壁溝は、ほぼ全周していた。

実測可能な遺物として、坏、蓋、台付甕、甕、鉄製の錐などを覆土中から検出した。

第6図1・11の坏は貯蔵穴周辺から、15の台付甕の脚部はカマド内から検出した。

第5図 第1号住居跡



第1号住居跡貯蔵穴覆土

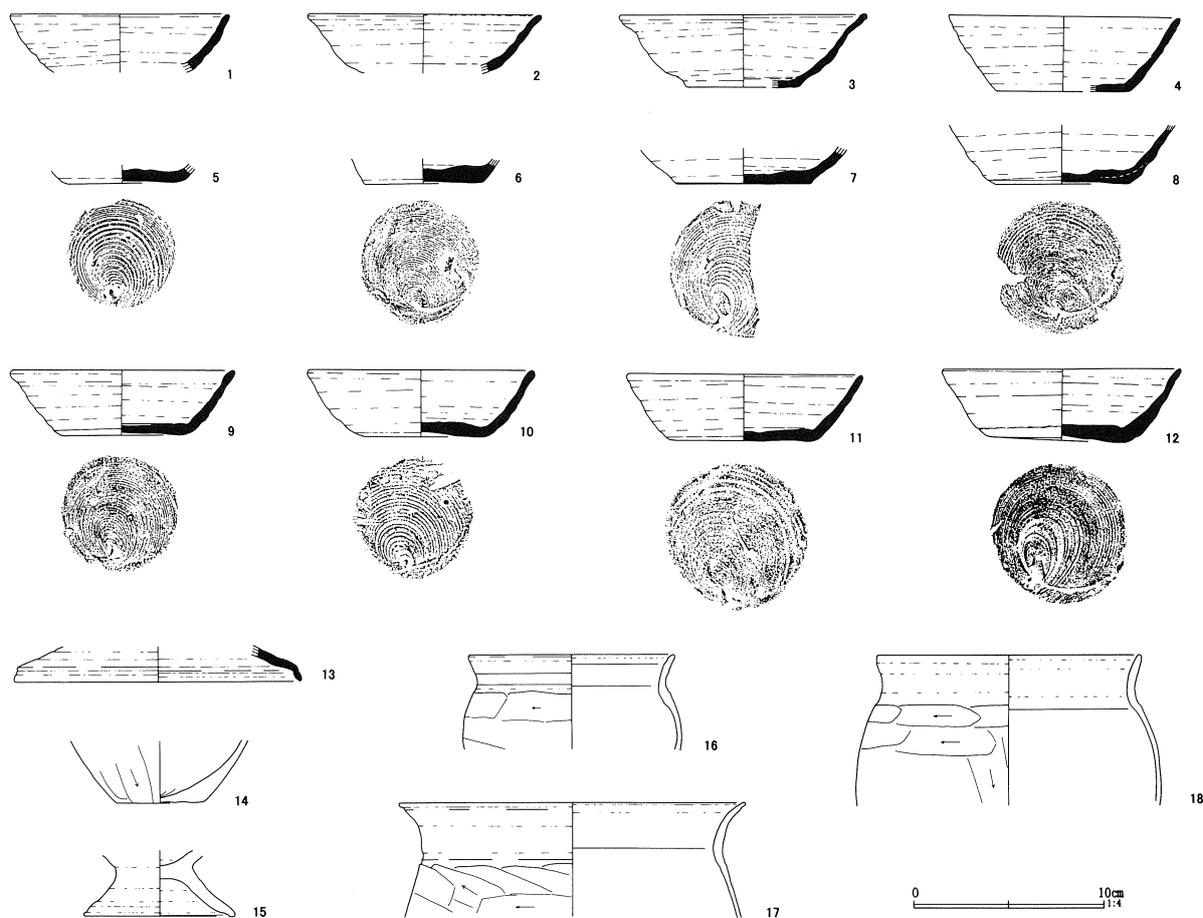
- 1 黒褐色 粘性中 炭化物粒子(中) 黄褐色粒子(少) しまり欠
- 2 黄褐色 粘性弱 黒褐色土粒子(多) ローム粒子(中) ローム粒子ブロック(少) しまりやや欠

- 7 黄褐色 粘性あり ローム粒(多) しまり良
- 8 黒褐色 粘性弱 炭化物粒子(少) 焼土粒子(少) ローム粒子(少) しまりやや良
- 9 黒灰色 粘性中 炭化物粒子(少) 焼土粒子(少) 灰白色粘土粒子(少) しまりやや欠 (カマド上部フク土)
- 10 灰褐色 粘性中 炭化物粒子(中) 焼土粒子(少) 灰白色粘土粒子(少) しまりやや欠 (カマド焼き口フク土)
- 11 暗赤褐色 粘性弱 炭化物粒子(微) 焼土粒子(多) 焼土粒子小ブロック(多) 白色粘土粒子(少) しまり欠 (カマド燃焼部フク土)
- 12 暗赤褐色 粘性中 炭化物粒子(少) 焼土粒子(少) 白色粘土粒子(少) しまりやや欠 (カマド下部フク土)
- 13 黒褐色 粘性中 炭化物粒子(微) 焼土粒子(微) しまり良 (カマド掘り方)

第1号住居跡覆土

- 1 黒褐色 粘性弱 ローム粒(少) 炭化物粒子(少) 焼土粒子(多)
- 2 黒褐色 粘性弱 ローム粒(少) 炭化物粒子(多) 焼土粒子(多)
- 3 暗褐色 粘性あり 炭化物粒子(多) 焼土粒子(多) しまり良
- 4 茶褐色 粘性なし ローム粒(多) 炭化物粒子(少) 焼土粒子(少) しまりなし
- 5 黒褐色 粘性あり ローム粒(少) 炭化物粒子(少) 焼土粒子(少) しまり良
- 6 明褐色 粘性あり ローム粒(多) しまり良

第6図 第1号住居跡出土遺物



第1号住居跡出土遺物観察表

№	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	須恵器坏	(11.5)			B	3	濃灰色	40	
2	須恵器坏	(12.1)			BL	3	灰色	30	
3	須恵器坏	(12.9)	3.8	(5.9)	B	3	濃灰色	20	
4	須恵器坏	(12.1)	4.0	(7.0)	B	3	薄灰色	20	
5	須恵器坏			(5.5)	BL	3	灰色	90	
6	須恵器坏			6.1	BFL	3	灰色	90	
7	須恵器坏			(6.9)	BF	3	薄灰色	60	
8	須恵器坏			(7.0)	B	3	灰色	80	
9	須恵器坏	11.7	3.4	6.2	BEF	3	濃灰色	90	
10	須恵器坏	11.8	3.5	6.1	BEL	4	薄灰色	60	
11	須恵器坏	12.4	3.5	7.0	BL	4	薄灰色	90	
12	須恵器坏	12.5	3.7	7.1	B	3	濃灰色	90	
13	須恵器蓋	(15.0)			B	3	灰色	10	
14	甕			4.6	B	3	赤褐色	30	
15	台付甕			7.8	G	3	赤褐色	90	
16	鉢	(10.8)			BG	3	赤褐色	30	
17	甕	18.2			BG	3	赤褐色	20	
18	甕	(13.9)			BG	3	濃赤褐色	30	

第2号住居跡 (第7~9区)

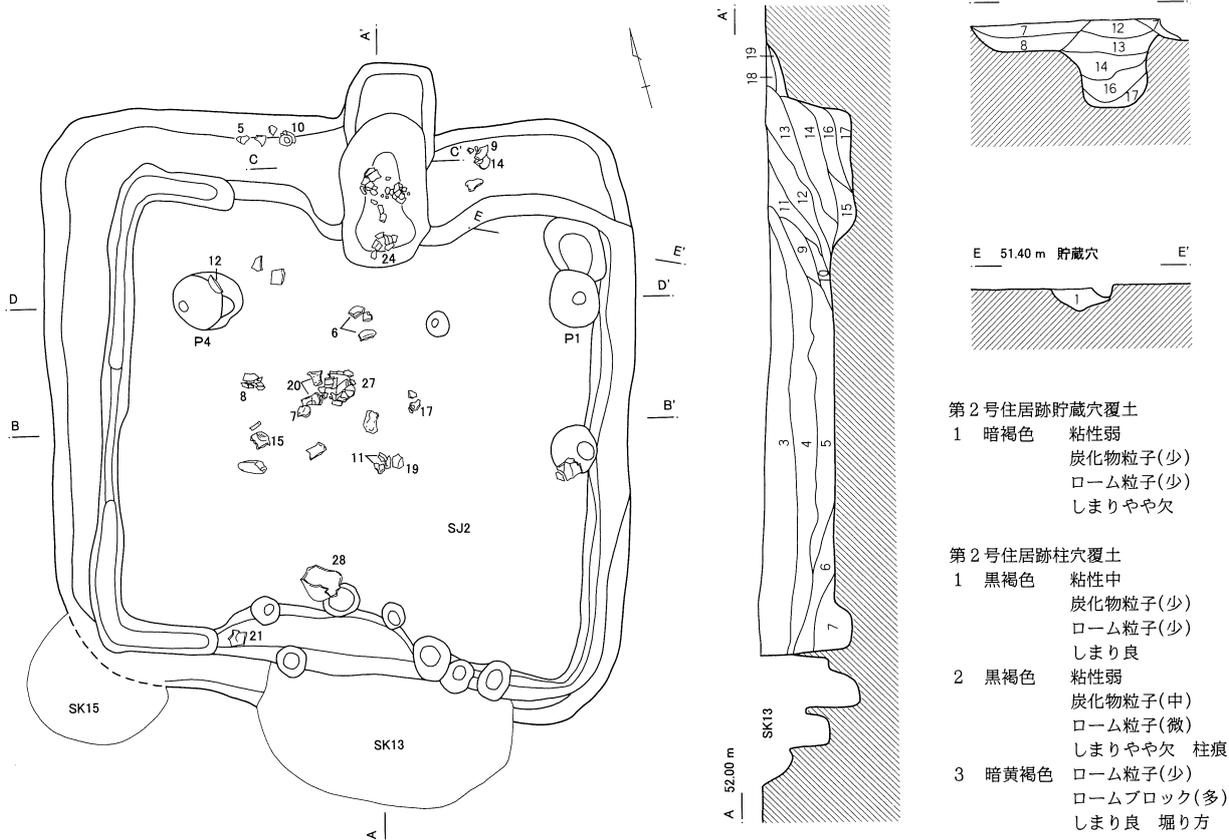
第2号住居跡は、F-7グリッドから検出した。

住居跡の南側は、SK-13のため、南西側のコーナー

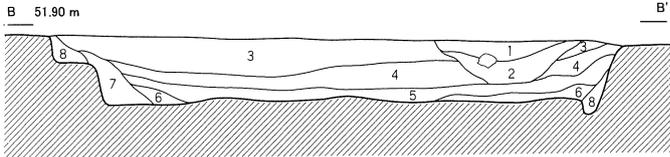
はSK-15のため、検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-15°-Eであった。

規模は、主軸長4.7m、副軸長4.7m、深さ55cm程

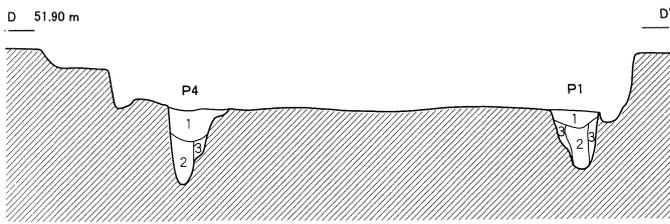
第7図 第2号住居跡



- 第2号住居跡貯蔵穴覆土
- 1 暗褐色 粘性弱
炭化物粒子(少)
ローム粒子(少)
しまりやや欠
- 第2号住居跡柱穴覆土
- 1 黒褐色 粘性中
炭化物粒子(少)
ローム粒子(少)
しまり良
 - 2 黒褐色 粘性弱
炭化物粒子(中)
ローム粒子(微)
しまりやや欠 柱痕
 - 3 暗黄褐色
ローム粒子(少)
ロームブロック(多)
しまり良 堀り方



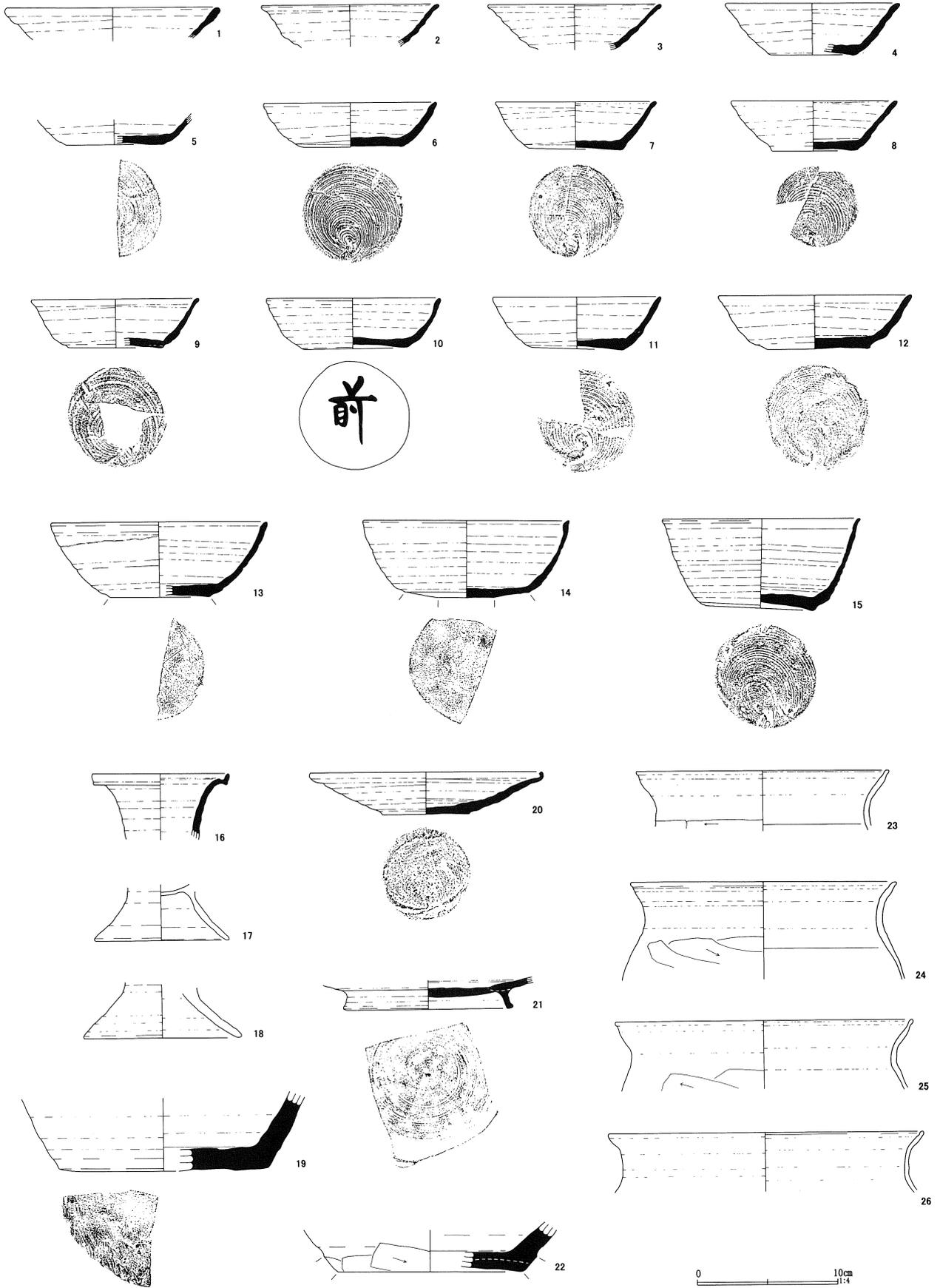
- 7 黒褐色 粘性弱 炭化物粒子(少) 焼土粒子(少)
ローム粒子(中) しまりやや欠
(住居跡フク土)
- 8 暗黄褐色 粘性弱 炭化物粒子(微) 焼土粒子(微)
ローム粒子(多)
しまりやや欠 (住居跡フク土)
- 9 黒褐色 粘性弱 炭化物粒子(少) 焼土粒子(少)
ローム粒子(微) しまりやや欠
(住居跡フク土)
- 10 暗褐色 粘性弱 炭化物粒子(少) 焼土粒子(中)
ローム粒子(少) しまりやや欠
(カマドフク土)
- 11 黒褐色 粘性弱 炭化物粒子(少) 焼土粒子(少)
灰白色粘土粒子(微) しまりやや欠
(カマドフク土)
- 12 黒褐色 粘性弱 炭化物粒子(少) 焼土粒子(中)
灰白色粘土粒子(微) しまりやや欠
(カマドフク土)



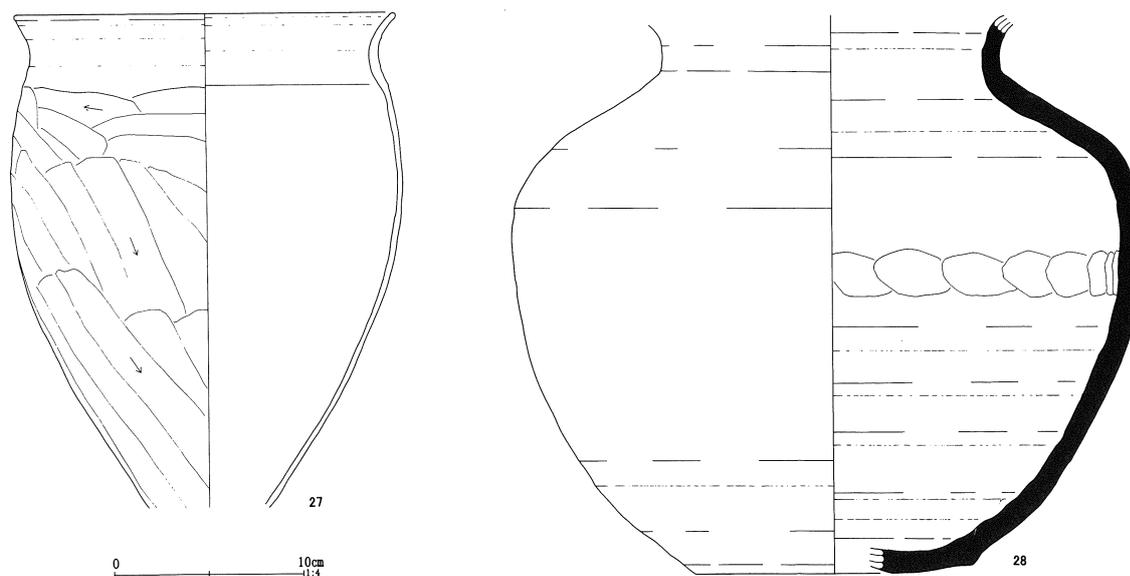
- 第2号住居跡覆土
- 1 暗茶褐色 粘性弱 炭化物粒子(微) 焼土粒子(微)
黄褐色土粒子(微) しまりやや欠 土壌フク土
 - 2 暗茶褐色 粘性弱 炭化物粒子(微) ローム粒子・
ロームブロック(多) 大型礫含む しまり良
(土壌フク土)
 - 3 黒褐色 粘性中 炭化物粒子(微) 焼土粒子(微)
ローム粒子(少) しまりやや良 (住居跡フク土)
 - 4 黒褐色 粘性中 炭化物粒子(少) 焼土粒子(少)
ローム粒子(少) しまり良 (住居跡フク土)
 - 5 黒褐色 粘性中 炭化物粒子(中) 焼土粒子(少)
ローム粒子(少) しまり良 (住居跡フク土)
 - 6 黒褐色 粘性中 炭化物粒子(少) 焼土粒子(中)
ローム粒子(中) しまり良 (住居跡フク土)

- 13 黒灰色 粘性中 炭化物粒子(微) 焼土粒子(少)
灰白色粘土粒子(中) しまりやや良 (カマドフク土)
- 14 暗赤褐色 粘性弱 炭化物粒子(微) 焼土粒子(多) 焼土ブロック(中)
灰白色粘土粒子(微) しまり欠 (カマドフク土)
- 15 暗褐色 粘性弱 炭化物粒子(中) 焼土粒子(少) ローム粒子(中)
灰白色粘土粒子(微) しまり欠 (カマドフク土)
- 16 暗褐色 粘性中 炭化物粒子(少) 焼土粒子(微) ローム粒子(少)
しまりやや良 (カマドフク土)
- 17 暗黄褐色 粘性中 炭化物粒子(微) ローム粒子(多) しまり良
(堀り方)
- 18 暗褐色 粘性中 炭化物粒子(少) 焼土粒子(少) ローム粒子(少)
しまりやや良 (カマドフク土)
- 19 黄褐色 粘性中 炭化物粒子(微) ローム粒子(多) しまり良
(カマド堀り方)

第8図 第2号住居跡出土遺物（1/2）



第9図 第2号住居跡出土遺物(2/2)



第2号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	須恵器坏	(15.0)			B	3	灰色	20	
2	須恵器坏	(12.5)			B	3	灰色	20	
3	須恵器坏	(12.3)			BL	4	薄灰色	30	
4	須恵器坏	(12.4)	3.7	(6.0)	BF	3	濃灰色	20	
5	須恵器坏			(7.0)	BL	4	薄灰色	40	
6	須恵器坏	12.3	3.2	6.8	BL	4	赤褐色	80	
7	須恵器坏	11.4	3.4	6.5	B	3	濃灰色	60	
8	須恵器坏	11.7	3.6	6.0	BL	3	濃灰色	90	
9	須恵器坏	(11.9)	3.4	(6.6)	BL	3	濃灰色	90	
10	須恵器坏	12.4	3.6	7.2	BL	4	帯黄灰色	80	墨書
11	須恵器坏		3.7	6.5	BFL	4	帯黄灰色	60	
12	須恵器坏	13.7	3.8	7.1	BEL	4	帯黄灰色	90	
13	須恵器坏	(15.4)	5.4	(7.0)	BL	3	淡灰色	40	
14	須恵器坏	(14.6)	5.5	(8.9)	BEF	3	濃灰色	40	
15	須恵器坏	14.0	6.4	7.7	BFL	3	帯黄灰色	80	
16	須恵器長頸瓶	(9.7)			B	3	濃灰色	40	
17	台付甕	9.4			B	3	濃赤褐色	50	
18	台付甕			11.0	B	3	赤褐色	40	
19	須恵器甕			(11.2)	B	3	帯黄灰色	20	
20	須恵器皿	16.4	3.0	6.2	BL	4	薄灰色	50	
21	須恵器皿			11.3	BFL	3	帯黄灰色	50	
22	須恵器甕			(13.1)	BEL	3	帯黄灰色	30	
23	甕	(18.0)			B	3	赤褐色	30	
24	甕	(18.8)			BEG	3	赤褐色	40	
25	甕	(21.3)			B	3	赤褐色	20	
26	甕	(22.5)			BE	3	赤褐色	20	
27	甕	20.0			B	3	赤褐色	80	
28	須恵器甕			(14.7)	B	3	灰色	40	

度であった。

壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。貯蔵穴は、カマドの右側から検出できた。床面は明瞭で、

壁溝は、北壁で一部途切れるがほぼ全周していた。柱穴は2本検出できた。

住居跡は、SK-13・15と重複していた。重複関係は、

SK-13・15を切っていた。

実測可能な遺物として、坏、碗、皿、台付甕、甕などを覆土中から検出した。

第8図5・9・10・14の坏類は北側壁際から、6・7・8・11・15の坏類、17の台付甕脚部、19の須恵器甕底部、20の皿は、中央付近から、12の坏はP4の覆土中から、24の甕はカマド内から、27の甕は中央から、28の甕は南側壁面から、それぞれ検出した。遺物が、主軸上に集中的に分布する傾向が認められた。

また、第8図13の坏はSK-13の覆土との境界付近から検出したが、帰属関係を明瞭にできなかった。

第3号住居跡 (第10・11図)

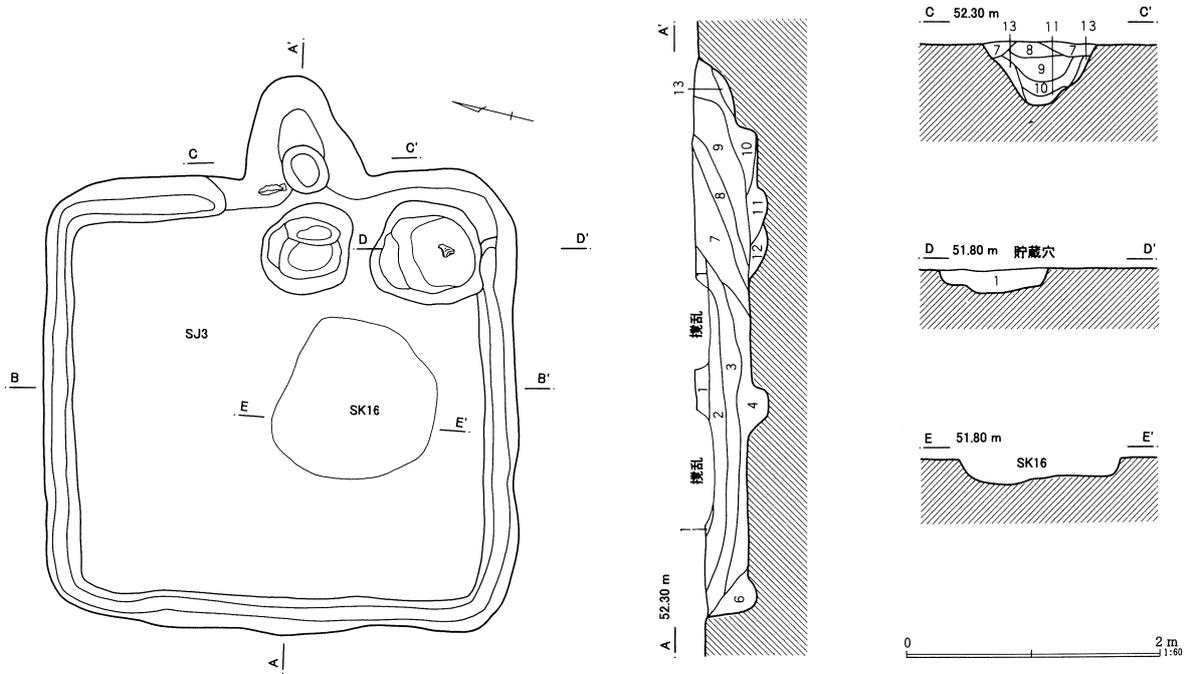
第3号住居跡は、H・I-7グリッドから検出した。住居跡の中央部分はSK-16のため、検出できなかった。

形態は方形で、主軸方位はN-76°-Eであった。

規模は、主軸長3.6m、副軸長3.8m、深さ45cm程度であった。壁は明瞭であり、東側からカマドが検出できた。カマド内からは、坏・甕が検出できた。貯蔵穴は、カマドの右側から検出できた。床面は明瞭で、壁溝は、ほぼ全周していた。

実測可能な遺物として、坏、甕、板状の鉄製品を検出した。

第10図 第3号住居跡



第3号住居跡覆土

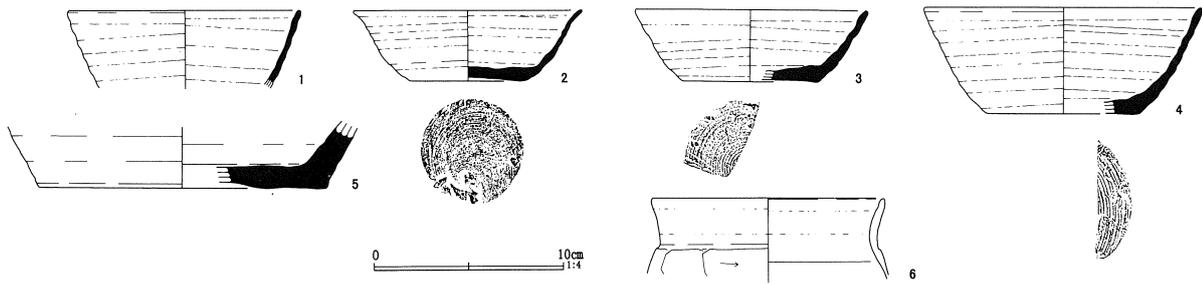
- | | | | | | | | |
|---|-----|-----|----------|----------|----------|-----------|--------|
| 1 | 黒褐色 | 粘性弱 | 炭化物粒子(少) | 焼土粒子(少) | ローム粒子(微) | 白色粘土粒子(微) | しまりやや欠 |
| 2 | 黒褐色 | 粘性弱 | 炭化物粒子(微) | 焼土粒子(微) | ローム粒子(少) | 白色粘土粒子(微) | しまりやや良 |
| 3 | 黒褐色 | 粘性中 | 炭化物粒子(少) | 焼土粒子(微) | ローム粒子(少) | | しまり良 |
| 4 | 黒褐色 | 粘性中 | 炭化物粒子(少) | 焼土粒子(中) | ローム粒子(中) | 白色粘土粒子(微) | しまりやや良 |
| 5 | 黒褐色 | 粘性中 | 炭化物粒子(微) | ローム粒子(中) | | | しまりやや欠 |

- | | | | | | | | |
|----|------|-----|---------------|----------|-----------|-----------|--------------------|
| 6 | 暗黄褐色 | 粘性中 | 焼土粒子(微) | ローム粒子(多) | | | しまり良
(壁崩落土) |
| 7 | 黒褐色 | 粘性中 | 炭化物粒子(少) | 焼土粒子(少) | ローム粒子(少) | 白色粘土粒子(中) | しまり良 |
| 8 | 白灰色 | 粘性大 | 白色粘土層 | | | | (カマド天井部崩落土) |
| 9 | 黒褐色 | 粘性中 | 炭化物粒子(少) | 焼土粒子(少) | 白色粘土粒子(少) | | 遺物含む
しまりやや良 |
| 10 | 赤褐色 | 粘性弱 | 焼土粒子及び焼土ブロック層 | | | | しまり欠 |
| 11 | 暗赤褐色 | 粘性中 | 炭化物粒子(多) | 焼土粒子(多) | 白色粘土粒子(中) | | しまりやや欠
(焚き口フク土) |
| 12 | 黒褐色 | 粘性弱 | 炭化物粒子(少) | 焼土粒子(少) | 白色粘土粒子(少) | ローム粒子(少) | しまり良
(焚き口フク土) |
| 13 | 暗褐色 | 粘性中 | ローム粒子(微) | 炭化物粒子(微) | | | しまり良
(カマド堀り方) |

第3号住居跡貯蔵穴覆土

- | | | | | | | | |
|---|-----|-----|----------|---------|---------|--|--|
| 1 | 黒褐色 | 粘性中 | 炭化物粒子(中) | 焼土粒子(多) | ローム粒(少) | | |
|---|-----|-----|----------|---------|---------|--|--|

第11図 第3号住居跡出土遺物



第3号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	須恵器坏	(12.2)			B	3	薄灰色	20	
2	須恵器坏	(12.1)	3.7	6.0	B L	3	灰色	60	
3	須恵器坏	(12.2)	3.8	(7.0)	B	3	灰色	30	
4	須恵器坏	(14.6)	5.6	(8.0)	B	3	帯黄灰色	30	
5	須恵器甕			(15.3)	B F	3	灰色	20	
6	鉢	(12.3)			B G	3	赤褐色	20	

第4号住居跡 (第12・13図)

第4号住居跡は、H-6・7グリッドから検出した。

住居跡の南西側コーナー部分は調査区外のため、検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はS-83°-Wであった。

規模は、主軸長3.4m、副軸長3.1m、深さ35cm程度であった。

壁は明瞭であり、東側からカマドが検出できた。床面は明瞭で、壁溝は、全周していた。

住居跡は、SJ-12と重複していた。重複関係は、SJ-12を切っていた。

実測可能な遺物として、坏、皿、壺、甕、などを検出した。図に掲載した遺物の他に、覆土中から骨片と鉄滓、羽口破片を検出した。

第12図、2・5・7の坏類は、住居跡南側の壁際から

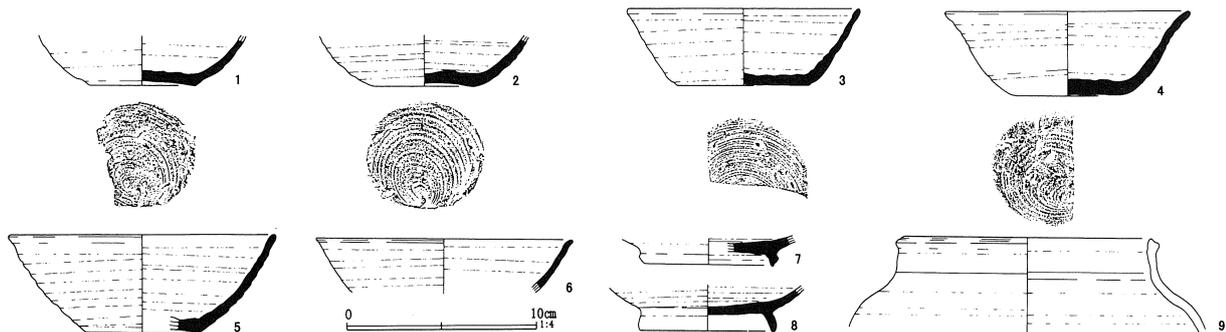
壁溝中にかけて、10・11・12の甕は、カマド内から、それぞれ検出した。

また、粗大な礫を、カマド手前中央付近と左側で検出したが、用途などは明らかに出来なかった。

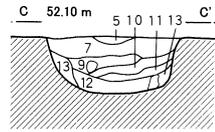
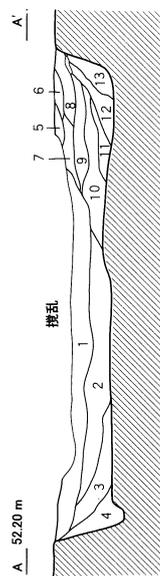
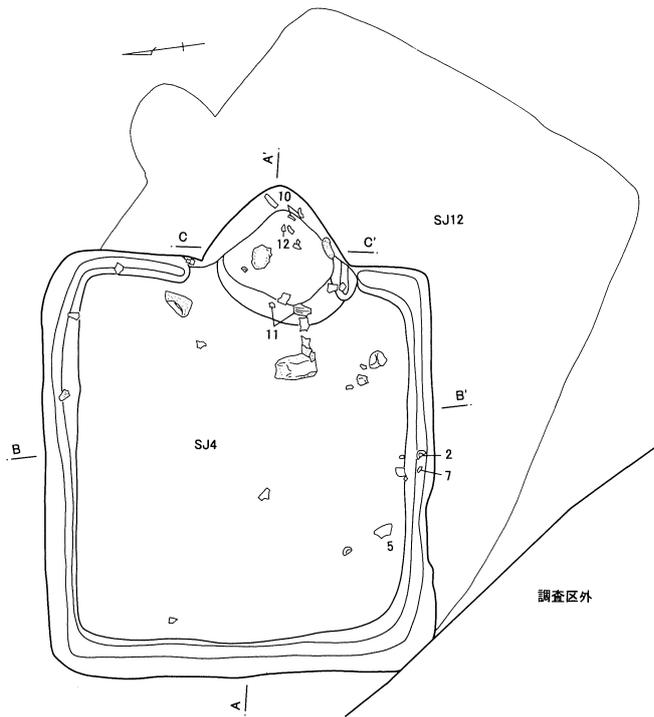
調査時の所見では、住居跡内での遺物の分布は、南東側に偏っていた。

この住居跡の南東側には、第12号住居跡が重複しており、新旧関係はこの住居跡の方が新しいので、この住居跡構築時に、第12号住居跡の覆土の一部を掘削し、これに帰属する遺物が周辺に散乱し、この住居跡の覆土が形成される際に、第12号住居跡の覆土を起源とする土とともに、遺物もまた流入した可能性も考えられた。従って、第4号住居跡出土として取り上げた遺物については、第12号住居跡の覆土に起源を持つ遺物である可能性も考えられた。

第12図 第4号住居跡出土遺物 (1/2)

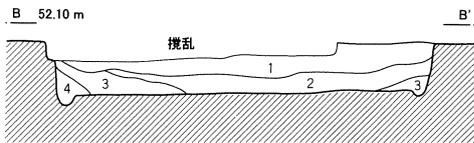


第13図 第4号住居跡・出土遺物 (2/2)



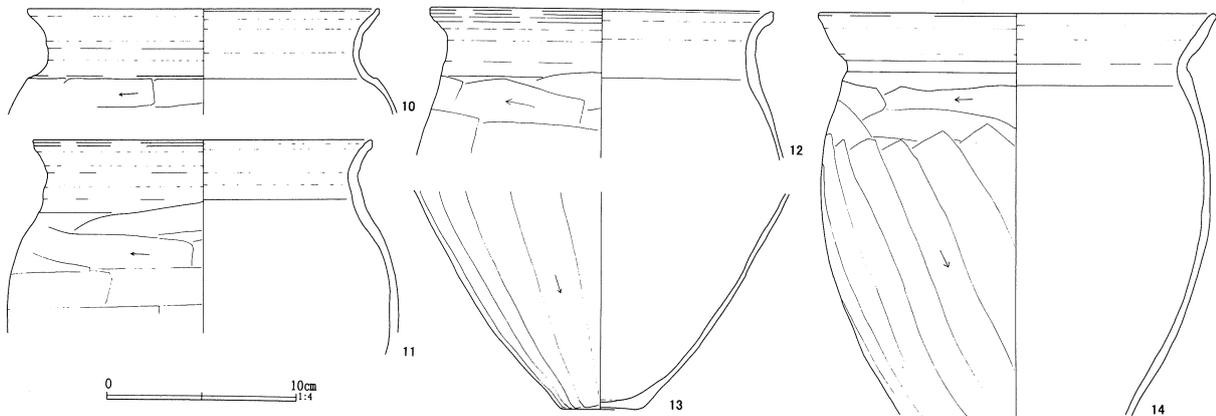
第4号住居跡覆土

- 1 黒褐色 粘性弱
炭化物粒子(少)
焼土粒子(少)
ローム粒子(少)
灰白色粘土粒子(少)
しまりやや欠
(住居フク土)
- 2 黒褐色 粘性弱
炭化物粒子(少)
焼土粒子(微)
ローム粒子(微)
しまりやや良
(住居フク土)
- 3 黒褐色 粘性弱
炭化物粒子(微)
ローム粒子(少)
しまり良
(住居フク土)
- 4 暗黄褐色 粘性中
炭化物粒子(微)
ローム粒子(多)
しまり良
(壁崩落土)
- 5 暗褐色 粘性弱
炭化物粒子(微)
焼土粒子(少)
しまりやや欠
(住居跡フク土)



- 6 暗赤褐色 粘性弱 炭化物粒子(少) 焼土粒子(多)
焼土粒子ブロック(少) 灰白色粘土粒子(少)
しまりやや欠 (カマド上部フク土)
- 7 黒褐色 粘性中 炭化物粒子(中) 焼土粒子(微)
ローム粒子(少) 灰白色粘土粒子(中)
しまりやや欠 (カマド上部フク土)
- 8 黒褐色 粘性中 炭化物粒子(多) 焼土粒子(微)
灰白色粘土粒子(少) しまりやや欠
(カマド上部フク土)
- 9 黒灰色 粘性中 炭化物粒子(中) 焼土粒子(少)
ローム粒子(微) 灰白色粘土粒子(多)
灰白色粘土粒子ブロック(少) しまりやや良

- 10 黒褐色 粘性中 炭化物粒子(多) 焼土粒子(中)
灰白色粘土粒子(少) しまりやや欠
(カマドフク土)
- 11 暗赤褐色 粘性弱 炭化物粒子(多) 焼土粒子(多)
ローム粒子(少) 灰白色粘土粒子(少)
しまりやや欠 (カマド下部フク土)
- 12 暗赤褐色 粘性弱 炭化物粒子(少) 焼土粒子(多)
焼土粒子ブロック(多) ローム粒子(少)
灰白色粘土粒子(少) しまり欠
(カマド下部フク土)
- 13 暗黄褐色 粘性中 炭化物粒子(少) 焼土粒子(微)
ローム粒子(中) 灰白色粘土粒子(微)



第4号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	須恵器坏			5.5	B	3	濃灰色	50	
2	須恵器坏			5.4	B	3	灰色	40	
3	須恵器坏	12.2	4.1	6.4	B	4	黄褐色	40	
4	須恵器坏	(12.9)	4.4	5.5	B	4	薄灰色	30	
5	須恵器坏	(14.0)	5.2	(5.9)	B L	3	灰色	20	
6	須恵器坏	(13.5)			B F	3	薄灰色	10	
7	須恵器皿			(6.8)	B	4	薄灰色	40	
8	緑釉皿			7.1	B F	4	薄灰色	80	
9	甕	13.0			B	3	灰色	10	
10	甕	(18.4)			B F	3	赤褐色	10	
11	甕	17.9			B G	3	赤褐色	30	
12	甕	18.0			B G	3	赤褐色	30	
13	甕			3.9	B	4	赤褐色	50	
14	甕	20.8			B F	3	黄褐色	60	

第5号住居跡 (第14・15図)

第5号住居跡は、F-5・6グリッドから検出した。

形態は方形で、主軸方位はN-14°-Eであった。

規模は、主軸長3.0m、副軸長4.6m、深さ55cm程

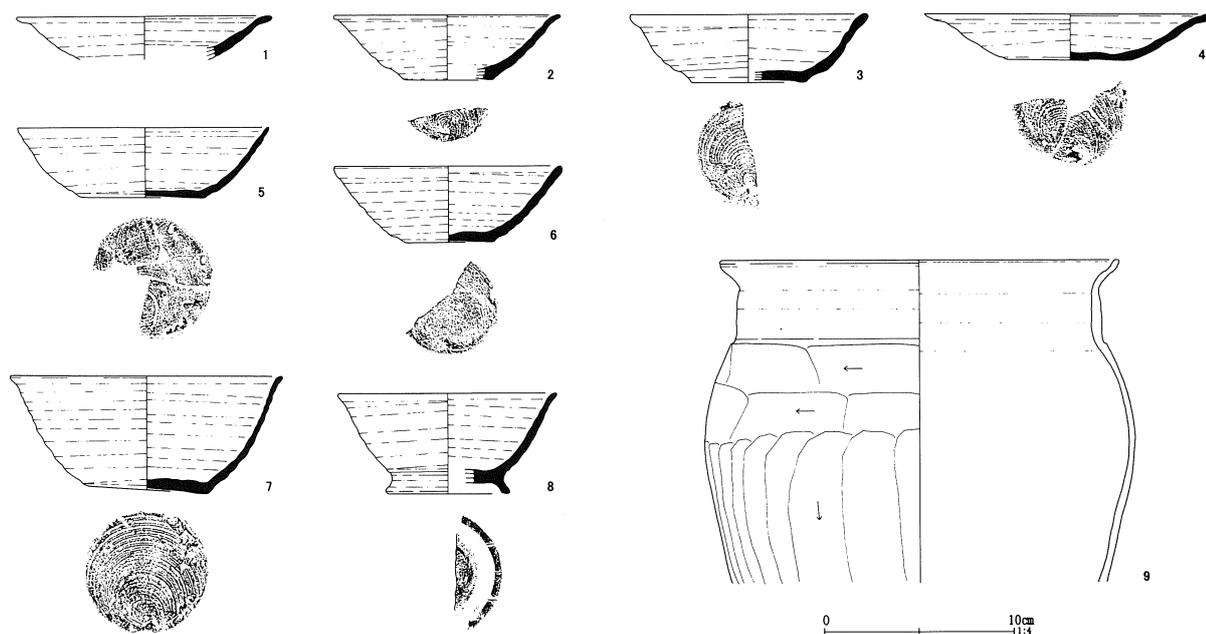
度であった。壁は明瞭であり、北東側からカマドが検

出できた。貯蔵穴は、南側から検出できた。床面は明

瞭で、壁溝は、全周していた。柱穴は2本検出できた。

実測可能な遺物として、坏、甕、鉄製の刀子、紡錘

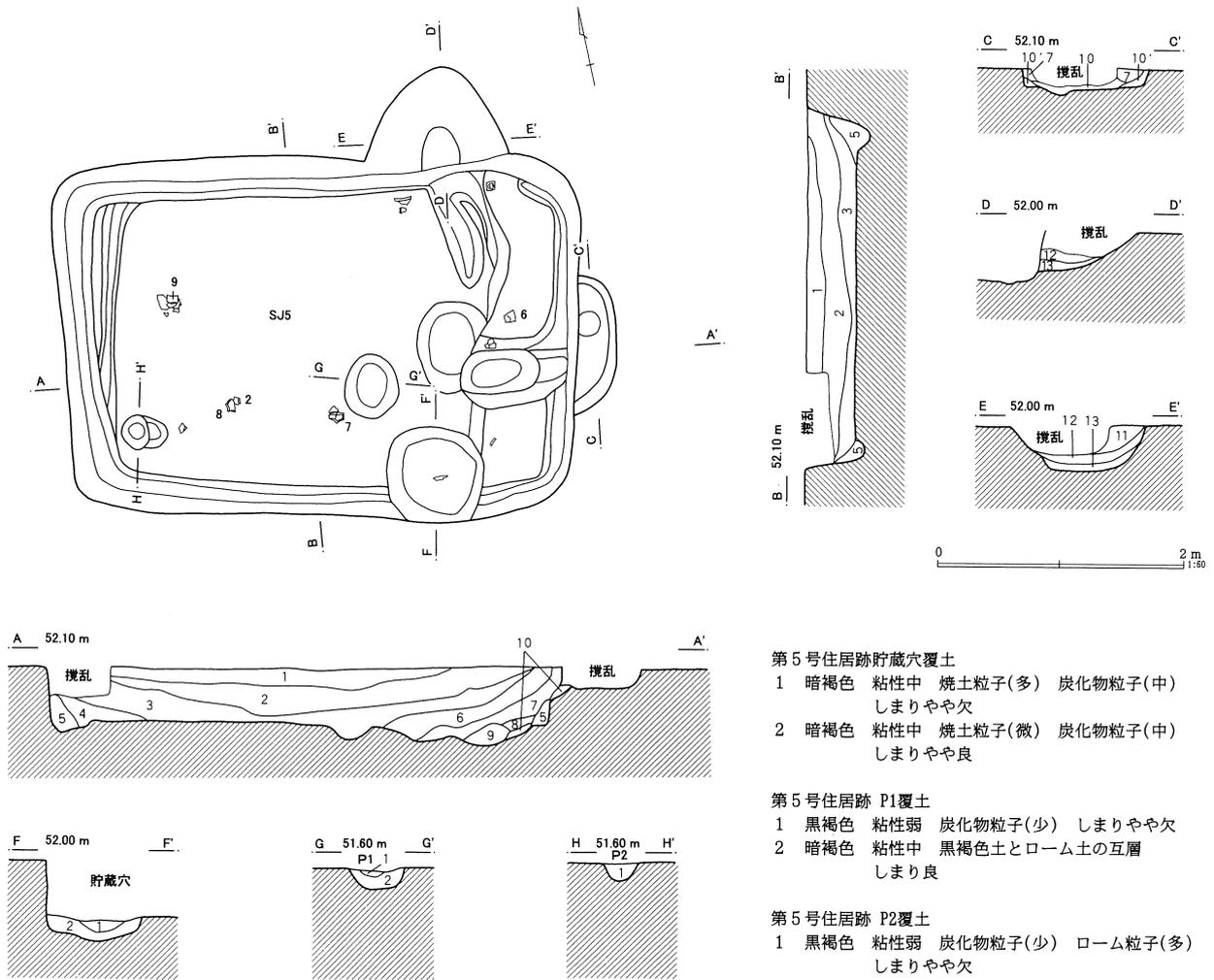
第14図 第5号住居跡出土遺物



第5号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	須恵器皿	(13.3)			B L	3	灰色	40	
2	須恵器坏	(11.8)	3.4	(4.5)	B L	3	灰色	30	
3	須恵器坏	(12.5)	3.6	(5.8)	B	3	灰色	30	
4	須恵器皿	(15.3)	2.4	(6.3)	B L	4	帯黄灰色	40	
5	須恵器坏	13.3	3.7	6.3	B	4	帯黄灰色	50	
6	須恵器坏	(11.9)	4.0	(4.5)	B L	4	帯黄灰色	40	
7	須恵器坏	14.3	6.0	5.8	B E F L	4	灰色	70	
8	須恵器坏	(11.4)	5.3	(6.1)	B F L	4	帯黄灰色	40	
9	甕	(20.9)			B	3	赤褐色	50	

第15図 第5号住居跡



第5号住居跡覆土

- 1 黒褐色 粘性弱 炭化物粒子(少) 焼土粒子(少) ローム粒子(中) 灰白色粘土粒子(微) しまりやや欠
- 2 黒褐色 粘性弱 炭化物粒子(少) 焼土粒子(中) ローム粒子(少) しまりやや良
- 3 黒褐色 粘性中 炭化物粒子(少) 焼土粒子(少) ローム粒子(中) しまり良
- 4 暗褐色 粘性中 炭化物粒子(微) ローム粒子(中) しまり良
- 5 暗黄褐色 粘性中 炭化物粒子(微) ローム粒子(多) しまりやや欠
- 6 黒灰色 粘性中 炭化物粒子(中) 焼土粒子(中) ローム粒子(少) 灰白色粘土粒子(中) しまりやや欠 (カマド上部フク土)
- 7 黒褐色 粘性中 炭化物粒子(少) 炭火材含む 焼土粒子(中) 灰白色粘土粒子(少) しまり良 (カマドフク土)

第5号住居跡貯蔵穴覆土

- 1 暗褐色 粘性中 焼土粒子(多) 炭化物粒子(中) しまりやや欠
- 2 暗褐色 粘性中 焼土粒子(微) 炭化物粒子(中) しまりやや良

第5号住居跡 P1覆土

- 1 黒褐色 粘性弱 炭化物粒子(少) しまりやや欠
- 2 暗褐色 粘性中 黒褐色土とローム土の互層 しまり良

第5号住居跡 P2覆土

- 1 黒褐色 粘性弱 炭化物粒子(少) ローム粒子(多) しまりやや欠

- 8 黄褐色 粘性中 炭化物粒子(中) 焼土粒子(微) ローム粒子(多) ローム粒子小ブロック(少) しまり良 (カマドフク土)
- 9 赤褐色 粘性弱 焼土粒子及びブロックの互層 (カマド燃焼部)
- 10 暗黄褐色 粘性弱 炭化物粒子とローム粒子の互層 (カマド堀り方)
- 11 灰白色 粘性強 炭化物粒子(少) 焼土粒子(微) 灰白色粘土粒子(多) しまり良 (カマドフク土) 旧カマド
- 12 暗赤褐色 粘性弱 炭化物粒子(微) 焼土粒子(多) 灰白色粘土粒子(少) しまり良 (カマドフク土) 旧カマド
- 13 暗赤褐色 粘性弱 炭化物粒子(中) 焼土粒子(少) 灰白色粘土粒子(少) しまり良 (カマドフク土) 旧カマド

車を検出した。

第14図2・8の坏は、住居跡中央のやや南西寄りから検出した。6の坏は、カマド周辺から検出した。

7の坏は、住居跡中央やや南寄り、9の甕は、住居跡のやや西よりでそれぞれ検出した。

調査時の所見では、遺物は、住居跡の中心から一定の距離を置いて、円を描くような形態で、万遍なく出土していた。

覆土は安定した自然堆積の状態を呈していた。カマドは、最も早く煙道側から埋没したと考えられた。

第6号住居跡 (第16・17図)

第6号住居跡は、E-4・5、F-4・5グリッドから検出した。

形態は方形で、主軸方位はS-78°-Eであった。

規模は、主軸長4.6m、副軸長4.3m、深さ45cm程度であった。

壁は明瞭であり、南東側からカマドが検出できた。

カマド内からは、坏が検出できた。

貯蔵穴は、カマドの右側から検出できた。床面は明瞭であり、壁溝は、東壁で一部途切れるがほぼ全周していた。

柱穴は不明瞭であり、床面の精査によって、北西側からやや大きめの、南西側からやや小さめのピットが

それぞれ検出できたが、住居跡との関係は明らかに出来なかった。

実測可能な遺物として、坏、甕、鉄製の刀の破片、紡錘車などを覆土中から検出した。

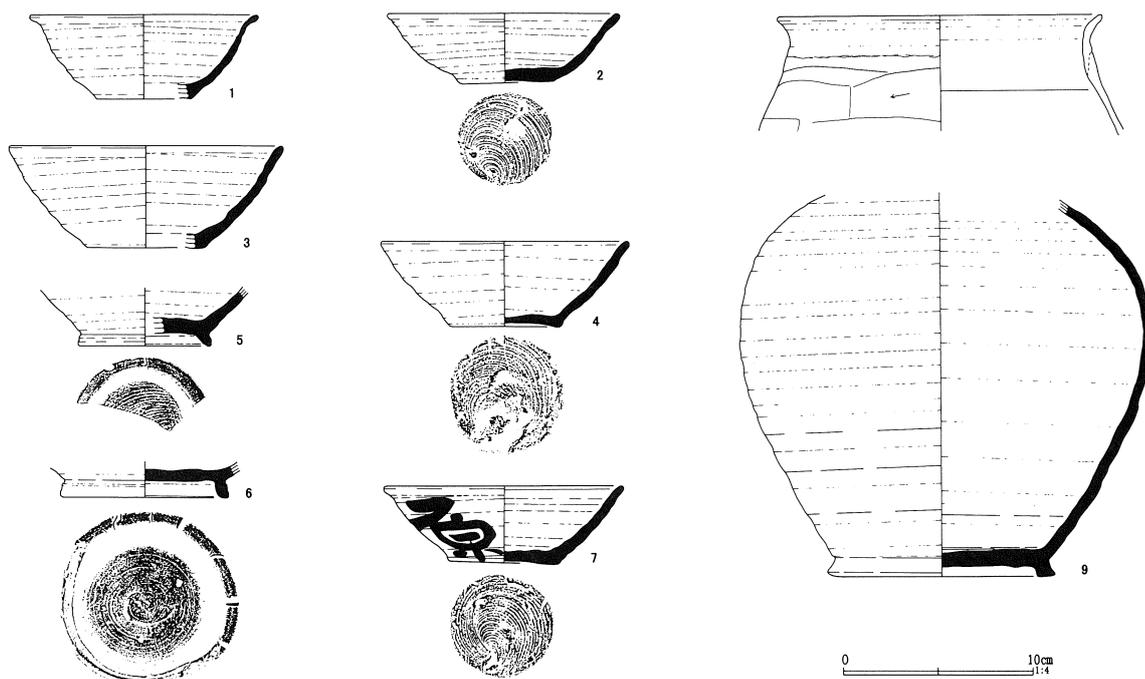
第16図2・3・4の坏類は、カマドの左側手前から検出した。6の坏は、P1を中心として、7の坏は、貯蔵穴の手前から、9の甕は住居跡の南側から検出した。

南側の壁溝内と、南西のコーナー付近から、礫が検出できた。

遺物の分布は、住居跡の南側に偏っており、北側からは、あまり検出できなかった。

覆土は、自然堆積の状況を呈しており、カマドの煙道方向からの流入堆積が、もっとも早いと考えられた。

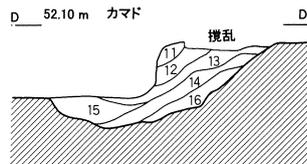
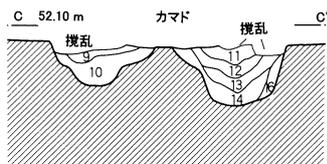
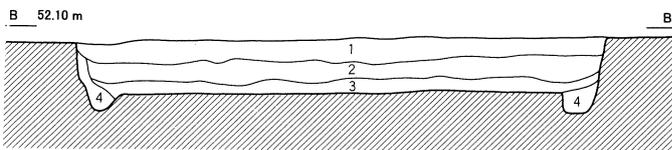
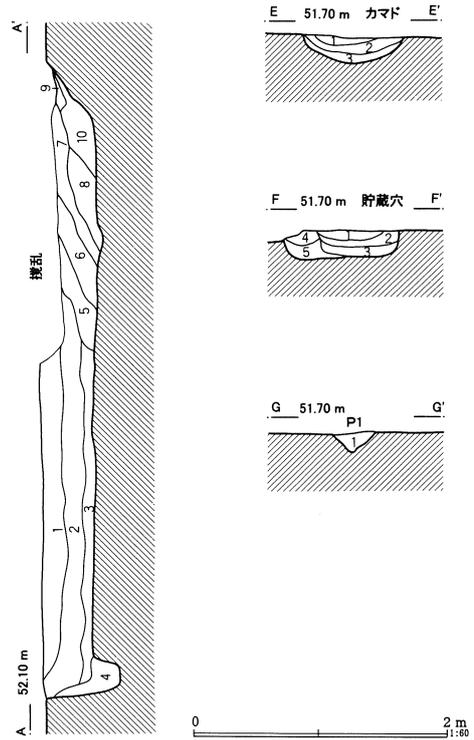
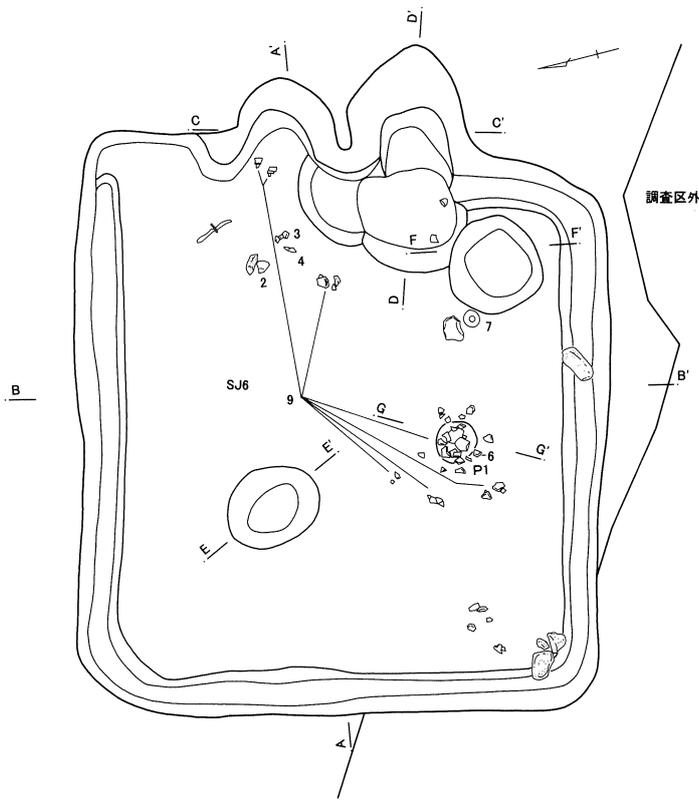
第16図 第6号住居跡出土遺物



第6号住居跡出土遺物観察表

Nq	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	須恵器坏	(12.0)	4.5	(4.9)	B	3	黄褐色	30	
2	須恵器坏	12.1	3.7	4.3	BL	4	黄褐色	100	
3	須恵器坏	(14.3)	5.4	(6.1)	BEL	3	黄褐色	30	
4	須恵器坏	(13.0)			BL	4	黄褐色	70	
5	須恵器坏			6.9	BL	3	灰色	30	
6	須恵器坏			8.7	B	4	帯黄灰色	80	
7	須恵器坏	12.5	4.0	5.7	BL	4	帯黄灰色	100	墨書
8	甕	(16.9)	4.5	(5.6)	B	3	濃褐色	20	
9	須恵器壺			12.0	BL	3	薄灰色	80	

第17図 第6号住居跡



第6号住居跡カマド跡覆土

- 1 黒褐色 粘性弱 焼土粒子・炭化物粒子(多) しまり欠
- 2 黒褐色 粘性弱 焼土粒子(少) 炭化物粒子(多) しまり欠
- 3 暗赤褐色 粘性弱 焼土粒子と焼土粒子ブロック層 底面赤化

第6号住居跡貯蔵穴覆土

- 1 黒褐色 粘性弱 炭化物粒子(少) ローム粒子(少) しまりやや欠
- 2 暗褐色 粘性中 炭化物粒子(微) ローム粒子(中) しまりやや欠
- 3 暗黄褐色 粘性中 ローム粒子(多) しまり良
- 4 黒褐色 粘性中 炭化物粒子(多) ローム粒子(微) しまりやや良
- 5 暗褐色 粘性中 炭化物粒子(少) ローム粒子(中) しまり良

第6号住居跡覆土

- 1 黒褐色 粘性弱 ローム粒・木炭粒(多)及び焼土を少量含む しまりなし
- 2 黒褐色 粘性弱 ローム粒・木炭粒・焼土を多量に含む しまり良
- 3 茶褐色 粘性弱 ローム粒・ロームブロックを含む 木炭・焼土を少量含む しまり良
- 4 明褐色 粘性弱 多量のローム粒とロームブロック 少量の木炭・焼土粒を含む しまりなし
- 5 黒褐色 粘性弱 焼土粒子(少) 炭化物粒子(微) 灰白色粘土粒子(微) ローム粒子(少) しまりやや良
- 6 黒褐色 粘性弱 焼土粒子(中) 炭化物粒子(少) 灰白色粘土粒子(少) ローム粒子(少) しまり良
- 7 黒灰色 粘性中 焼土粒子(少) 炭化物粒子(中) 灰白色粘土粒子(中) 灰白色粘土粒子ブロック(少) しまり良
- 8 黒褐色 粘性中 焼土粒子(少) 炭化物粒子(少) 灰白色粘土粒子(少) ローム粒子(少) しまり良

- 9 暗褐色 粘性弱 焼土粒子(少) 炭化物粒子(微) ローム粒子(少) しまりやや欠
- 10 暗黄褐色 粘性中 焼土粒子(微) 炭化物粒子(微) ローム粒子(多) しまり良
- 11 黒褐色 粘性弱 焼土粒子(少) 炭化物粒子(微) 灰白色粘土粒子(微) ローム粒子(微) しまりやや良 (カマドフク土)
- 12 黒褐色 粘性中 焼土粒子(中) 炭化物粒子(少) 灰白色粘土粒子(微) しまり良 (カマドフク土)
- 13 黒褐色 粘性弱 焼土粒子(少) 炭化物粒子(微) しまりやや欠 (カマドフク土)
- 14 暗赤褐色 粘性弱 焼土粒子(多) 焼土粒子ブロック(多) 炭化物粒子(少) 灰白色粘土粒子(少) しまり欠 (カマドフク土)
- 15 黒褐色 粘性中 焼土粒子(少) 炭化物粒子(中) 灰白色粘土粒子(少) ローム粒子(中) しまりやや欠 (焚き口フク土)
- 16 暗黄褐色 粘性中 焼土粒子(微) 炭化物粒子(微) ローム粒子(多) しまり良 (カマド堀り方)

第7号住居跡（第18・19図）

第7号住居跡は、E-4・5グリッドから検出した。住居跡の中央部分は攪乱のため、検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-19°-Eであった。

規模は、主軸長3.5m、副軸長4.5m、深さ55cm程度であった。

壁は明瞭であり、北東側からカマドを検出した。カマド内からは、坏、甕を検出した。

貯蔵穴は、カマドの右側から検出した。床面は明瞭であった。貯蔵穴を検出した東側コーナー部分では、貯蔵穴の上端が壁溝にまで達していたので、検出できなかったが、他の部分では壁溝は、全周していた。

柱穴は、床面の精査によっても確認できなかった。

実測可能な遺物として、坏、碗、甕などを覆土中から検出した。

第18図2・3の坏、6・7の甕は、カマド内から、4

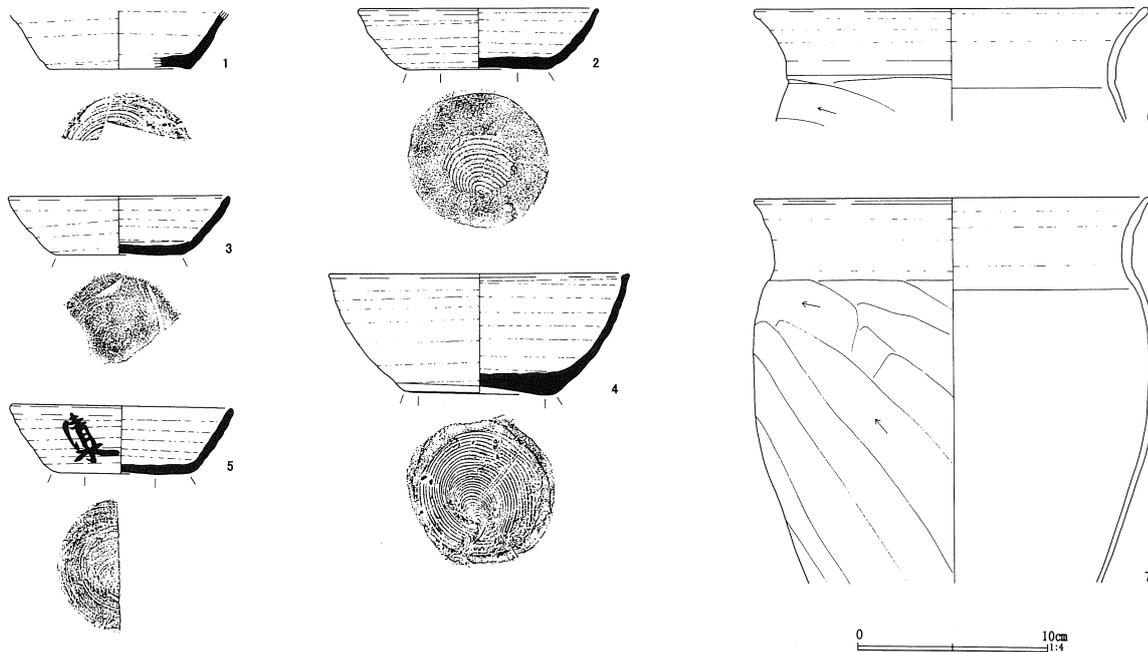
の坏は貯蔵穴の北側から、5の坏は西側の壁際からそれぞれ検出した。

住居跡の確認面からの深さは、およそ55cm程度であったので、他の住居と比べても、浅い方ではなかったが、覆土中から検出した遺物の量は少なかった。

覆土は、自然堆積の状況を示していた。カマド煙道方向からの土砂の流入と、カマド本体の崩壊による堆積がもっとも早かったと考えられる。

カマド手前のU字状の溝に関しては、その機能を明確にできなかった。カマド内に堆積していた第16層については、調査時の所見ではカマドの掘り方充填土層と見なされていた。U字状の溝の覆土は、このカマド掘り方充填土層の上に堆積し、カマド本体に起源をもつと考えられる灰白色の粘土粒子によって充填されていたので、カマドの使用時には、底面を露出させて使用されていた可能性が考えられた。

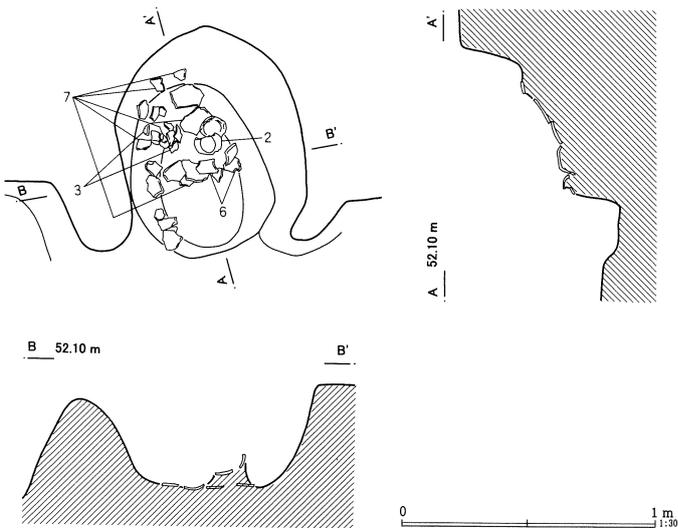
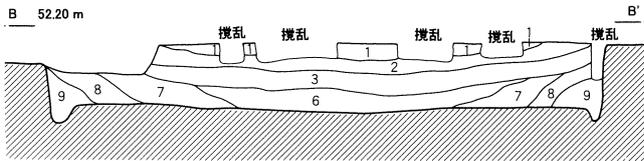
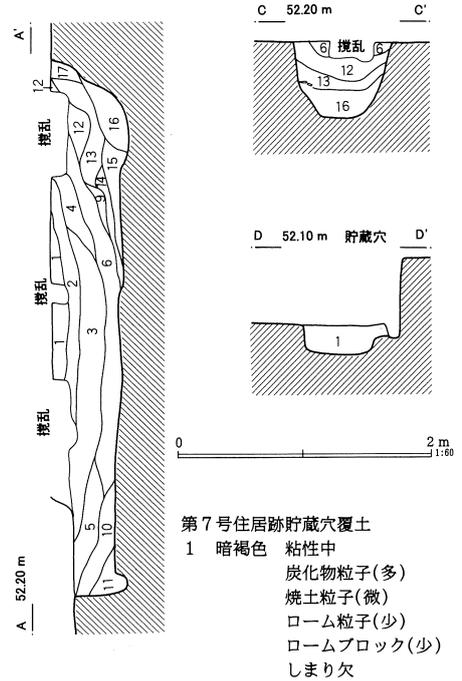
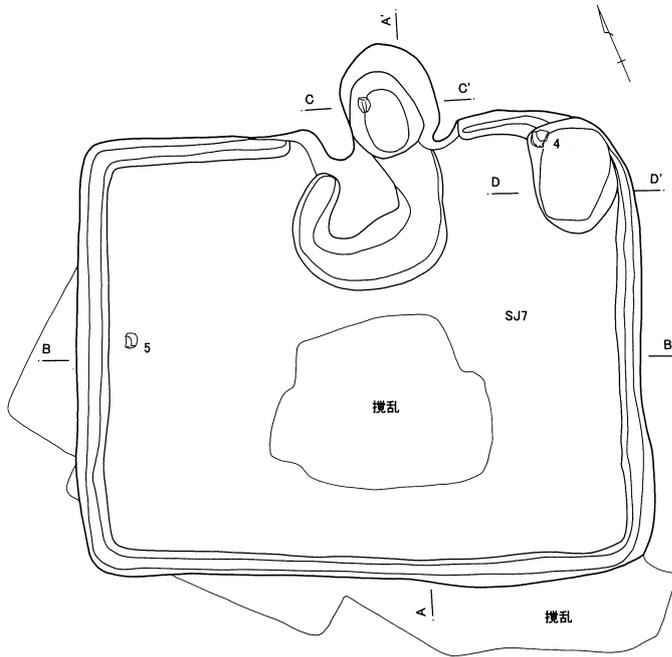
第18図 第7号住居跡出土遺物



第7号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	須恵器坏			(7.4)	B	4	薄灰色	30	
2	須恵器坏	12.6	3.2	7.4	B L	3	灰色	80	
3	須恵器坏	(11.7)	3.1	(6.5)	B	3	帯黄灰色	40	
4	須恵器坏	15.8	6.3	6.7	B F L	3	帯黄灰色	70	
5	須恵器坏	(11.5)	3.6	(6.5)	B F	3	灰色	50	墨書
6	甕	20.7			B	3	赤褐色	20	
7	甕	(20.7)			B E F	3	赤褐色	40	

第19図 第7号住居跡



第7号住居跡覆土

- | | | | | |
|----|------|-----|----------|---------------------|
| 1 | 暗褐色 | 粘性弱 | 炭化物粒子(少) | 焼土粒子(微) |
| 2 | 黒褐色 | 粘性中 | 炭化物粒子(少) | 焼土粒子(少) |
| 3 | 黒褐色 | 粘性中 | 炭化物粒子(中) | 焼土粒子(中) |
| 4 | 黄褐色 | 粘性中 | 炭化物粒子(微) | 焼土粒子(微) |
| 5 | 黒灰色 | 粘性中 | 炭化物粒子(少) | 焼土粒子(中) |
| 6 | 黒褐色 | 粘性中 | 炭化物粒子(微) | 焼土粒子(少) |
| 7 | 暗黄褐色 | 粘性弱 | 炭化物粒子(少) | 焼土粒子(微) |
| 8 | 暗褐色 | 粘性弱 | 炭化物粒子(少) | ローム粒子(多)しまり良 (フク土) |
| 9 | 黄褐色 | 粘性中 | 炭化物粒子(微) | ローム粒子(多)しまり良 (壁崩落土) |
| 10 | 黒灰色 | 粘性中 | 炭化物粒子(多) | 焼土粒子(中) |
| 11 | 黄褐色 | 粘性中 | ローム粒子(多) | ロームブロック(多)しまりやや欠 |
| 12 | 黒灰色 | 粘性弱 | 炭化物粒子(少) | 焼土粒子(少) 灰白色粘土粒子(多) |
| 13 | 灰白色 | 粘性強 | 炭化物粒子(少) | 焼土粒子(微) |
| 14 | 黒灰色 | 粘性中 | 炭化物粒子(多) | 焼土粒子(少) |
| 15 | 暗赤褐色 | 粘性中 | 炭化物粒子(多) | 焼土粒子(多) 焼土ブロック(中) |
| 16 | 暗黄褐色 | 粘性弱 | 炭化物粒子(微) | 焼土粒子(多) ローム粒子(少) |
| 17 | 暗褐色 | 粘性弱 | 炭化物粒子(少) | 焼土粒子(少) ローム粒子(少) |

第8号住居跡 (第20・21図)

第8号住居跡は、D・E-5グリッドから検出した。住居跡の北側は調査区外のため検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-17°-Eであった。規模は、副軸長4.3m、深さ45cm程度であった。壁は明瞭であったが、カマドが検出できなかった。カマドは、調査区外に所在する住居跡の北側に存在していると考えられた。床面は明瞭で、壁溝は、南西側のコーナーから東壁にかけて検出できた。

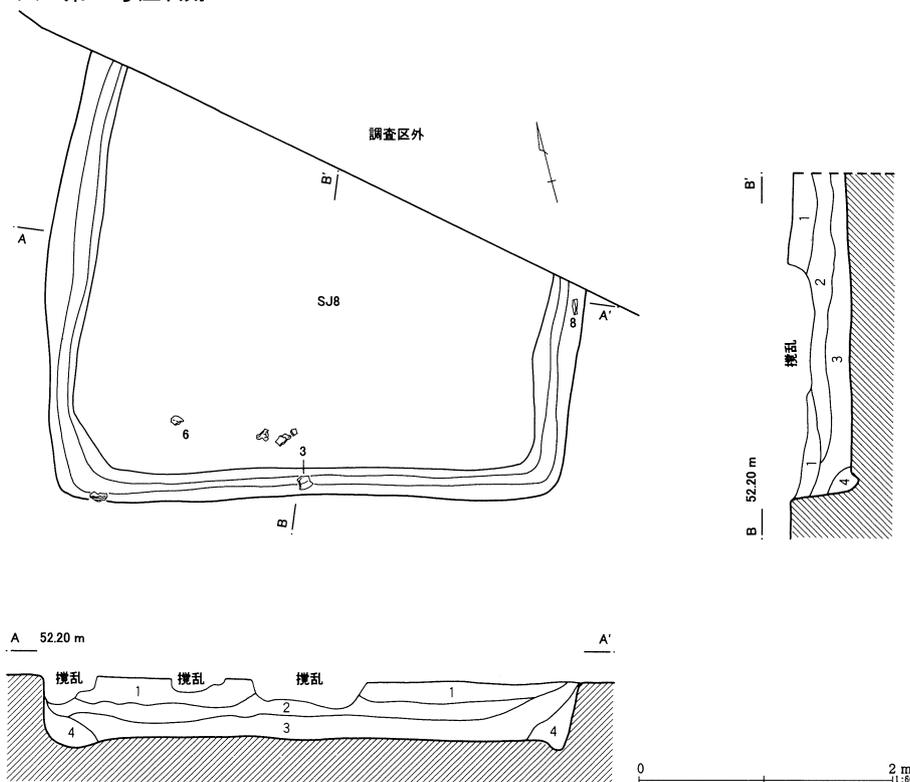
柱穴は、床面の精査によっても確認することができなかった。

覆土は、自然堆積の状況を示していた。実測可能な遺物として、坏、蓋、円面硯などを覆土中から検出した。

第21図3・6の坏は南側の壁際から、8の円面硯は、東側の壁際から検出した。

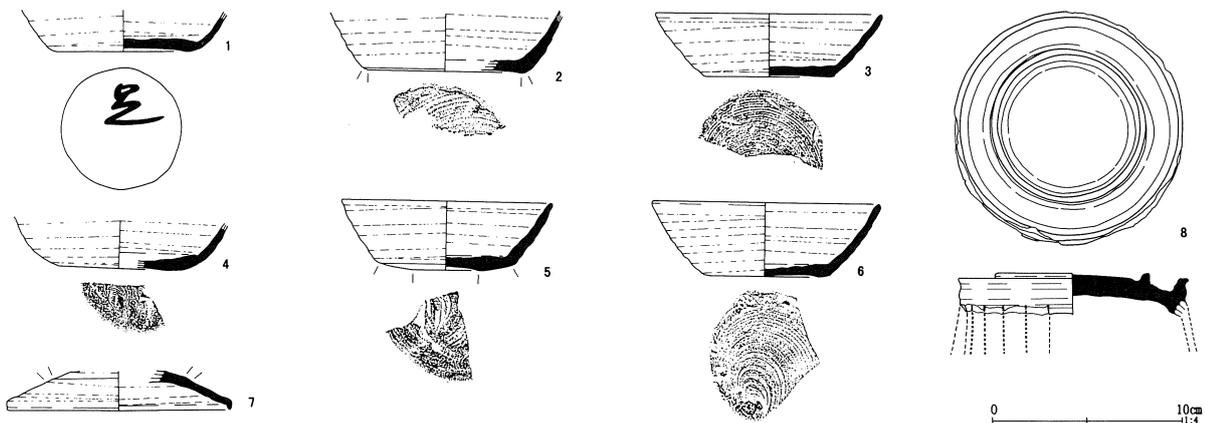
8の円面硯は、脚部を完全に欠失しており、二次的に打ち欠いた痕跡も認められた。墨の痕跡も明瞭に遺存しており、反復使用が想定された。

第20図 第8号住居跡



- 第8号住居跡覆土
- 1 黒褐色 粘性なし
ローム粒・炭化物・
焼土粒を多く含む
しまり良
 - 2 暗褐色 粘性あり
ローム粒・炭化物・
焼土粒及びローム
ブロック含む
しまり良
 - 3 茶褐色 粘性あり
ローム粒・炭化物を
多く含む
少量の焼土を含む
しまり良
 - 4 明褐色 粘性あり
多粒のローム及び
ロームブロック含む
炭・焼土を少量含む
しまり良

第21図 第8号住居跡出土遺物



第8号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	須恵器杯			7.0	B F	3	灰色	70	墨書
2	須恵器杯			(8.1)	B E F	4	黄褐色	20	
3	須恵器杯	(12.0)	3.3	(6.8)	B E L	3	灰色	20	
4	須恵器杯			(5.9)	B E F	3	帯黄灰色	20	
5	須恵器杯	(11.0)	3.6	(7.0)	B F L	3	帯黄灰色	20	
6	須恵器杯	(12.0)	3.9	(5.7)	B F	3	薄灰色	50	
7	須恵器蓋	(11.8)			B F	3	灰色	10	
8	須恵器円面硯	12.1			B L	3	灰色	90	

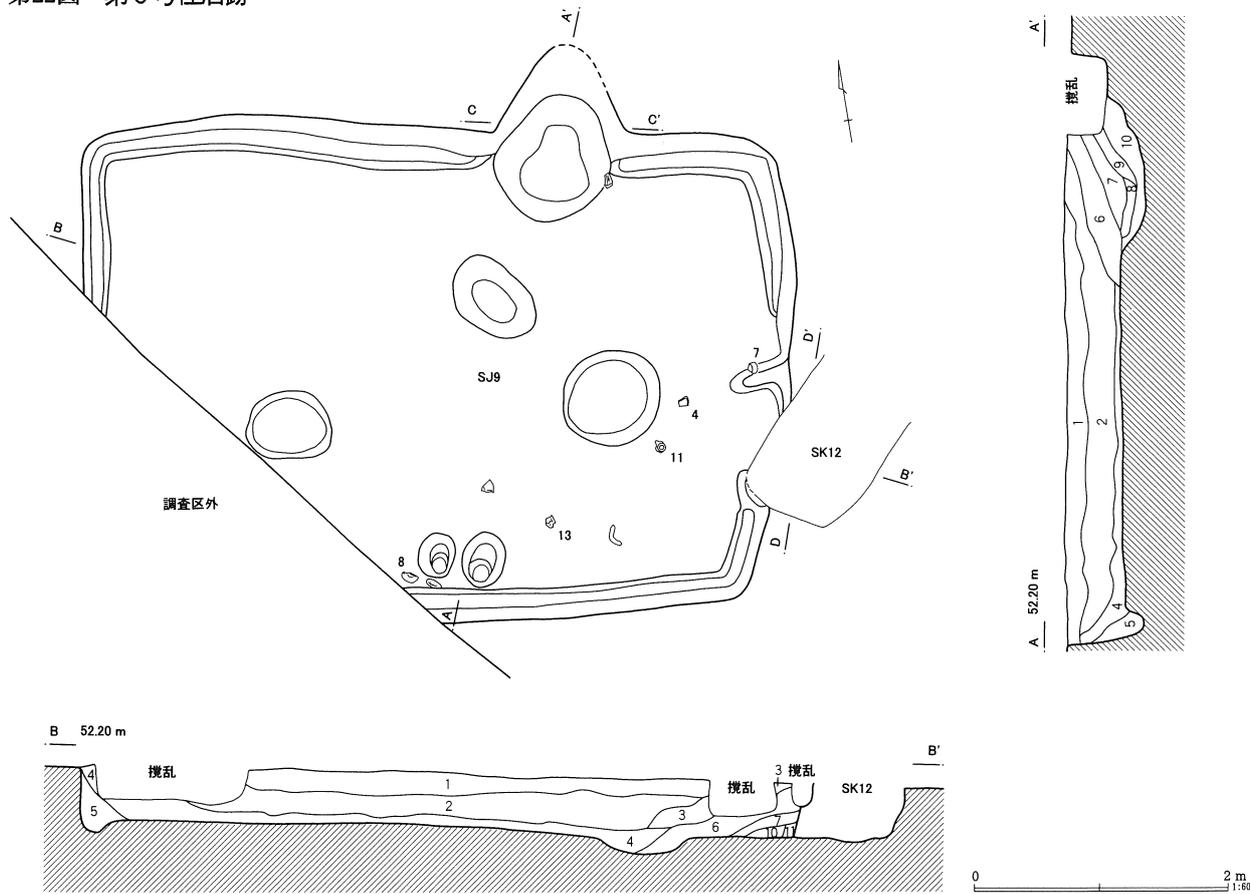
第9号住居跡 (第22・23図)

住居跡の南西側は調査区外のため、東側はSK-12の

第9号住居跡は、D-3・4グリッドから検出した。

ため検出できなかった。形態は方形で主軸方位はN-

第22図 第9号住居跡



- 第9号住居跡覆土
- | | | | | |
|---|-----|------|------------------------|-------|
| 1 | 黒褐色 | 粘性なし | 少量のローム粒・木炭・焼土含む | しまりなし |
| 2 | 暗褐色 | 粘性なし | 少量のローム粒と木炭・焼土を多く含む | しまり良 |
| 3 | 暗褐色 | 粘性あり | 少量のローム粒と多量の焼土 微量の粘土を含む | しまり良 |
| 4 | 明褐色 | 粘性あり | 多量のローム粒 焼土と木炭を少量含む | しまり良 |

- | | | | | |
|----|------|------|--|-------|
| 5 | 茶褐色 | 粘性あり | ローム粒を多量に含む 少量の焼土・木炭含む | しまりなし |
| 6 | 暗茶褐色 | 粘性あり | 焼土・木炭を多く含む ローム粒・粘土を少量含む | しまり良 |
| 7 | 黒褐色 | 粘性中 | 炭化物粒子(少) 焼土粒子(少) 灰白色粘土粒子(少) ローム粒子(少) しまりやや欠 (カマドフク土) | |
| 8 | 黒褐色 | 粘性少 | 炭化物粒子(中) 焼土粒子(中) 灰白色粘土粒子(微) しまりやや良 (カマドフク土) | |
| 9 | 暗赤褐色 | 粘性少 | 炭化物粒子(少) 焼土粒子(多) 灰白色粘土粒子(微) しまり欠(カマドフク土) | |
| 10 | 暗赤褐色 | 粘性少 | 炭化物粒子(少) 焼土粒子(多) 焼土ブロック(少) 灰白色粘土粒子(微) しまり欠 (カマドフク土) | |
| 11 | 灰白色 | 粘性中 | 灰白色粘土ブロック | |

9°-Eであった。

規模は、主軸長4.0m、副軸長5.7m、深さ60cm程度であった。

壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。床面は明瞭で、壁溝は、南東部分で一部途切れるがほぼ全周していた。

床面の精査によって、ピットを5本検出した。ピットの中で、3本は口径がやや大きく、住居跡の比較的中央寄りから検出した。2本は、口径がやや小さく、南側の壁際で検出した。前者の中の二本が、柱穴に相当する可能性があるが、いずれのピットについても、覆土の観察結果や出土遺物からは、住居跡との関係を

明瞭にできなかった。

住居跡は、SK-12と重複していた。重複関係は、SK-12に切られていた。

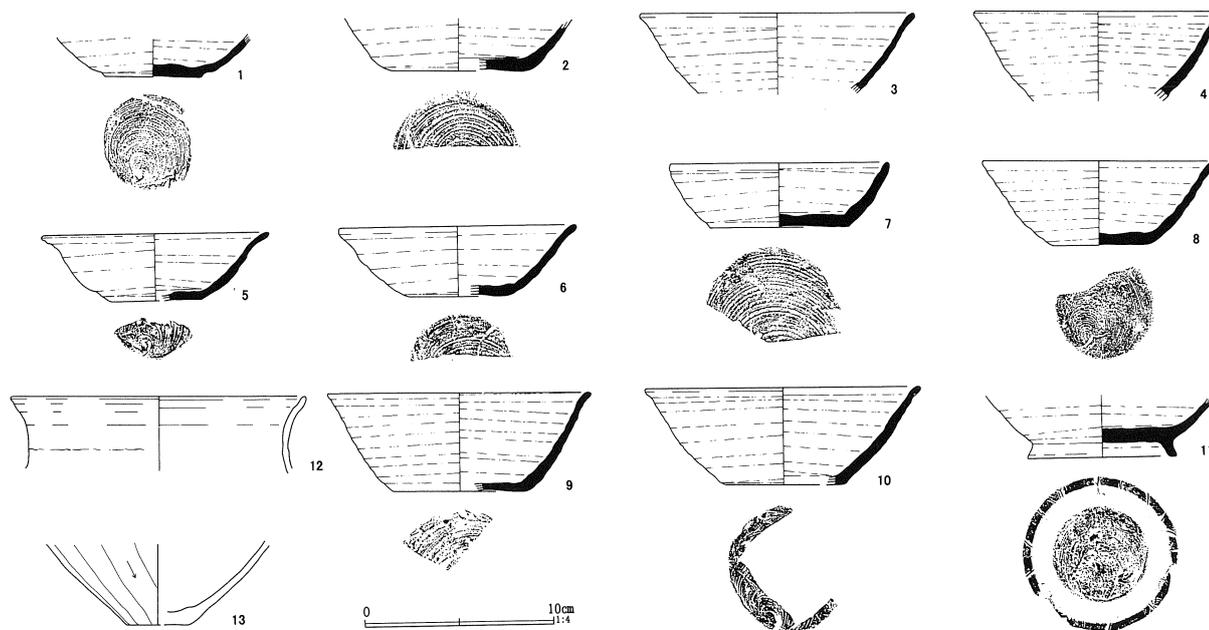
実測可能な遺物として、坏、碗、甕、棒状鉄製品、鎌などを覆土中から検出した。

第23図4・7・11の坏、13の甕の底部は住居跡の南東側から、8の坏は南側の壁際からそれぞれ検出した。

覆土は、自然堆積の状況を示していた。堆積の当初は、カマドの煙道からの土砂の流入と、カマド本体の崩壊に伴う土が主体となっていた。

灰白色粘土のブロックからなる覆土11層については、住居跡北側のカマドとの関係を明瞭にできなかった。

第23図 第9号住居跡出土遺物



第9号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	須恵器坏			5.0	BEL	3	赤褐色	60	
2	須恵器坏			(6.9)	BF	3	黄褐色	40	
3	須恵器坏	(14.4)			BL	4	黄褐色	20	
4	須恵器坏	(13.0)			BL	3	帯黄灰色	20	
5	須恵器坏	(11.7)	3.6	(4.7)	BFL	3	灰色	40	
6	須恵器坏	(12.4)	3.2	(5.1)	BEF	3	黄褐色	40	
7	須恵器坏	(11.5)	3.4	7.3	BF	3	灰色	50	
8	須恵器坏	12.2	4.5	4.8	BFL	3	黄褐色	60	
9	須恵器坏	13.8	5.2	6.9	B	3	濃灰色	20	
10	須恵器坏	(14.4)	5.1	(6.0)	BFL	3	灰色	50	
11	須恵器坏			7.8	BEL	4	薄灰色	70	
12	甕	(15.5)			BF	3	赤褐色	20	
13	甕			(3.2)	BE	3	赤褐色	50	

第10号住居跡 (第24・25図)

第10号住居跡は、C-2・3グリッドから検出した。形態は方形で、主軸方位はS-65°-Eであった。規模は、主軸長3.9m、副軸長3.9m、深さ40cm程度であった。壁は明瞭であり、東側からカマドが検出できた。カマド内からは、坏・皿、礫製の支脚が検出できた。床面は明瞭で、壁溝は、全周していた。

住居跡は、SB-6と重複していた。重複関係は、SJ-10確認時に、SB-6のピットが確認できなかった為に、

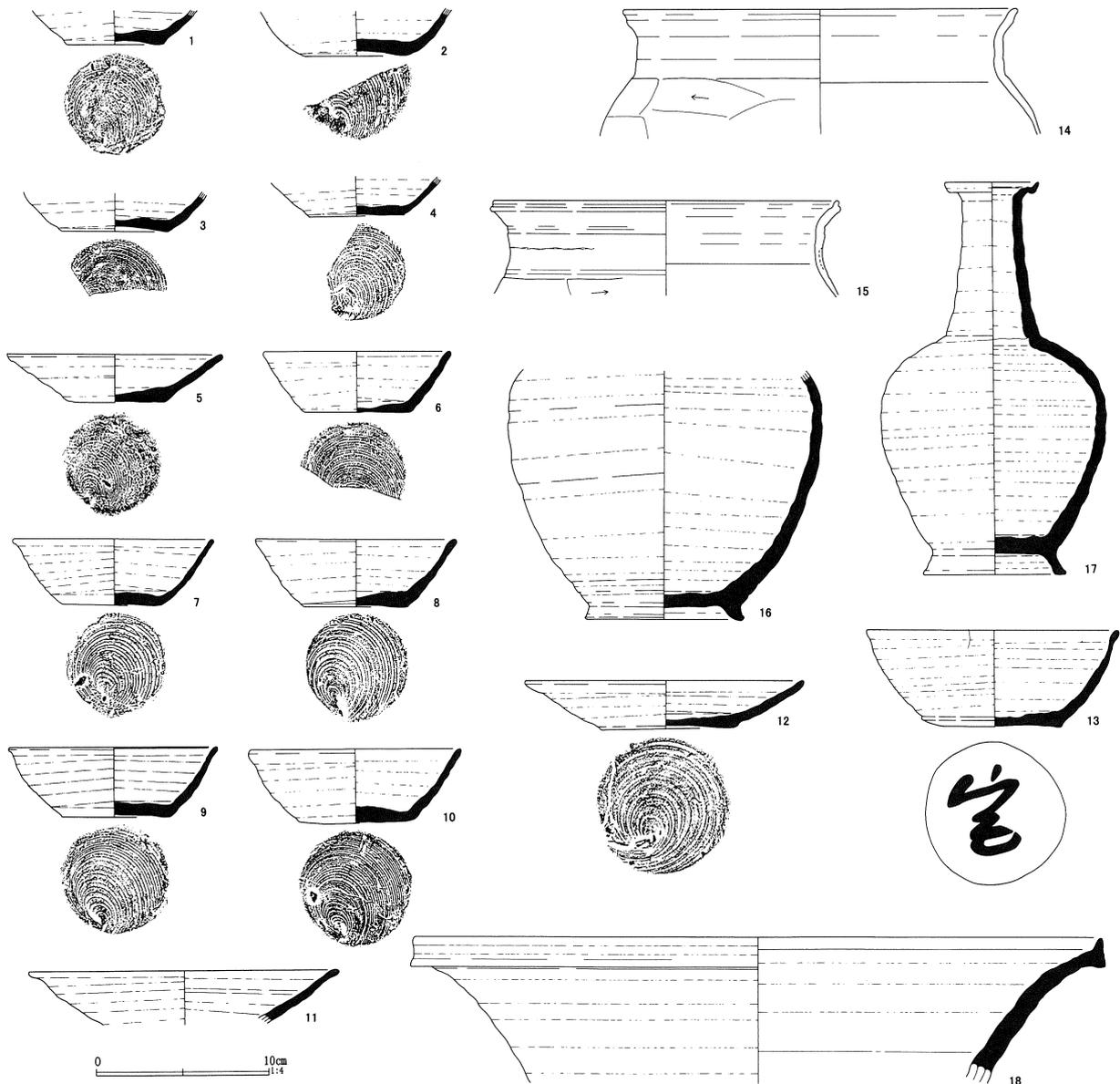
SJ-10の方が新しいと考えられた。

実測可能な遺物として、坏、皿、甕、鉄製の鎌などを覆土中から検出した。

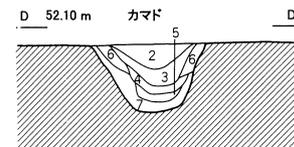
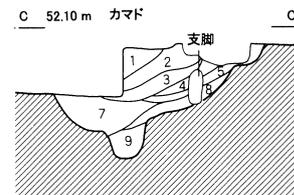
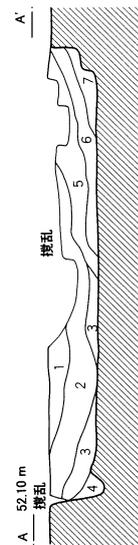
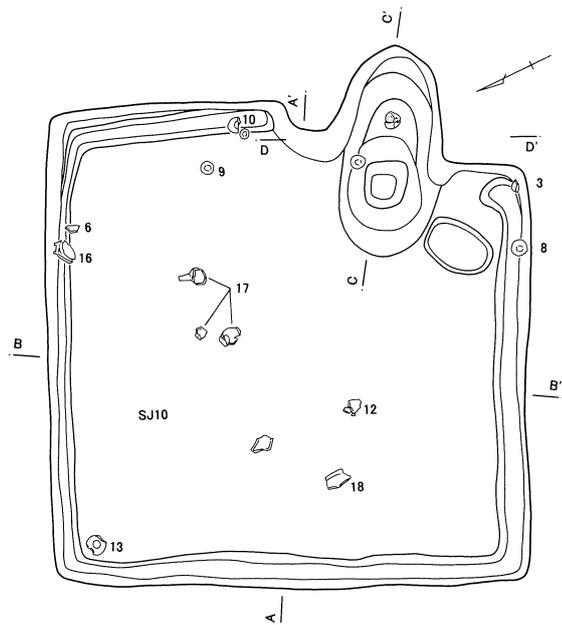
第24図5・7の坏はカマド内から、3・8の坏はカマド右側コーナー付近の壁溝の中から、9・10の坏はカマド左側から、6の坏は北側の壁際から、12の皿は住居跡中央やや西よりの床面上から、13の坏は北側コーナー付近から、16の壺は北側の壁際から、17の壺は中央から、18の甕は西側から、それぞれ検出した。

覆土は、自然堆積の状況を示していた。

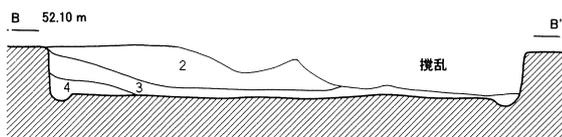
第24図 第10号住居跡出土遺物



第25図 第10号住居跡



0 2m 1:50



第10号住居跡覆土

- 1 暗褐色 粘性弱 炭化物粒子(少) 焼土粒子(少) ローム粒子(少)
- 2 黒褐色 粘性弱 炭化物粒子(中) 焼土粒子(中) ローム粒子(少)
- 3 黒褐色 粘性中 炭化物粒子(中) 焼土粒子(少) ローム粒子(少)
- 4 黒褐色 粘性中 炭化物粒子(少) 焼土粒子部分的に多く含む
ローム粒子(多) しまりやや欠
- 5 黒灰色 粘性中 炭化物粒子(中) 焼土粒子(中) ローム粒子(微)
灰白色粘土粒子(中) しまりやや欠
- 6 灰白色 粘性中 炭化物粒子(多) 焼土粒子(少)
灰白色粘土と黒色土の互層 しまりやや欠

- 7 暗赤褐色 粘性中 炭化物粒子(多) 焼土粒子(多)
灰白色粘土粒子(少) しまり良 (カマドフク土の流失)

第10号住居跡カマド覆土

- 1 暗褐色 粘性弱 焼土粒子(少) 炭化物粒子(中)
灰白色粘土粒子(少) ローム粒子(少) しまりやや良
- 2 灰褐色 粘性中 焼土粒子(微) 炭化物粒子(中)
灰白色粘土粒子(多) ローム粒子(微) しまり良
- 3 灰褐色 粘性中 焼土粒子(少) 炭化物粒子(多)
灰白色粘土粒子(中) しまりやや欠
- 4 暗赤褐色 粘性弱 焼土粒子(多) 炭化物粒子(多)
灰白色粘土粒子(少) しまり欠
- 5 暗褐色 粘性弱 焼土粒子(少) 炭化物粒子(多)
灰白色粘土粒子(微) ローム粒子(微) しまり欠
- 6 灰白色 粘性大 灰白粘土層 (カマド構築土)
- 7 暗褐色 粘性弱 焼土粒子(中) 炭化物粒子(多)
灰白色粘土粒子(少) ローム粒子小ブロック(少)
- 8 黄褐色 粘性弱 焼土ブロック(少) 灰白色粘土粒子(多)
しまり良く被熱により硬化 (カマド掘り方)
- 9 暗黄褐色 粘性弱 暗褐色土とロームブロックの互層 しまり欠

第10号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	須恵器坏			5.2	BFL	4	薄灰色	50	
2	須恵器坏			5.7	BF	3	灰色	40	
3	須恵器坏			6.1	B	3	濃灰色	30	
4	須恵器坏			5.5	BL	3	濃灰色	50	
5	須恵器坏	12.4	2.8	5.2	BL	3	黄褐色	100	
6	須恵器坏	10.8	3.5	6.0	BL	3	濃灰色	50	
7	須恵器坏	11.5	3.8	5.5	BEL	3	赤褐色	80	
8	須恵器坏	11.5	3.9	6.0	BE	3	黄褐色	100	
9	須恵器坏	12.0	4.0	6.2	BFL	3	灰色	100	
10	須恵器坏	12.1	4.3	6.7	BE	3	濃褐色	70	
11	須恵器皿	(17.8)			BF	3	濃灰色	20	
12	須恵器皿	16.1	2.8	7.5	BF	4	薄灰色	70	
13	須恵器坏	14.5	5.6	6.9	BFL	3	黄褐色	80	墨書
14	甕	(22.7)			BG	3	赤褐色	20	
15	甕	(19.9)			BG	3	赤褐色	20	
16	須恵器壺			9.0	BIL	3	灰色	50	
17	須恵器長頸瓶	(5.4)	22.7	8.2	BFL	3	濃灰色	90	
18	須恵器甕	(40.0)			BF	3	濃灰色	20	

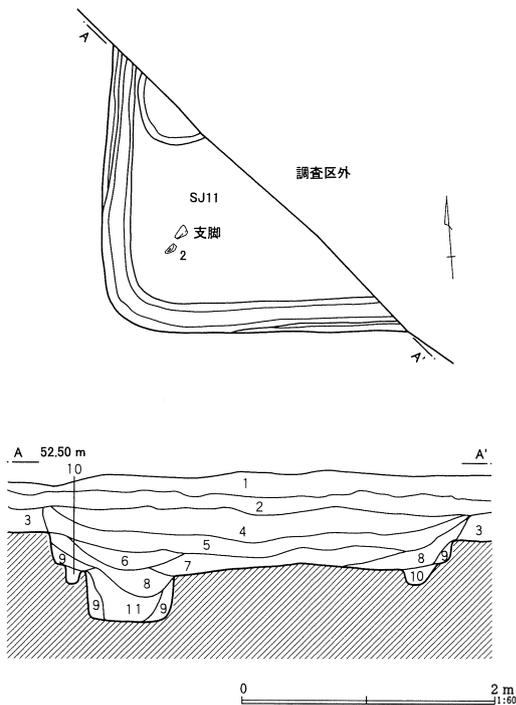
第11号住居跡 (第26・27図)

第11号住居跡は、A・B-3グリッドから検出した。
住居跡の北から南東側は調査区外のため検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-5°-Eであった。
規模は、深さ75cm程度であった。
壁は明瞭であったが、カマドが検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は、全周していた。
実測可能な遺物として、坏、甕などを覆土中から検出した。

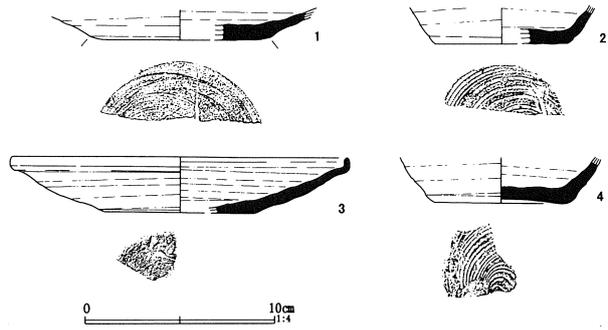
第11号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	須恵器皿			(8.9)	BFL	3	濃褐色	30	
2	須恵器坏			(7.0)	BF	3	黄褐色	30	
3	須恵器皿	(17.8)	(2.9)	(8.0)	BFL	4	帯黄灰色	30	
4	須恵器坏			(6.9)	BEF	3	濃褐色	20	

第27図 第11号住居跡



第26図 第11号住居跡出土遺物



第26図2の坏と、支脚と考えられる礫を、南西側のコーナー付近から検出した。

第11号住居跡覆土

- 1 灰褐色 粘性弱 耕作土
- 2 黒褐色 粘性弱 焼土粒子(少) 炭化物粒子(少) 白色微粒子(少) ローム粒子(少) しまり欠
- 3 暗褐色 粘性弱 白色微粒子(少) ローム粒子(少) しまり良
- 4 暗褐色 粘性中 焼土粒子(中) 炭化物粒子(少) ローム粒子(少) しまりやや欠 (フク土)
- 5 暗褐色 粘性中 焼土粒子(少) 炭化物粒子(少) ローム粒子(微) 灰白色粘土粒子(微) しまりやや良 (フク土)
- 6 暗褐色 粘性中 焼土粒子(少) 炭化物粒子(中) ローム粒子(中) しまりやや欠 (フク土)
- 7 暗褐色 粘性弱 焼土粒子(多) 炭化物粒子(中) 灰白色粘土粒子(少) しまりやや欠 (フク土)
- 8 暗褐色 粘性中 焼土粒子(微) 炭化物粒子(少) ローム粒子(中) しまり欠 (フク土)
- 9 暗黄褐色 粘性中 炭化物粒子(微) ローム粒子(多) しまり欠 (壁崩落土)
- 10 黒褐色 粘性中 炭化物粒子(微) ローム粒子(中) しまり良 (壁溝フク土)
- 11 黄褐色 粘性弱 焼土粒子(少) 炭化物粒子(微) ローム粒子(多) ローム粒子ブロック(多) しまり良 (ヒットフク土)

第12号住居跡 (第28図)

第12号住居跡は、H-7グリッドから検出した。
住居跡の西側は SJ-4のため検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-35°-Eであった。
規模は、主軸長3.4m、深さ25cm程度であった。
壁は明瞭であり、東側からカマドが検出できた。床面

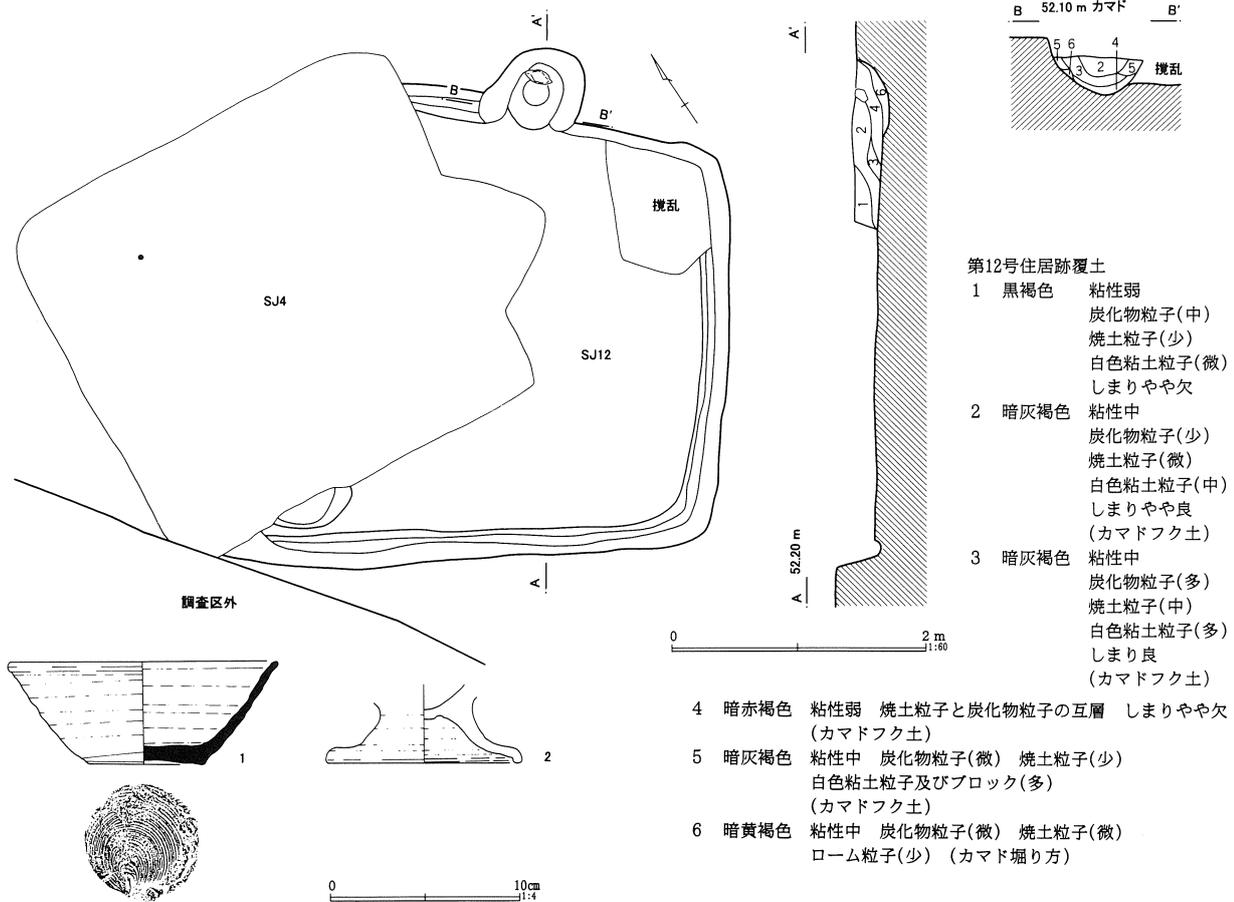
は明瞭で、壁溝は、全周していた。

住居跡は、SJ-4と重複していた。重複関係は、SJ-4に切られていた。

実測可能な遺物として、坏、台付甕の脚部などを覆土中から検出した。

覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第28図 第12号住居跡・出土遺物



第12号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	須恵器坏	14.2	5.4	6.0	BFL	3	灰色	70	
2	台付甕			10.0	BE	3	黄褐色	90	

第13号住居跡 (第29・30図)

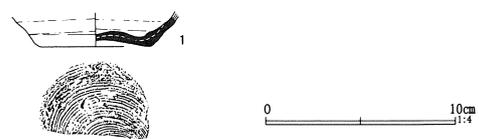
第13号住居跡は、I-7グリッドから検出した。住居跡の大半は、攪乱のため、西側は調査区外のため、検出できなかった。形態は不整形で、主軸方位はS-58°-Eであった。規模は、主軸長不明、副軸長不明、深さ65cm程度であった。壁は不明瞭であり、東南側からカマドが検出できた。カマド内からは、支脚が検出できた。検出した支脚は、カマド内覆土第2・3層中に含まれており、使用時の位置を保ってはいなかった。床面は比較的明瞭で、壁溝は残存していた北西壁のみ検出できた。しかし、カマドから想定した主軸とは、

方向が一致しなかった。調査区外との境界にかかる断面を精査して、土層確認をしたが、複数の住居跡が重複している痕跡は認められなかった。

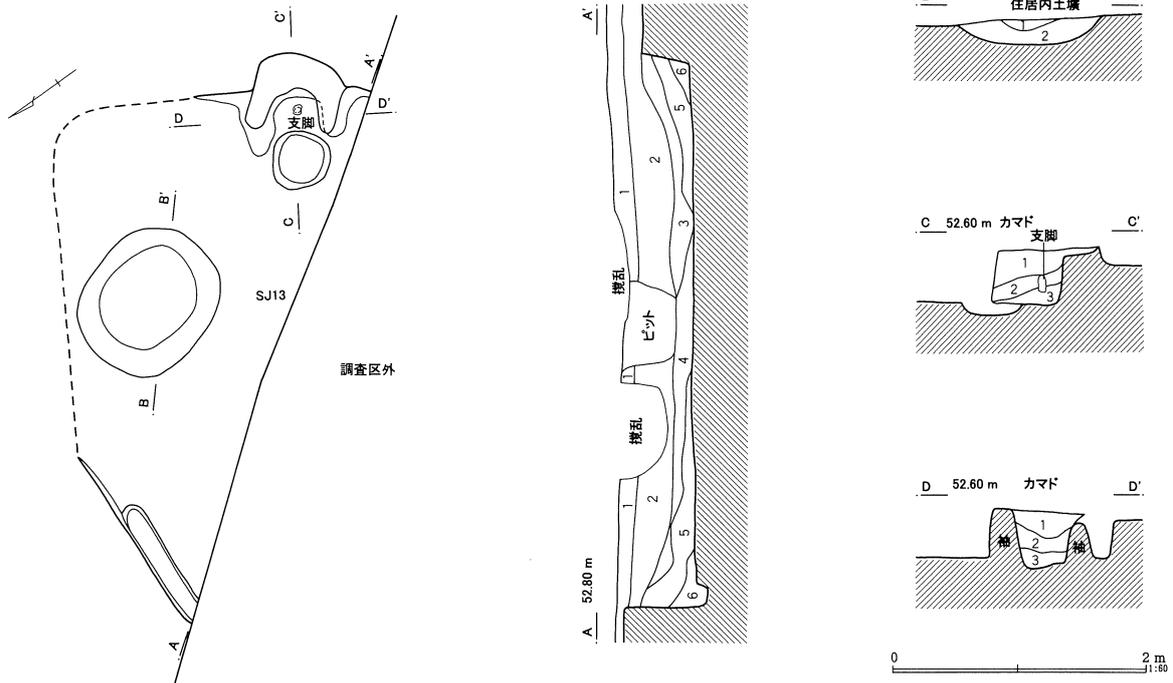
床面の精査によって、北側からピットを検出したが、やや浅く、覆土の観察によっては、住居跡との関係を明らかに出来なかった。

実測可能な遺物として、坏の底部破片、棒状鉄製品などを覆土中から検出した。

第29図 第13号住居跡出土遺物



第30図 第13号住居跡



第13号住居跡覆土

- 1 黒褐色 粘性弱 焼土粒子(少) 炭化物粒子(少) 白色微粒子(少) しまり良 (包含層フク土)
- 2 黒褐色 粘性弱 焼土粒子(中) 炭化物粒子(少) ローム粒子(少) しまり良 (住居フク土)
- 3 黒褐色 粘性中 焼土粒子(中) 炭化物粒子(中) 白色粘土粒子(少) しまり良 (住居フク土)
- 4 黒褐色 粘性弱 焼土粒子(多) 炭化物粒子(多) しまり良 (住居フク土)
- 5 暗灰褐色 粘性中 焼土粒子(中) 炭化物粒子(少) 白色粘土粒子(多) しまり良 (カマド流失土)
- 6 暗黄褐色 粘性中 焼土粒子(微) 炭化物粒子(微) ローム粒子(多) しまりやや欠 (壁崩落土)

第13号住居内土壇覆土

- 1 灰褐色 粘性中 焼土ブロックと灰色粘土の互層 しまり欠
- 2 黒褐色 粘性中 焼土粒子(少) 炭化物粒子(中) 白色粘土粒子(少) しまりやや欠

第13号住居跡カマド覆土

- 1 黒褐色 粘性弱 炭化物粒子(少) 焼土粒子(少) しまりやや欠
- 2 暗褐色 粘性中 炭化物粒子(少) 焼土粒子(中) 白色粘土粒子(少) しまり良
- 3 暗赤褐色 粘性弱 炭化物粒子(少) 焼土粒子(多) 白色粘土粒子(微) しまり良

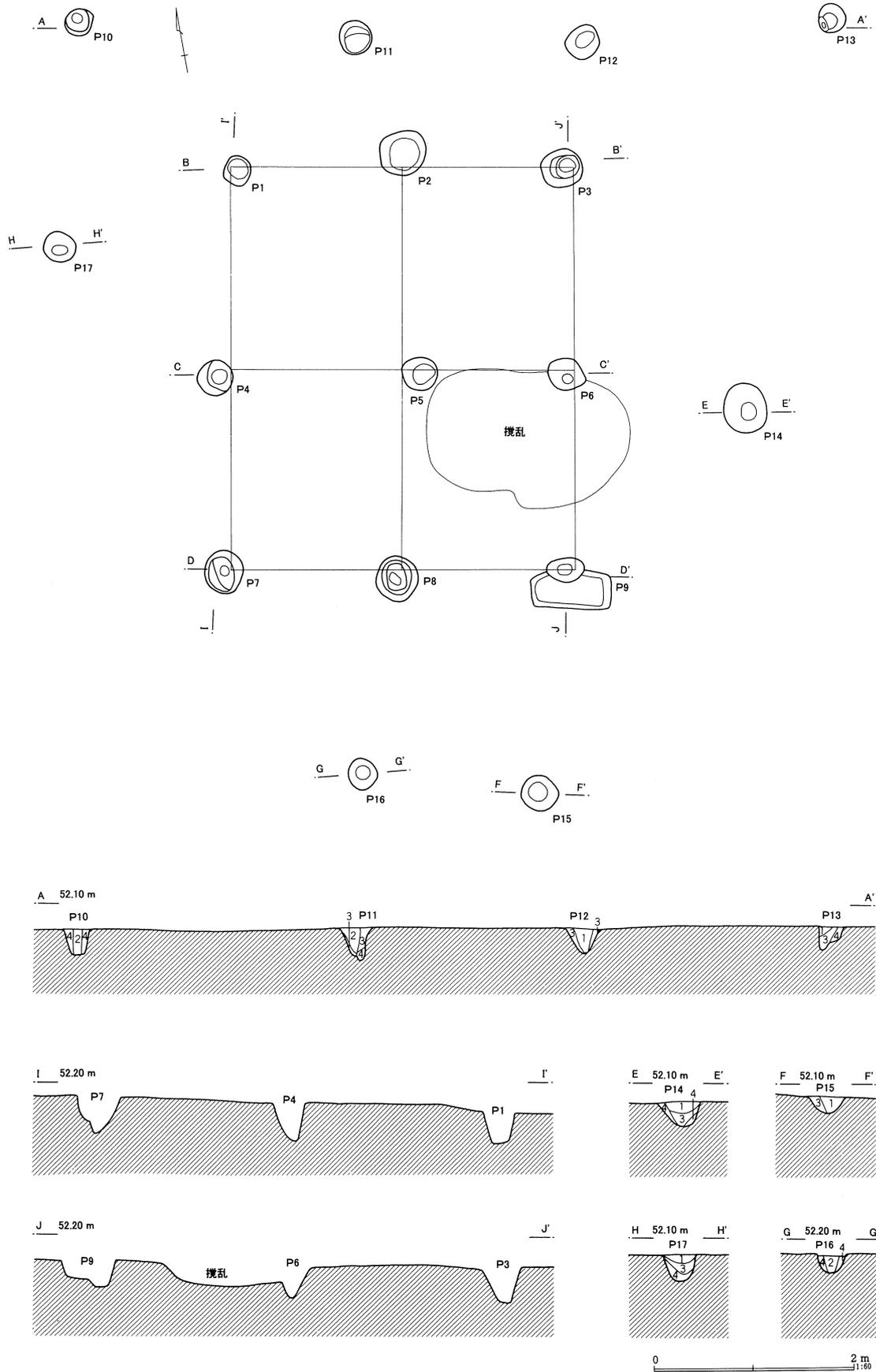
第13号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	須恵器杯			5.8	B E	3	濃灰色	60	

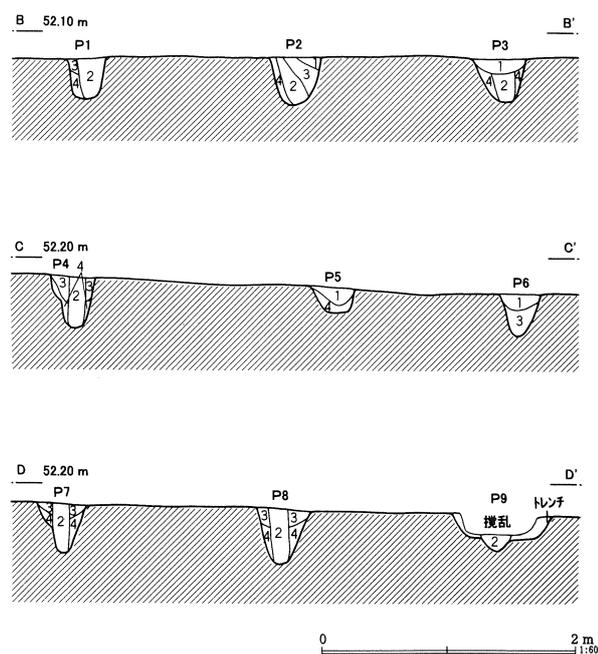
表1 戸張遺跡検出住居跡一覧表

番号	Grid	主軸方位	主軸長/m	副軸長/m	深さ/cm	カマド位置	壁溝
SJ-1	I-7・8	N-5°-E	3.3	3.4	35	北	ほぼ全周
SJ-2	F-7	N-15°-E	4.7	4.7	55	北	ほぼ全周
SJ-3	H・I-7	N-76°-E	3.6	3.8	45	東	ほぼ全周
SJ-4	H-6・7	S-83°-E	3.4	3.1	35	東	全周
SJ-5	F-5・6	N-14°-E	3.0	4.6	55	北東	全周
SJ-6	E・F-4・5	S-78°-E	4.6	4.3	45	南東	ほぼ全周
SJ-7	E-4・5	N-19°-E	3.5	4.5	55	北東	ほぼ全周
SJ-8	D・E-5	N-17°-E	—	4.3	45	—	南西～東
SJ-9	D-3・4	N-9°-E	4.0	5.7	60	北	ほぼ全周
SJ-10	C-2・3	S-65°-E	3.9	3.9	40	東	全周
SJ-11	A・B-3	N-5°-E	—	—	75	—	—
SJ-12	H-7	N-35°-E	3.4	—	25	東	—
SJ-13	I-7	S-58°-E	—	—	65	東南	北西

第31図 第1号掘立柱建物跡



第32図 第1号掘立柱建物跡



第1号掘立柱建物跡覆土

- 1 暗褐色 粘性弱 ローム粒(多) 暗褐色土粒(少) しまり欠 抜去痕
- 2 黒褐色 粘性弱 炭化物粒(微) しまり欠 柱痕
- 3 黒褐色 粘性中 ローム粒(微) 暗褐色土粒(少) しまりやや良
- 4 暗褐色 粘性中 ローム粒(多少) 暗褐色土粒(多少) しまり良 掘り方

(2) 掘立柱建物跡

戸張遺跡の調査区内からは、掘立柱建物跡を10棟検出した。

調査区は道路幅で細長く、遺跡の全貌を把握するには至らなかったが、調査範囲内の状況からは、竪穴住居跡と掘立柱建物跡との3単位の組み合わせが想定で

きる。

この中で、SB-1は、総柱で外周にもピットを持つ建物であった。

SB-3・4については、わずかに主軸をずらした、同一場所での立て替えと考えられた。柱掘り方の規模も他の掘立柱建物跡と比べると大きく、しっかりしていた。

これらの中で、SB-3・5・7・8・9からは、遺物も検出できたが、いずれも微細な破片であり、当該遺構との帰属関係は、明瞭にし得なかった

第1号掘立柱建物跡 (第31図)

第1号掘立柱建物跡は、H-7・8グリッドから検出した。

形態は方形で、主軸方位はN-10°-Eであった。

規模は、桁行4.1m、梁行3.5m、面積14.0m²で2間×2間の総柱建物であった。

建物の外周には、柱穴が巡っていた。

柱間寸法は、桁間2.0m、梁間1.7mであった。

柱掘り方の形状は円形で、身舎は径30～45cm、深さは20～40cmであった。外周は径25～45cm、深さは20～35cmであった。

柱痕は、身舎ではP1、P3、P4、P7、P8、P9、外周ではP10、P11、P16で検出した。

SB-1のP6は、攪乱を受けていた。

実測可能な遺物は検出できなかった。

表2 戸張遺跡検出掘立柱建物跡一覧表

番号	Grid	主軸方位	面積/m ²	桁行/m	梁行/m	間数/間	桁間/m	梁間/m	柱 痕
SB-1	H-7・8	N-10°-E	14.0	4.1	3.5	2×2	2.0	1.7	P1 P3 P4 P7 ~ P9
SB-2	E-5・6	N-0°-E	17.6	4.4	4.1	2×2	2.2	2.0	P1 ~ P8
SB-3	C・D-3・4	N-10°-E	41.8	7.4	5.7	3×2	3.7	2.8	P1 ~ P5 P10
SB-4	C・D-3・4	N-16°-E	41.4	7.4	5.7	3×2	3.7	2.9	P3 ~ P5 P7 ~ P9
SB-5	C-3・4	N-25°-E	—	5.4	—	3×—	1.8	—	P2 ~ P4
SB-6	C-2・3	N-30°-E	—	3.6以上	—	—	1.5	—	
SB-7	B-2・3	N-8°-E	19.4	4.9	4.0	3×2	1.5	2.0	
SB-8	A・B-2	N-14°-E	21.9	5.1	4.3	3×2	1.7	2.2	P3 P7
SB-9	Y・Z-3	N-11°-E	—	N4.4 E3.6	—	—	2.2	1.8	
SB-10	Y・Z-3	N-20°-E	—	N3.0 E2.8	—	—	1.5	1.4	P1 ~ P5

第2号掘立柱建物跡 (第33図)

第2号掘立柱建物跡は、E-5・6グリッドから検出した。

形態は方形で、主軸方位はN-0°-Eであった。

規模は、桁行4.4m、梁行4.1m、面積17.6m²で2間×2間の側柱建物であった。

柱間寸法は、桁行2.2m、梁行2.0mであった。

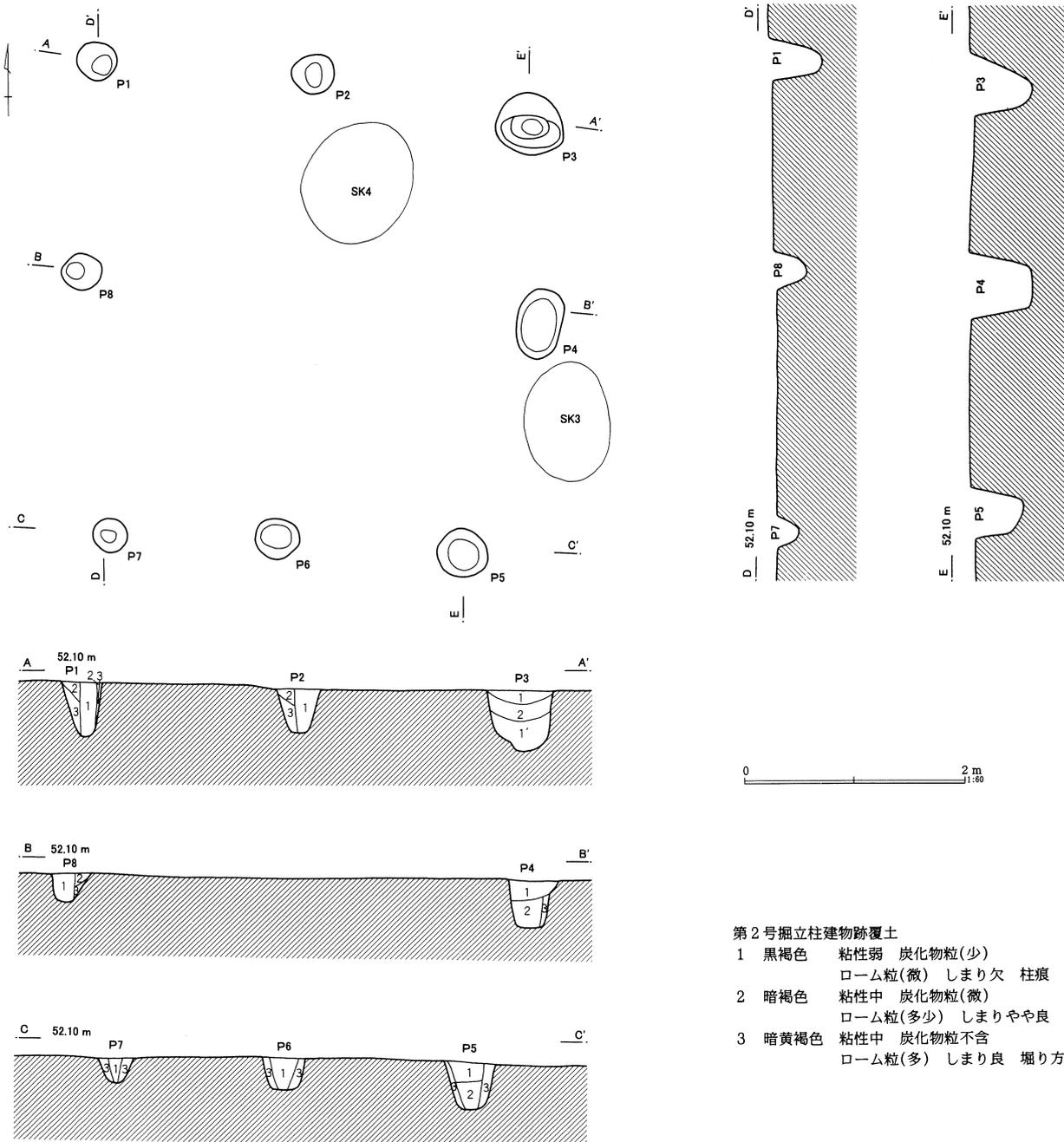
柱掘り方の形状は、円形または楕円形で、径30~60cm、深さは20~55cmであった。

柱痕はP1~P8の中で、P3とP4を除く全ての柱穴で検出した。

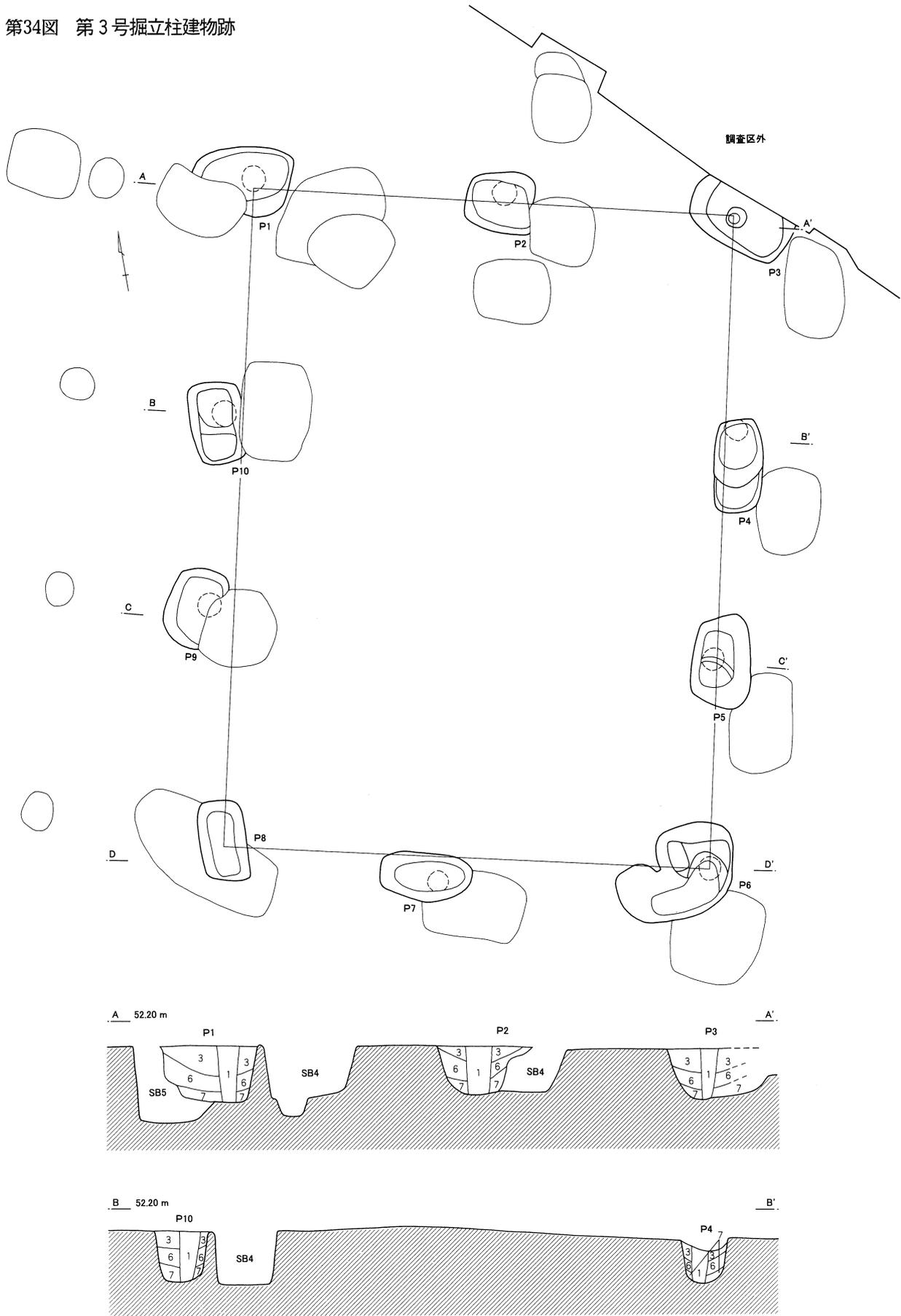
SB-2は、P2南側でSK-4と、P4南側でSK-3と重複していた。

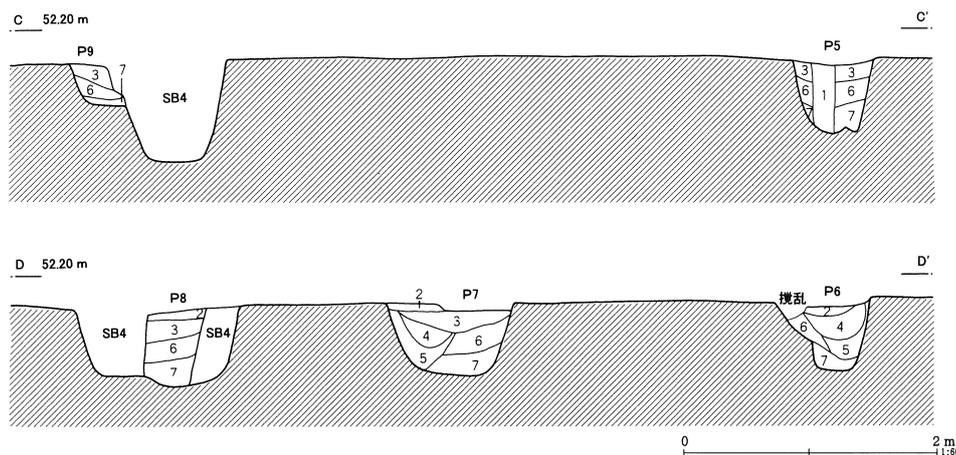
実測可能な遺物は検出できなかった。

第33図 第2号掘立柱建物跡



第34图 第3号掘立柱建物跡





第3号掘立柱建物跡覆土

- 1 暗褐色 粘性弱 炭化物粒(少) ローム粒(微) しまり欠 柱痕
- 2 暗褐色 粘性弱 炭化物粒(少) ローム粒(少) しまり欠
- 3 黒褐色 粘性弱 炭化物粒(微) ローム粒(少) しまり良
- 4 暗褐色 粘性中 炭化物粒(微) ローム粒(少) ロームブロック(少) しまりやや欠
- 5 暗褐色 粘性中 炭化物粒(微) ローム粒(少) ロームブロック(多少) しまりやや欠
- 6 暗褐色 粘性中 ローム粒・ロームブロック・暗褐色土の互層 しまり良
- 7 黒褐色 粘性中 黒褐色土・ローム粒の互層 しまり良

第3号掘立柱建物跡 (第34・35図)

第3号掘立柱建物跡は、C-3・4、D-3・4グリッドから検出した。

形態は方形で、主軸方位はN-10°-Eであった。

規模は、桁行7.4m、梁行5.7m、面積41.8m²で3間×2間の側柱建物であった。

柱間寸法は、桁行3.7m、梁行2.8mであった。

柱掘り方の形状は隅丸方形で、径70~100cm、深さは40~60cmであった。

柱痕は、P1~P5、P10の柱穴で検出した。

SB-3は、SB-4、SB-5と重複していた。新旧関係は、SB-4、SB-5を切っていた。

実測可能な遺物として、第35図1の須恵器杯を、P4から検出した。小さな破片であるために、SB-3に対する帰属関係は、明らかに出来なかった。

第35図 第3号掘立柱建物跡出土遺物



第3号掘立柱建物跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	須恵器杯	(13.9)			B	4	薄灰色	20	P2

第4号掘立柱建物跡 (第36図)

第4号掘立柱建物跡は、C-3・4、D-3・4グリッドから検出した。

形態は方形で、主軸方位はN-16°-Eであった。

規模は、桁行7.4m、梁行5.7m、面積41.4m²であった。西側に庇のついた建物であった。庇の柱穴列とは、位置の平行関係から、SB-3ではなく、SB-4に帰属すると考えた。庇との間隔は2.1mで、3間×2間の側柱建物であった。

柱間寸法は、桁行3.7m、梁行2.9mであった。

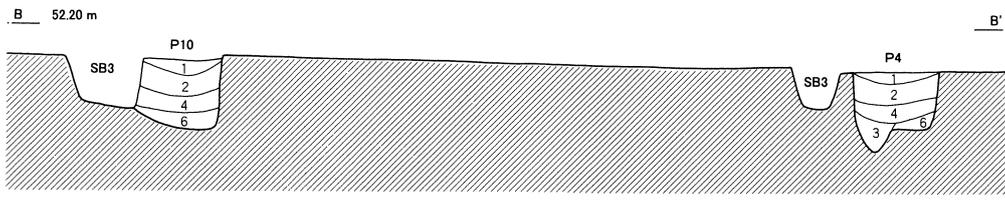
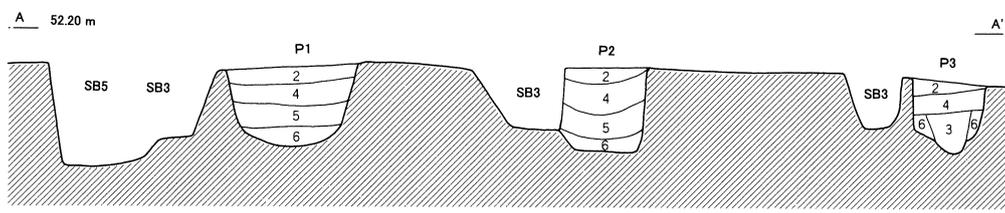
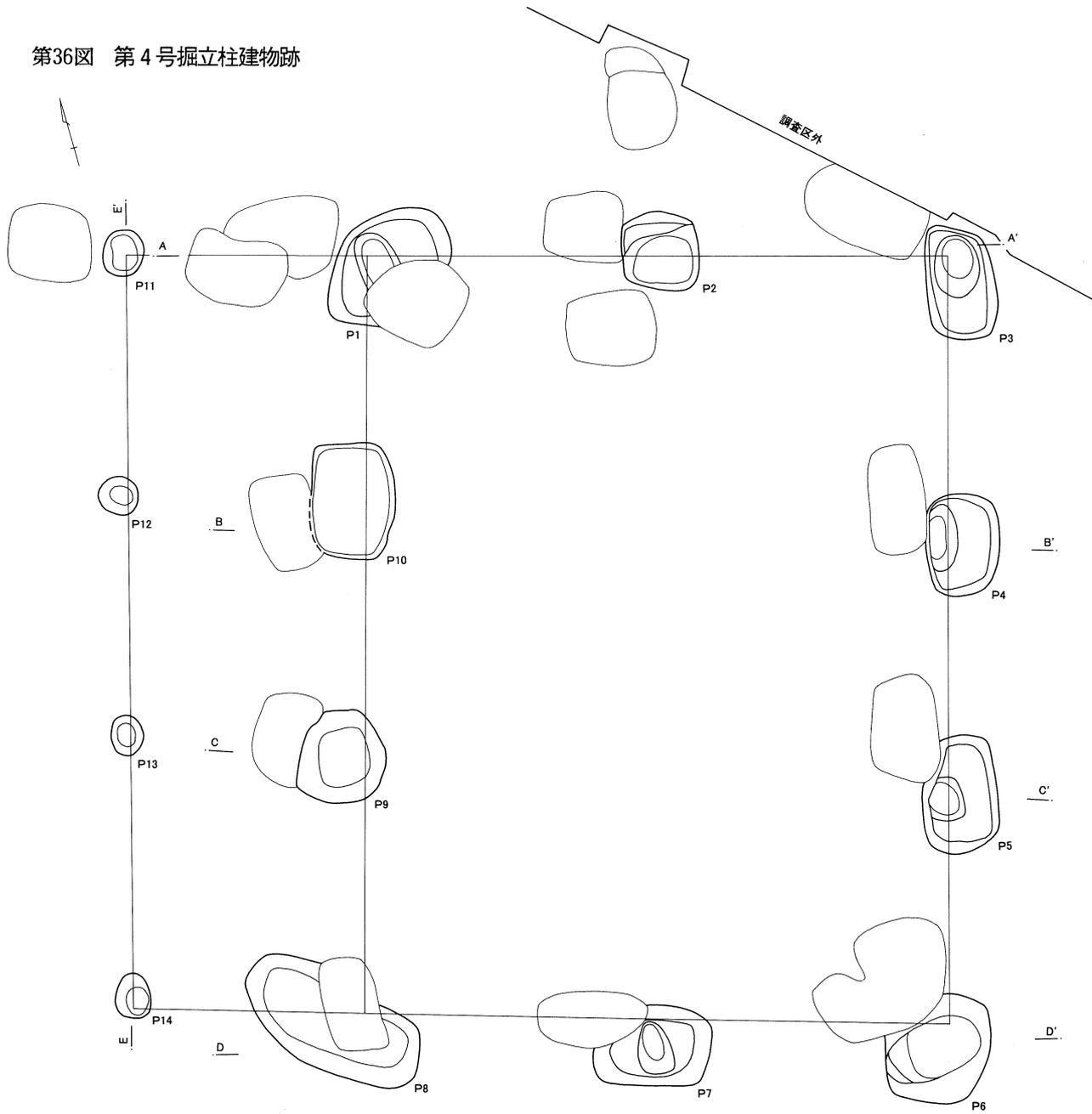
柱掘り方の形状は方形、または長方形で径105~70cm、深さは55~80cmであった。

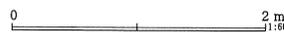
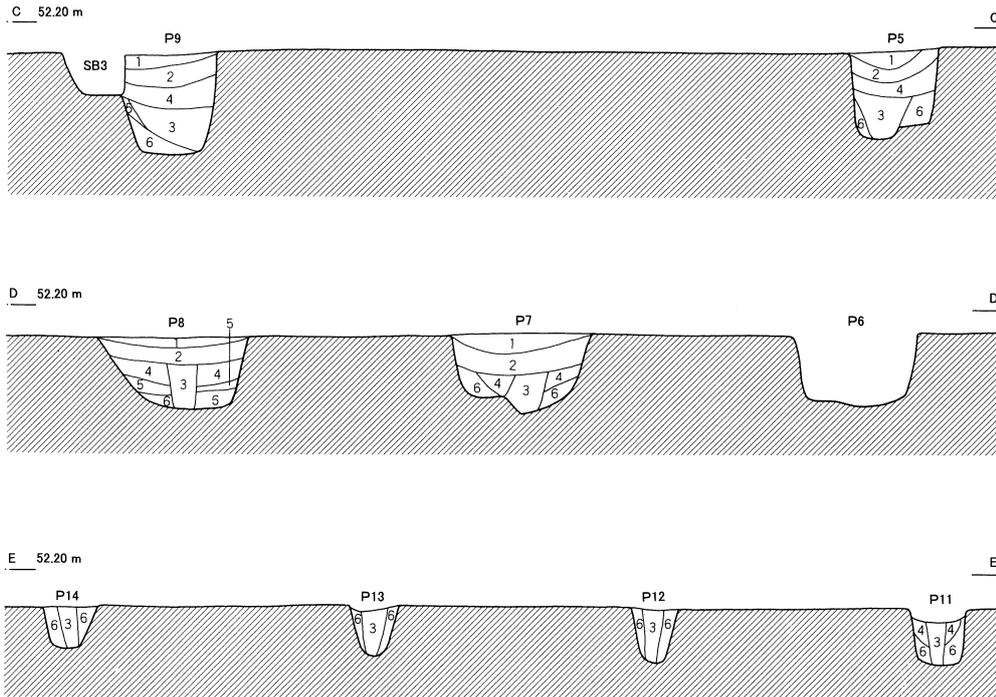
柱痕は、P3、P4、P5、P7、P8、P9の柱穴で検出した。庇の柱痕は、P11~P14の柱穴で検出した。庇の柱掘り方の形状は円形で、径35~45cm、深さは30~45cmであった。

SB-4は、SB-3、SB-5と重複していた。新旧関係は、SB-3とSB-5に切られていた。

実測可能な遺物は検出できなかった。

第36图 第4号掘立柱建物跡





第4号掘立柱建物跡覆土

- 1 暗褐色 粘性弱 焼土粒(少) 炭化物粒(少) ロームブロック(多少) しまり欠
- 2 黒褐色 粘性中 炭化物粒(少) ローム粒(微) しまりやや欠
- 3 暗褐色 粘性弱 ロームブロック多少 しまり欠 炭化物粒(少) 柱痕
- 4 暗褐色 粘性中 暗褐色土・ロームブロックの互層 しまり良
- 5 黄褐色 粘性弱 ロームブロック主体 しまり良
- 6 黒褐色 粘性中 ローム粒・ロームブロック(多少) しまり良

第5号掘立柱建物跡 (第37・39図)

第5号掘立柱建物跡は、C-3・4グリッドから検出した。

形態は方形で、主軸方位はN-25°-Eであった。

規模は、東西を桁と仮定した場合に桁行5.4m、梁行不明であった。北側が調査区外へ展開していたため南北2間分×西東3間を検出した。

柱間寸法は、桁行1.8mであった。

柱掘り方の形状は、長方形で、径80~105cm、深さは55~85cmであった。

柱痕はP2~P4の柱穴で検出した。

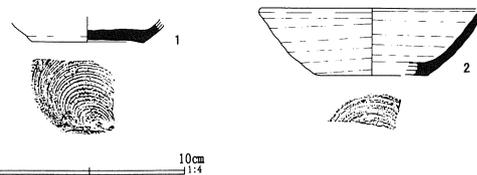
SB-5はSB-3、SB-4と重複していた。新旧関係は、SB-3に切られ、SB-4を切っていた。

実測可能な遺物として、須恵器坏をP6から検出した。

第37図 第5号掘立柱建物跡出土遺物



第38図 第6号掘立柱建物跡出土遺物



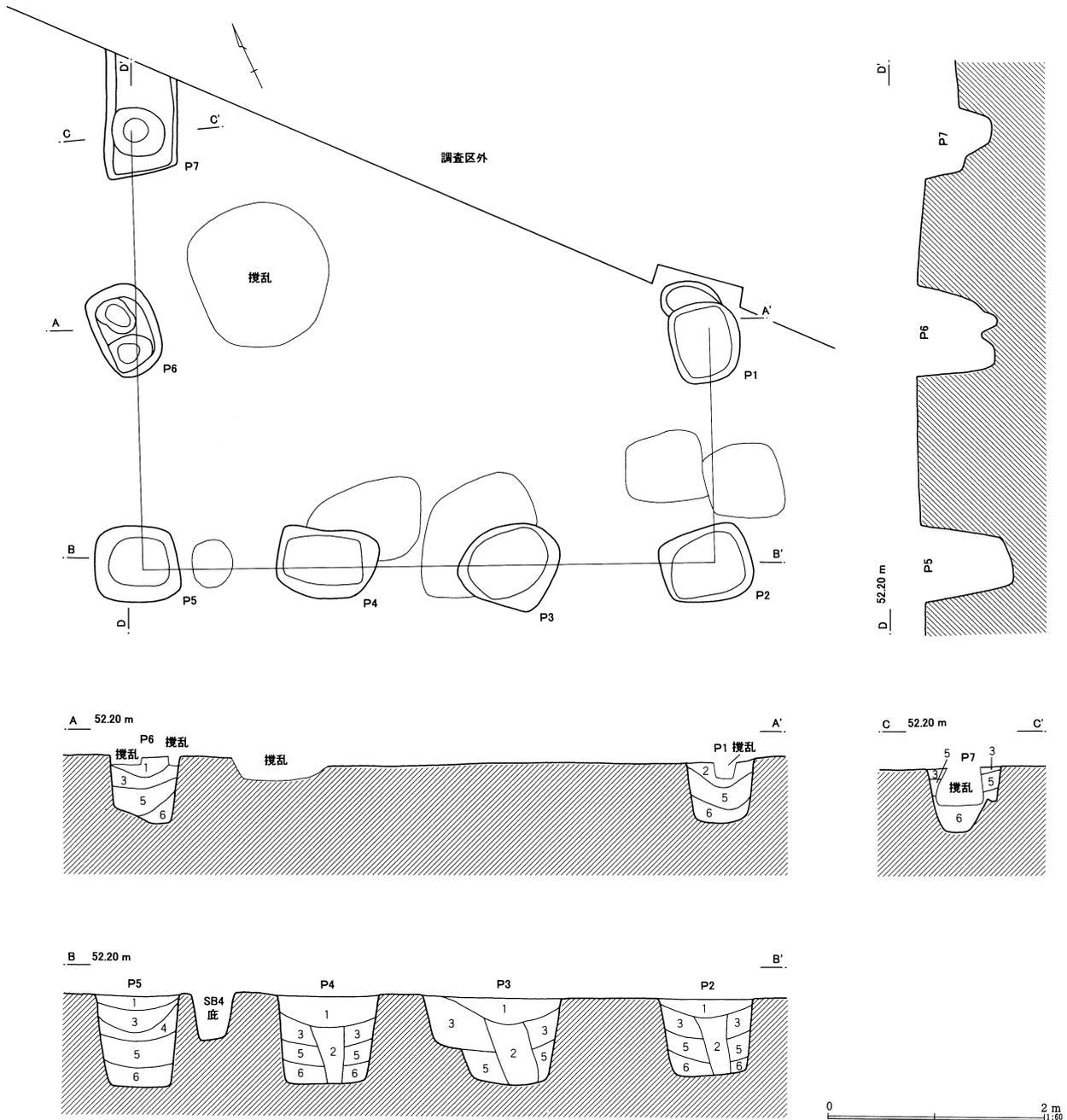
第5号掘立柱建物跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	須恵器坏	(11.0)			B L	3	濃灰色	10	

第6号掘立柱建物跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	須恵器坏			(5.9)	B L	3	濃灰色	20	P3
2	須恵器坏	(11.9)			B F L	4	薄灰色	20	

第39図 第5号掘立柱建物跡



第5号掘立柱建物跡覆土

- 1 暗褐色 粘性中 炭化物粒(少) ローム粒(微) しまり良
- 2 暗褐色 粘性弱 炭化物粒(少) ローム粒(少) 柱穴抜去痕
- 3 暗黄褐色 粘性弱 暗褐色土・ローム粒の互層 しまり良
- 4 黄褐色 粘性弱 黒褐色土・ローム粒の互層 炭化物粒(少) しまり欠
- 5 暗黄褐色 粘性中 炭化物粒(微) しまり良
- 6 黒褐色 粘性中 炭化物粒(少) ロームブロック(少) しまり良

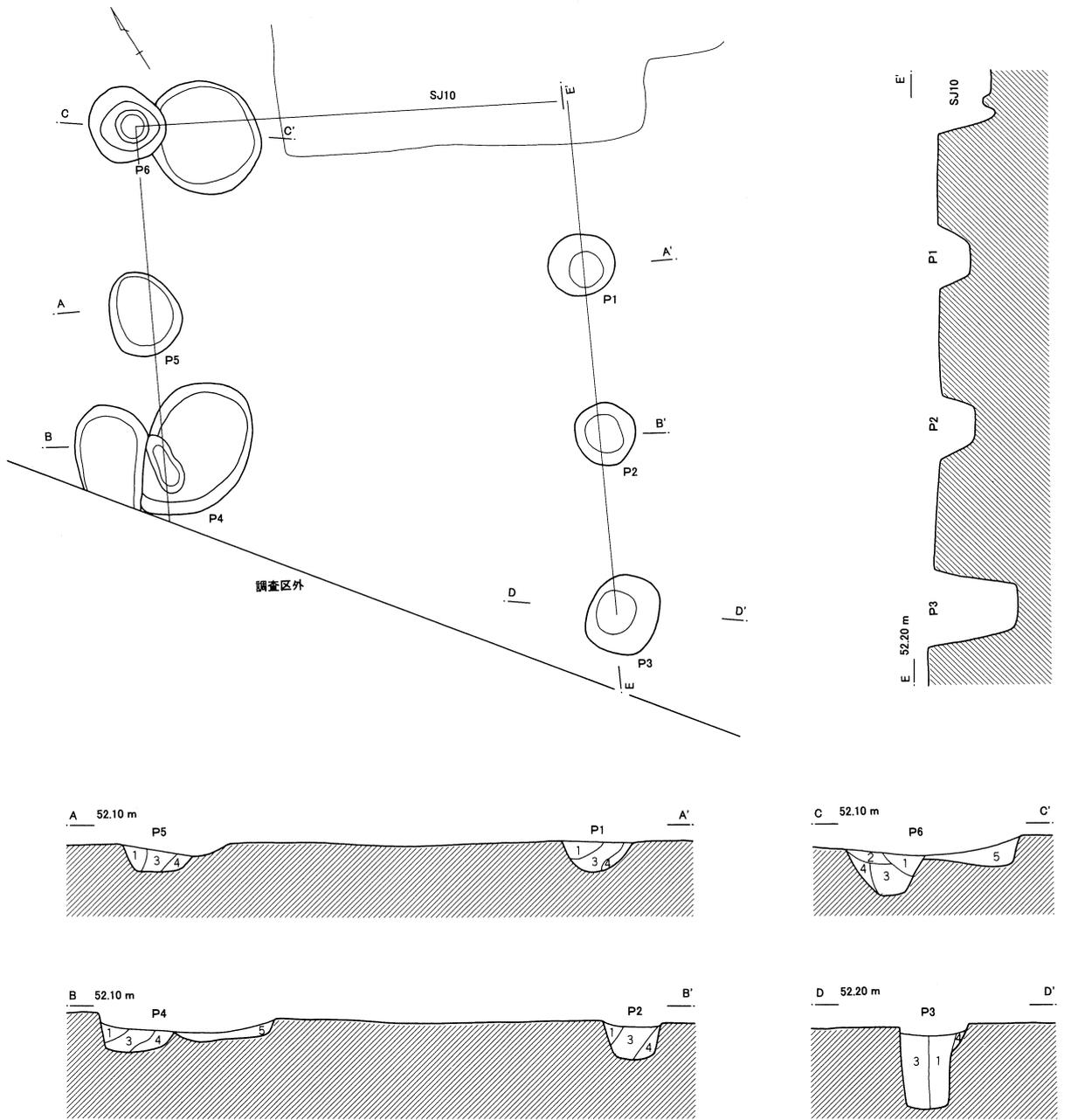
第6号掘立柱建物跡 (第38・40図)

第6号掘立柱建物跡は、C-2・3グリッドから検出した。

形態は方形で、主軸方位はN-30°-Eであった。

規模は、南側が調査区外へ展開していたため、南北が2間であり、西東側はSJ-10に切られているため、明

第40図 第6号掘立柱建物跡



第6号掘立柱建物跡覆土

- 1 暗黄褐色 粘性弱 炭化物粒不含 ローム粒(多) しまりやや欠
- 2 暗褐色 粘性中 炭化物粒(少) ローム粒(少) しまりやや良
- 3 黒褐色 粘性中 炭化物粒(少) ローム粒(微) しまり良
- 4 黄褐色 粘性弱 黒褐色土・ロームブロックの互層 しまりやや欠
- 5 黒褐色 粘性弱 炭化物粒(少) 黒褐色土・ローム土の互層

らかにすることができなかった。柱間寸法は、桁行1.5 mであった。柱掘り方の形状は円形で、径55~80cm、深さは25~75cmであった。

柱痕は検出できなかった。

SB-6は、SJ-10と重複していた。新旧関係はSJ-10の確認時、当該場所にSB-6のピットが確認できなかったため、SJ-10のほうが新しいと考えられた。

実測可能な遺物は、P4、P6から坏を1点ずつ検出した。

第7号掘立柱建物跡（第41図）

第7号掘立柱建物跡は、B-2・3グリッドから検出した。

形態は方形で、主軸方位はN-8°-Eであった。

規模は、桁行4.9m、梁行4.0m、面積19.4m²で3間×

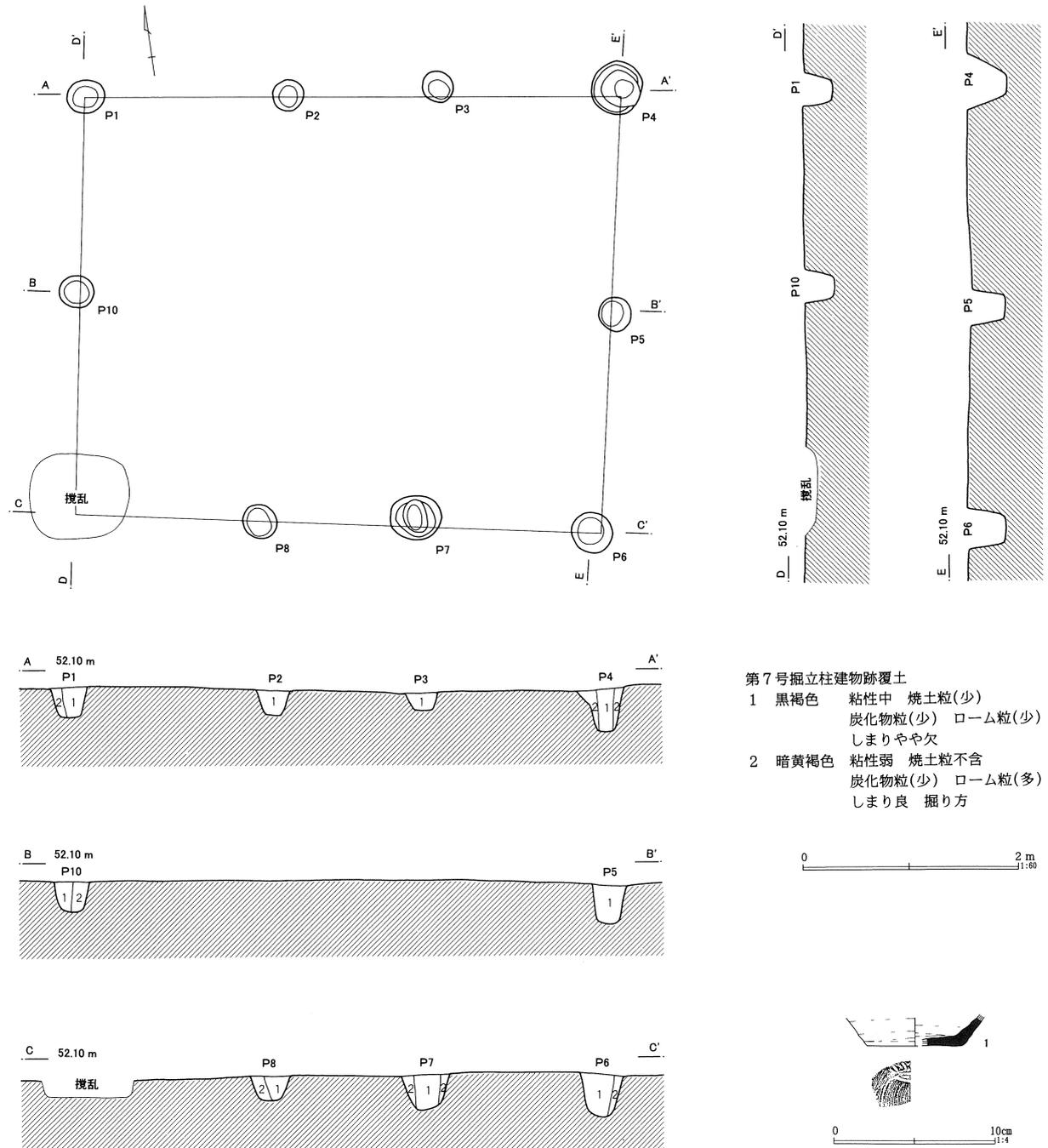
2間の側柱建物であった。

柱間寸法は、桁行1.5m、梁行2.0mであった。

柱掘り方の形状は円形で、径30~50cm、深さは20~40cmであった。P9は攪乱によって検出できなかった。

実測可能な遺物として、須恵器坏をP8から検出した。

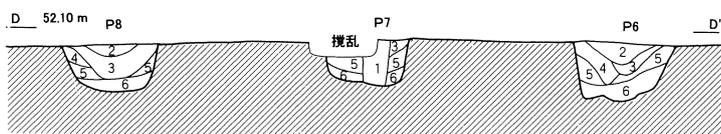
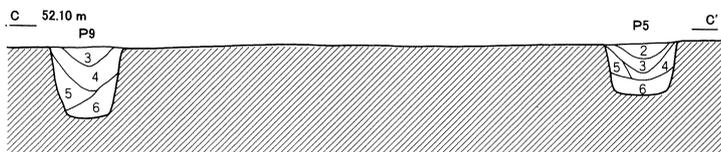
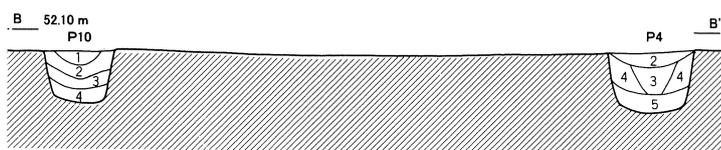
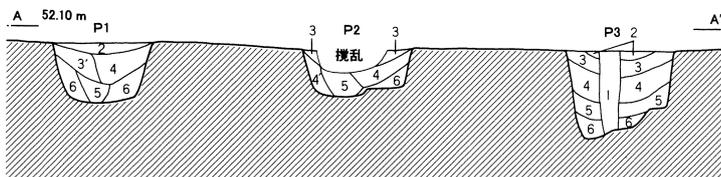
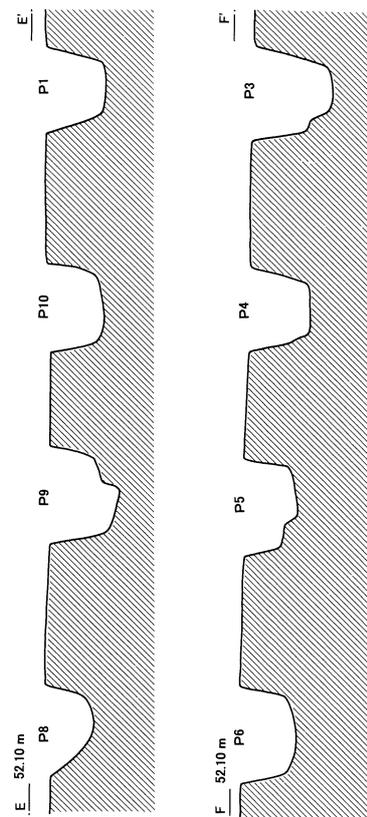
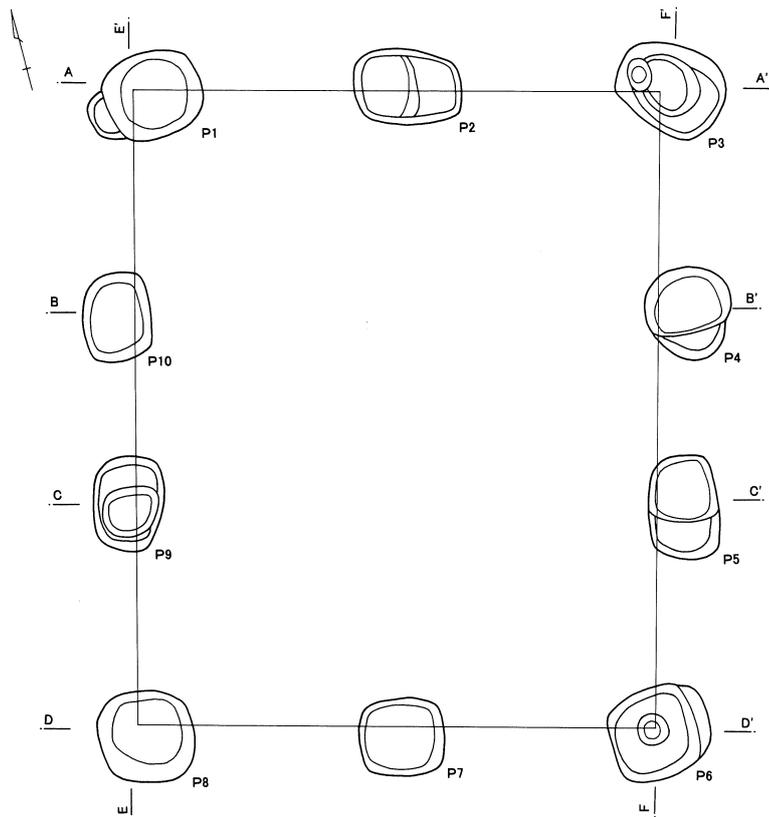
第41図 第7号掘立柱建物跡・出土遺物



第7号掘立柱建物跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	須恵器坏			(5.6)	B	3	濃褐色	20	P3

第42図 第8号掘立柱建物跡



第8号掘立柱建物跡覆土

- 1 暗褐色 粘性弱 炭化物粒(少)
ローム粒(少) しまり欠 柱痕
- 2 黒褐色 粘性中 炭化物粒(多少)
ローム粒(多少) 焼土粒(少)
しまりやや良
- 3 暗褐色 粘性中 炭化物粒(微)
ローム粒(少) 焼土粒(微)
しまりやや良
- 4 暗黄褐色 粘性中 炭化物粒(微)
ローム粒(多) 焼土粒不含
しまりやや欠
- 5 暗褐色 粘性中 炭化物粒(少)
ローム粒(多少) 焼土粒不含
しまりやや良
- 6 黒褐色 粘性中 炭化物粒(少)
ローム粒(微) 焼土粒(微)
しまり良

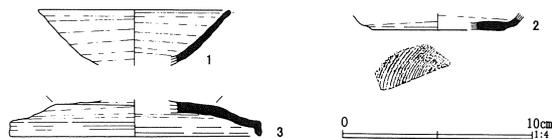
第8号掘立柱建物跡 (第42・43図)

第43図 第8号掘立柱建物跡出土遺物

第8号掘立柱建物跡は、A・B-2グリッドから検出した。

形態は方形で、主軸方位はN-14°-Eであった。

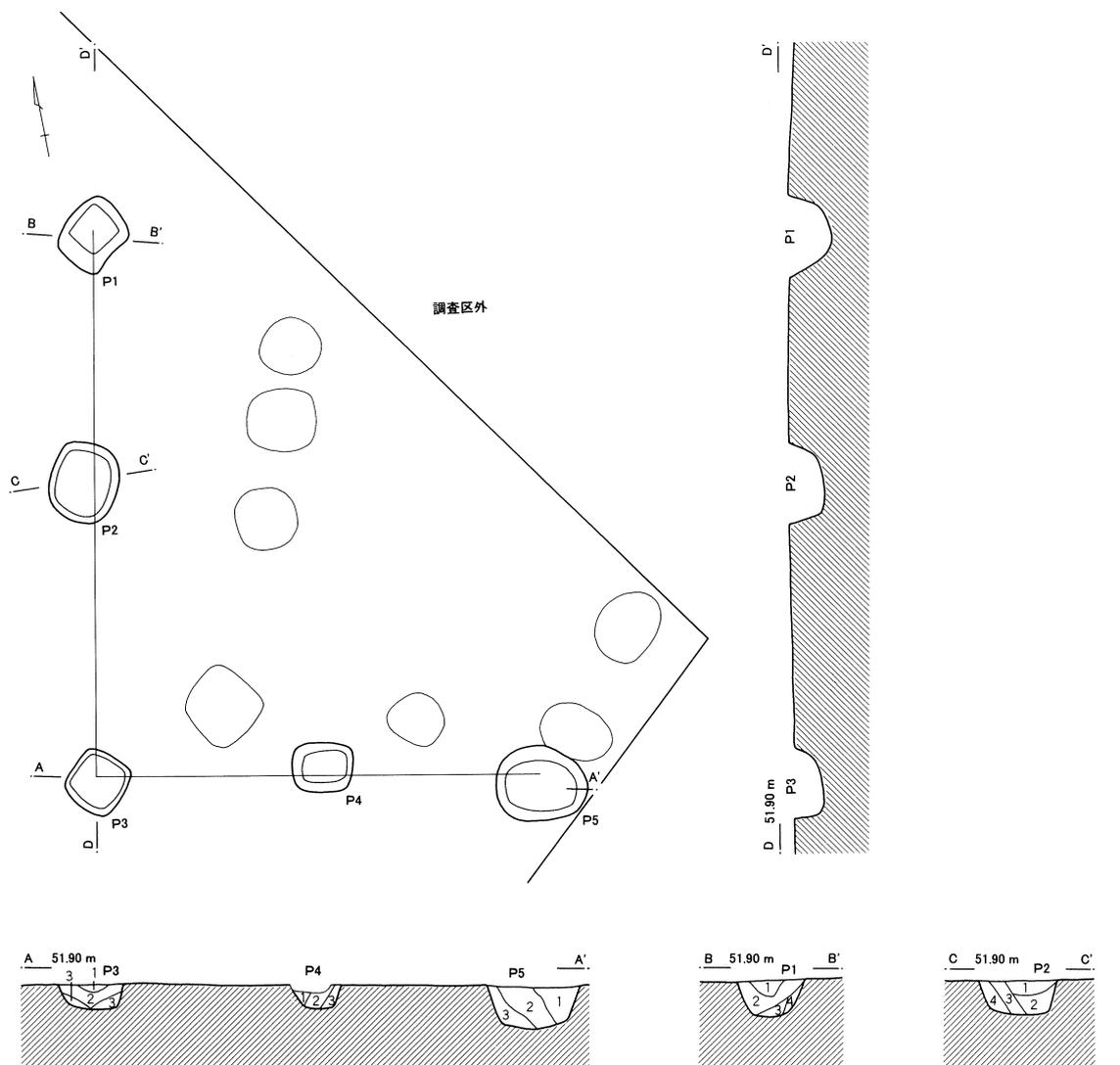
規模は、桁行5.1m、梁行4.3m、面積21.9m²で3間×



第8号掘立柱建物跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	須恵器坏	(10.0)			BFL	3	薄灰色	10	P6
2	須恵器坏			(6.9)	BFL	3	灰色	40	P4
3	須恵器蓋	(13.2)			B	3	濃灰色	20	P2

第44図 第9号掘立柱建物跡



第9号掘立柱建物跡覆土

- 1 黒褐色 粘性弱 炭化物粒(少) ローム粒(少) 焼土粒(微) しまり良
- 2 暗褐色 粘性弱 炭化物粒(微) ローム粒(多) 焼土粒不含 しまりやや欠
- 3 暗褐色 粘性弱 炭化物粒(微) ローム粒(多少) 焼土粒不含 黒褐色土粒(少) しまり良
- 4 暗黄褐色 粘性中 黒褐色・ロームブロックの互層 しまりやや欠

2間の側柱建物であった。

柱間寸法は、桁行1.7m、梁行2.2mであった。

柱掘り方の形状は方形で、径65～85cm、深さは35～70cmであった。

柱痕はP3、P7の柱穴で検出した。

実測可能な遺物として、P2から、第43図2・3の須恵器坏底部と須恵器蓋を、P3から第43図1の須恵器坏を検出した。

第9号掘立柱建物跡 (第44図)

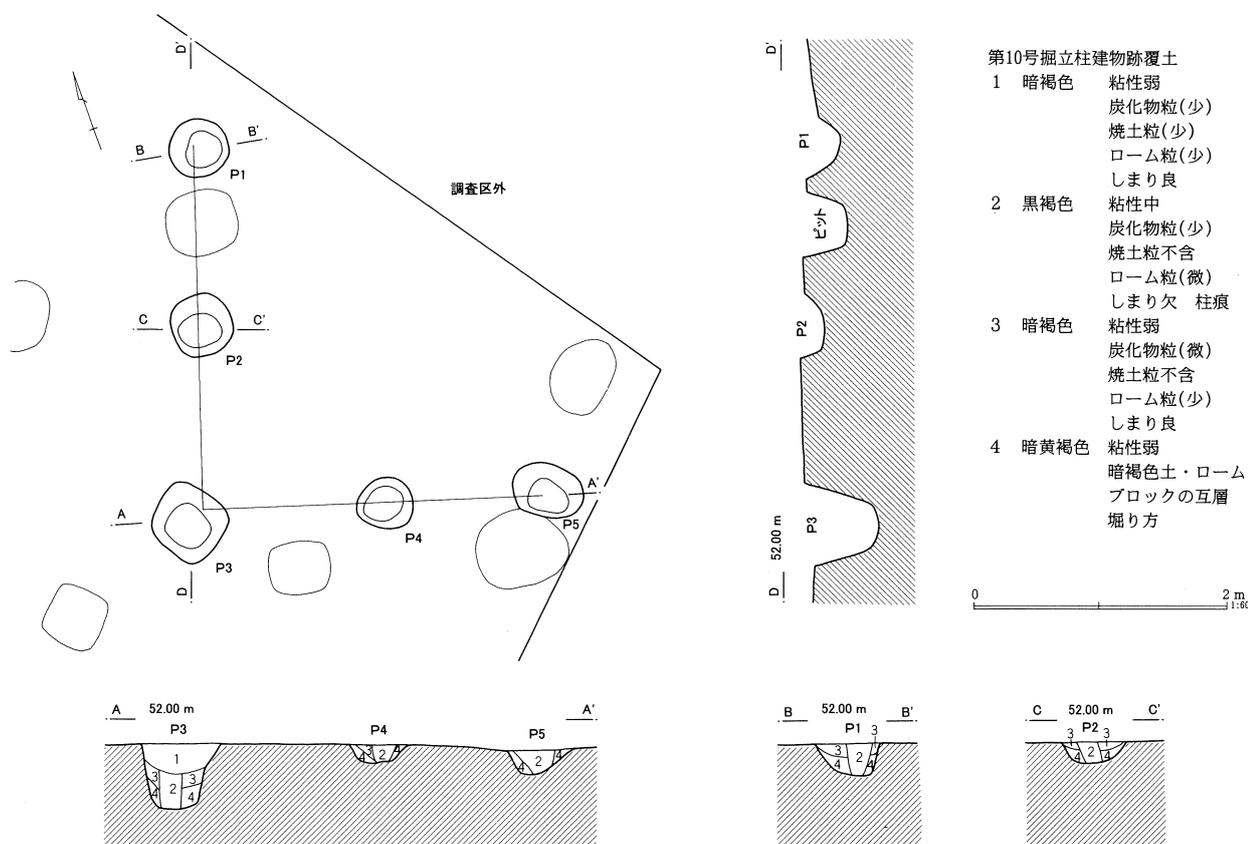
第9号掘立柱建物跡は、Y・Z-3グリッドから検出した。形態は方形で、主軸方位はN-11°-Eであった。

柱間寸法は、桁行2.2m、梁行1.8mであった。

柱掘り方の形状は方形、または楕円形で、径50～70cm、深さは20～35cmで、柱痕は検出できなかった。

SB-9はSB-10と重複していたが、新旧関係は、確認できなかった。実測可能な遺物は検出できなかった。

第45図 第10号掘立柱建物跡



第10号掘立柱建物跡 (第45図)

第10号掘立柱建物跡は、Y・Z-3グリッドから検出した。形態は方形で、主軸方位はN-20°-Eであった。

規模は、南北3.0m以上であった。

遺構は、北側と東側が調査区外へ展開していたため、南北2間分×西東2間分を検出した。

検出した柱掘り方の中で、P3はやや深く、位置もやや

南西に外れていた。

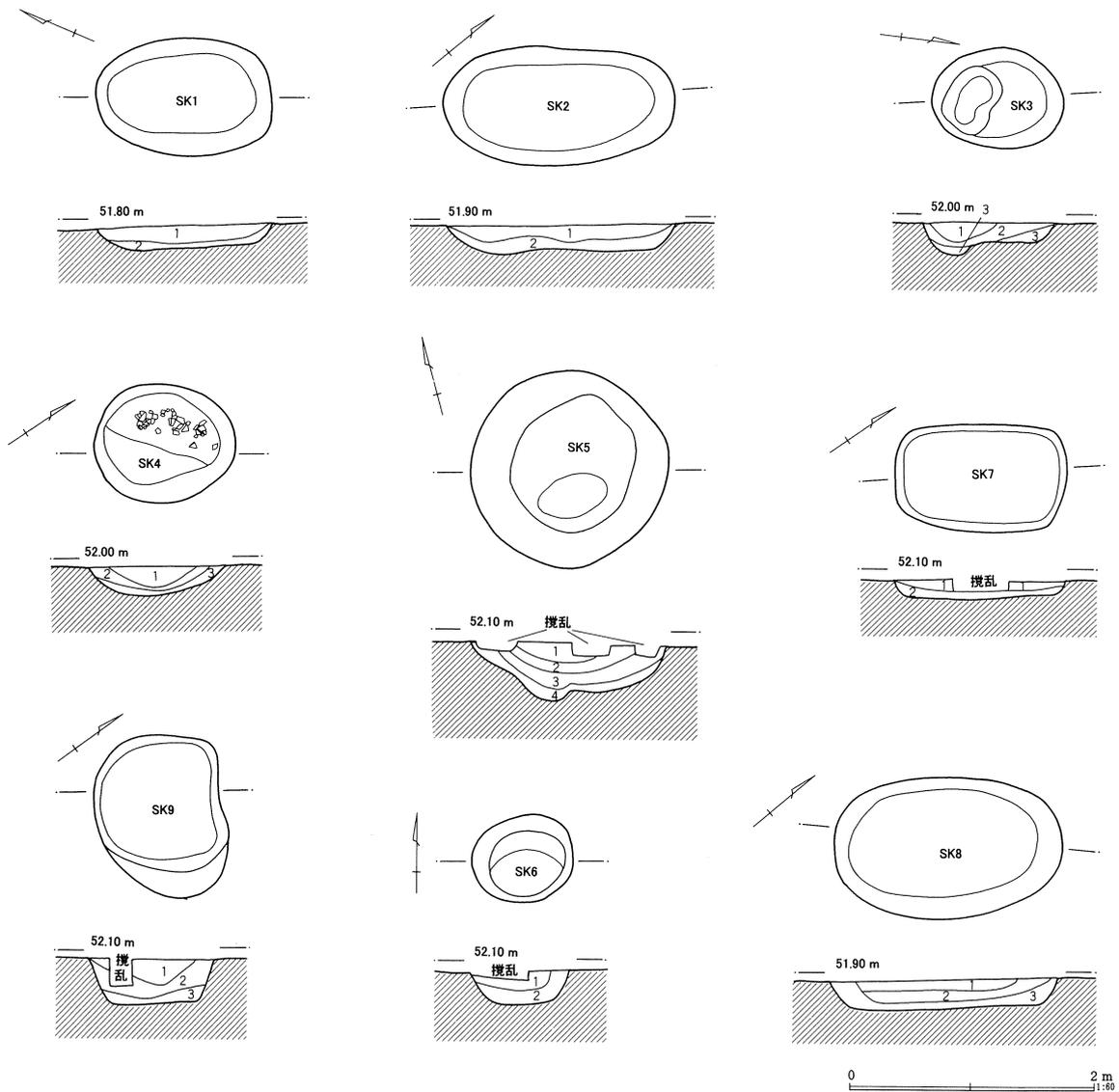
柱間寸法は、桁行1.5m、梁行1.4mであった。

柱掘り方の形状は円形で、径45～60cm、深さは15～50cmであった。柱痕はP1～P5の柱穴で検出した。

SB-10は、SB-9と重複していた。新旧関係は、個別の柱穴が重複していなかったため、確認できなかった。

実測可能な遺物は検出できなかった。

第46図 第1～9号土壇



第1号土壇覆土

- 1 暗茶褐色 粘性中 炭化物粒(微) 焼土粒(微) 白色粒(微) しまり良
- 2 暗黄褐色 粘性中 炭化物粒(微) 焼土粒不含 白色粒(中) しまり良

- 3 暗茶褐色 粘性中 炭化物粒(微) 焼土粒(微) 白色粒(微) しまり良
- 4 暗黄褐色 粘性中 炭化物粒(微) 焼土粒不含 白色粒(中) しまり良

第2号土壇覆土

- 1 暗茶褐色 粘性中 炭化物粒(微) 焼土粒(微) 白色粒(微) しまり良
- 2 暗黄褐色 粘性中 炭化物粒(微) 焼土粒不含 白色粒(中) しまり良

第6号土壇覆土

- 1 暗茶褐色 粘性中 炭化物粒(微) 焼土粒(微) 白色粒(微) しまり良
- 2 暗黄褐色 粘性中 炭化物粒(微) 焼土粒不含 白色粒(中) しまり良

第3号土壇覆土

- 1 黒褐色 粘性中 炭化物粒(少) 白色粒(中) ローム粒(微) しまり良
- 2 暗茶褐色 粘性中 炭化物粒(微) 焼土粒(微) 白色粒(微) しまり良
- 3 暗黄褐色 粘性中 炭化物粒(微) 焼土粒不含 ローム粒(中) しまり良

第7号土壇覆土

- 1 暗茶褐色 粘性中 炭化物粒(微) 焼土粒(微) 白色粒(微) しまり良
- 2 暗黄褐色 粘性中 炭化物粒(微) 焼土粒不含 白色粒(中) しまり良

第4号土壇覆土

- 1 黒褐色 粘性中 炭化物粒(少) 白色粒(中) ローム粒(微) しまりやや欠
- 2 暗茶褐色 粘性中 炭化物粒(微) 焼土粒(微) 白色粒(微) しまり良
- 3 暗黄褐色 粘性中 炭化物粒(微) 焼土粒不含 白色粒(中) しまり良

第8号土壇覆土

- 1 暗褐色 粘性中 炭化物粒(微) 焼土粒(微) ローム粒(少) しまり良
- 2 暗褐色 粘性中 炭化物粒不含 焼土粒(微) ローム粒(中) 白色粒(少) しまり良
- 3 暗黄褐色 粘性中 炭化物粒不含 焼土粒不含 ローム粒(多) 白色粒(少) しまり良

第5号土壇覆土

- 1 黒褐色 粘性弱 炭化物粒(少) 焼土粒(多) 焼土ブロック(少) しまりやや欠
- 2 黒褐色 粘性中 炭化物粒(微) 焼土粒(微) ローム粒(少) しまりやや良

第9号土壇覆土

- 1 黒褐色 粘性中 暗褐色粒(中) 黄褐色粒(中) 炭化物粒(少) しまり良
- 2 黒褐色 粘性中 黒色粒(多) 黄褐色(少) 炭化物粒(少) しまり良
- 3 黒褐色 粘性中 黒色粒(少) ローム粒(中) 炭化物粒不含 しまり良

(3) 土壌

戸張遺跡からは、16基の土壌が検出できた。この中で、4号土壌は縄文土器を伴っており、9号土壌は須恵器の坏類を伴っていた。他の14基は、実測可能な共伴遺物が検出できなかった。

第1号土壌 (第46図)

G-8グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸1.4m、短軸0.9m、深さ20cm程度であった。主軸方位はN-65°-Eであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第2号土壌 (第46図)

G-6グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸1.9m、短軸1.0m、深さ20cm程度であった。主軸方位はN-53°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第3号土壌 (第46図)

E-6グリッドから検出した。平面形態は、円形で、規模は、長軸1.1m、短軸0.8m、深さ25cm程度であった。主軸方位はS-78°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第4号土壌 (第46・47図)

E-5グリッドから検出した。平面形態は、円形で、規模は、長軸1.1m、短軸0.9m、深さ25cm程度であった。主軸方位はN-54°-Wであった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

実測可能な遺物は、覆土中から縄文土器を検出した。

1～7は黒浜式土器である。

1は外傾する口縁部に斜縄文が施文されていた。2は口縁部近くの文様帯で平行沈線が横走していた。3・4は胴下半部の破片で、異原体による羽状縄文が施文されていた。5～7は斜縄文が施文される胴部破片であった。

なお、3～6は内面に繊維痕が顕著に残っていた。土器の色調は1が黄褐色、2～5が褐色、6が黒褐色、7が明褐色を呈していた。

胎土にはいずれも繊維を多く含み、3～7は石英、白色砂粒を含んでいた。

焼成は、4～6が不良で焼きが弱く、他は良好であった。

第5号土壌 (第46図)

E-5グリッドから検出した。平面形態は、円形で、規模は、長軸1.6m、短軸1.6m、深さ50cm程度であった。主軸方位はN-15°-Eであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

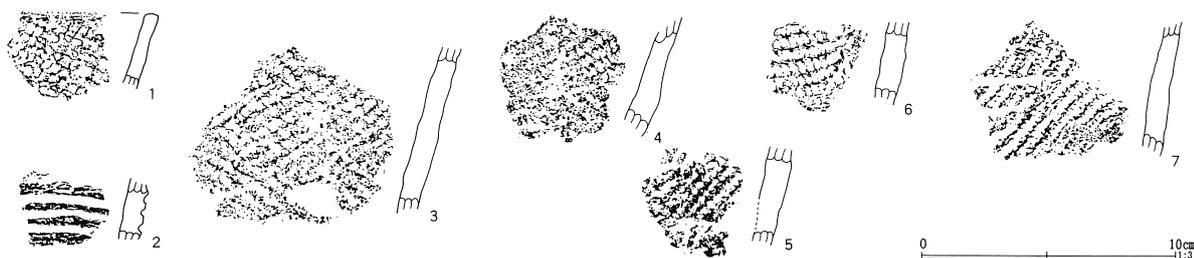
第6号土壌 (第46図)

E-6グリッドから検出した。平面形態は、略円形で、規模は、長軸0.8m、短軸0.7m、深さ30cm程度であった。主軸方位はS-0°-Eであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

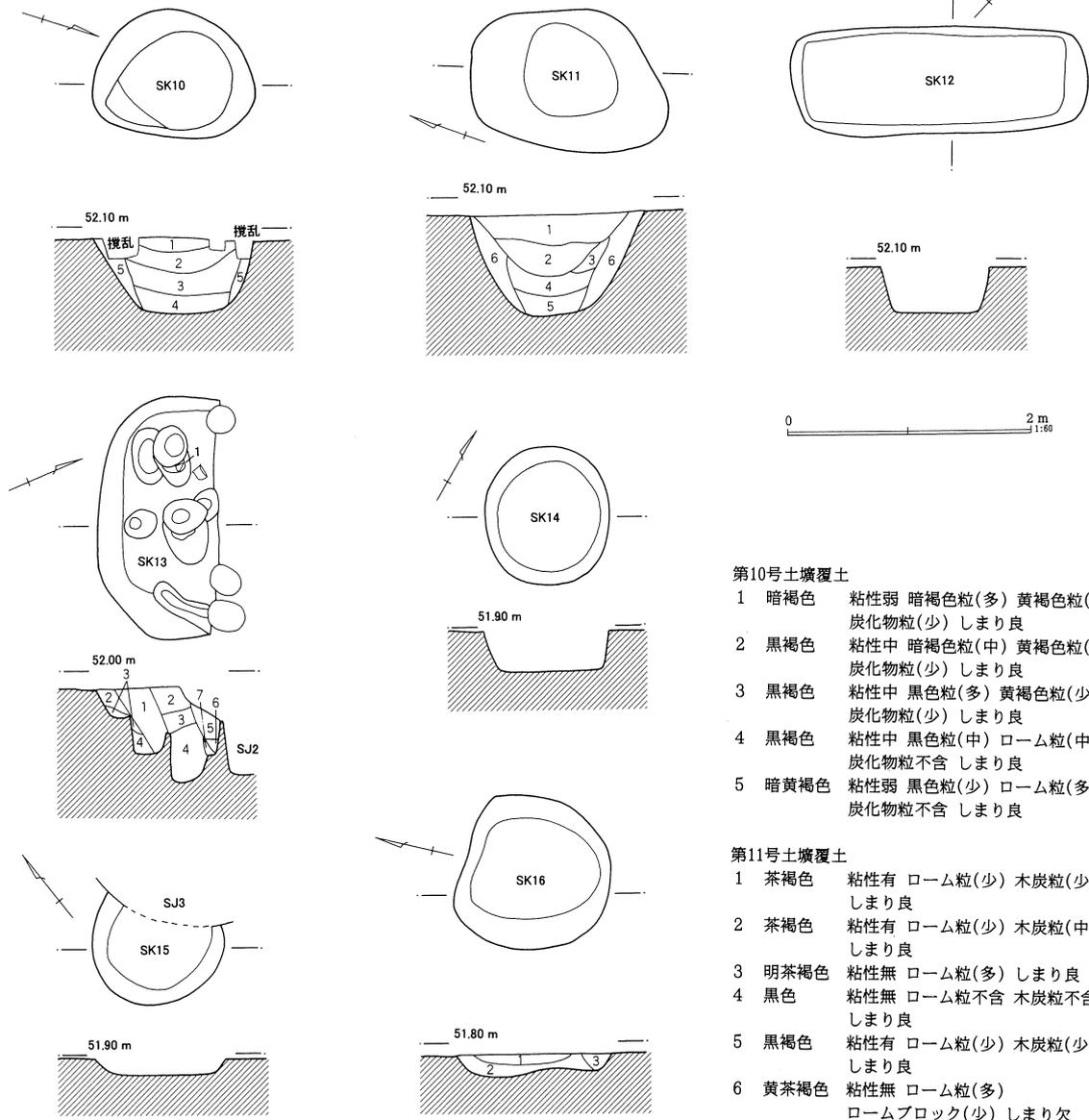
第7号土壌 (第46図)

D-5グリッドから検出した。平面形態は、隅丸方形で、規模は、長軸1.3m、短軸0.8m、深さ20cm程度であった。主軸方位はS-59°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第47図 第4号土壌出土遺物



第48図 第10~16号土壌



- 第10号土壌覆土
- 1 暗褐色 粘性弱 暗褐色粒(多) 黄褐色粒(少) 炭化物粒(少) しまり良
 - 2 黒褐色 粘性中 暗褐色粒(中) 黄褐色粒(中) 炭化物粒(少) しまり良
 - 3 黒褐色 粘性中 黒色粒(多) 黄褐色粒(少) 炭化物粒(少) しまり良
 - 4 黒褐色 粘性中 黒色粒(中) ローム粒(中) 炭化物粒不含 しまり良
 - 5 暗黄褐色 粘性弱 黒色粒(少) ローム粒(多) 炭化物粒不含 しまり良

- 第11号土壌覆土
- 1 茶褐色 粘性有 ローム粒(少) 木炭粒(少) しまり良
 - 2 茶褐色 粘性有 ローム粒(少) 木炭粒(中) しまり良
 - 3 明茶褐色 粘性無 ローム粒(多) しまり良
 - 4 黒色 粘性無 ローム粒不含 木炭粒不含 しまり良
 - 5 黒褐色 粘性有 ローム粒(少) 木炭粒(少) しまり良
 - 6 黄茶褐色 粘性無 ローム粒(多) ロームブロック(少) しまり欠

- 第13号土壌覆土
- 1 黒褐色 粘性弱 炭化物粒(少) ローム粒(少) しまり欠(柱痕)
 - 2 暗褐色 粘性中 炭化物粒(微) ローム粒(少) しまりやや良(土層)
 - 3 暗黄褐色 粘性中 炭化物粒不含 ローム粒(中) 暗褐色粒(多)(土層)
 - 4 暗黄褐色 粘性中 炭化物粒不含 ローム粒(多) ロームブロック(少) しまり良(住居)
 - 5 黒褐色 粘性中 炭化物粒(少) 焼土粒(中) ローム粒(中) しまり良(住居)
 - 6 黒褐色 粘性弱 炭化物粒(少) 焼土粒(少) ローム粒(中) しまりやや欠(住居)

- 7 暗黄褐色 粘性弱 炭化物粒(微) 焼土粒(微) ローム粒(多) しまりやや欠(住居)

- 第16号土壌覆土
- 1 黄褐色 粘性弱 ロームブロック・黒褐色土互層(貼り床)
 - 2 黒褐色 粘性中 ロームブロック(微) ローム粒(微)(土層)
 - 3 黒褐色 粘性弱 焼土粒(少) 炭化物粒(微) ローム粒(少) (ビット)

第8号土壌 (第46図)

F-6 グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸1.9m、短軸1.1m、深さ25cm程度で

あった。主軸方位はN-42°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第9号土壌出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	須恵器蓋	(17.3)			BFL	3	灰色	30	P6
2	須恵器坏			(5.5)	B	4	薄灰色	20	

第9号土壌 (第46図)

E-5グリッドから検出した。平面形態は、不整形円で、規模は、長軸1.3m、短軸1.0m、深さ40cm程度であった。主軸方位はN-56°-Eであった。覆土は自然堆積の状況を示していた。

実測可能な遺物は、坏、蓋、坏底部の微細な破片を、覆土中から検出した。

第10号土壌 (第48図)

D-4・5グリッドから検出した。平面形態は、不整形円形で、規模は、長軸1.3m、短軸1.0m、深さ60cm程度であった。主軸方位はN-89°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は自然堆積の状況を示していた。

第11号土壌 (第48図)

E-4グリッドから検出した。平面形態は、不整形形で、規模は、長軸1.7m、短軸1.1m、深さ85cm程度であった。主軸方位はN-90°-Eであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第12号土壌 (第48図)

D-4グリッドから検出した。平面形態は、方形で、規模は、長軸2.4m、短軸0.8m、深さ40cm程度であった。主軸方位はN-45°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

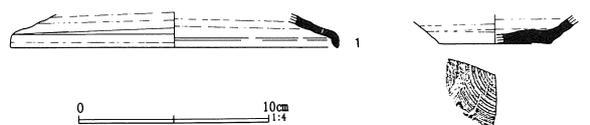
第13号土壌 (第48図)

G-7グリッドから検出した。SJ-2によって壊されていた。平面形態は、不整形形で、規模は、長軸2.0m、短軸1.2m、深さ80cm程度であった。主軸方位は、N-66°-Wであった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第7図13に掲載した遺物は、SJ-2の覆土との境界付近から検出したもので、SK-13に帰属する可能性がある。

第14号土壌 (第48図)

G-7グリッドから検出した。平面形態は、略円形で、規模は、長軸1.1m、短軸1.0m、深さ30cm程度であった。主軸方位はN-30°-Wであった。実測可能な遺

第49図 第9号土壌出土遺物

物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第15号土壌 (第48図)

G-7グリッドから検出した。重複関係は、SJ-2を壊していた。平面形態は、円形で、規模は、長軸1.6m、短軸不明、深さ15cm程度であった。主軸方位はN-33°-Eであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第16号土壌 (第48図)

H-3・I-3グリッドから検出した。重複関係はSJ-3と、入れ子状に重複していた。平面形態は、不整形円形で、規模は、長軸1.4m、短軸1.3m、深さ20cm程度であった。主軸方位はN-75°-Eであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

(4) 井戸跡**第1号井戸跡 (第50図)**

第1号井戸跡は、D-4グリッドから検出した。

形態は円形で、確認面下0.9mから下は、漏斗形に急激に細くなっていた。

1.5m以下は発掘できなかった。

覆土は、地山のロームを比較的多く含み自然堆積の状況を示していたが、第7層は、有機物起源の黒色土層で、筒状のものの存在を示していた。

実測可能な遺物は検出できなかった。覆土の状況から中世のものであると考えられた。

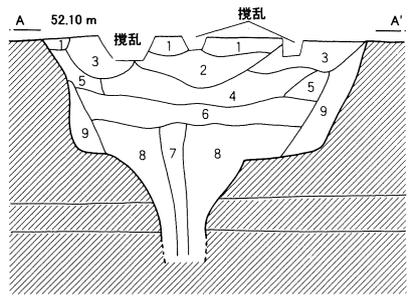
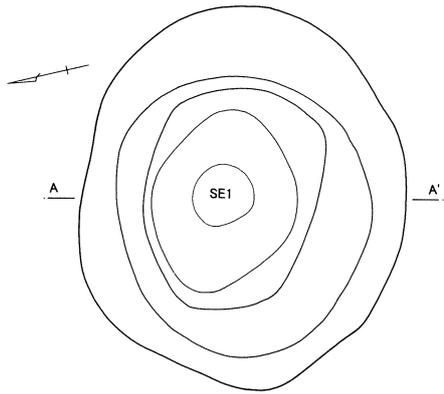
(5) 溝跡 (第50図)

第1号溝跡は、I-7グリッドからH-9グリッドにかけて検出した。

断面形態は逆台形で、調査区内を横断するかたちで、南西から北東方向へ延びていた。

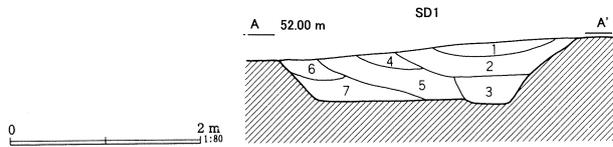
実測可能な遺物は検出できなかったが、覆土の状況から中世のものであると考えられた。

第50図 第1号井戸跡・第1号溝跡



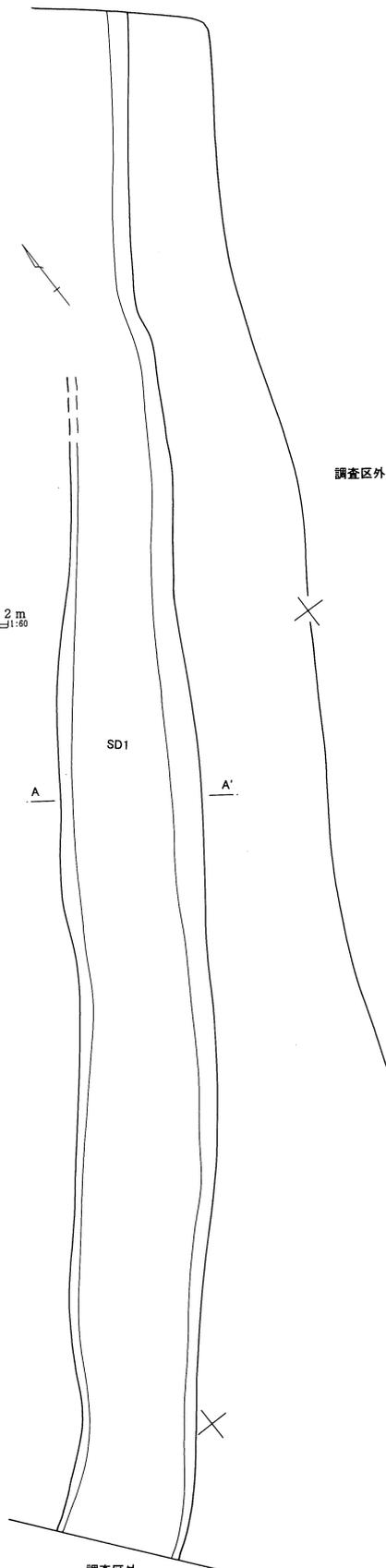
第1号井戸跡覆土

- 1 黒褐色 粘性無 ローム粒(少)
炭化物粒(少) しまり良
- 2 黒褐色 粘性無 ローム粒(多少)
炭化物粒(多少) 焼土粒(多少) しまり良
- 3 暗褐色 粘性無 ローム粒(多) 炭化物粒(少)
しまり欠
- 4 暗茶褐色 粘性やや有 ローム粒(多) 炭化物粒(少)
焼土粒(少) しまり良
- 5 明褐色 粘性無 ローム粒(多) しまり欠
- 6 暗茶褐色 粘性有 ローム粒(多) 炭化物粒(微)
しまり良
- 7 黒褐色 粘性弱 黒色土粒(多) しまり欠
筒状のもの痕跡か
- 8 暗茶褐色 粘性有 ローム粒(多少) 炭化物粒(微)
しまり良
- 9 明褐色 粘性有 ローム粒(多) しまり良



第1号溝跡覆土

- 1 黒褐色 粘性中 炭化物粒子(少) 暗褐色土粒子(少)
しまりやや良
- 2 黒褐色 粘性中 炭化物粒子(微) 白色微粒子(少)
しまりやや良
- 3 黒褐色 粘性中 炭化物粒子(少) 焼土粒子(微)
ローム粒子(少) しまり良
- 4 黒褐色 粘性中 炭化物粒子(少) 焼土粒子(少)
暗褐色土粒子(少) しまり良
- 5 黒褐色 粘性中 炭化物粒子(微) 白色微粒子(少)
ローム粒子(微) しまり良
- 6 黒褐色 粘性中 炭化物粒子(無) 白色微粒子(微)
焼土粒子(微) しまりやや良
- 7 暗褐色 粘性弱 暗褐色土とローム土の互層
しまり良



(6) 金属遺物 (第51図)

1は、基部と先端部を欠失した刀子で、第4号住居跡の覆土から検出した。

2も、基部と先端部を欠失した刀子と考えられた。ただし、形状から、鋏の可能性も想定された。第5号住居跡の覆土から検出した。

3は、やや大型の刀子と考えられた。第5号住居跡

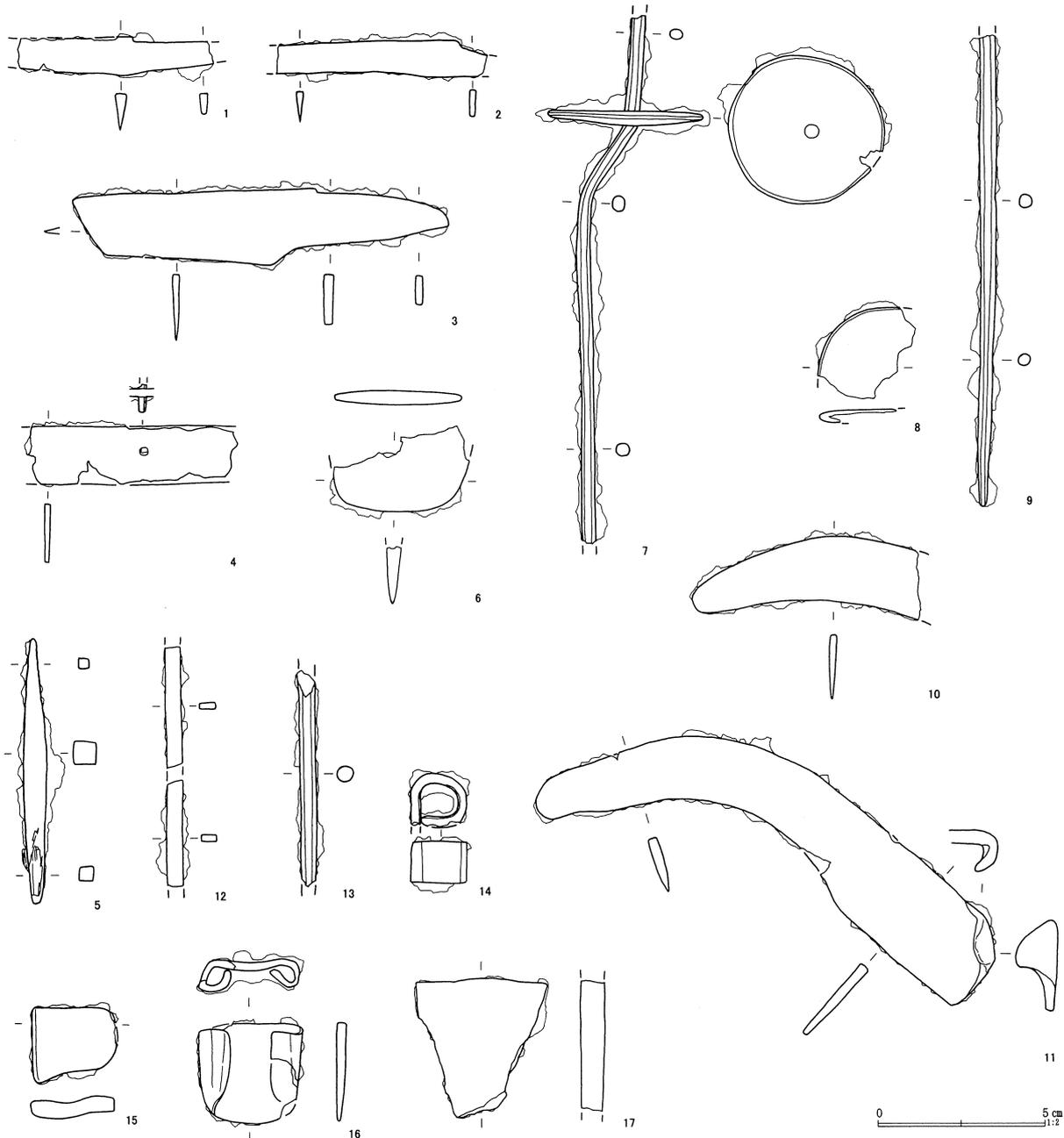
の覆土から検出した。

4は、両端を欠失した刀で、目釘が依存していた。第6号住居跡のカマドから検出した。

5は、錐と考えられる製品で、下部に木質が遺存していた。第1号住居跡の覆土から検出した。

6は、刃物の先端部破片で、斧の可能性が考えられた。第5号住居跡の覆土から検出した。

第51図 金属製品



7は紡錘車で、軸棒の上下を欠失していた。第6号住居跡の床面から検出した。

8も、紡錘車の車部と考えられる破片で、9は、紡錘車の軸棒と考えられる破片で、上端を欠失していた。いずれも第5号住居跡の覆土から検出した。

10、11は鎌である。10は第10号住居跡の、11は第9号住居跡の床面からそれぞれ検出した。

12、13は、棒状の製品で、用途は明らかに出来なかった。12は断面の形状が長方形で、13は円形であった。12は第9号住居跡から、13は第13号住居跡の覆土からそれぞれ検出した。

14～17は、用途不明の鉄製品である。14は、板をの字形に折り曲げた管状のものである。15は、やや厚い板状のものである。16は、両端を折り曲げたもので、鋤先の模造品の可能性がある。17は厚い板状のもので、縁辺部は全て欠失していた。15は、第3号住居跡の覆土から、その他は、表土より検出した。

(7) 石器 (第52図)

1は、紡錘車の未製品と考えられるもので、穿穴が裏面にまで達しておらず、窪み程度でとまっていた。凝灰岩製であった。

2は、砥石であった。4面とも使用面で、全体の形状が錨形になっていた。砂岩製であった。

3は、スクレイパーであった。一部自然面を残した側縁部が使用部分と思われた。砂岩製であった。

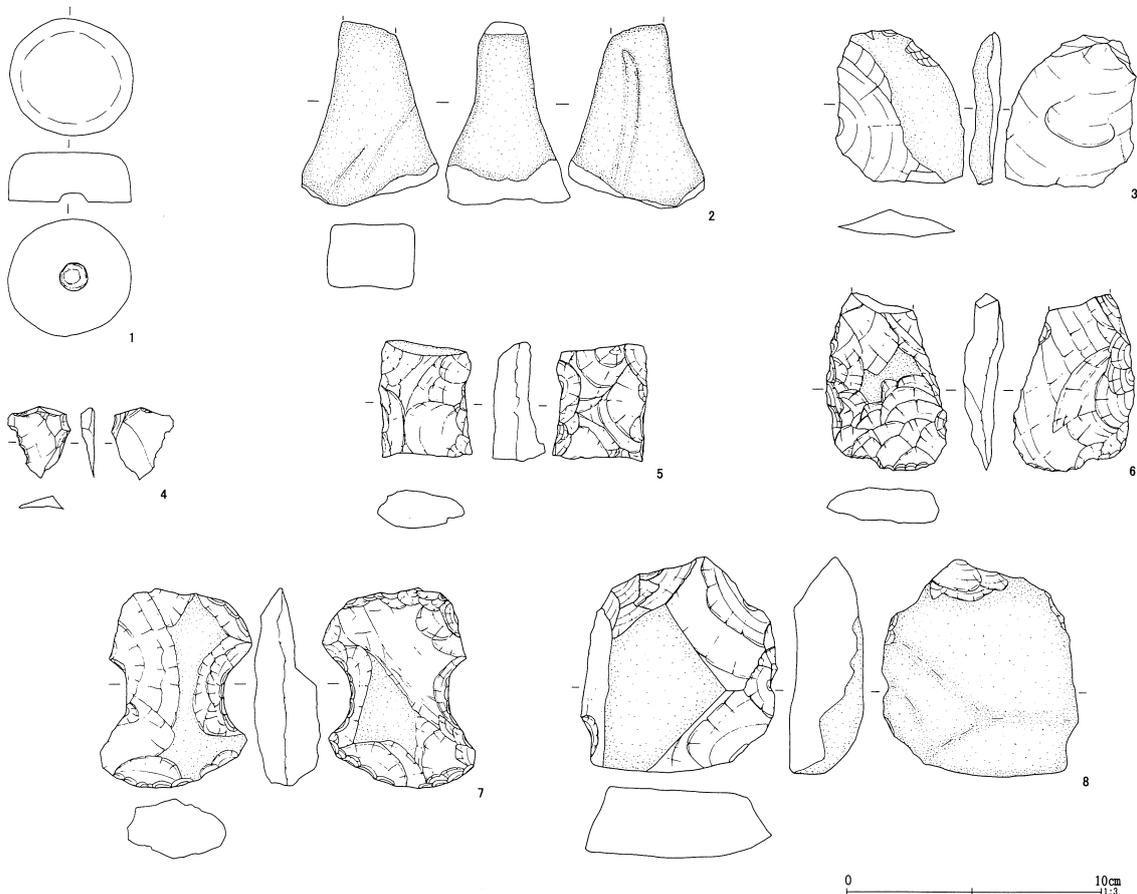
4は、黒曜石製のスクレイパーであった。正面左側縁部に二次的な剥離が認められた。

5～7は、打製石斧であった。5は上下の端部を、6は基部を欠損していた。

5はフォルンフェルス製、6・7の石質は変成岩の可能性が想定された。

8は、礫器であった。片面には自然面を広く残し、もう片面から周縁部分を大きく隔離していた。石質は泥岩と思われた。

第52図 石器・石製品



(8) 遺構外出土遺物 (第53図)

1～10は、黒浜式の縄文施文土器で、胎土に繊維を多く含み、内面調整は良好であった。2・3・6は無節の縄文が施文されていた。10は底部破片で上げ底状になっていた。土器の色調は、6が黒褐色、他は黄褐色を呈していた。焼成はいずれも良好であった。

11は等間隔に平行沈線が横走していた。黒浜式土器の口縁部近くの破片であった。色調は黒褐色で、焼成は良好であった。胎土には繊維を含んでいた。

12は外反する波状口縁の波頂部で、口縁にそって半截竹管による平行沈線と沈線間に連続爪形文が施文されていた。下部には同様の文様による斜線モチーフが描かれていた。色調は明褐色で、胎土には白色砂粒、石英、微量の繊維を含んでいた。焼成は良好であった。有尾式土器と考えられた。

13は低い隆帯が懸垂する胴部破片で、隆帯の両側縁には沈線が沿っていた。地文には縄文が施文されていた。色調は赤褐色で、胎土には石英、雲母、砂粒を多く含んでいた。焼成は良好であった。縄文中期前葉の

土器であった。

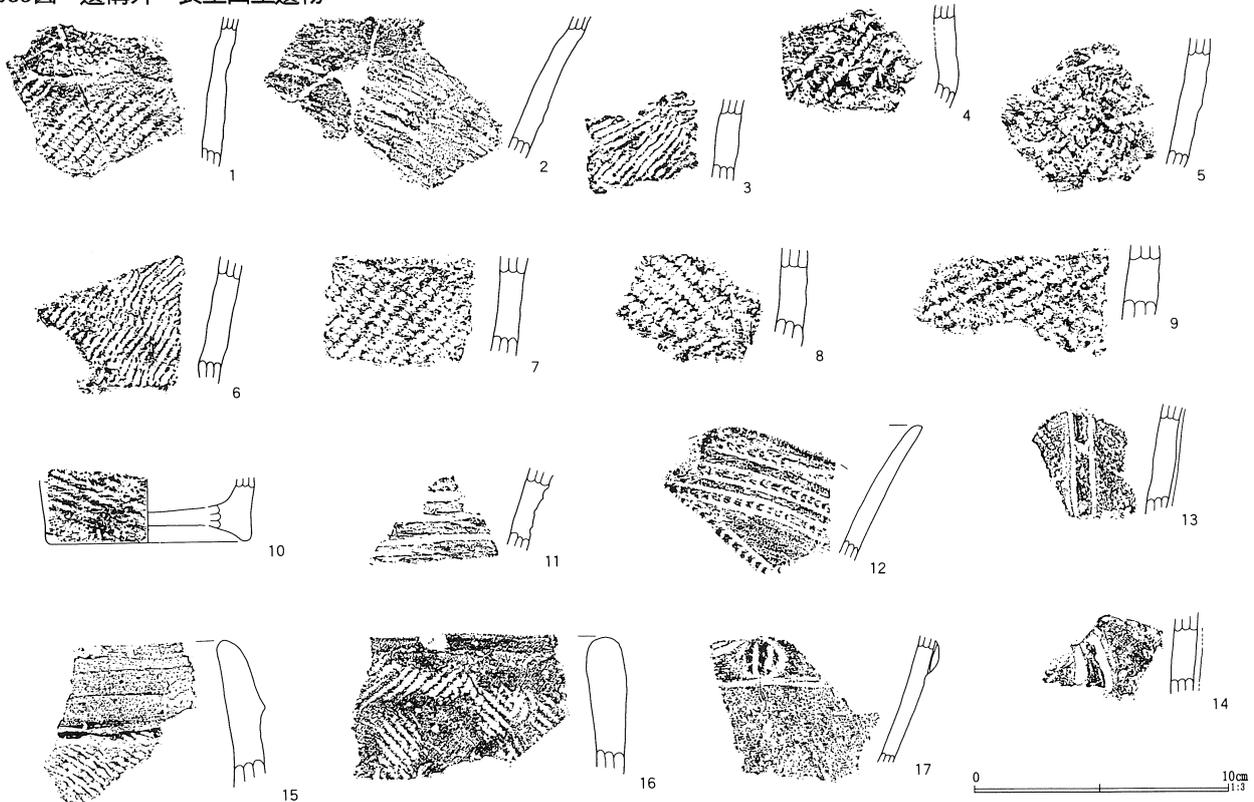
14は隆帯が曲線を描いて張り付き、隆帯の両側縁が沈線で粗くなぞられていた。地文は無文であった。色調は明赤褐色で、胎土には細かい砂粒を含んでいた。焼成は良好で、固くしまっていた。縄文中期中葉の土器であった。

15・16は加曾利E式の口縁部であった。15は微隆起線が1本横走し、下部には無節縄文が施文されていた。16は縄文が部分的に施文されていた。色調は15が赤褐色、16が橙色を呈していた。2点ともに、胎土には砂粒を含み、焼成は良好であった。

17は安行3 a式の胴部であった。浅い沈線の上部に豚鼻状の突起が貼り付き、上部には弧状に沈線が走っていた。内面調整は緻密であった。色調は黒褐色、焼成は良好で、胎土には黒色粒子、片岩を含んでいた。

グリッド取り上げ遺物は、全体的には縄文時代前期前葉の縄文施文土器が最も多く目立った。その中心となるのは、平行沈線文の土器片がわずかに含まれることから、黒浜式土器であると思われた。

第53図 遺構外・表土出土遺物



IV 中原遺跡

第54図 中原遺跡調査区全体図

1 遺跡の概要

中原遺跡は、狭山市街の北東で、西部新宿線新狭山駅から北東へ1.5kmに位置している。

立地は、入間川右岸の狭山台地上であり、入間川は、台地の西南西から東北東に向かって流れている。飯能丘陵からつながる段丘面の中位段丘にあり、沖積低地との比高差は、およそ10m程度である。

調査区の標高は、55m程度で、調査区は、南側に緩やかに傾斜している。

周辺には、戸張遺跡、稻荷上遺跡、坂上遺跡等が存在している。

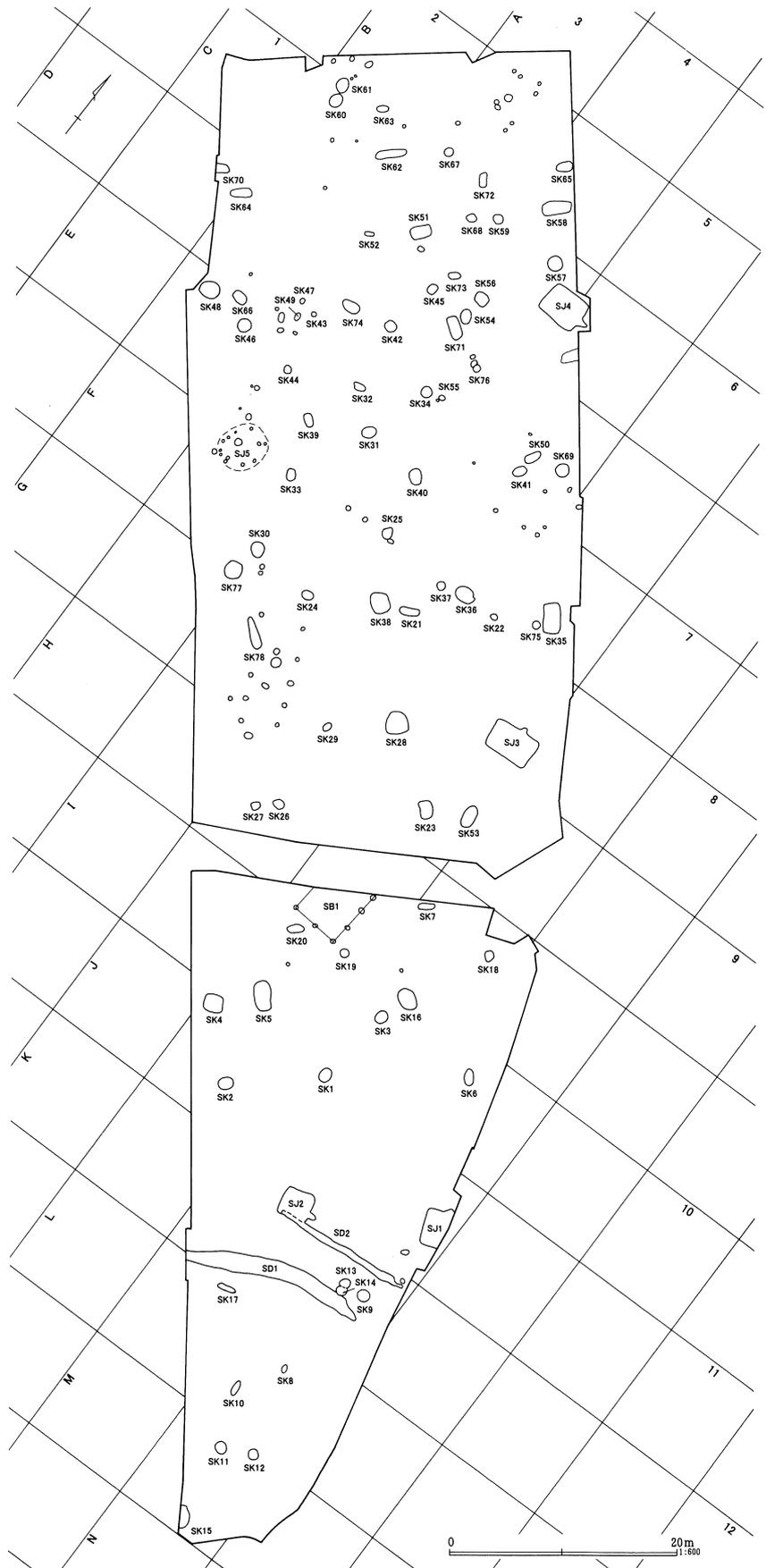
中原遺跡での遺構確認面は、ローム層であり、そのローム層も、牛蒡掘りのトレンチャーによって、著しい攪乱を受けていた。

今回の調査では、縄文時代中期から後期にかけての住居跡1軒、縄文時代の落とし穴3基、平安時代の竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡1棟、中世から近世にかけての溝2条、中世から近世にかけての土壌75基が確認できた。

最も古い遺構は、縄文時代前期の落とし穴であった。大部分の遺構は、平安時代のものであった。

遺物は、須恵器坏、土師器甕の他に、石製紡錘車等であった。

なお、平成6年の4・5月に、今回の調査区の南東側について、一次調査を行ったが、遺構・遺物は検出できなかった。



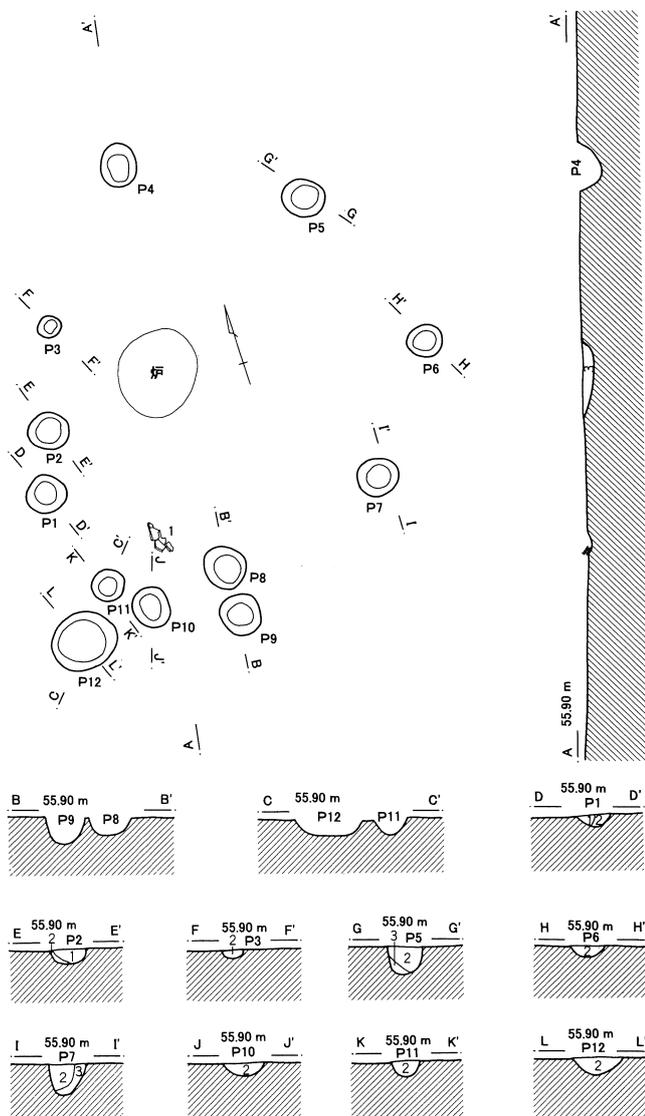
2 遺構と遺物

(1) 縄文時代の住居跡

中原遺跡の調査区内からは、縄文時代の住居跡が1軒検出できた。

縄文土器は、調査区内の表土や、牛蒡掘りのトレンチによる攪乱から、散漫に検出できたが、集中は認めらず、むしろ、調査区外の近隣の畑にその主体が存在すると考えられた。

第55図 第5号住居跡



第5号住居跡ピット覆土

- 1 黒褐色 ローム(径1mm 風化 多少)
- 2 黄褐色 ローム(径2~10mm 風化 多少)
- 3 黄褐色 ローム(2層より多量)



第5号住居跡 (第55・56図)

第5号住居跡は、E・F-3グリッドから検出した。住居跡の西側は調査区外のため検出できなかった。主軸方位はN-8°-Eであった。

規模は、主軸長4.2m、副軸長3.8m、深さ25cm程度であった。

壁は不明瞭であり、床面は不明瞭で、柱穴を8本、対ピットを4本検出した。

中央からやや西寄りで炉を検出した。

実測可能な遺物は、加曾利E式土器と磨石を検出した。

1は胴部に櫛状工具による縦の集合沈線が施文される土器で、浅鉢になるものと思われる。

2は無文の底部である。

3は太い隆帯で区画された口縁部文様帯に、縄文が施文されている。

4は下部に隆帯が横走り、口縁部文様帯を区画している。

5は胴部破片で地文縄文に沈線が懸垂している。

6・7は、櫛状工具による集合沈線が縦方向に施文されている。2点とも1と同一個体になると思われる。

土器の色調は2・3が黒褐色、その他は褐色～明褐色を呈する。いずれも胎土には石英、白色砂粒を含み、焼成は良好である。

8は磨石の欠損品で、両面が滑らかになる。長さ10.2cm、幅11.8cm、厚さ3.3cm、重さ635gである。石質は砂岩である。

(2) 平安時代の住居跡

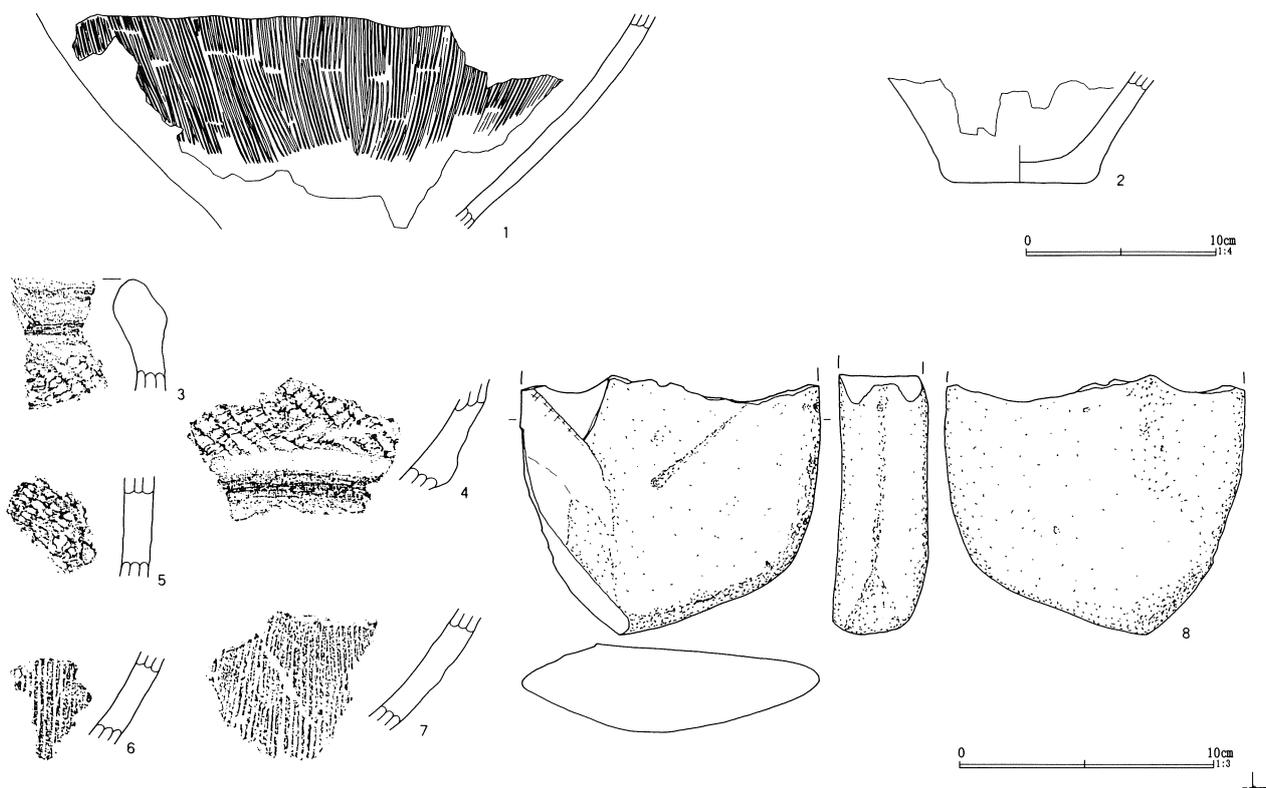
第1号住居跡 (第58図)

第1号住居跡は、J-8グリッドから検出した。住居跡の東側は調査区外のため、検出できなかった。

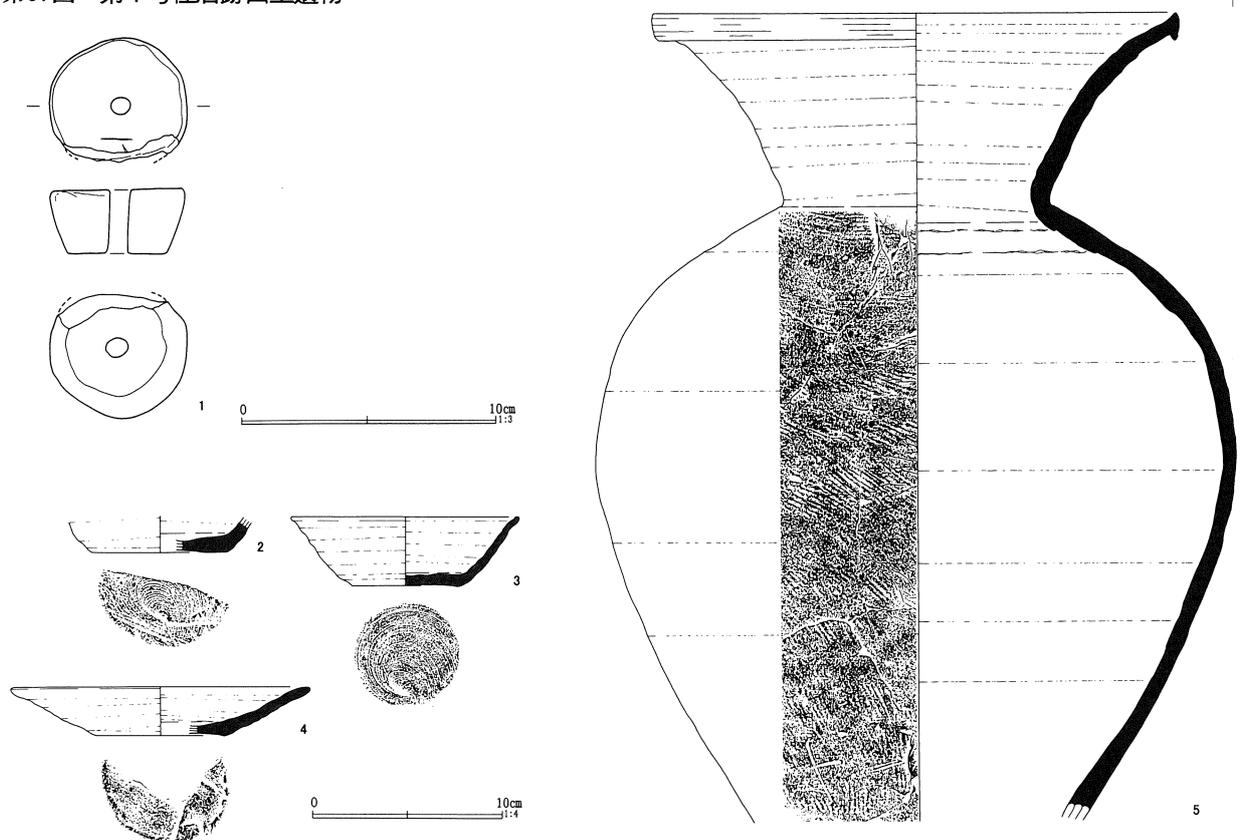
形態は方形で、主軸方位はN-22°-Wであった。

規模は、主軸長3.8m、副軸長は不明、深さ40cm程度であった。

第56图 第5号住居跡出土遺物



第57图 第1号住居跡出土遺物



壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。床面は明瞭で、壁溝は、全周していた。

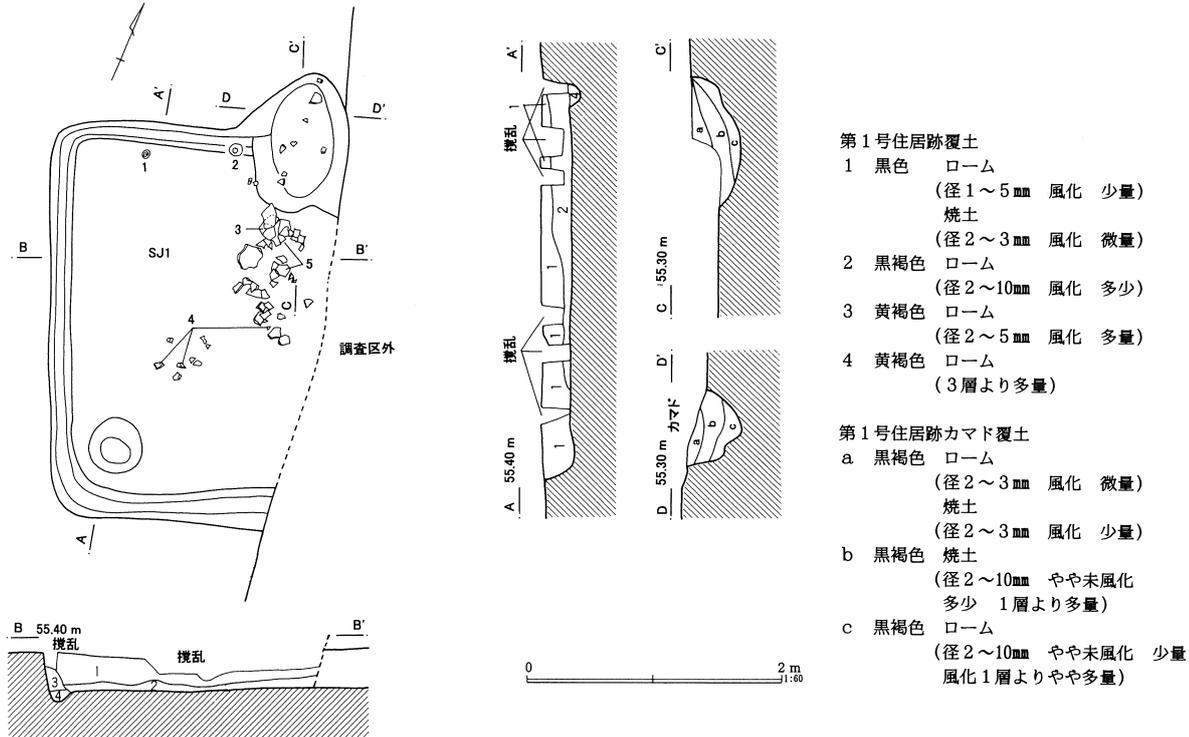
床面を精査した結果、柱穴の可能性あるピットを1本検出した。床面は明瞭であったが、他の柱穴や貯蔵穴は検出できなかった。

覆土は牛蒡掘りのトレンチャーによって著しい攪乱

を受けていたが、残存部分は、おおむね自然堆積の状況を示していた。

実測可能な遺物として、1の紡錘車をカマド左の壁際から、2の坏底部をカマド左側から、3の坏、5の甕をカマド前から、4の皿を住居跡の中央付近からそれぞれ検出した。

第58図 第1号住居跡



第1号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	紡錘車		2.6	5.1	B	3	淡褐色	70	
2	須恵器坏			(7.1)	B F	3	帯黄灰色	50	
3	須恵器坏	11.9	3.6	5.5	B E	3	濃灰色	100	
4	須恵器皿	(15.5)	2.6	(6.7)	B L	4	淡褐色	50	
5	須恵器甕				B L	3	帯黄灰色	60	

第2号住居跡 (第59・60図)

第2号住居跡は、J・K-7グリッドから検出した。

形態は方形で、主軸方位はN-75°-Eであった。

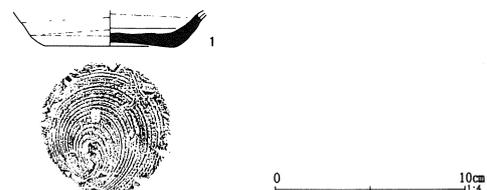
規模は、主軸長2.7m、副軸長は不明、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であり、東側からカマドが検出できた。床面は不明瞭で、壁溝は、南側から検出できた。

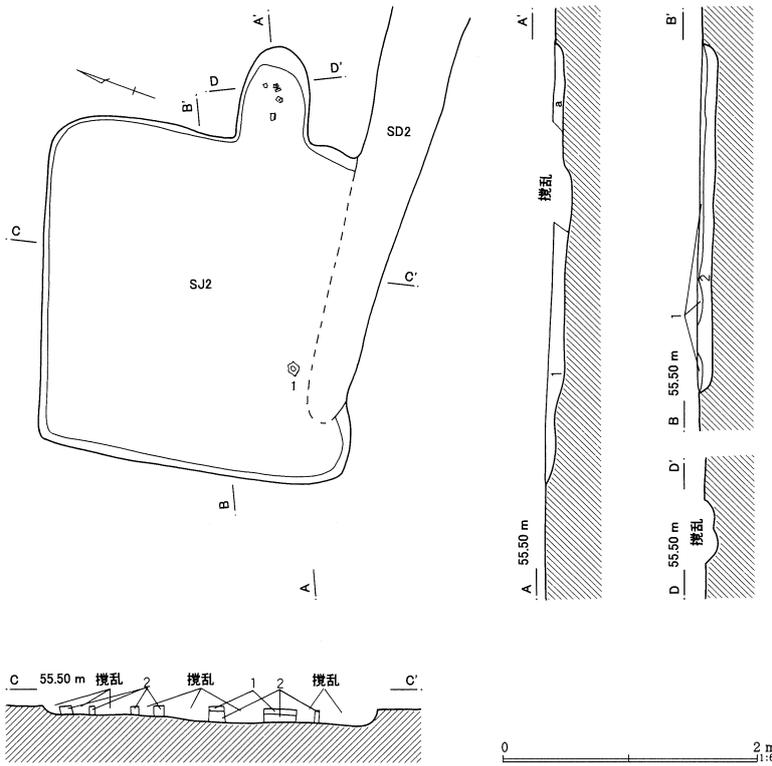
住居跡は、SD-2と重複していた。新旧関係は、溝に切られていた。

実測可能な遺物として、須恵器坏の底部を南側の床面上から検出した。ただし、当該地点はSD-2との重複が認められたので、帰属関係は明瞭にできなかった。

第59図 第2号住居跡出土遺物



第60図 第2号住居跡



第2号住居跡覆土

- 1 灰黒色 ローム
(径2~10mm 風化 少量)
- 2 灰黒色 ローム
(1層より多少)

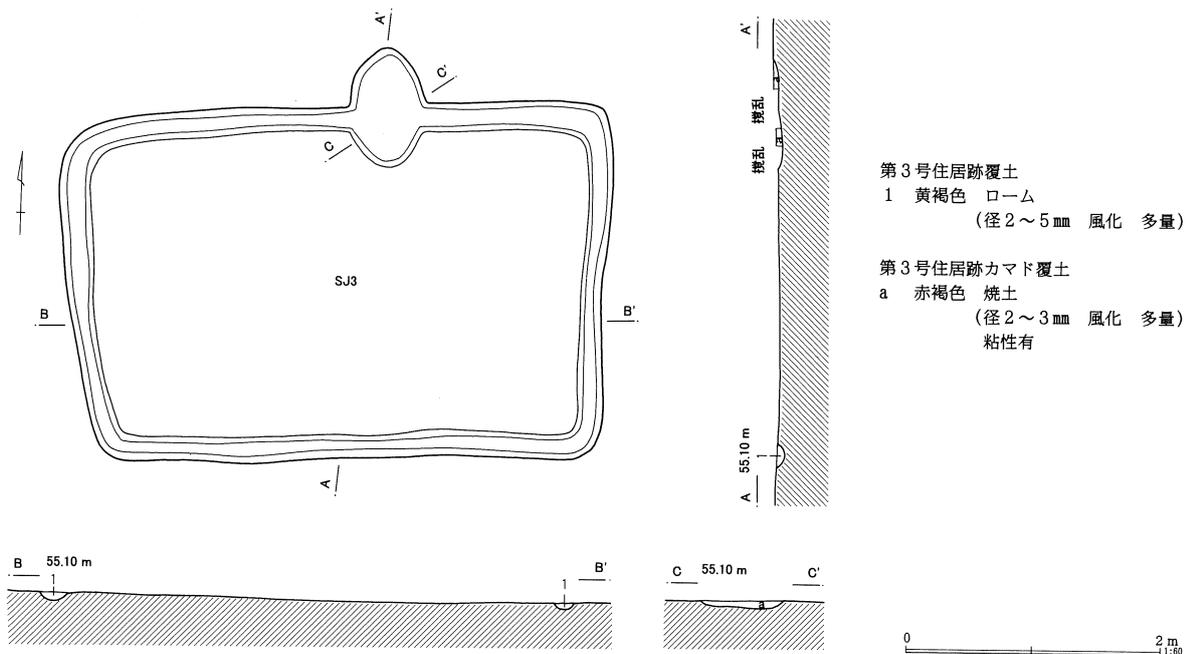
第2号住居跡カマド覆土

- a 赤褐色 ローム
(径1~2mm 風化 多少)
- 焼土
(径2~3mm 風化 多量)

第2号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	須恵器坏			6.8	B F	3	赤褐色	90	

第61図 第3号住居跡



第3号住居跡覆土

- 1 黄褐色 ローム
(径2~5mm 風化 多量)

第3号住居跡カマド覆土

- a 赤褐色 焼土
(径2~3mm 風化 多量)
- 粘性有

第3号住居跡 (第61図)

第3号住居跡は、F-6グリッドから検出した。形態は方形で、主軸方位はN-7°-Wであった。規模は、主軸長2.8m、副軸長4.2m、深さ5cm程度であった。

住居跡は後世に削平を受けており、壁溝とカマドの痕跡のみが検出できた。

壁溝は、全周しており、微妙な色調の違いから、地山と掘り分けたが、底面以下のシミ状の痕跡と考えられた。

カマドも北側から検出できたが、壁溝と同様であり、わずかに地山が赤化した事によって掘り分けたが、使用面ではなく、使用に伴う地山の焼化部分であると考えられた。

床面と柱穴は検出できなかった。

実測可能な遺物は検出できなかった。

第4号住居跡 (第62・63図)

第4号住居跡は、C-4・5グリッドから検出した。形態は方形で、主軸方位はN-90°-Eであった。

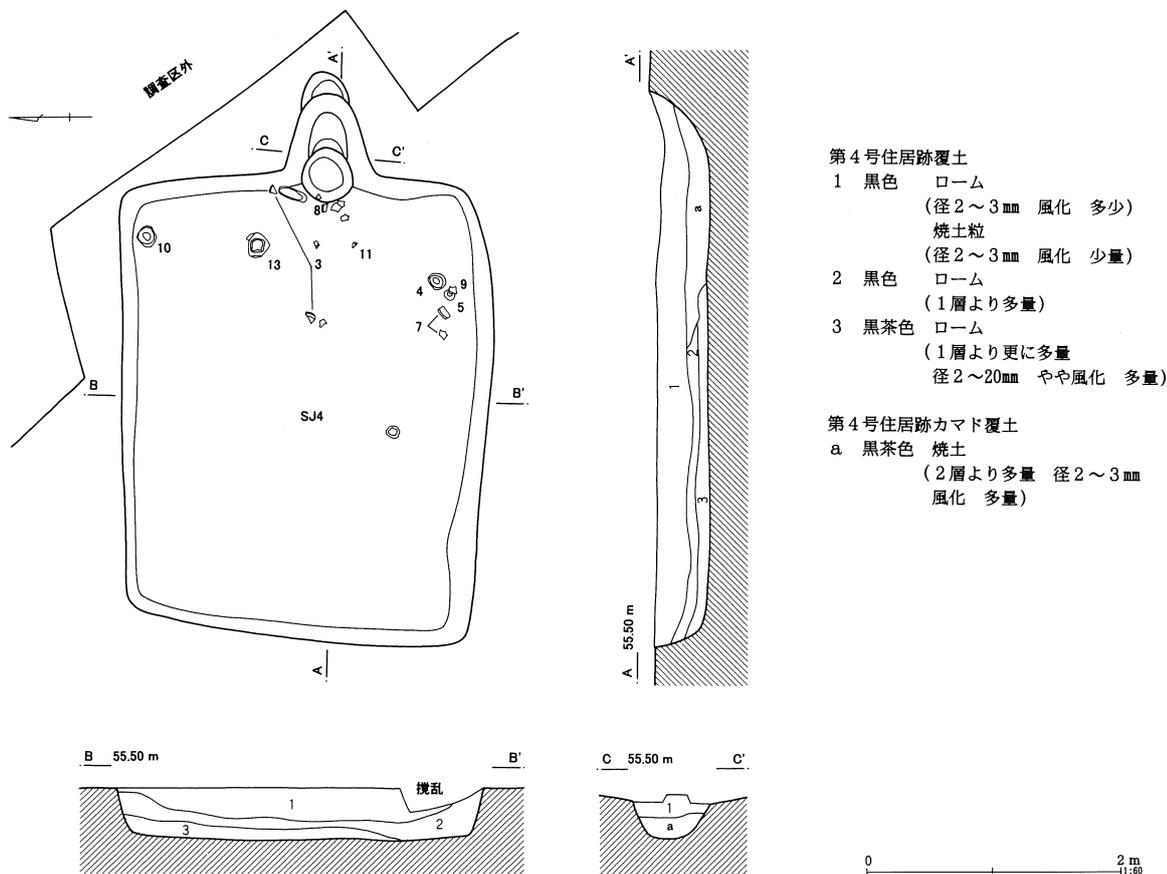
規模は、主軸長3.7m、副軸長2.9m、深さ40cm程度であった。

壁は非常に明瞭であり、東側中央付近からカマドが検出できた。床面も明瞭であったが、床面の精査にも関わらず、柱穴と考えられるピットや壁溝は全く検出できなかった。

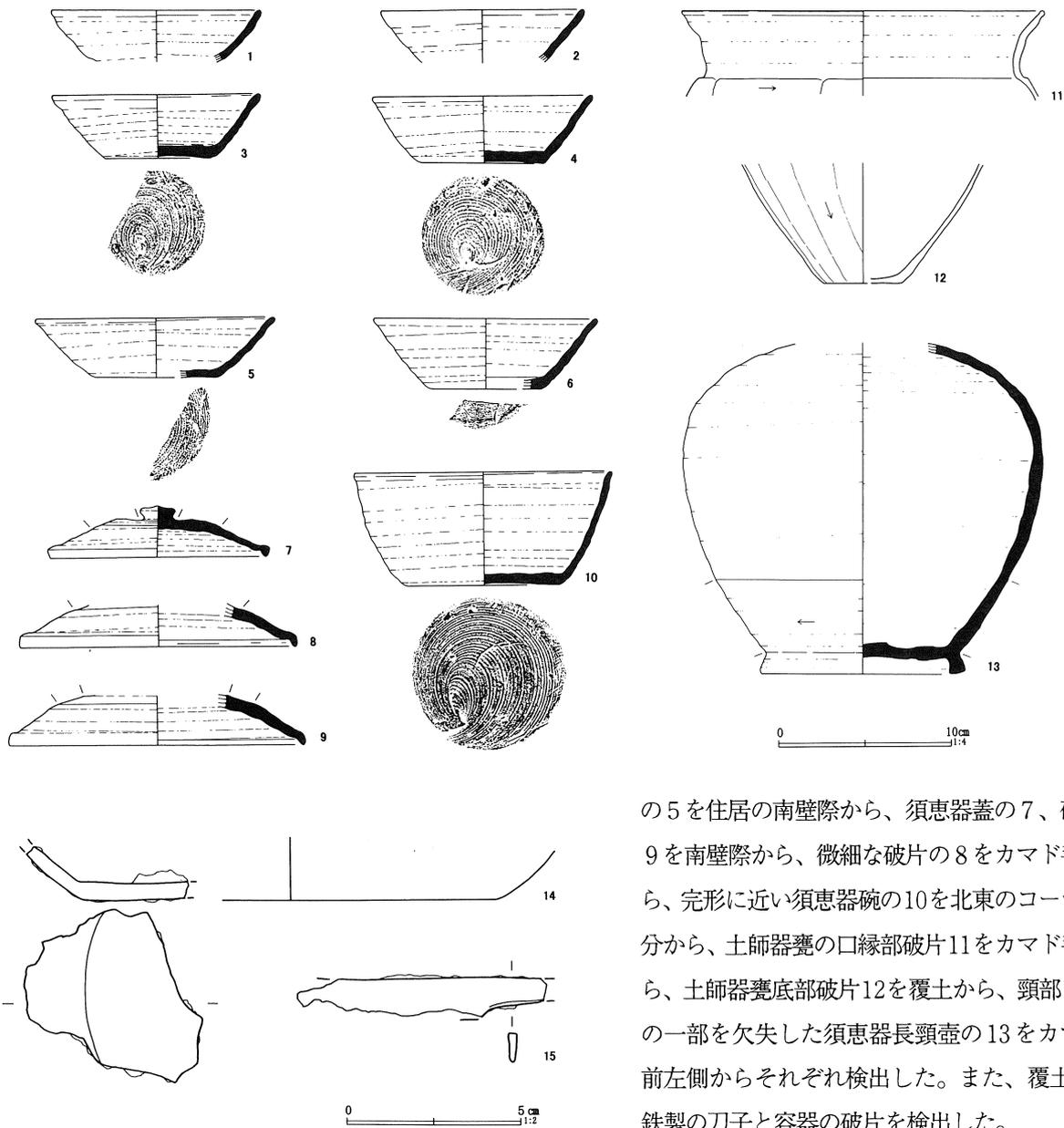
住居跡の覆土は、旧表土起源と考えられる黒色土を主体として、地山ロームの均一な風化粒子を多少含み、北西側からの流入傾向をもつ緩やかな自然堆積によって形成されていた。

実測可能な遺物として、須恵器坏破片の1、2と6を覆土中から、須恵器坏大型破片の3をカマドの左側と正面から、ほぼ完形の須恵器坏4、1/3程度の破片

第62図 第4号住居跡



第63図 第4号住居跡出土遺物



の5を住居の南壁際から、須恵器蓋の7、破片の9を南壁際から、微細な破片の8をカマド手前から、完形に近い須恵器碗の10を北東のコーナー部分から、土師器甕の口縁部破片11をカマド手前から、土師器甕底部破片12を覆土から、頸部と胴部の一部を欠失した須恵器長頸壺の13をカマド手前左側からそれぞれ検出した。また、覆土から、鉄製の刀子と容器の破片を検出した。

第4号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	須恵器坏	(12.0)			B E	3	帯黄灰色	50	
2	須恵器坏	(11.6)			B E	3	濃灰色	20	
3	須恵器坏	11.9	3.7	6.0	B E G	3	灰色	60	
4	須恵器坏	12.6	3.9	7.0	B E L	4	淡褐色	100	
5	須恵器坏	(13.7)	3.5	(7.0)	B	3	灰色	30	
6	須恵器坏	(12.9)	4.1	(6.4)	B E	3	灰色	10	
7	須恵器蓋	12.4	3.0		B	3	灰色	80	
8	須恵器蓋	(15.9)			B	4	帯黄灰色	20	
9	須恵器蓋	(17.0)			B	3	帯黄灰色	20	
10	須恵器碗	14.8	6.6	8.8	B E F	4	黄褐色	90	
11	甕	(20.9)			B C	3	赤褐色	30	
12	甕			(4.5)	B C	3	濃褐色	60	
13	須恵器壺				B F	3	帯黄灰色	70	

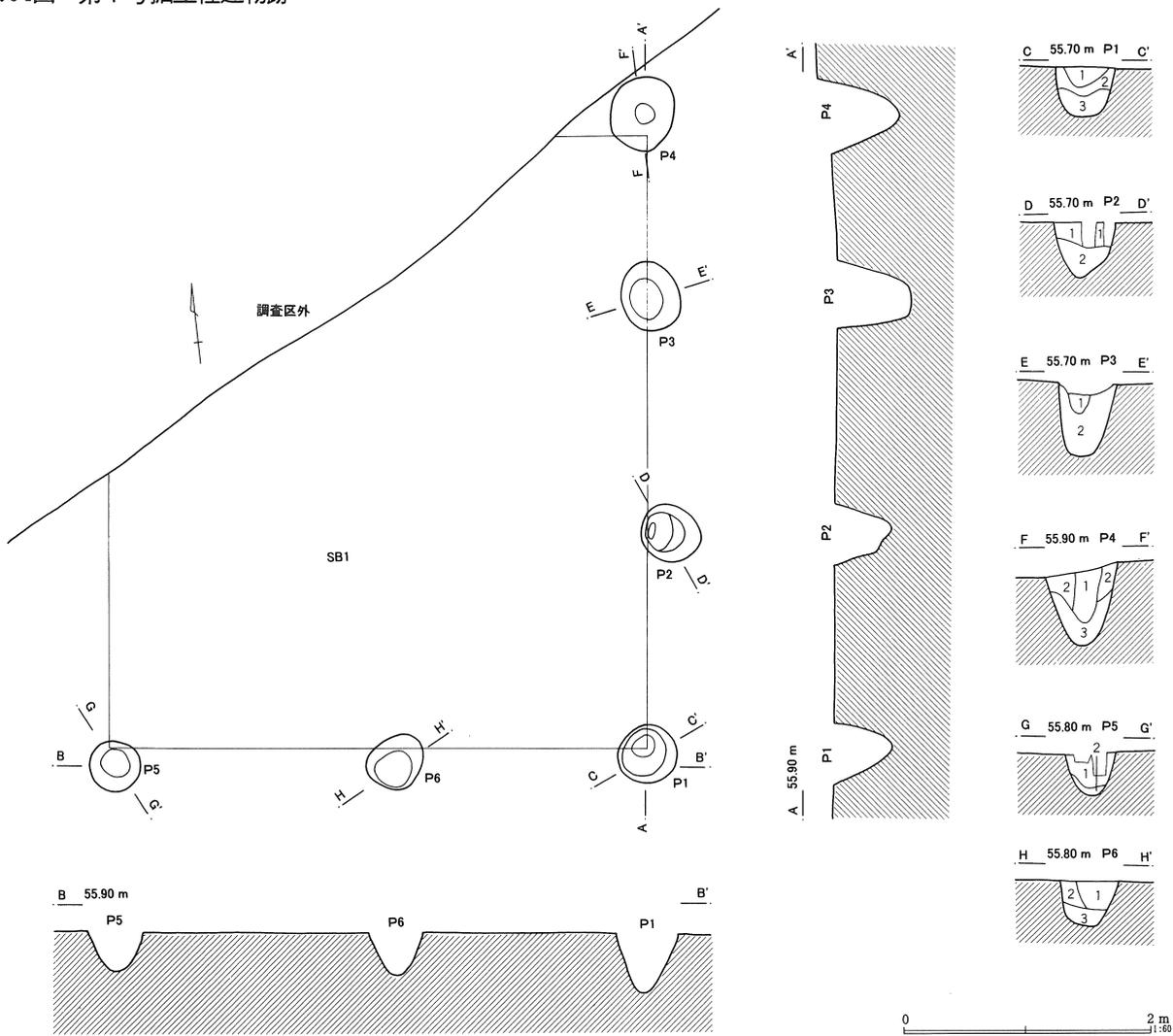
(3) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 (第64図)

第1号掘立柱建物跡は、H・I-6グリッドから検出した。形態は方形で、主軸方位はN-7°-Eであった。北側は調査区外に伸びており、規模は、桁行5.2m、

梁行4.4mであった。遺構は、2間×3間以上の側柱建物であった。柱間寸法は、梁行1.7m、桁行2.2mであった。柱掘り方の形状は、円形で、径40~60cm、深さは35~60cmであった。柱痕はP4で検出した。実測可能な遺物は検出できなかった。

第64図 第1号掘立柱建物跡



第1号掘立柱建物跡覆土

P 1

- 1 黒色 均一 ローム(1mm 小) 炭化物全体に散在 締まりやや弱 粘性やや強
- 2 黒褐色 均一 ローム(やや多) 炭化物全体に散在 締まりやや弱 粘性やや強
- 3 暗褐色 均一 ローム(1mm やや多) 炭化物全体に散在 締まりやや弱 粘性やや強

P 2

- 1 暗褐色 ローム(5mm 多) 締まり弱 粘性強 地山起源
- 2 暗褐色 ローム(2mm 多) 締まり弱 粘性強 地山起源

P 3

- 1 黒褐色 ローム(5mm 微量) 締まり弱 粘性やや強 地山起源
- 2 暗褐色 ローム(斑状 多)

P 4

- 1 暗褐色 ローム(少) カーボン散在微量 締まりやや弱 粘性やや強 柱穴
- 2 暗褐色 ローム(2mm 多) 締まりやや強 粘性やや強
- 3 暗褐色 ローム(3~4mm 多) 締まりやや強 粘性やや強

P 5

- 1 黒色 ローム(少量) 締まりやや弱 粘性やや強 地山起源
- 2 黒褐色 ローム(1mm 少) 締まりやや弱 粘性やや強 地山起源

P 6

- 1 黒褐色 ローム(2mm 多少) 黒色土(1mm 少) 締まりやや弱 粘性強 地山起源
- 2 暗黄褐色 ローム(3mm) 黒色土(2mm 多少) 締まりやや強 粘性やや強
- 3 暗褐色 ローム(3mm) 黒色土(2mm 多量)

(4) 土壌

第1号土壌 (第65図)

J-7グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸1.2m、短軸1.1m、深さ20cm程度であった。主軸方位はN-20°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第2号土壌 (第65図)

J-6グリッドから検出した。平面形態は、円形で、規模は、直径1.3m、深さ20cm程度であった。主軸方位はN-25°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第3号土壌 (第65図)

I-7グリッドから検出した。平面形態は、円形で、規模は、直径1.2m、深さ10cm程度であった。主軸方位はN-25°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第4号土壌 (第65図)

J-6グリッドから検出した。平面形態は、隅丸方形で、規模は、長軸1.8m、短軸1.6m、深さ30cm程度であった。主軸方位はN-18°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第5号土壌 (第65図)

I-6グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸2.7m、短軸1.6m、深さ50cm程度であった。主軸方位はN-24°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第6号土壌 (第65図)

I-8グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸1.5m、短軸0.9m、深さ40cm程度であった。主軸方位はN-28°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第7号土壌 (第65図)

H-7グリッドから検出した。平面形態は、隅丸方形

で、規模は、長軸1.5m、短軸0.5m、深さ10cm程度であった。主軸方位はN-55°-Eであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第8号土壌 (第65図)

L-8グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸0.8m、短軸0.6m、深さ10cm程度であった。主軸方位はN-76°-Eであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第9号土壌 (第65図)

K-8グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸1.2m、短軸1.1m、深さ30cm程度であった。主軸方位はN-20°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第10号土壌 (第65図)

L-8グリッドから検出した。平面形態は、隅丸方形で、規模は、長軸1.3m、短軸0.6m、深さ10cm程度であった。主軸方位はN-79°-Eであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第11号土壌 (第65図)

M-8グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸1.1m、短軸1.0m、深さ40cm程度であった。主軸方位はN-9°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第12号土壌 (第66図)

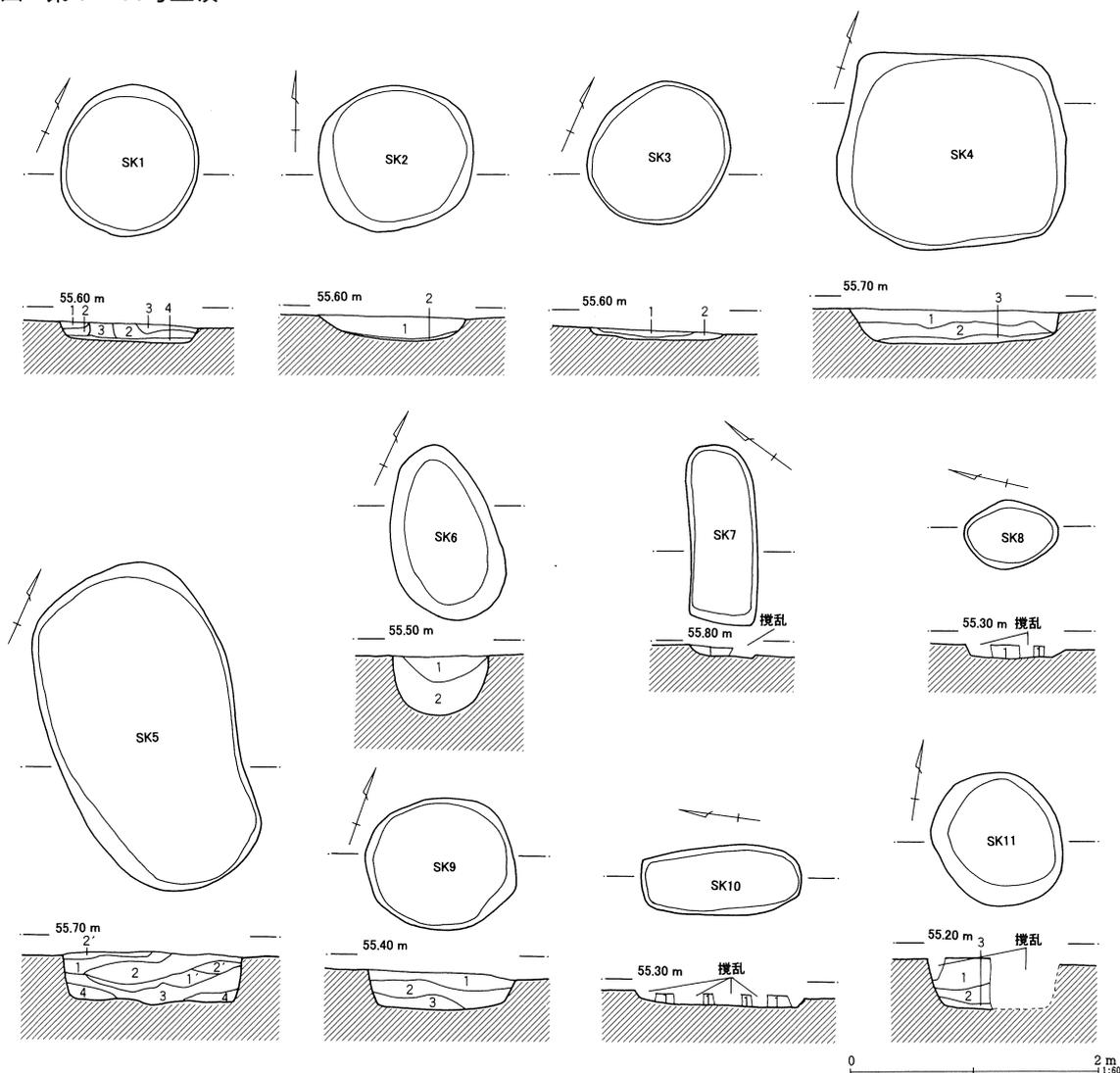
M-8グリッドから検出した。平面形態は、円形で、規模は、直径1.0m、深さ20cm程度であった。主軸方位はN-1°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第13号土壌 (第66図)

K-8グリッドから検出した。平面形態は、円形で、規模は、直径0.9m、深さ20cm程度であった。

主軸方位はN-22°-Wであった。実測可能な遺物は、

第65図 第1～11号土壌



第1号土壌覆土

- 1 黒色 均一 ローム(径5～30mm 未風化 多量) 旧表土起源
- 2 黄色 やや均一 ローム(径1～20mm 風化 多量)
旧表土(径5～20mm 風化少量)
地山ローム起源
- 3 黄色 やや均一 2層より黒色土多含
- 4 黒色 均一 有機物起源 ローム・旧表土不含

- 2' 黒色 均一 2層よりローム風化
- 3 黒色 均一 ローム(径2～10mm 風化 多量)
- 4 黒色 均一 ローム不含 土壌内有有機物起源

第2号土壌覆土

- 1 褐色 やや均一 ローム(径1～30mm やや未風化 多量)
- 2 黒色 均一 土壌内の有機物起源

第6号土壌覆土

- 1 黒褐色 均一 ローム(径1～2mm 風化 多量)
- 2 黄褐色 均一 ローム(径1～3mm 風化 多量)

第3号土壌覆土

- 1 褐色 やや均一 ローム(径1～3mm やや 風化 多量)
- 2 黒色 均一 ローム(径1～10mm 未風化 少量)

第7号土壌覆土

- 1 灰黒色 やや均一 ローム(径1～10mm やや風化 多量)

第4号土壌覆土

- 1 黒色 やや均一 ローム(径2～5mm やや風化 少量)
- 2 灰褐色 やや均一 ローム(径2～50mm やや未風化 多量)
- 3 黒色 均一 ローム(径2～5mm 未風化 少量) 有機物起源

第8号土壌覆土

- 1 黄褐色 均一 ローム(径1～5mm 風化 多量)

第5号土壌覆土

- 1 黒色 均一 ローム(径5～50mm やや未風化 多量)
- 1' 黒色 均一 1層よりローム風化
- 2 灰黒色 やや均一 ローム(径2～20mm 風化 多量)
1層よりローム少ない

第9号土壌覆土

- 1 黒褐色 均一 ローム(径1～3mm 風化 微量)
- 2 黒色 やや均一 ローム(径1～10mm やや未風化 少量)
- 3 黒褐色 やや均一 ローム(径1～20mm やや未風化 多量)

第10号土壌覆土

- 1 黄褐色 やや均一 ローム(径2～20mm 風化 多量)

第11号土壌覆土

- 1 黒色 均一 ローム(径1～2mm 風化 微量)
- 2 黒色 やや均一 ローム(径1～2mm 風化 少量)
- 3 黒色 やや均一 ローム(径1～30mm やや風化 多量)

検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第14号土壙 (第66図)

K-8グリッドから検出した。平面形態は、円形で、規模は、直径0.9m、深さ20cm程度であった。主軸方位はN-11°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第15号土壙 (第66図)

M-8グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸2.0m、短軸不明、深さ100cm程度であった。主軸方位はS-59°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第16号土壙 (第66図)

I-7グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸2.0m、短軸1.5m、深さ150cm程度であった。主軸方位はN-29°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土の状況と、遺構の形態から、縄文時代の落とし穴と考えられた。

第17号土壙 (第66図)

L-7グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸1.7m、短軸0.5m、深さ20cm程度であった。主軸方位はS-72°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第18号土壙 (第66図)

H-7グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸1.0m、短軸0.8m、深さ20cm程度であった。主軸方位はS-67°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第19号土壙 (第66図)

I-6グリッドから検出した。平面形態は、円形で、規模は、直径0.8m、深さ30cm程度であった。主軸方位はN-22°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第20号土壙 (第66図)

I-6グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸1.6m、短軸0.8m、深さ10cm程度であった。主軸方位はS-49°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第21号土壙 (第66図)

F-5グリッドから検出した。平面形態は、隅丸方形で、規模は、長軸1.7m、短軸0.6m、深さ40cm程度であった。主軸方位はN-28°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第22号土壙 (第66図)

E-5・6、F-5・6グリッドから検出した。平面形態は、円形で、規模は、直径0.7m、深さ20cm程度であった。主軸方位はS-82°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第23号土壙 (第67図)

G-6グリッドから検出した。平面形態は、方形で、規模は、長軸1.6m、短軸1.2m、深さ20cm程度であった。主軸方位はN-31°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第24号土壙 (第67図)

F-4グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸1.1m、短軸0.9m、深さ20cm程度であった。主軸方位はN-63°-Eであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

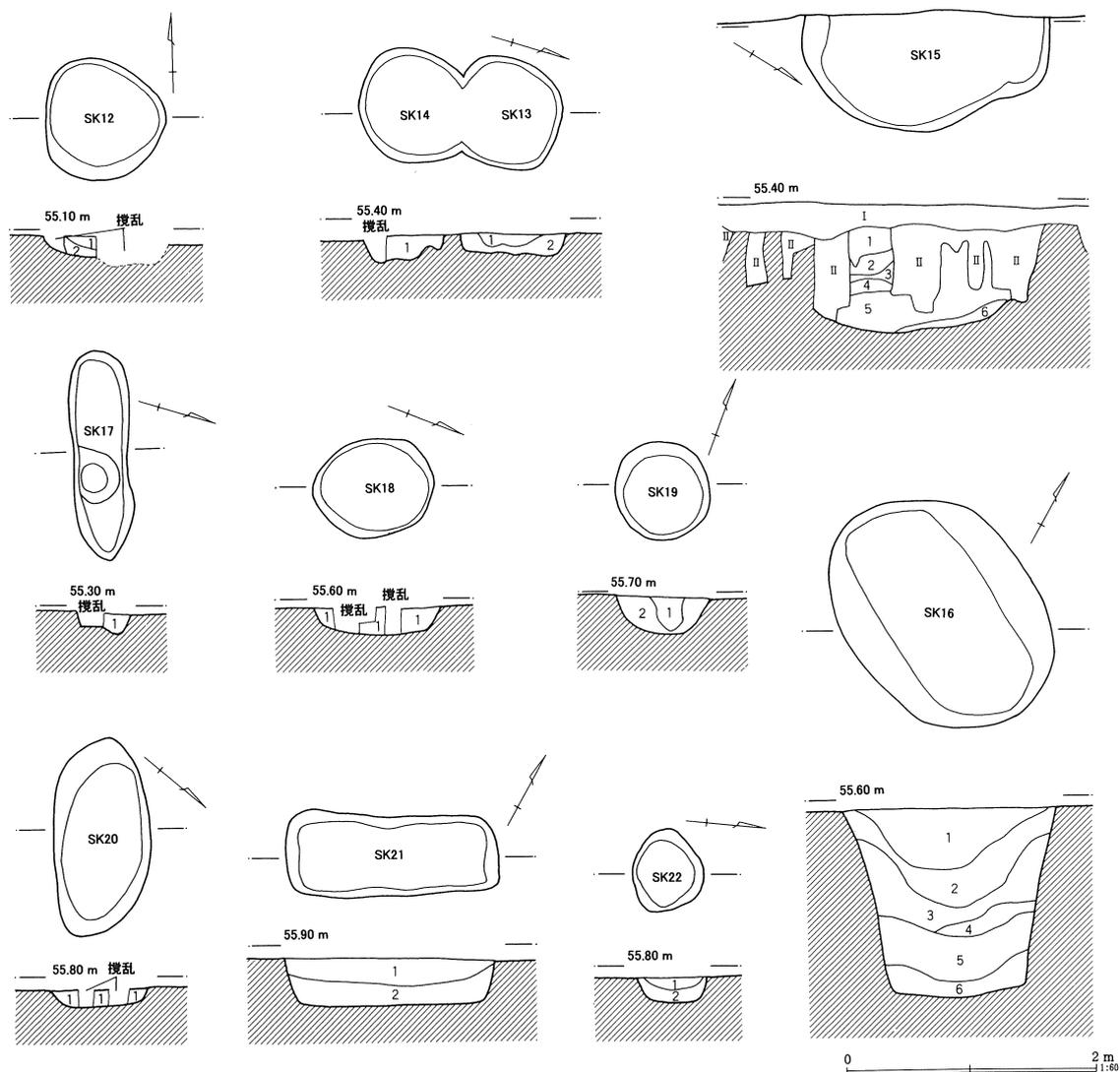
第25号土壙 (第67図)

E-4グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸1.1m、短軸1.0m、深さ40cm程度であった。主軸方位はN-33°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第26号土壙 (第67図)

H-5グリッドから検出した。平面形態は、楕円形

第66図 第12～22号土壇



第12号土壇覆土

- 1 黒色 均一 ローム(径1~3mm 風化 多少)
- 2 褐色 やや不均一 ローム(径2~10mm やや未風化 多量)

第13号土壇覆土

- 1 黒色 均一 ローム(径1~20mm 風化 多少)
- 2 黒褐色 やや均一 ローム(径1~5mm 風化 多量)

第14号土壇覆土

- 1 黄褐色 均一 ローム風化物 やや粘性

第15号土壇覆土

- I 褐色土 やや均一 現在の耕作表土
- II 褐色土 やや均一 牛蒡トレンチによる攪乱土
- 過去の耕作土層
- 1 黒色 やや均一 ローム(径1~10mm 風化 少量)
- 2 黒褐色 やや不均一 ローム(径2~30mm 風化 多量)
- 3 褐色 やや不均一 ローム(径2~30mm 風化 多量)
- 4 黒褐色 やや不均一 ローム(径2~20mm 風化 多量)
- 5 褐色 やや不均一 3層よりロームやや大
- 6 褐色 やや不均一 4層よりロームやや小 風化進行

第16号土壇覆土

- 1 黒色 均一 ローム(径1mm 風化 微量) 旧表土
- 2 黒黄色 均一 ローム(径1~3mm 風化 多少)
- 3 黄褐色 やや均一 ローム(径2~50mm 風化 多少)

- 4 黒色 不均一 ローム(径2~50mm やや未風化 多少)
- 5 黄褐色 不均一 ローム(径5~50mm やや未風化 多量)
- 6 褐色 均一 粘性強

第17号土壇覆土

- 1 黒褐色 やや均一 ローム(径1~10mm 風化多少)

第18号土壇覆土

- 1 黄色 均一 地山ローム起源 ローム風化土

第19号土壇覆土

- 1 暗褐色 均一 含有物特になし しまり粘性やや強
- 2 暗黄褐色 均一 黒褐色粒子(微含)

第20号土壇覆土

- 1 黒褐色 均一 ローム粒少量 地山起源
- しまりやや弱 粘性やや強

第21号土壇覆土

- 1 黒褐色 やや均一 ローム(径1~20mm 風化 多量)
- 2 黒褐色 やや均一 1層よりローム新鮮

第22号土壇覆土

- 1 黄褐色 やや均一 ローム(径2~5mm 風化 多少)
- 2 黄褐色 やや不均一 ローム(径2~50mm 風化 多量)

で、規模は、長軸1.0m、短軸0.8m、深さ10cm程度であった。主軸方位はN-25°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第27号土壙 (第67図)

H-5グリッドから検出した。平面形態は、隅丸方形で、規模は、長軸0.8m、短軸0.3m、深さ80cm程度であった。主軸方位はN-26°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第28号土壙 (第67図)

G-5グリッドから検出した。平面形態は、不整形円で、規模は、長軸1.9m、短軸1.8m、深さ20cm程度であった。主軸方位はN-30°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第29号土壙 (第67図)

G-5グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸0.8m、短軸0.7m、深さ10cm程度であった。主軸方位はN-31°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第30号土壙 (第67図)

F-3・4グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸1.4m、短軸1.0m、深さ10cm程度であった。主軸方位はN-60°-Eであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第31号土壙 (第67図)

E-4グリッドから検出した。平面形態は、隅丸方形で、規模は、長軸1.3m、短軸0.9m、深さ10cm程度であった。主軸方位はN-40°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第32号土壙 (第67図)

E-3グリッドから検出した。平面形態は、不整形で、規模は、長軸1.0m、短軸0.6m、深さ10cm程度で

あった。主軸方位はN-27°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第33号土壙 (第67図)

F-3グリッドから検出した。平面形態は、不整形円で、規模は、長軸1.0m、短軸0.9m、深さ70cm程度であった。主軸方位はN-35°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第34号土壙 (第67図)

D-4グリッドから検出した。平面形態は、円形で、規模は、直径1.0m、深さ20cm程度であった。主軸方位はN-67°-Eであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第35号土壙 (第68図)

E-6グリッドから検出した。平面形態は、方形で、規模は、長軸2.7m、短軸1.5m、深さ20cm程度であった。主軸方位はN-55°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第36号土壙 (第68図)

E-5, F-5グリッドから検出した。平面形態は、不整形で、規模は、長軸1.9m、短軸1.4m、深さ20cm程度であった。主軸方位はN-26°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

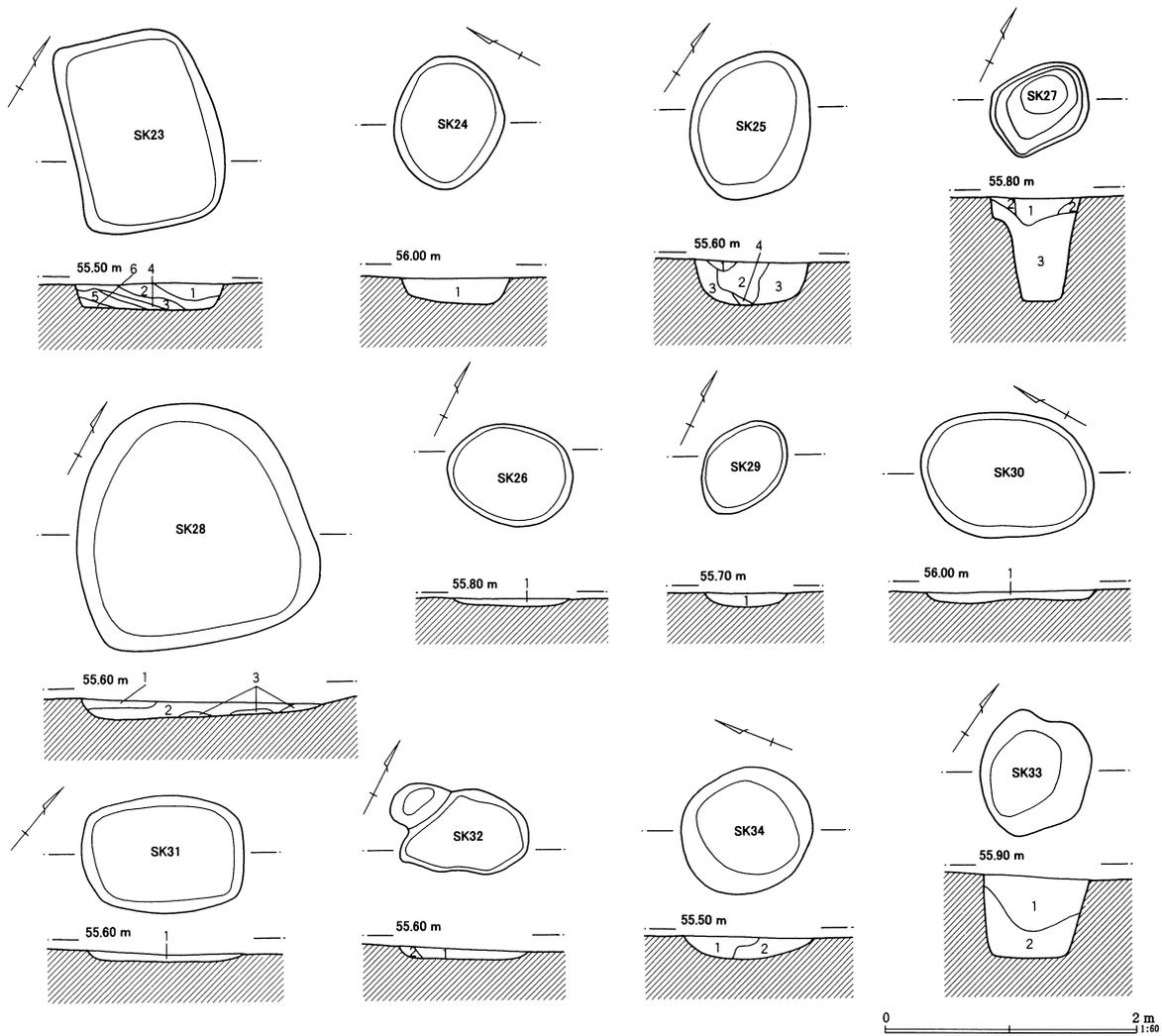
第37号土壙 (第68図)

E-5, F-5グリッドから検出した。平面形態は、円形で、規模は、直径0.9m、深さ30cm程度であった。主軸方位はN-15°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第38号土壙 (第68図)

F-5グリッドから検出した。平面形態は、不整形円で、規模は、長軸1.8m、短軸1.6m、深さ60cm程度であった。主軸方位はN-50°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第67図 第23~34号土坑



第23号土坑覆土

- 1 黒褐色 やや均一 ローム(径2~50mm やや風化 多量)
褐色土(径40~100mm 風化 多量)
- 2 黒褐色 不均一 ローム(径2~20mm 風化 多量)
- 3 黒褐色 不均一 2層よりロームかなり多量
- 4 黒褐色 やや不均一 2層よりローム大きく少量 風化弱い
- 5 黒褐色 やや不均一 2層よりロームわずかに新鮮
- 6 黒色 やや均一 底面直上の黒色土

第24号土坑覆土

- 1 黄色 均一 黄色ロームの風化物 やや灰色を帯びる

第25号土坑覆土

- 1 黄褐色 均一 ローム(径1~2mm 風化 多少)
ローム風化物起源
- 2 黄褐色 均一 1層よりローム新鮮 やや多量
- 3 黄褐色 やや均一 1層よりローム少量
- 4 黄褐色 やや均一 ローム(径2~50mm やや未風化 多量)
ローム風化物起源

第26号土坑覆土

- 1 黄色 均一 地山ローム わずかに灰色がかかる

第27号土坑覆土

- 1 黒褐色 やや均一 ローム(径2~3mm 風化 多少)
- 2 黒褐色 やや不均一 ローム(径2~5mm やや風化 多量)
- 3 黒褐色 やや均一 ローム(径2~3mm 風化 多少)

第28号土坑覆土

- 1 黒色 やや不均一 ローム(径2~20mm やや風化 多量)
- 2 黄褐色 不均一 ローム(径5~70mm 未風化 多量) ローム起源
- 3 黒色 均一 ローム(径1~3mm 風化 少量)

第29号土坑覆土

- 1 黄褐色 やや均一 ローム(径1~5mm 風化 多量) ローム起源

第30号土坑覆土

- 1 暗褐色 均一 ローム(多量) 黒色粒子(均一 少量)
しまり粘性やや強

第31号土坑覆土

- 1 黒色 均一 ローム(径1~2mm 多量) しまり粘性やや弱

第32号土坑覆土

- 1 黒色 均一 ローム(1~3mm 多量) しまりやや弱 粘性やや強
- 2 黒色 均一 しまりやや弱 粘性やや強

第33号土坑覆土

- 1 黒褐色 均一 ローム(径1~2mm 風化 多量)
炭化物(径1~2mm 風化 多少)
- 2 黒褐色 均一 1層よりローム多量

第34号土坑覆土

- 1 灰褐色 やや不均一 ローム(径1~4mm 風化 多少) ローム起源
- 2 灰褐色 均一 ローム(径1~2mm 風化 少量) ローム起源

示していた。

第39号土壌 (第68図)

E-3グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸1.2m、短軸0.8m、深さ50cm程度であった。主軸方位はN-52°-Eであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第40号土壌 (第68図)

E-4グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸1.4m、短軸1.0m、深さ40cm程度であった。主軸方位はN-60°-Eであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第41号土壌 (第68図)

D-5グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸1.3m、短軸0.9m、深さ20cm程度であった。主軸方位はN-58°-Eであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第42号土壌 (第68図)

D-3グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸1.1m、短軸0.9m、深さ10cm程度であった。主軸方位はN-37°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第43号土壌 (第68図)

D-3グリッドから検出した。平面形態は、円形で、規模は、直径0.6m、深さ10cm程度であった。主軸方位はN-9°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第44号土壌 (第68図)

E-3グリッドから検出した。平面形態は、方形で、規模は、長軸0.7m、短軸0.7m、深さ20cm程度であった。主軸方位はN-63°-Eであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第45号土壌 (第68図)

C-3・D-3グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸0.9m、短軸0.7m、深さ20cm程度であった。主軸方位はN-47°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第46号土壌 (第69図)

E-2グリッドから検出した。平面形態は、円形で、規模は、直径1.2m、深さ10cm程度であった。主軸方位はN-68°-Eであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第47号土壌 (第69図)

D-3グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸0.7m、短軸0.5m、深さ20cm程度であった。主軸方位はN-13°-Eであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第48号土壌 (第69図)

E-2グリッドから検出した。平面形態は、不整形円で、規模は、長軸1.8m、短軸1.5m、深さ30cm程度であった。主軸方位はN-4°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第49号土壌 (第69図)

D-3グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸0.9m、短軸0.5m、深さ10cm程度であった。主軸方位はN-77°-Eであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

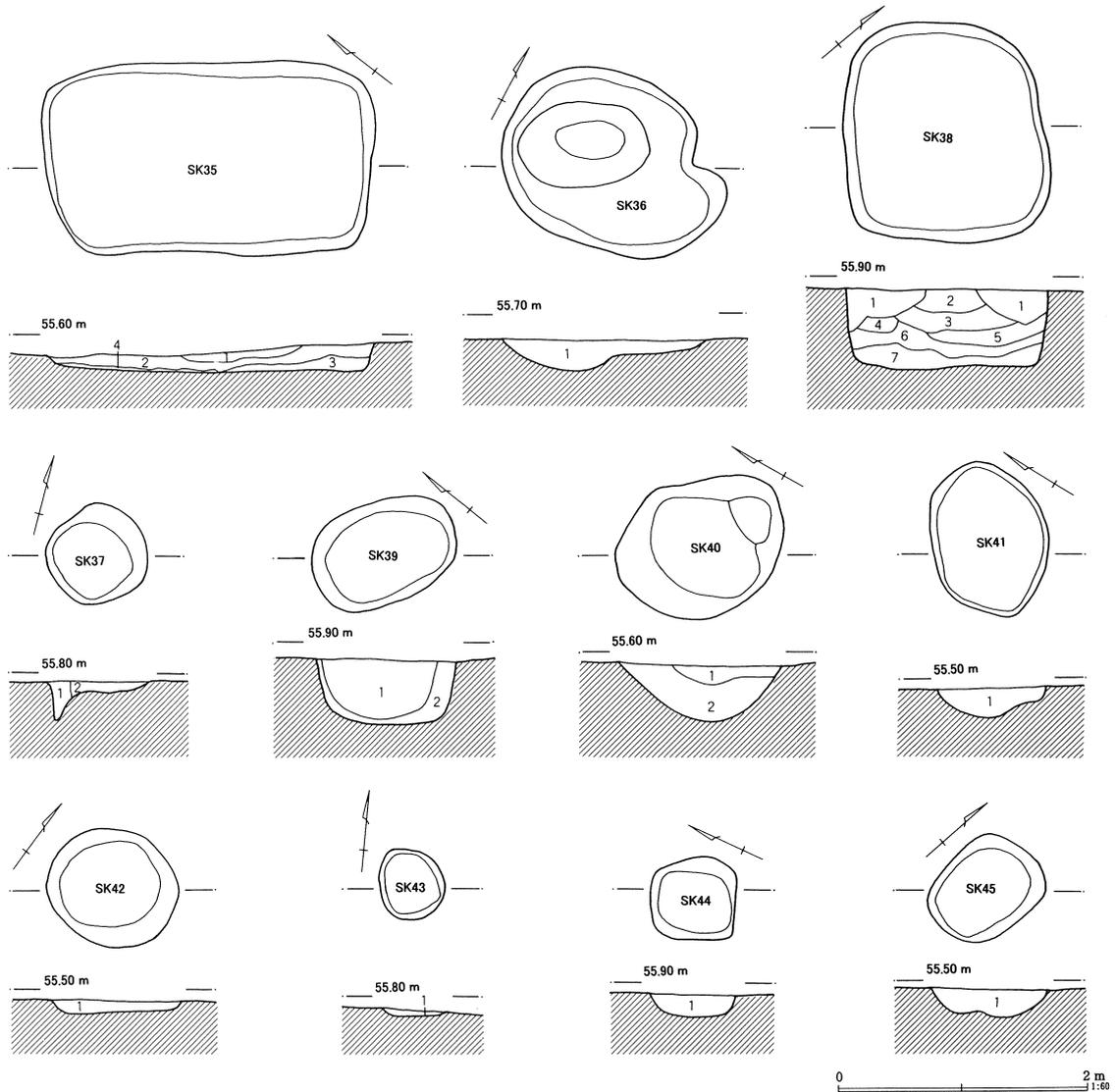
第50号土壌 (第69図)

D-5グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸1.6m、短軸0.8m、深さ90cm程度であった。主軸方位はS-70°-Eであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第51号土壌 (第69図)

C-3グリッドから検出した。平面形態は、隅丸方形で、規模は、長軸1.9m、短軸1.1m、深さ40cm程度で

第68図 第35～45号土壇



第35号土壇覆土

- | | | | |
|---|-----|-------|--------------------|
| 1 | 黒色 | やや不均一 | ローム(径2~30mm 風化 多量) |
| 2 | 黒色 | 均一 | ローム(径2~5mm 風化 少量) |
| 3 | 黒褐色 | やや均一 | 1層よりローム少量 |
| 4 | 黒色 | 均一 | 2層よりローム少量 |

第36号土壇覆土

- | | | | |
|---|-----|----|-------------------------------|
| 1 | 灰黄色 | 均一 | ローム(径2~5mm 風化 多少)
ローム風化物主体 |
|---|-----|----|-------------------------------|

第37号土壇覆土

- | | | | |
|---|----|------|--------------------|
| 1 | 黒色 | 均一 | ローム(径1~3mm 風化 少量) |
| 2 | 黒色 | やや均一 | ローム(径2~30mm 風化 少量) |

第38号土壇覆土

- | | | | |
|---|-----|----|---------------------------------------|
| 1 | 灰黒色 | 均一 | ローム(径1~5mm 未風化 多量)
やや砂質 |
| 2 | 黒色 | 均一 | ローム(径2~5mm 風化 多量)
焼土(径2~3mm 風化 微量) |
| 3 | 黒色 | 均一 | 2層よりロームやや新鮮 |
| 4 | 黒色 | 均一 | 2層よりローム大きく新鮮 |
| 5 | 黒色 | 均一 | 2層よりローム少なく風化 |
| 6 | 黒色 | 均一 | 2層よりロームかなり多い |
| 7 | 黒色 | 均一 | 2層よりローム大きく多く新鮮 |

第39号土壇覆土

- | | | | |
|---|-----|----|-------------------|
| 1 | 黒褐色 | 均一 | ローム(径1~2mm 風化 少量) |
| 2 | 黒褐色 | 均一 | ローム(径1~2mm 風化 多量) |

第40号土壇覆土

- | | | | |
|---|----|-----|---------------------|
| 1 | 黒色 | 均一 | ローム(径2~20mm 風化 多少) |
| 2 | 黒色 | 不均一 | ローム(径2~50mm 未風化 多量) |

第41号土壇覆土

- | | | | |
|---|----|----|-------------------|
| 1 | 黄色 | 均一 | ローム(径1~3mm 風化 多量) |
|---|----|----|-------------------|

第42号土壇覆土

- | | | | |
|---|----|----|----------------------------|
| 1 | 黄色 | 均一 | ローム(径1~3mm 風化 多量)
ローム起源 |
|---|----|----|----------------------------|

第43号土壇覆土

- | | | | |
|---|----|----|--------------------|
| 1 | 黒色 | 均一 | ローム(径2~10mm 風化 多量) |
|---|----|----|--------------------|

第44号土壇覆土

- | | | | |
|---|-----|----|---------------------------|
| 1 | 黄褐色 | 均一 | ローム(径2~5mm 風化 少量)
やや砂質 |
|---|-----|----|---------------------------|

第45号土壇覆土

- | | | | |
|---|----|----|-----------------------------|
| 1 | 黄色 | 均一 | ローム(径1~10mm 風化 多少)
ローム起源 |
|---|----|----|-----------------------------|

あった。主軸方位はN-51°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第52号土壌 (第69図)

C-3グリッドから検出した。平面形態は、方形で、規模は、長軸0.8m、短軸0.4m、深さ10cm程度であった。主軸方位はN-41°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第53号土壌 (第69図)

G-6グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸2.4m、短軸1.1m、深さ120cm程度であった。主軸方位はS-75°-Wであった。底面から、逆茂木の跡と考えられるピットが3本検出できた。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土の状況と、遺構の形態から、縄文時代の落とし穴と考えられた。

第54号土壌 (第69図)

C-4・D-4グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸1.2m、短軸0.9m、深さ60cm程度であった。主軸方位はS-55°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第55号土壌 (第69図)

D-4グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸0.7m、短軸0.5m、深さ20cm程度であった。主軸方位はN-49°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第56号土壌 (第70図)

C-4グリッドから検出した。平面形態は、方形で、規模は、長軸1.2m、短軸0.9m、深さ10cm程度であった。主軸方位はN-35°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第57号土壌 (第70図)

C-4グリッドから検出した。平面形態は、不整形円で、規模は、直径1.4m、深さ40cm程度であった。主

軸方位はN-40°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第58号土壌 (第70図)

B-4グリッドから検出した。平面形態は、方形で、規模は、長軸2.4m、短軸1.1m、深さ10cm程度であった。主軸方位はN-45°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第59号土壌 (第70図)

C-3・4グリッドから検出した。平面形態は、不整形円で、規模は、長軸1.0m、短軸0.8m、深さ20cm程度であった。主軸方位はN-39°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第60号土壌 (第70図)

C-2グリッドから検出した。平面形態は、円形で、規模は、直径1.2m、深さ40cm程度であった。主軸方位はN-48°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第61号土壌 (第70図)

B-2・C-2グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸1.3m、短軸1.1m、深さ130cm程度であった。主軸方位はN-42°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

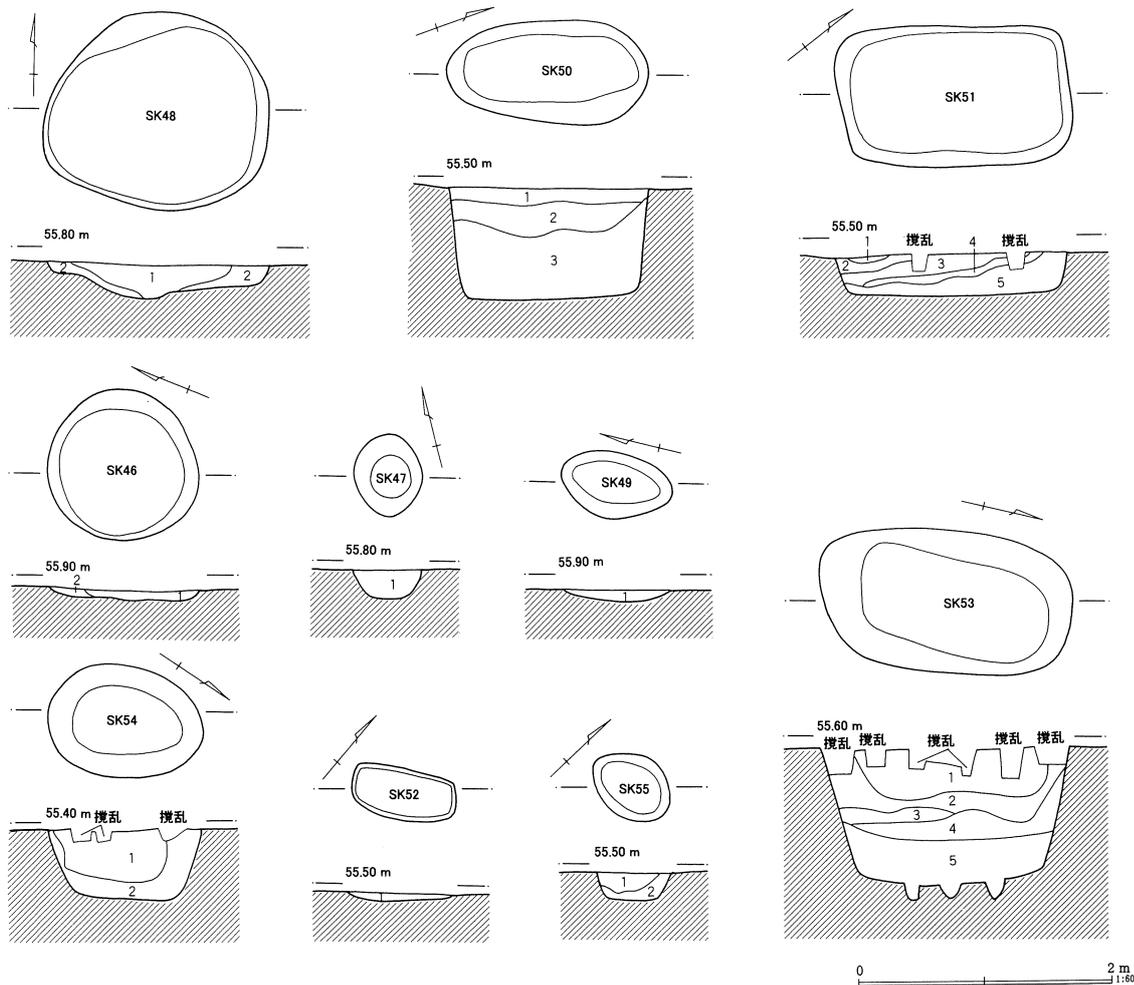
第62号土壌 (第70図)

C-2グリッドから検出した。平面形態は、隅丸方形で、規模は、長軸2.7m、短軸0.6m、深さ10cm程度であった。主軸方位はN-44°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第63号土壌 (第70図)

B-2・C-2グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸0.9m、短軸0.6m、深さ10cm程度であった。主軸方位はN-30°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第69図 第46~55号土坑



第46号土坑覆土

- 1 黒色 均一 ローム(径1~2mm 風化 多量)
- 2 黒褐色 やや不均一 ローム(径2~30mm 風化 多量)

第47号土坑覆土

- 1 黄色 均一 ローム(径1mm以下 風化 多量) ローム起源

第48号土坑覆土

- 1 黄褐色 均一 ローム(径2~5mm 風化 多量)

第49号土坑覆土

- 1 黄褐色 均一 ローム(径1~50mm 風化 多量)

第50号土坑覆土

- 1 黒色 均一 ローム(径1mm 風化 微量)
- 2 黒色 均一 ローム(径1~2mm 風化 少量)
- 3 黒褐色 やや不均一 ローム(径1~5mm 風化 多量)

第51号土坑覆土

- 1 黄褐色 均一 ローム(径2~4mm 風化 多量)
- 2 黒色 均一 ローム(径1~40mm 風化 多量)
- 3 黄褐色 均一 1層よりローム風化 多い

- 4 黒色 均一 2層よりローム少ない
- 5 黒色 均一 2層よりロームやや少ない

第52号土坑覆土

- 1 黒色 均一 ローム(径2~3mm 風化 少量)

第53号土坑覆土

- 1 黒褐色 やや均一 ローム(径1~5mm 風化 多量)
- 2 黄褐色 均一 ローム(径1~30mm 風化 多量)
- 3 黒褐色 均一 1層より均一 ローム多い
- 4 黄褐色 やや不均一 3層よりローム多 未風化
- 5 黄褐色 やや不均一 3層より更にローム多い 更に未風化

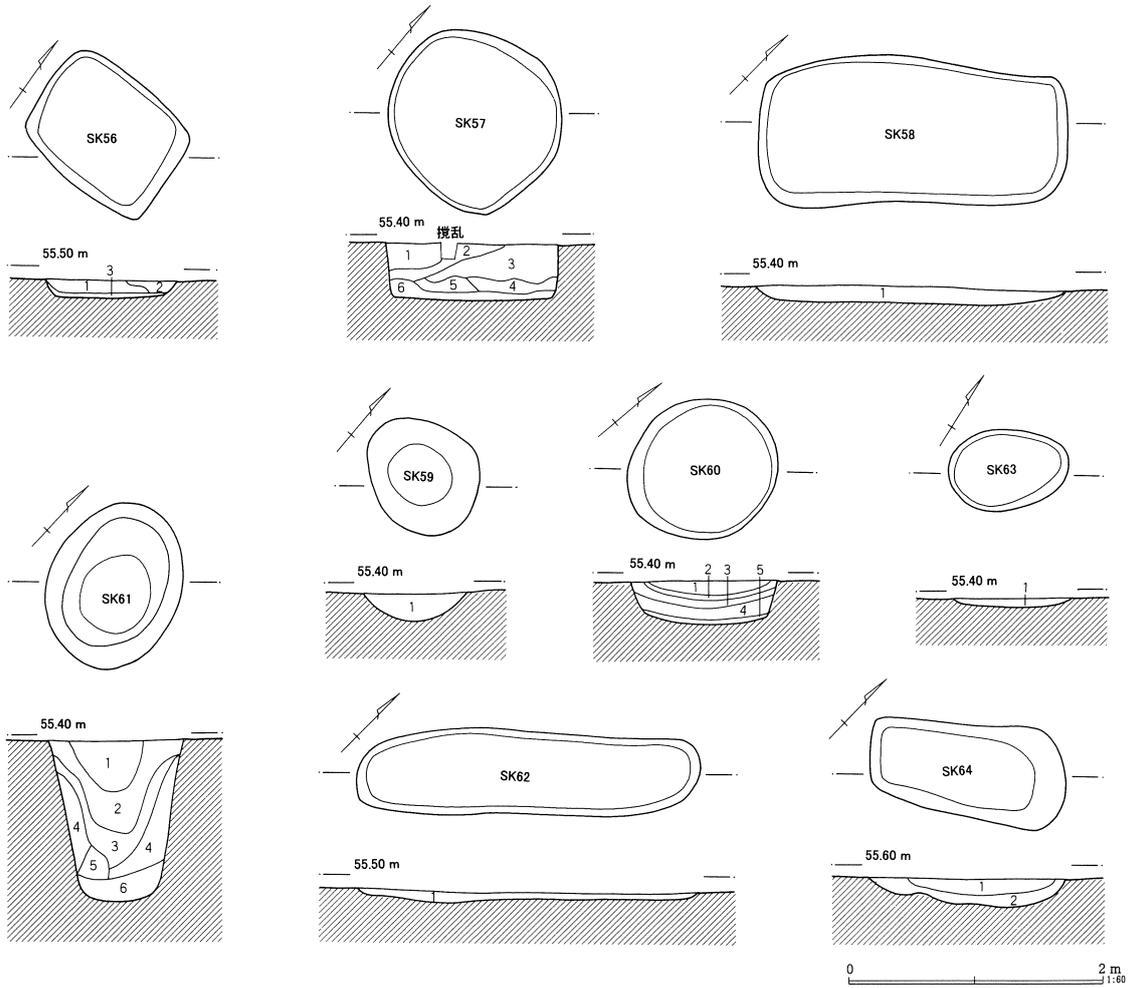
第54号土坑覆土

- 1 黒褐色 均一 ローム(径1~2mm 風化 少量)
炭化物(径1~2mm 風化 微量)
- 2 黄褐色 均一 ローム(径1~2mm 風化 多量)

第55号土坑覆土

- 1 灰黄色 不均一 ローム(径2~30mm 風化 多量) ローム起源
- 2 灰黄色 やや不均一 1層よりローム多い

第70図 第56～64号土壌



第56号土壌覆土

- | | | | |
|---|----|------|----------------------|
| 1 | 黒色 | 均一 | ローム(径1~3mm 風化 少量) |
| 2 | 黒色 | やや均一 | ローム(径1~20mm 風化 多量) |
| 3 | 黒色 | 均一 | ローム(径1~10mm やや風化 少量) |

第57号土壌覆土

- | | | | |
|---|----|-------|----------------------|
| 1 | 黒色 | 均一 | ローム(径2~40mm やや風化 多量) |
| 2 | 黒色 | やや不均一 | ローム(径2~20mm やや風化 多量) |
| 3 | 黒色 | やや均一 | 2層よりローム多い |
| 4 | 黒色 | 均一 | 2層よりローム風化 ローム少ない |
| 5 | 黒色 | やや均一 | 2層よりロームわずかに多い やや風化 |
| 6 | 黒色 | 均一 | 2層よりローム極めて少ない |

第58号土壌覆土

- | | | | |
|---|----|------|--------------------|
| 1 | 黒色 | やや均一 | ローム(径2~30mm 風化 多量) |
|---|----|------|--------------------|

第59号土壌覆土

- | | | | |
|---|-----|----|-------------------|
| 1 | 黄褐色 | 均一 | ローム(径1~2mm 風化 多量) |
|---|-----|----|-------------------|

第60号土壌覆土

- | | | | |
|---|-----|------|--------------------|
| 1 | 黒褐色 | やや均一 | ローム(径2~20mm 風化 多量) |
| 2 | 黒色 | 均一 | ローム(径2~3mm 風化 少量) |

- | | | | |
|---|-----|-------|----------------------|
| 3 | 黄褐色 | やや不均一 | ローム(径2~30mm やや風化 多量) |
| 4 | 黒褐色 | やや均一 | 1層よりロームやや少ない やや風化進行 |
| 5 | 黒色 | 均一 | 2層よりローム少ない |

第61号土壌覆土

- | | | | |
|---|-----|-------|---------------------------------------|
| 1 | 黒褐色 | 均一 | ローム(径1~2mm 風化 少量)
焼土(径2~3mm 風化 少量) |
| 2 | 黒褐色 | やや不均一 | 1層よりローム多い |
| 3 | 黄褐色 | やや不均一 | ローム(径5~30mm 風化 多量) |
| 4 | 黄褐色 | やや均一 | 3層よりローム多く未風化 |
| 5 | 黒褐色 | やや不均一 | 2層よりローム多く未風化 |
| 6 | 黒褐色 | やや均一 | ローム(径2~5mm 風化 多量) |

第62号土壌覆土

- | | | | |
|---|-----|------|----------------------|
| 1 | 黒褐色 | やや均一 | ローム(径2~10mm やや風化 多量) |
|---|-----|------|----------------------|

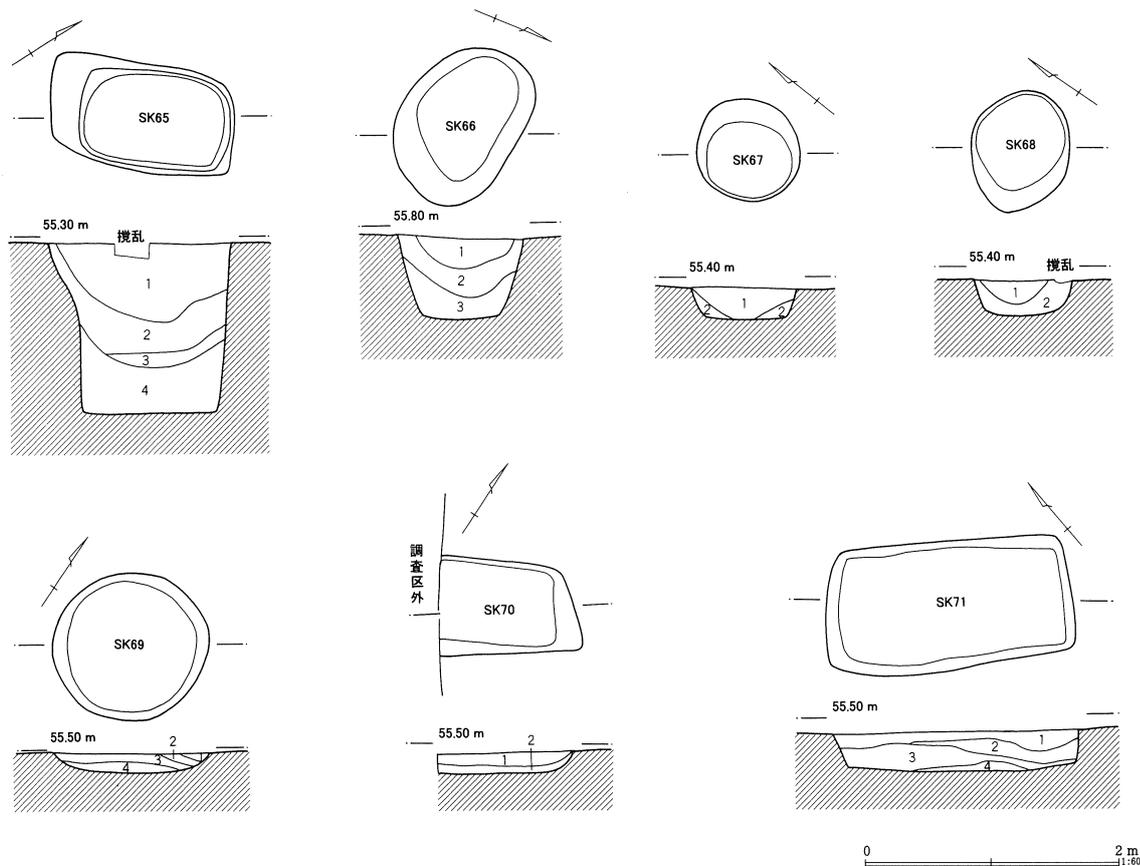
第63号土壌覆土

- | | | | |
|---|-----|-----|-------------------|
| 1 | 黒褐色 | 不均一 | ローム(径2~3mm 風化 多量) |
|---|-----|-----|-------------------|

第64号土壌覆土

- | | | | |
|---|----|------|-------------------|
| 1 | 黒色 | やや均一 | ローム(径2~5mm 風化 多量) |
| 2 | 黒色 | やや均一 | 1層よりローム大きく未風化 |

第71図 第65～71号土壇



第65号土壇覆土

- | | | | |
|---|-----|----|-----------------------|
| 1 | 黒褐色 | 均一 | ローム(径2~30mm やや未風化 多量) |
| 2 | 黒色 | 均一 | ローム(径2~10mm やや未風化 多少) |
| 3 | 黒色 | 均一 | ローム(径2~20mm やや風化 少量) |
| 4 | 黒色 | 均一 | ローム(径2~40mm やや風化 多少) |

第66号土壇覆土

- | | | | |
|---|-----|----|--|
| 1 | 黒褐色 | 均一 | ローム(径2~3mm 風化 少量)
炭化物(径2~3mm 風化 微量)
焼土(径1~2mm 風化 少量) |
| 2 | 黒褐色 | 均一 | 1層よりローム・炭化物・焼土少ない |
| 3 | 黒褐色 | 均一 | 1層よりローム多い |

第67号土壇覆土

- | | | | |
|---|-----|----|-------------------------------|
| 1 | 黄褐色 | 均一 | ローム(径2~30mm 風化 多量)
地山ローム起源 |
| 2 | 黄褐色 | 均一 | 1層よりローム風化弱い |

第68号土壇覆土

- | | | | |
|---|-----|----|--------------------|
| 1 | 黄褐色 | 均一 | ローム(径2~30mm 風化 多量) |
|---|-----|----|--------------------|

- | | | | |
|---|-----|----|-------------|
| 2 | 黄褐色 | 均一 | 1層よりローム風化弱い |
|---|-----|----|-------------|

第69号土壇覆土

- | | | | |
|---|-----|-------|-------------------------------------|
| 1 | 褐色 | 不均一 | ローム(径2~30mm 風化 多量) |
| 2 | 黒色 | 均一 | ローム(径2~10mm 風化 少量) |
| 3 | 黒褐色 | やや不均一 | ローム(径2~5mm 風化 多量) |
| 4 | 黒褐色 | 均一 | ローム(径2~5mm 風化 多量)
3層よりローム少ない 風化弱 |

第70号土壇覆土

- | | | | |
|---|----|----|--------------------------------------|
| 1 | 黒色 | 均一 | ローム(径2~5mm 風化 多少) |
| 2 | 黒色 | 均一 | ローム(径2~5mm 風化 多少)
1層よりロームやや多く風化弱い |

第71号土壇覆土

- | | | | |
|---|-----|------|--|
| 1 | 黒褐色 | 均一 | ローム(径2~20mm 風化 多少) |
| 2 | 黒色 | 均一 | ローム(径2~20mm 風化 多少) |
| 3 | 黒褐色 | やや均一 | ローム(径2~40mm やや未風化 多量) |
| 4 | 黒褐色 | やや均一 | ローム(径2~40mm やや未風化 多量)
3層よりロームやや多く風化 |

第64号土壇 (第70図)

D-1・2グリッドから検出した。平面形態は、方形で、規模は、長軸1.6m、短軸0.7m、深さ20cm程度であった。主軸方位はN-43°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第65号土壇 (第71図)

B-4グリッドから検出した。平面形態は、方形で、規模は、長軸1.5m、短軸0.9m、深さ140cm程度であった。主軸方位はN-59°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第66号土壌 (第71図)

E-2グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸1.3m、短軸0.9m、深さ70cm程度であった。主軸方位はS-68°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第67号土壌 (第71図)

B-3グリッドから検出した。平面形態は、円形で、規模は、直径0.8m、深さ30cm程度であった。主軸方位はN-53°-Eであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第68号土壌 (第71図)

C-3グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸1.0m、短軸0.8m、深さ30cm程度であった。主軸方位はN-56°-Eであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第69号土壌 (第71図)

D-5グリッドから検出した。平面形態は、円形で、規模は、直径1.2m、深さ10cm程度であった。主軸方位はN-33°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第70号土壌 (第71図)

D-1グリッドから検出した。平面形態は、方形で、規模は、長軸不明、短軸0.7m、深さ20cm程度であった。主軸方位はN-37°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第71号土壌 (第71図)

D-4グリッドから検出した。平面形態は、方形で、規模は、長軸2.0m、短軸1.0m、深さ30cm程度であった。主軸方位はN-39°-Eであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第72号土壌 (第72図)

B-3・C-3グリッドから検出した。平面形態は、方形で、規模は、長軸1.3m、短軸0.6m、深さ60cm程度

であった。主軸方位はN-37°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第73号土壌 (第72図)

C-3・4グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸1.0m、短軸0.6m、深さ20cm程度であった。主軸方位はN-40°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第74号土壌 (第72図)

D-3グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸1.5m、短軸0.9m、深さ20cm程度であった。主軸方位はN-35°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第75号土壌 (第72図)

E-6グリッドから検出した。平面形態は、円形で、規模は、直径0.8m、深さ20cm程度であった。主軸方位はN-73°-Eであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

第76号土壌 (第72図)

D-4グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸0.7m、短軸0.5m、深さ30cm程度であった。主軸方位はN-51°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土は、自然堆積の状況を示していた。

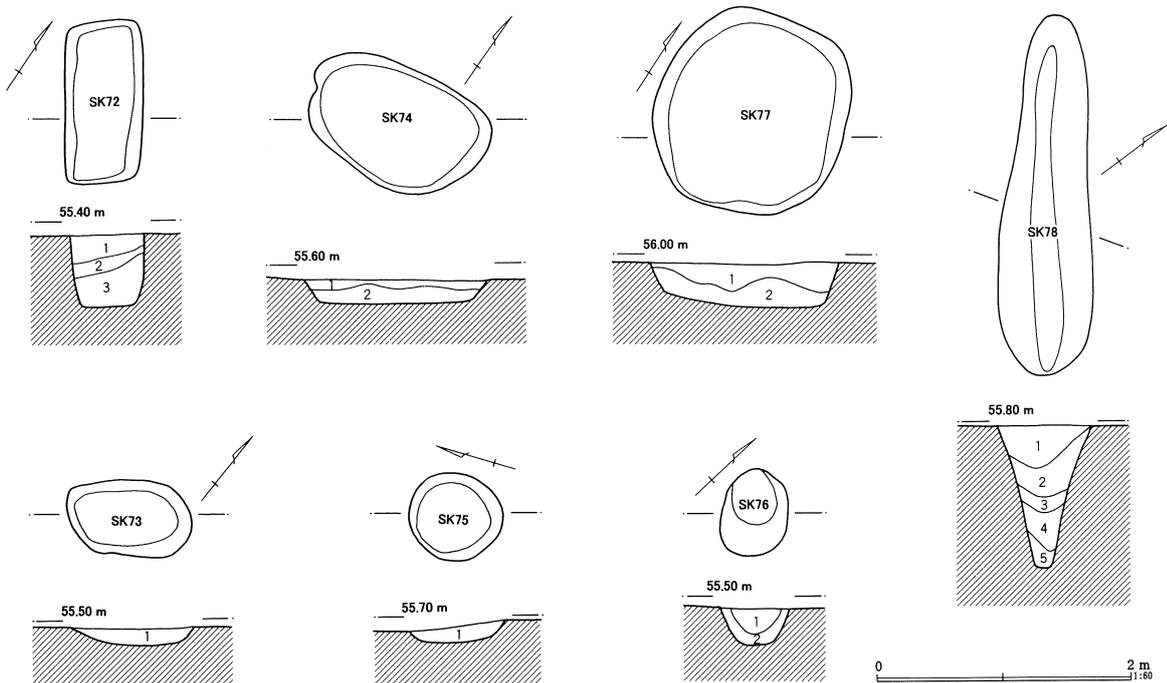
第77号土壌 (第72図)

F-3・4、G-3・4グリッドから検出した。平面形態は、円形で、規模は、直径1.6m、深さ30cm程度であった。主軸方位はN-33°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。

第78号土壌 (第72図)

G-4グリッドから検出した。平面形態は、楕円形で、規模は、長軸2.8m、短軸0.7m、深さ100cm程度であった。主軸方位はN-33°-Wであった。実測可能な遺物は、検出できなかった。覆土の状況と、遺構の形態から、縄文時代の落とし穴と考えられた。

第72図 第72～78号土坑



第72号土坑覆土

- 1 黒灰色 やや不均一 ローム(径2～50mm 風化 多量)
- 2 黄色 均一 ローム(径2～50mm 風化 多量)
- 3 黒灰色 やや均一 ローム(径2～30mm 風化 少量)

第73号土坑覆土

- 1 黒褐色 均一 ローム(径2～20mm 風化 多量)

第74号土坑覆土

- 1 黄褐色 やや不均一 ローム(径2～40mm 風化 多量)
- 2 黄褐色 やや均一 ローム(径2～40mm やや風化 多少)

第75号土坑覆土

- 1 黄褐色 やや均一 ローム(径5～50mm 風化 多量)

第76号土坑覆土

- 1 黄褐色 均一 ローム(径1～3mm 風化 多少)
- 2 黄褐色 やや不均一 ローム(10～50mm 未風化 多少)

第77号土坑覆土

- 1 黄褐色 均一 ローム(径2～3mm 風化 多量)
- 2 黄褐色 均一 1層よりローム大きく風化弱

第78号土坑覆土

- 1 黒褐色 やや均一 ローム(径2～10mm 風化 多少)
焼土(径2～3mm 風化 少量)
- 2 黄色 均一 ローム(径2～50mm 未風化 多量)
- 3 黄褐色 やや均一 2層よりローム少ない
- 4 黄褐色 均一 2層よりロームやや少ない
- 5 黒褐色 やや均一 1層よりロームやや風化弱

(5) 溝跡

第1号溝跡 (第73図)

第1号溝跡は、K-7・8、L-7グリッドから検出した。

西側は調査区外へ伸びていた。

遺構の規模は、長さが調査区内で15.9m、幅が1.7m、深さが0.7mであった。

畑作による削平の影響をうけ、覆土はやや浅かったが、残存部分は、自然堆積の状況を示しており、顕著な砂粒などは、検出できなかった。

実測可能な遺物は検出できなかった。

第2号溝跡 (第73図)

第2号溝跡は、K-7・8グリッドから検出した。

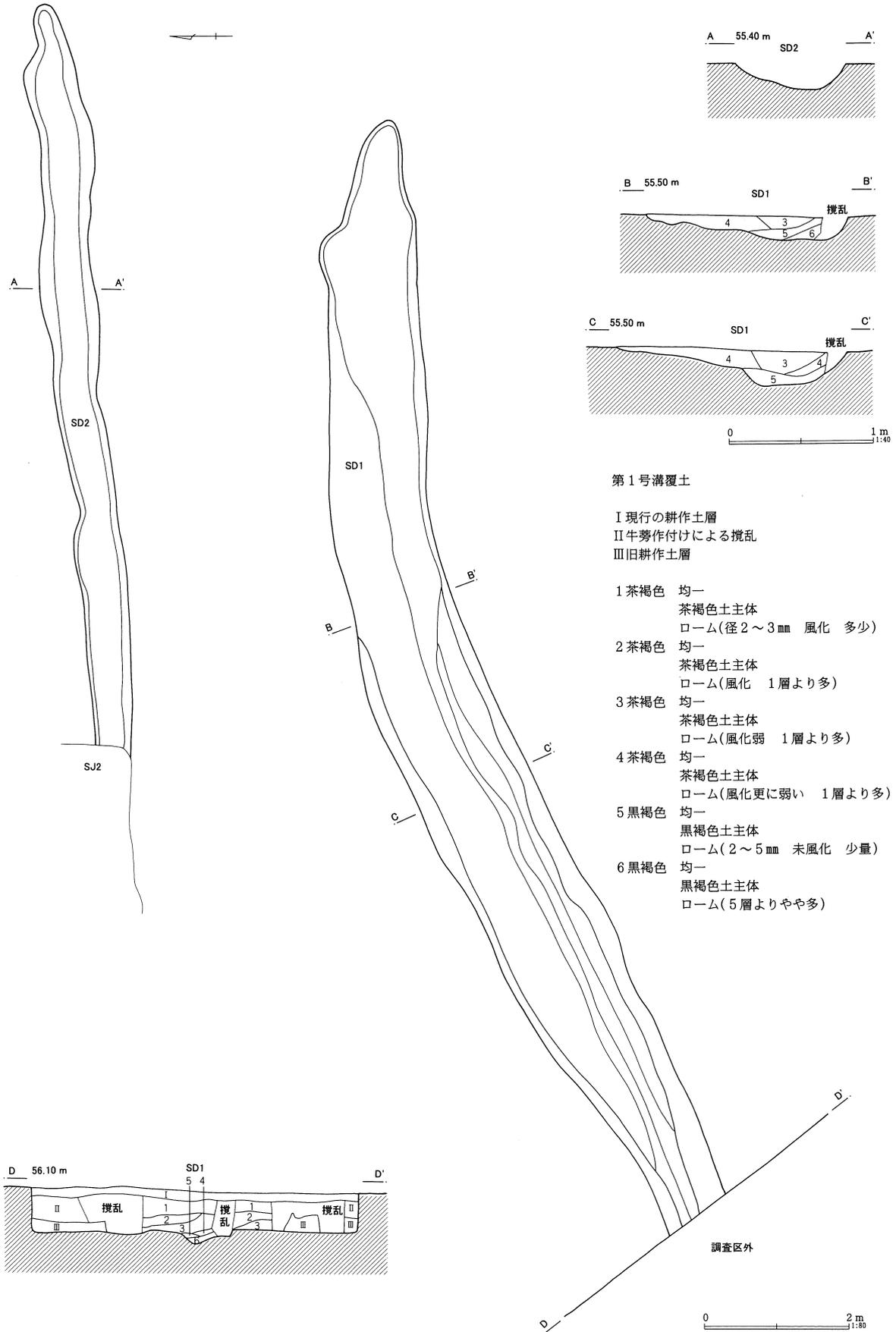
西側は、SJ-2と重複していたために検出できなかった。東側は、調査区の境界付近で、徐々に浅くなっていった。

遺構の規模は、長さが調査区内で10.3m、幅が0.4m、深さが0.7mであった。

畑作による削平の影響をうけ、覆土は浅かったが、残存部分は、自然堆積の状況を示しており、顕著な砂粒などは、検出できなかった。

実測可能な遺物は検出できなかった。

第73図 第1・2号溝跡



(6) 遺構外遺物 (第74図)

少量ではあるが、グリッドで遺物を取り上げた。ほとんどは土器破片であり、土器以外には、打製石斧が1点出土していた。土器破片の時期は、大半が縄文時代中期後半だった。それらのもののうち、図示することが可能な遺物は、12点であった。

1～12は、加曾利E式後半の土器であった。

1は口縁部破片であり、渦巻きを形作る太い隆帯が口縁部を横走していた。キャリパー形土器の口縁部文様帯を構成するものと思われた。

2は、浅い沈線によって、口縁部文様帯を構成していた。

3は、キャリパー形土器の、胴部破片になるものと思われた。縦方向に施文した単節斜縄文を地文として、2本の平行沈線による磨消無文帯が懸垂していた。

4は内彎する口縁部破片であった。浅鉢になるものと思われた。図の拓本ではわかりにくいですが、口縁部無文帯の下には縦方向に細い櫛状文が施文されていた。

5は胴部破片で、縦方向に緩やかな波状の櫛状文が描かれていた。内面は黒色を呈し、調整が緻密であり、滑らかに研磨されていた。

6は胴部に微隆起線による懸垂文が付いており、右

側には同じく微隆起線によって、曲線的なモチーフが描かれていると考えられた。

7～11は、沈線によって、磨消縄文を区画する胴部破片であった。8～10は、2本1組の沈線が曲線を描き、10は沈線間が隆帯状に盛り上がっていた。

11は無文地に縄文を充填した区画文が、曲線的なモチーフを描いていた。区画文のモチーフはJ字文か、または渦巻き文になるものと思われた。中期終末から後期初頭の土器である。

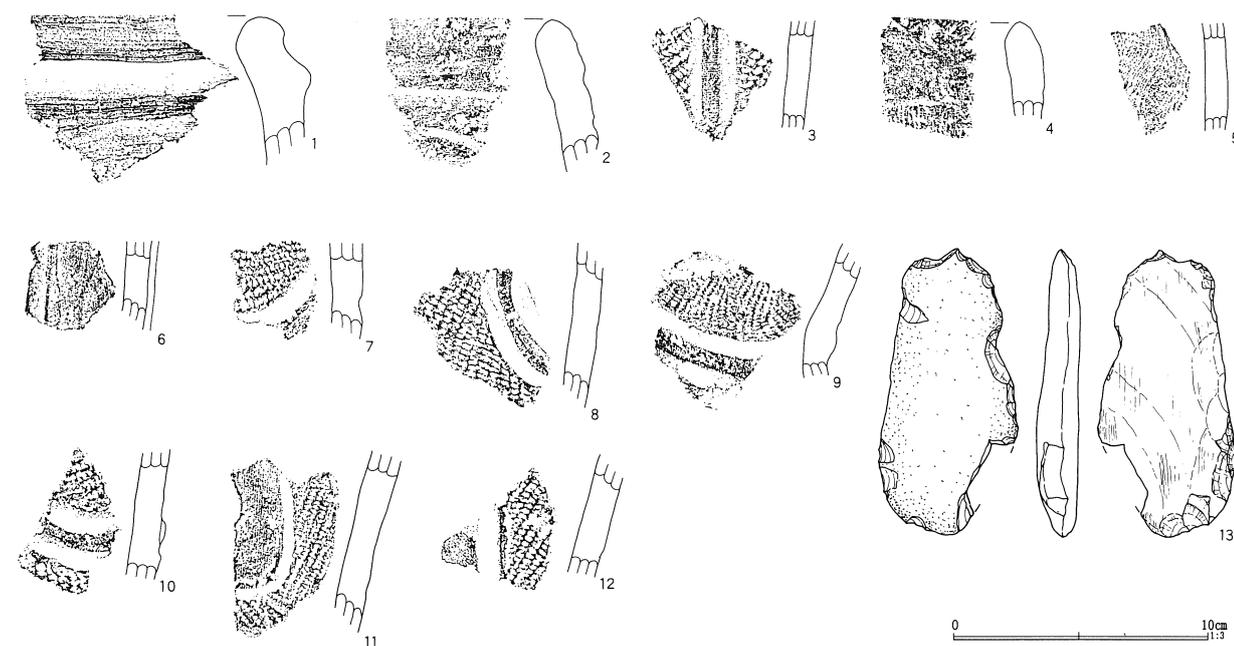
12は幅広の無文帯が懸垂していた。縄文は縦方向に単節斜縄文が施文されていた。

土器の色調は、1が暗褐色、2～5が明黄褐色、6が赤褐色、7が黒褐色、8～12が明赤褐色を呈していた。いずれも胎土には砂粒を含み、1・6は片岩を含んでいた。焼成はいずれも良好であった。

13は打製石斧であった。一部刃部が欠損していた。片面には自然面が多く残り、基部や側縁部を部分的に剥離していた。もう片面も同様に剥離調整は部分的であり、剥離後に軽く研磨されていた。

長さ11.3cm、幅5.4cm、厚さ1.7cm、重さ117.2gであった。

石質はフォルンフェルスであった。



第74図 遺構外・表土出土遺物

(7) 調査区周辺採集遺物 (第75図)

第75図1～5は、粕谷仁一郎氏によって、今回の調査区周辺の畑の中で、長年にわたって耕作中に採集された石器の一部である。

1～3までは縄文時代の石鏃であった。

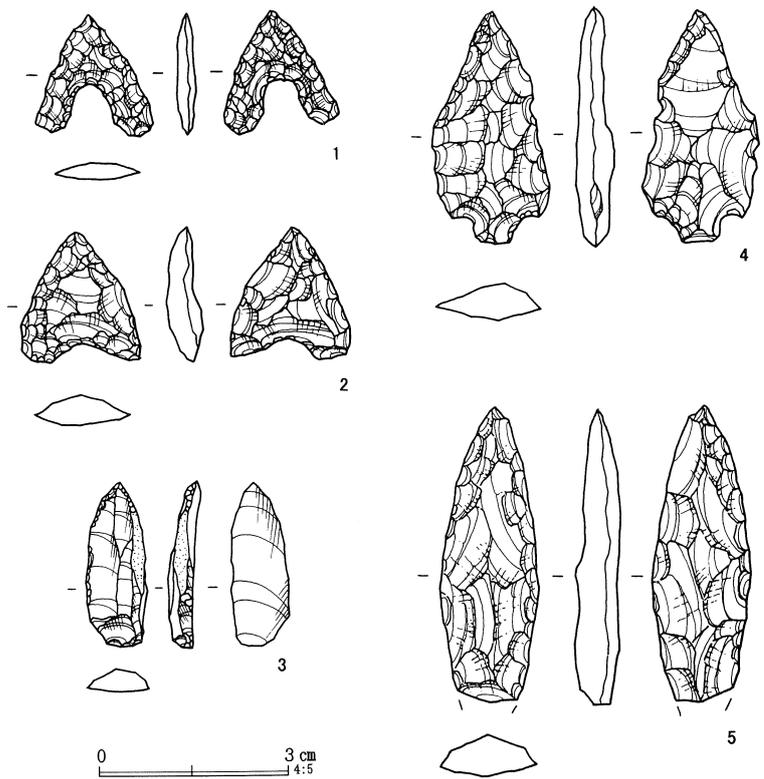
1はいわゆる鋤形鏃で、長さ2.0cm、幅1.9cm、厚さ0.3cm、重さ0.63gであった。周辺部位の調整加工は入念になされており、袂部は深く身部に及んでいた。これによって長い脚部が作出されていた。石材は漆黒の良質な黒曜石を用いていた。縄文時代早期に特徴的な石鏃型式であった。

2は抉りの浅い、略三角形を呈する石鏃で、珪岩製であった。長さ2.1cm、幅1.9cm、厚さ0.6cm、重さ1.78g。側面形状を見ると、身がやや反っていることが伺われ、幅広の縦長剥片を用い、その打面側に石鏃基部を設定していることが判った。時期は不明であった。

3は、旧石器時代のナイフ形石器であった。長さ2.6cm、幅1.0cm、厚さ0.4cm、重さ0.93gで、基部と先端部を中心として調整がされていた。素材は黒曜石製の縦長剥片であり、側面部に部分的に自然面を残存させていることから、剥片剥離の比較的初期に剥離された素材を用いていると考えられた。本例は通常のナイフ形石器のように、調整加工によって刃部に対する背縁が形成されておらず、左右の側辺に素材のそれを残していた。これは形状変革の程度が少ないことを意味しているが、その反面、先端部は左右の側辺からの調整加工によって尖鋭な形態が作出されていた。こうした特徴はナイフ形石器の終末期段階に特徴的なものと言える。

4は茎(なかご)を持つ有茎の石鏃であった。石材は珪岩。長さ3.8cm、幅1.8cm、厚さ0.7cm、重さ3.17gであり、有茎石鏃のなかでも比較的大形の部類に属していた。表面は入念な調整加工が施されているが、

第75図 調査区周辺採集遺物



対する裏面の調整は粗い印象を与えていた。また側辺から基部へと至る部分の調整加工も粗雑であった。製作途上の未製品のようにも見えるが、裏面の先端部右側辺には衝撃痕と考えられる剥離痕跡が観察されることから欠損品であることは間違いない。帰属時期の判断は難しいが、後期の可能性がたかいと考えられた。

5は安山岩を石材として用いた石槍であった。長さ4.7cm、幅1.6cm、厚さ0.8cm、重さ4.89gで、基部を欠損していたが、形態は柳葉形を呈するものと言えよう。表裏面は側辺側からの加工によって入念に調整され、左右対称の形状が作出されていた。断面は凸レンズ状であった。石材や調整加工面等の観察から判断すると、本例は縄文草創期にまで降るものではなく、旧石器時代終末の所産との位置づけが妥当と言えよう。4のナイフ形石器とはほぼ同じ段階の石器として捉えておきたい。

以上の資料は、粕谷仁一郎氏のご厚意により、県立埋蔵文化財センターに寄贈されたものである。

V 結 語

該期の須恵器坏を詳細に観察すると、底部断面には粘土を二枚張り合わせたような痕跡が、底部外面器肉剥離面には回転糸切り痕が、体部内外面には粘土の境界と考えられる痕跡がしばしば認められる。

渡辺一は、『鳩山窯跡群Ⅰ』『同Ⅱ』の中で、須恵器坏の外面に認められる「巻き上げ状痕」と、内面に現れる「粘土不連続痕」に注目して、それぞれ「引き上げ状痕」と「不連続被覆痕」であると実体を想定し、該期の坏が粘土紐の巻き上げによってではなく、「粘土円柱に粘土円板を重ね、底部を複合にしてさらに体部の素材並びに素形」とすると考え、「底部複合円板造り」を提唱した。

該期須恵器坏が粘土円柱上で作られている事については、疑問の余地はないが、粘土円柱上に設置する粘土の形状と、設置の仕方、及び、その後の成形の仕方については、未だ定説となるには至っていない。

以下では、粘土円柱上に設置する粘土の形状と、設置の仕方について考察する。

該期の一般的な須恵器坏の製作は、轆轤の上に粘土円柱を据えて、この上で行われていると考えられている。轆轤上に粘土塊を直置きしたのでは、体部から底部にかけての成形に困難を来すので、製作途上の坏は、轆轤の面に接して設置せずに、相対的に離して設置する必要がある。

この粘土円柱上で行われる須恵器坏の製作過程について、坏の製作に使用する粘土の起源に関して、二つの方法が考えられる。一つは、粘土円柱を材料として、粘土円柱を消費しながら作り続ける方法であり、もう一つは、粘土円柱上に粘土を付加して、付加した粘土を主たる材料として作り続ける方法である。

前者の一定の高さの粘土円柱を材料として、粘土円柱を消費しながら製作する方法では、一個体の坏を形成する材料が同一の塊からなっているので、粘土の接合に伴う界面が生じず、製作時や使用時の割れに強い

事が予想される。反面、成形過程で粘土円柱を消費して行くので、轆轤が一定の高さに固定されているならば、粘土円柱が消費されるに従って坏を成形する位置が低くなり、一個体毎に製作時の高さが異なってしまう。また、このような製作手法からは、冒頭に述べたような痕跡が出現する機会を見出し得ない。

後者の粘土円柱上に一個体分ずつ粘土塊を付加して、付加した粘土を主たる材料として坏を作り続ける方法では、坏の成形過程で粘土円柱を消費しないので、坏を成形する高さが同一であり、作業効率はやいと考えられる。しかしその反面、一個体の坏を形成するために起源の異なった二つの粘土素材を用いるために、粘土の界面が坏の器肉の中に持ち込まれた時には、この粘土の界面から器壁が剥落する可能性が出てくる。粘土円柱と粘土塊の界面で坏を切り離せば問題ないが、粘土の界面と坏の切り離し位置がずれると、様々な状況が生じてしまう。

粘土円柱上で成形・調整を終えた坏を粘土円柱から切り離す際に、粘土円柱と粘土塊の界面より上で切り離した場合、坏の器肉の中には、粘土の張り合わせ痕跡は一切現れない。しかし、粘土円柱の側には粘土の界面が残存しており、次の個体を製作する時に、粘土の界面が坏に取り込まれる可能性が出てくる。

粘土円柱と粘土塊の界面より下で切り離した場合、坏の中に粘土の界面が取り込まれる事となる。この場合、二つの粘土素材が接している界面がより上方に位置していれば、言い換えるならば、完成品の坏に必要な粘土量に対して、粘土円柱上に設置した粘土塊の量が著しく少なかった場合、粘土の界面は、坏の体部に取り込まれる事となる。体部の成形時には比較的強い押圧がなされる為に、粘土の境界が不鮮明となりつつも、体部の器肉内に粘土界面の痕跡が残る事となる。

粘土の界面がより下方に位置していれば、言い換えるならば、完成品の坏に必要な粘土量に対して、粘土

円柱上に設置した粘土塊の量がわずかに少なかった場合、粘土の界面は、坏の底部に取り込まれる事となる。底部の成形ではあまり強い押圧を上方から加えないために、粘土の界面が残存しやすく、場合によっては、前作の切り離し時に残された粘土円柱上面の糸切り痕が、痕跡的に遺存する可能性も考えられる。

つまり、完成品に必要な粘土量に対する、粘土円柱上に設置される粘土塊の大きさによって、切り離し位置に対する粘土界面の位置が変化する事となる。これによって、一個体毎に微妙に界面と切り離し位置がずれて、様々な痕跡のものが生産されると考えられる。

消費地である住居跡の資料のみならず、生産地である窯跡の資料においてさえも、様々な痕跡が系統的に見い出されずに、ある場合は糸切り痕であったり、ある場合には接合痕であったりし、更に接合痕も底部に見られたり、体部に見られたりしていることは、粘土円柱上に設置した粘土塊から須恵器坏を作る製作過程の中で、粘土の界面と、糸切りの位置とが必ずしも一致せずに、ずれが生じている事が原因と考えられる。

「底部複合円板造り」は、一個体の須恵器坏を構成する素材の粘土が、粘土円板と粘土円柱の二種類の粘土に必ず由来することを必然的であると見なす考え方であるが、粘土円板と粘土円柱を複合させて一個体の坏を作り出す必要性が十分に説明されているとはいえない。また、一個体の坏を製作する際に二種類の粘土を用いる事に必然性があるならば、製品の断面に見られるその痕跡の出現頻度の低さが説明できない。

遺跡出土の該期須恵器坏の断面を観察した時、これらの痕跡が顕著なものから全く認められないものまで、様々である事を考えれば、むしろこれらの痕跡が一定の製作手法を取ったときに偶発的に出現すると考えることの方が妥当であると思われる。

また、技術的な問題としては、「底部複合円板造り」

が、粘土円板の形状について、どの程度の扁平率を想定しているか明らかではないが、一定の面積を持った粘土に、新たに粘土を付け加えることは、粘土の境界に空気が入り込み、剥落の原因となる事が明らかであり、土器の製作過程で、このような方法をあえて採用するだけの積極的な理由が見あたらない。

これをうまく説明するためには、粘土円柱上に設置される材料が、粘土円板ではなく、粘土塊であると考えの方が良いであろう。

粘土紐を巻き上げて成形している杯も確実に存在しているが、粘土円柱上に粘土を付加する場合には、製作物の器形とは無関係に塊状の粘土を乗せて、押圧を加えながら二種類の粘土を一体化させるのがよりよい方法であり、付加する粘土の形状は、粘土の可塑性が十分であれば成品の形態に近い必要性はないと思われる。

このように考えるならば、該期の須恵器坏の製作過程では、粘土円柱上に概ね一個体分に相当する粘土塊を設置し、粘土円柱と一体化させつつ一個体の坏を成形し、切り離したと見ることができる。その際に粘土塊を付加する意味は、あらかじめ一定の形を作り、成形過程を有利に進めるためではなく、単に、粘土円柱が大きく食われることを防ぐためであると考えられる。

この結果として、粘土塊が小さく、粘土円柱が大きく消費された場合には、粘土塊と粘土円柱の界面が坏の体部器肉内に生じる事となり、わずかに消費された場合には、底部器肉内に糸切り痕跡が残り、全く消費されなかった場合には、坏の断面には粘土の接合痕跡が全く見られない事となる。

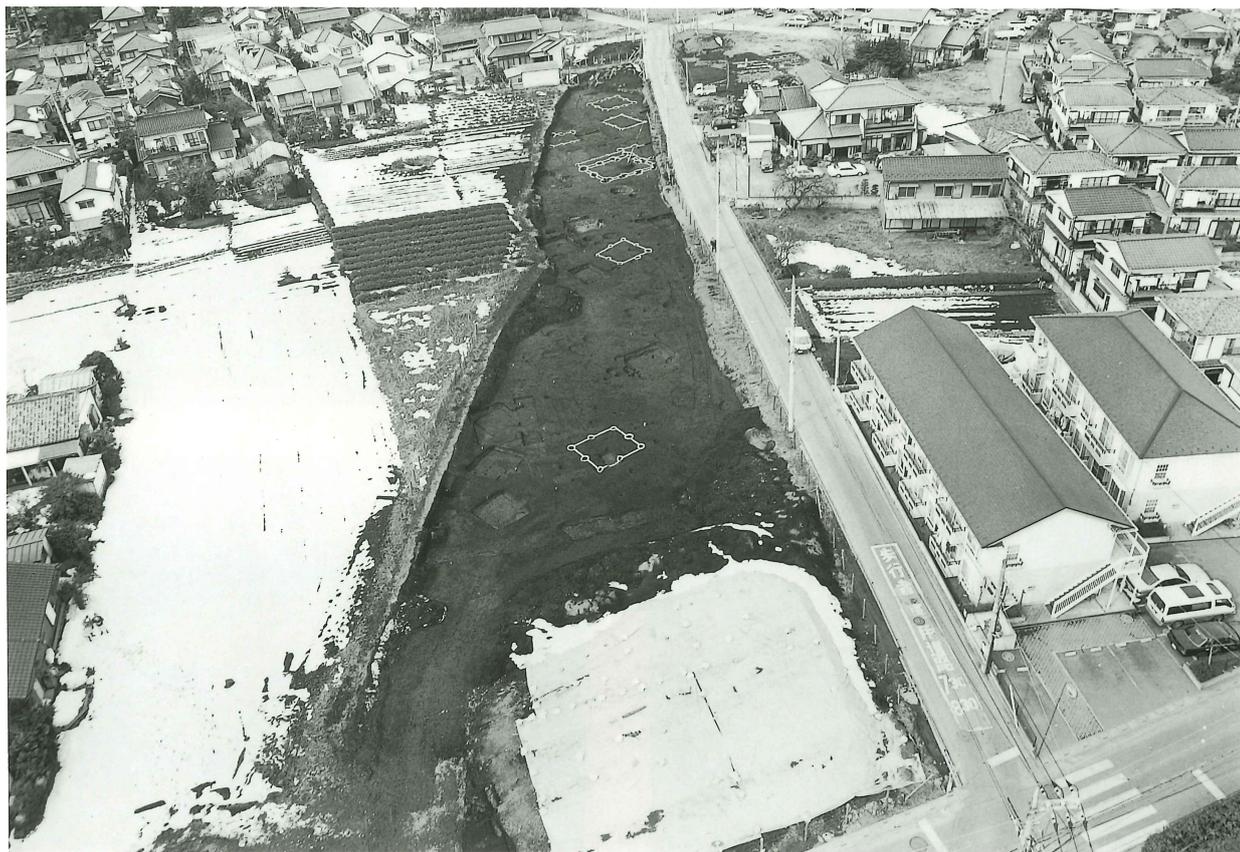
以上の事は、自己の意図とは無関係に、一定量の生産を迫られた生産者による、高度な熟練を背景とした中での状況に適応した製作に起因すると考えられる。

引用参考文献

渡辺 一 『鳩山窯跡群Ⅰ』 1988 鳩山窯跡群異性調査会・鳩山町教育委員会

渡辺 一 『鳩山窯跡群Ⅱ』 1990 鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会

写真図版



戸張遺跡一区全景（南東より）



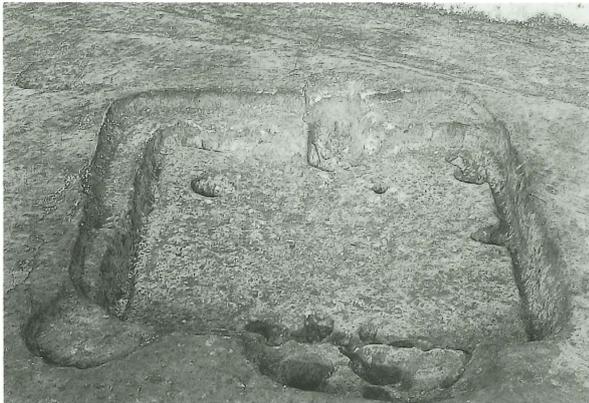
戸張遺跡一・二区全景（北西より）



第1号住居跡



第1号住居跡出土遺物



第2号住居跡



第2号住居跡遺物出土状況



第2号住居跡遺物出土状況



第2号住居跡出土遺物



第3号住居跡



第4号住居跡



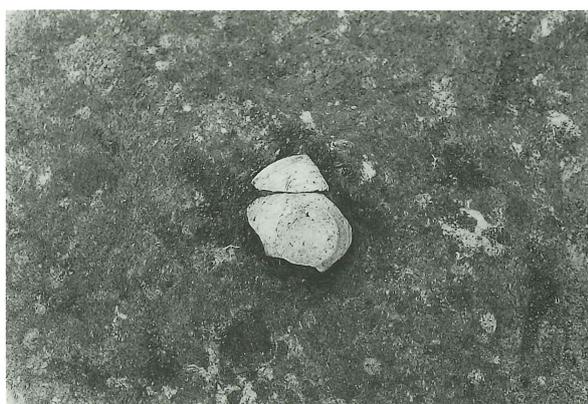
第4号住居跡遺物出土状況



第4号住居跡出土遺物



第5号住居跡



第5号住居跡出土遺物



第6号住居跡



第6号住居跡出土遺物



第7号住居跡



第7号住居跡出土遺物



第8号住居跡



第8号住居跡出土遺物



第9号住居跡



第10号住居跡



第10号住居跡出土遺物



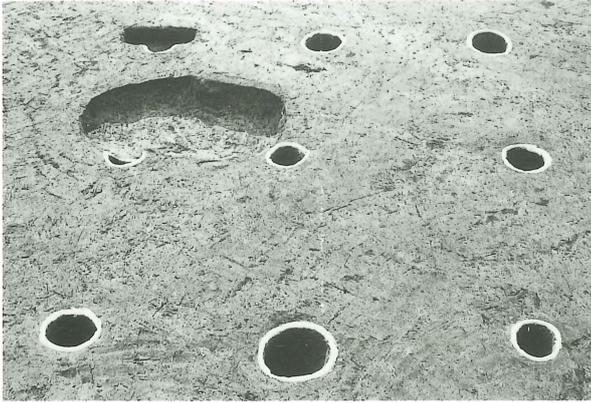
第11号住居跡



第12号住居跡



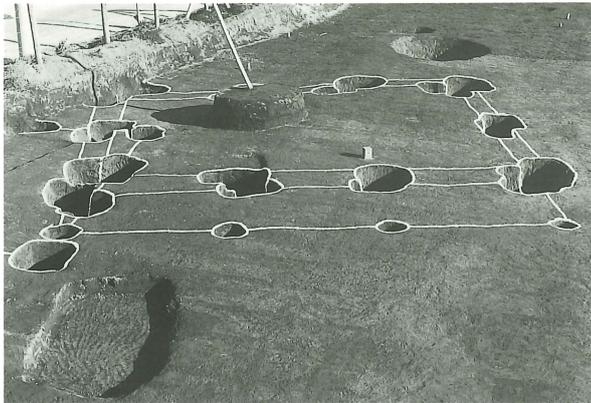
第13号住居跡



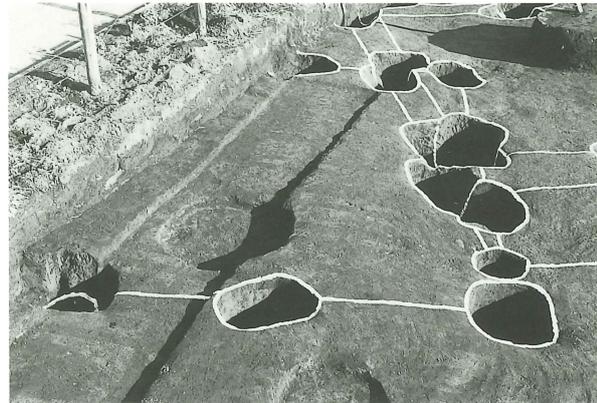
第1号掘立柱建物跡



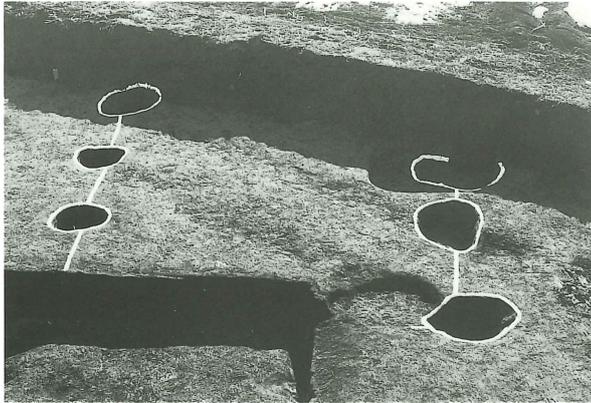
第2号掘立柱建物跡



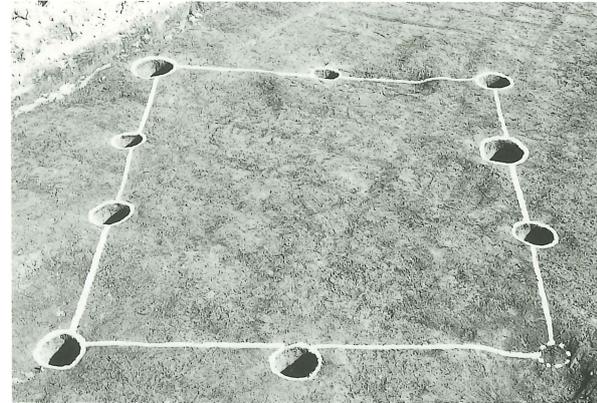
第3・4号掘立柱建物跡



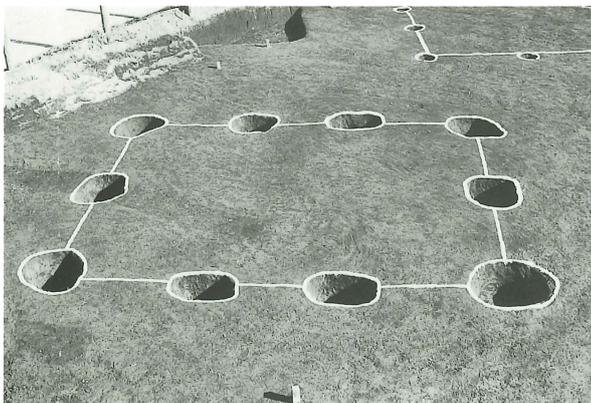
第5号掘立柱建物跡



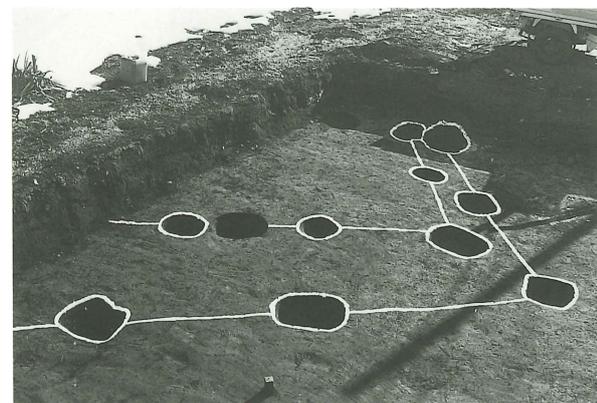
第6号掘立柱建物跡



第7号掘立柱建物跡



第8号掘立柱建物跡



第9・10号掘立柱建物跡



第4号土壙遺物出土状況



第5号土壙



第1号井戸跡



第1号井戸跡土層断面



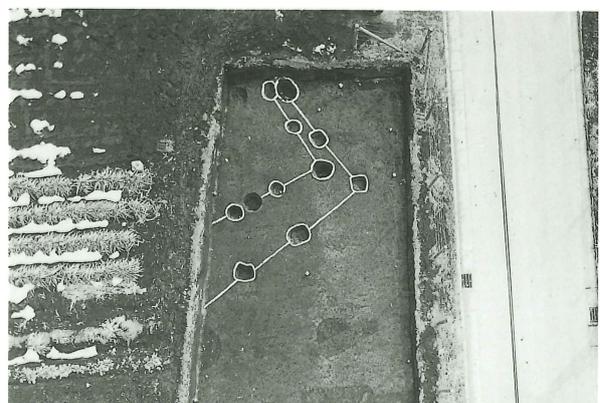
一区全景 (南東より)



一区全景 (北西より)



二区全景 (北西より)



二区全景 (南東より)



第1号住居跡-1



第1号住居跡-9



第1号住居跡-10



第1号住居跡-11



第1号住居跡-12



第2号住居跡-6



第2号住居跡-7



第2号住居跡-8



第2号住居跡-9



第2号住居跡-11



第 2 号住居跡-10



第 2 号住居跡-12



第 2 号住居跡-13



第 2 号住居跡-10



第 2 号住居跡-14



第 2 号住居跡-20



第 3 号住居跡- 2



第 5 号住居跡- 1



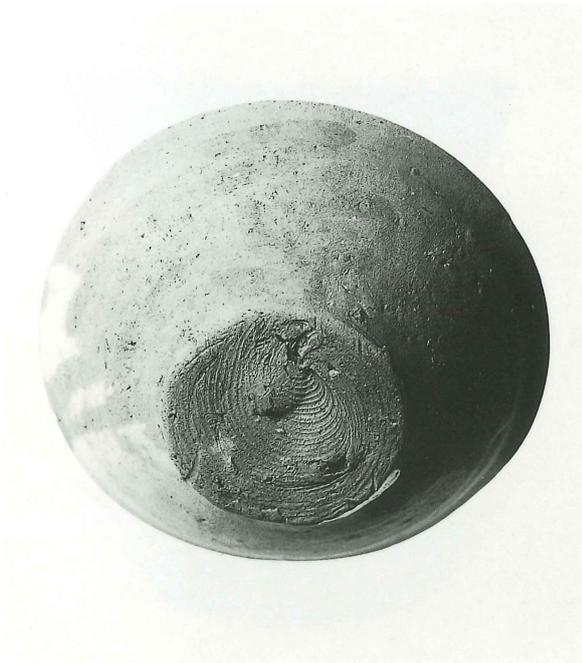
第 5 号住居跡- 5



第5号住居跡-7



第6号住居跡-2



第6号住居跡-7



第7号住居跡-5



第6号住居跡-7



第6号住居跡-4



第7号住居跡-5



第7号住居跡-2



第7号住居跡-4



第8号住居跡-1



第8号住居跡-3



第9号住居跡-5



第9号住居跡-6



第9号住居跡-7



第9号住居跡-8



第9号住居跡-10



第10号住居跡-5



第10号住居跡-6



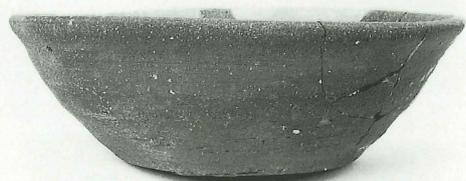
第10号住居跡-7



第10号住居跡-8



第10号住居跡-9



第10号住居跡-10



第10号住居跡-13



第10号住居跡-12



第12号住居跡-1



第10号住居跡-13



第 1 号住居跡—16



第 1 号住居跡—18



第 2 号住居跡—15



第 2 号住居跡—28



第 4 号住居跡—12



第 4 号住居跡—13



第5号住居跡-8



第2号住居跡-27



第5号住居跡-9



第10号住居跡-16



第4号住居跡-14



第7号住居跡—7



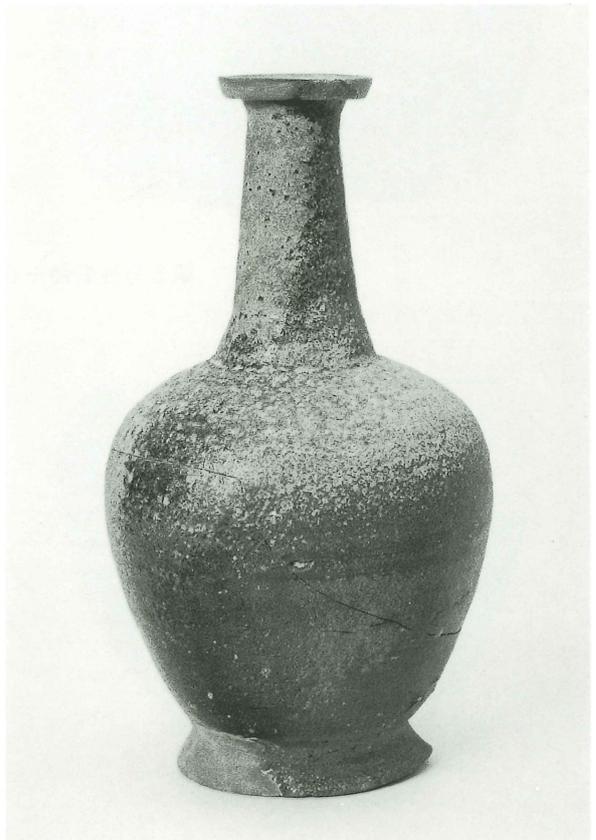
第10号住居跡—9



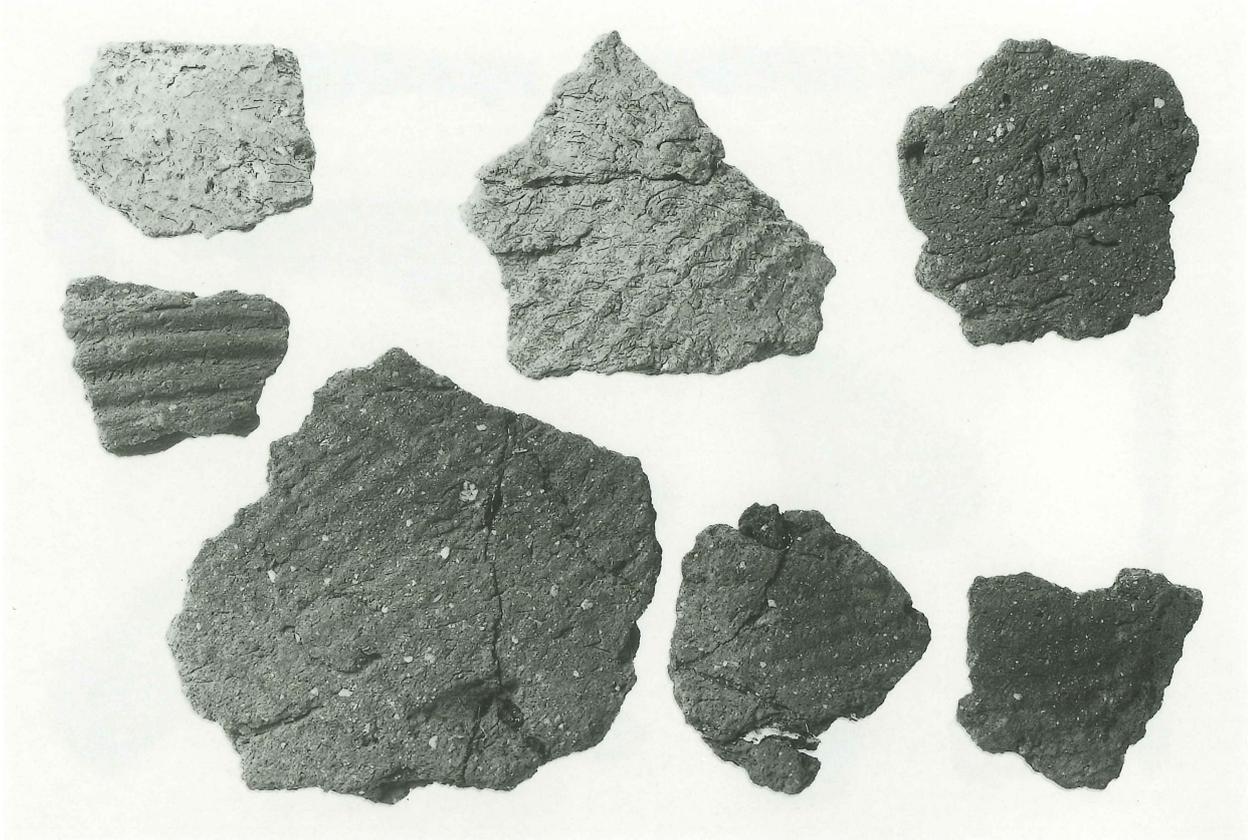
第8号住居跡—8



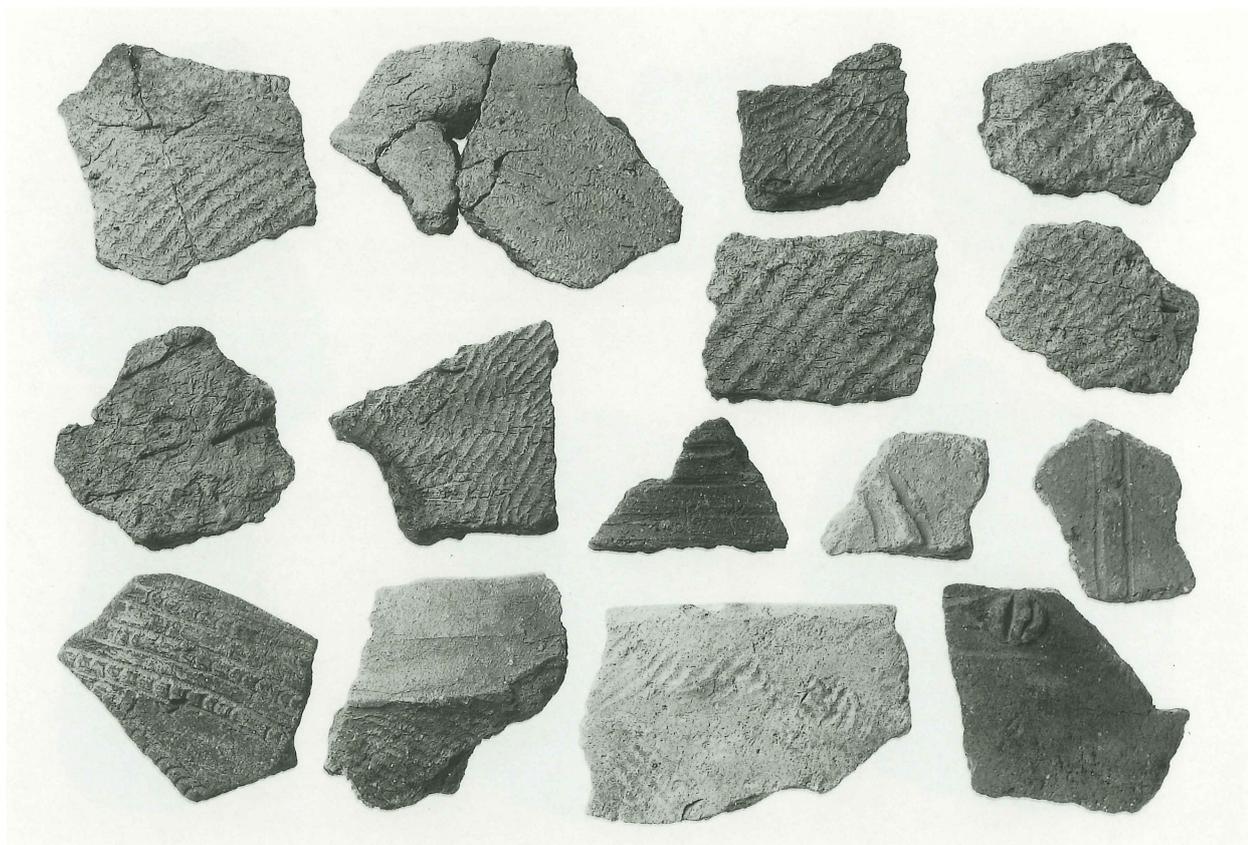
第8号住居跡—8



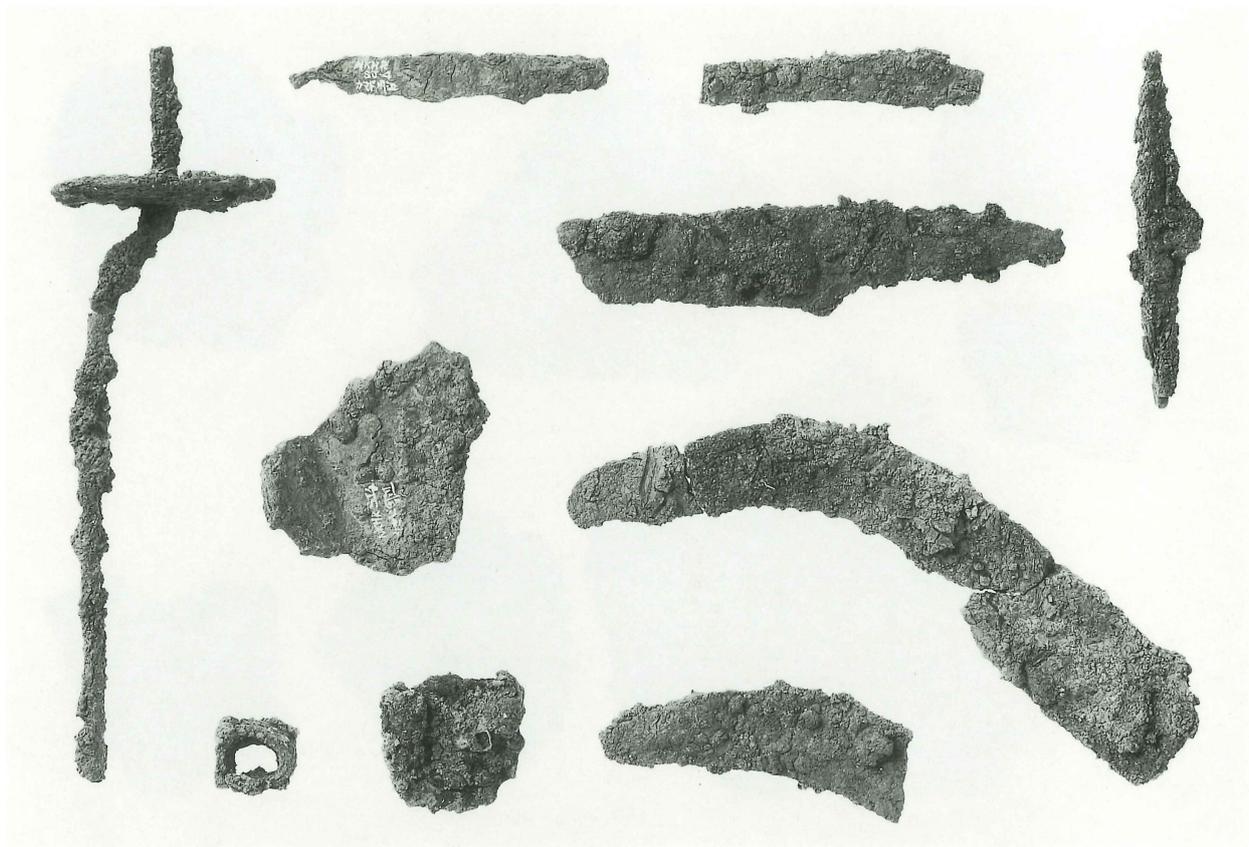
第10号住居跡—17



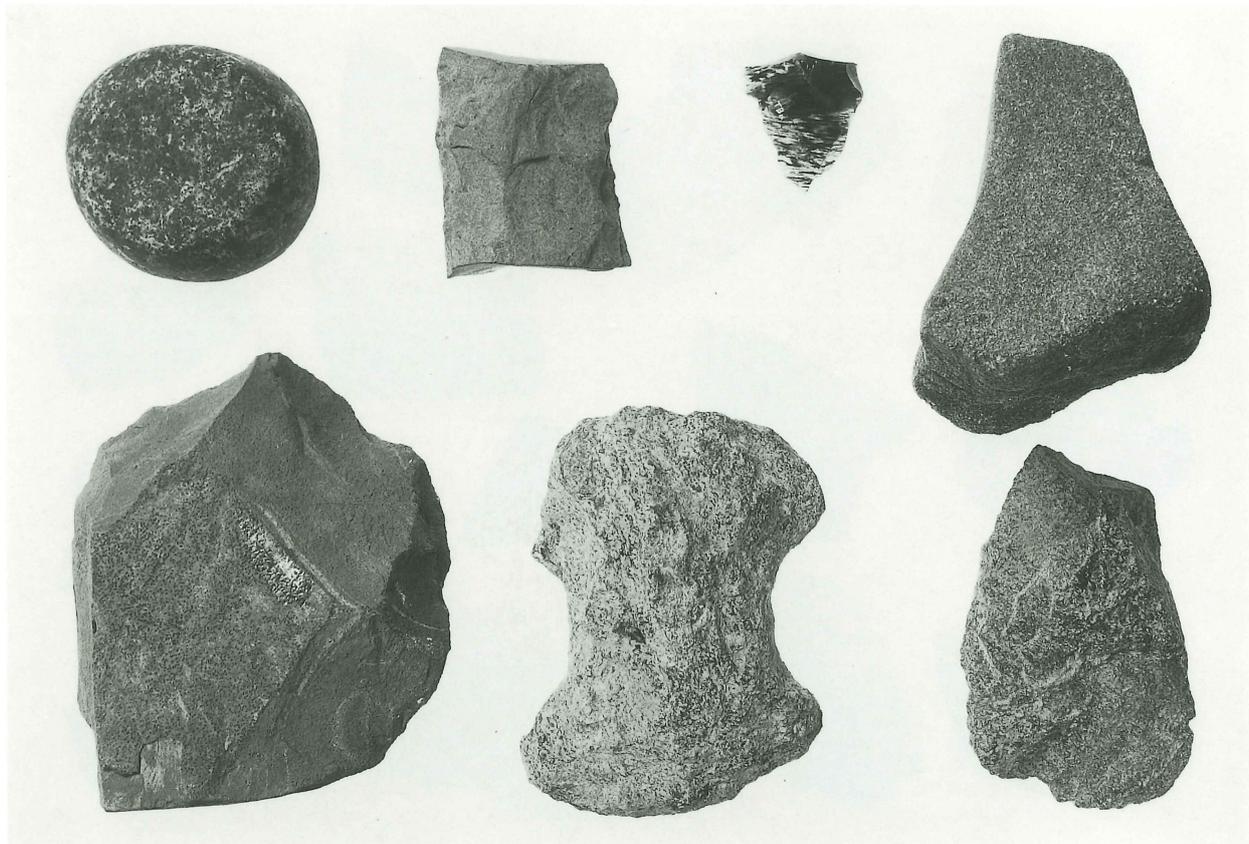
第4号土壙出土遺物



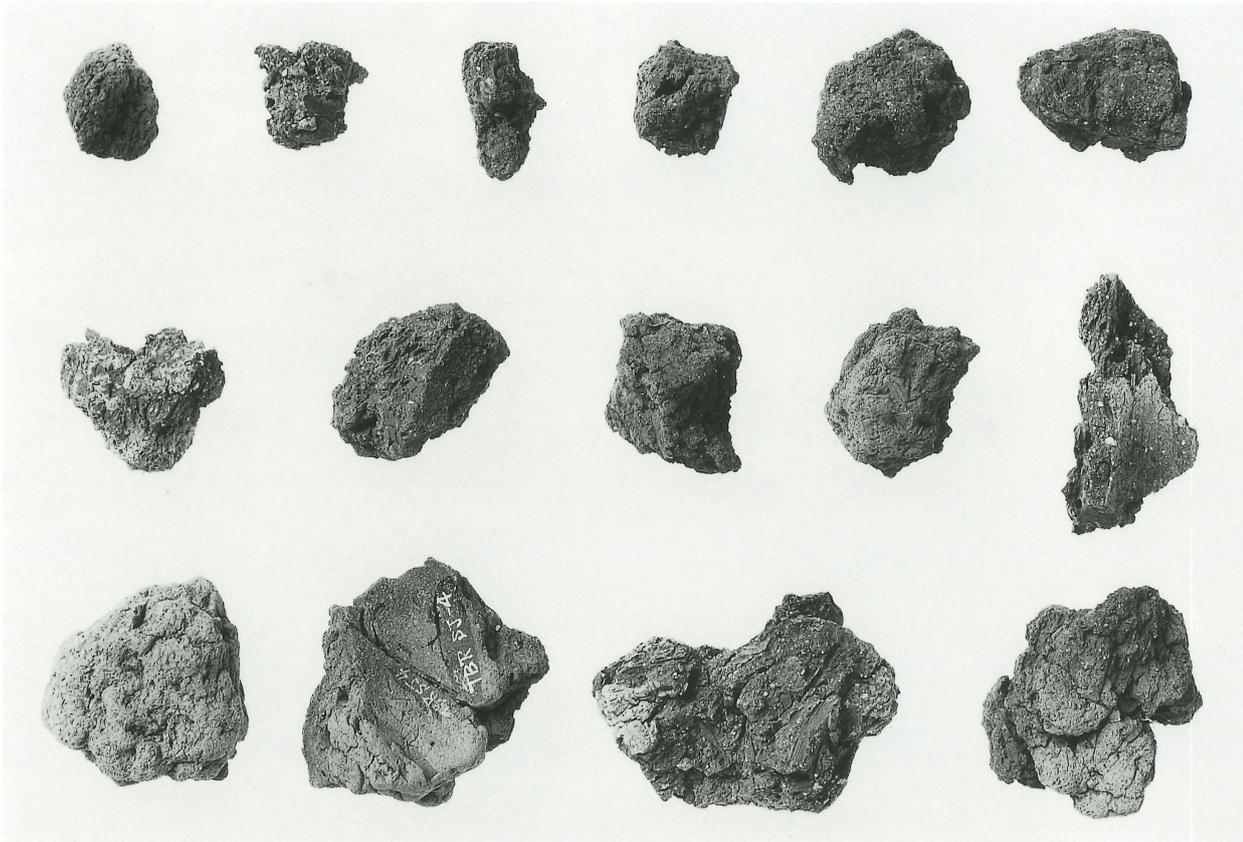
遺構外出土遺物



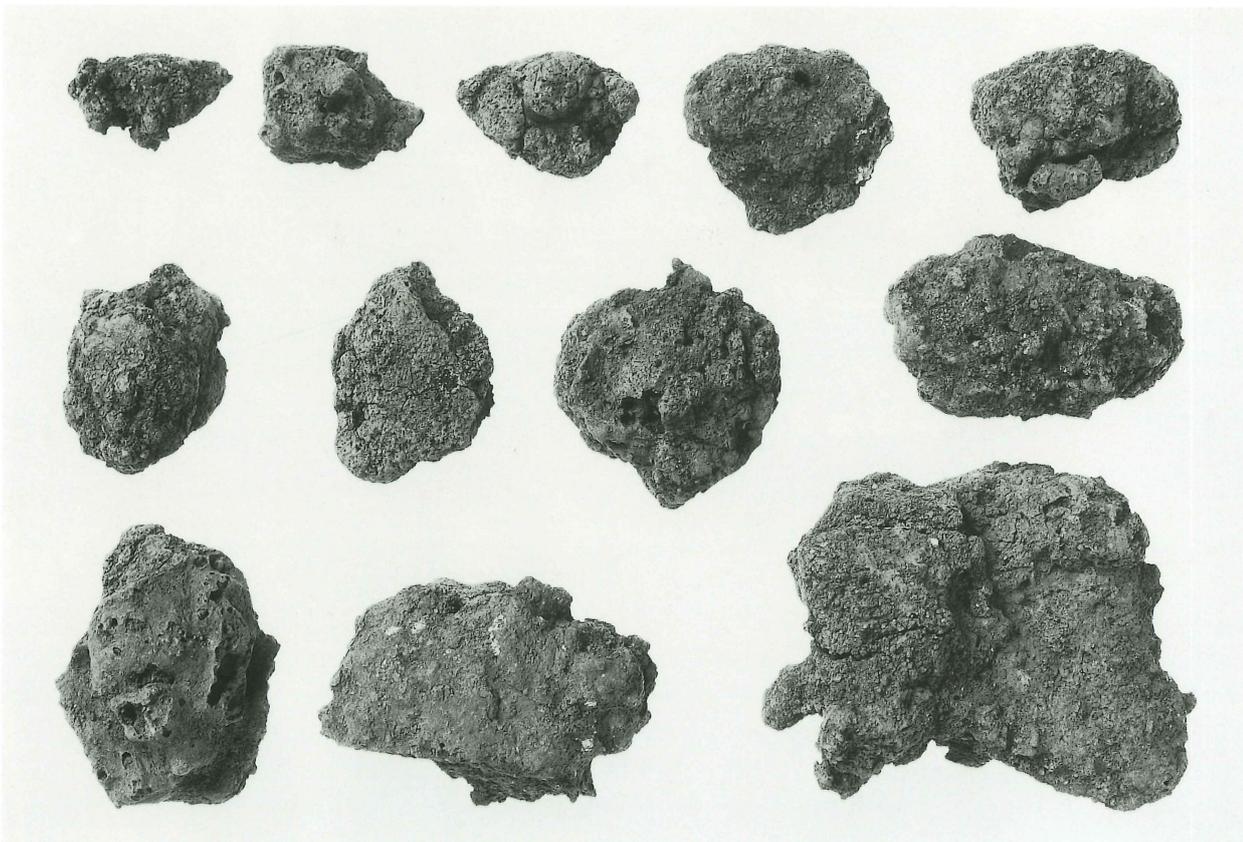
戸張・中原遺跡調査区内出土鉄製品



調査区内出土石器・石製品



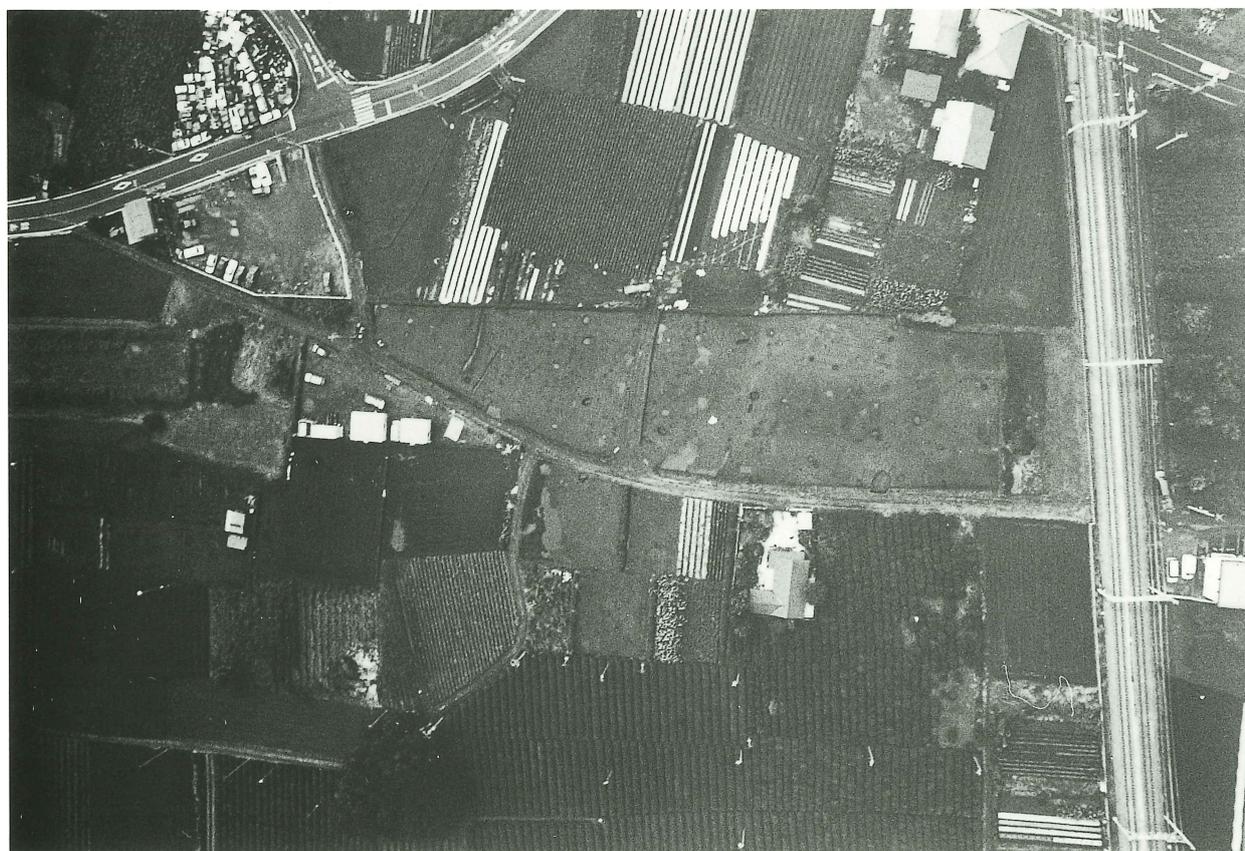
第4号住居跡出土羽口



第4号住居跡出土鉄滓



中原遺跡調査区全景（北より）



中原遺跡調査区全景（東より）



第1号住居跡



第1号住居跡遺物出土状況



第1号住居跡出土遺物



第1号住居跡カマド



第2号住居跡



第2号住居跡カマド



第3号住居跡



第3号住居跡カマド



第4号住居跡



第4号住居跡遺物出土状況



第4号住居跡カマド



第4号住居跡カマド出土遺物



第5号住居跡



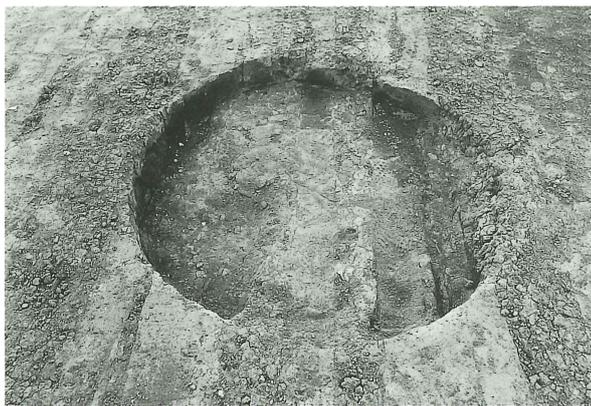
第5号住居跡張出部



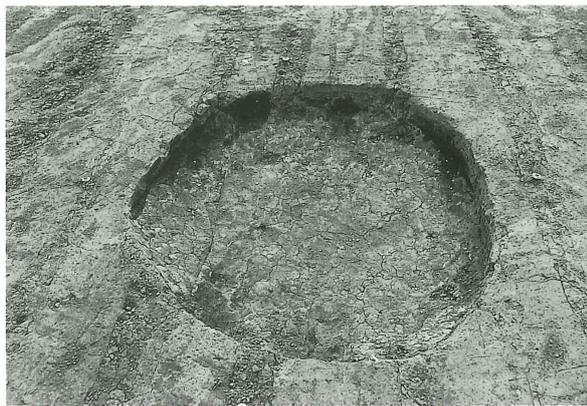
第5号住居跡出土遺物



第5号住居跡炉



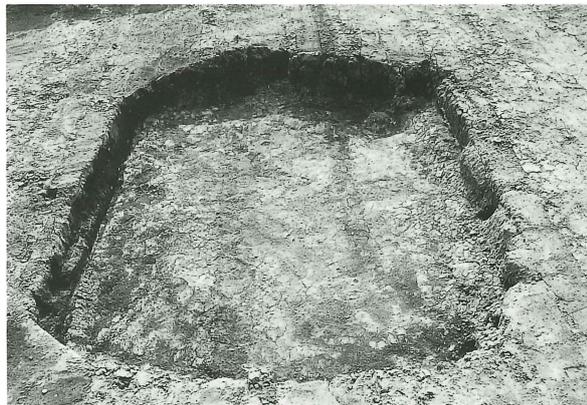
第1号土坑



第2号土坑



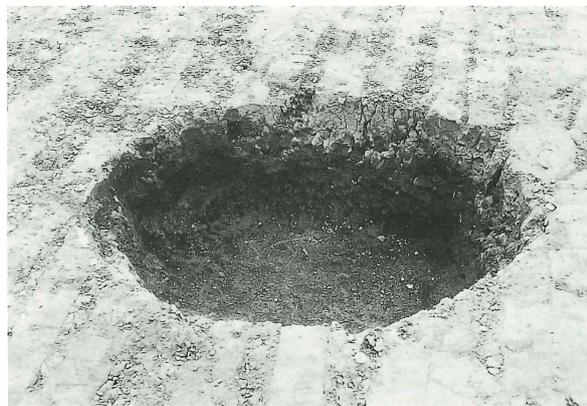
第3号土坑



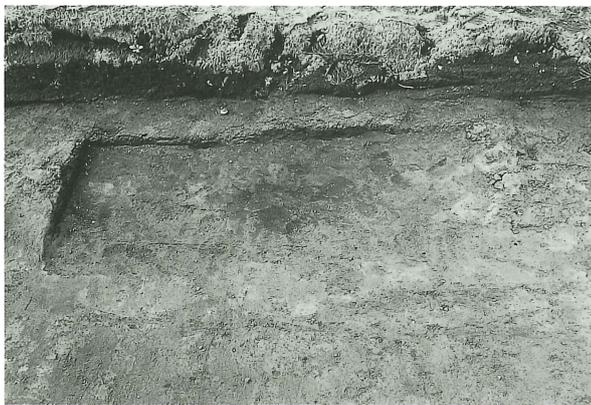
第4号土坑



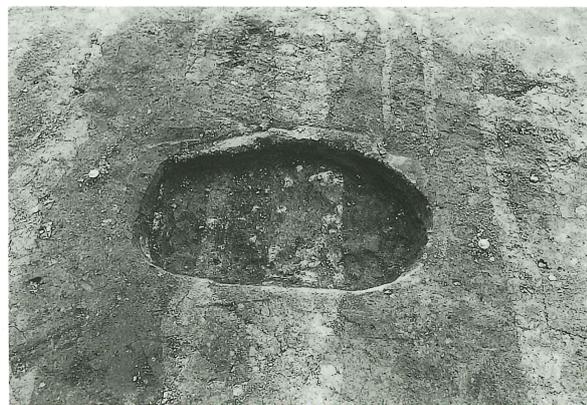
第5号土坑



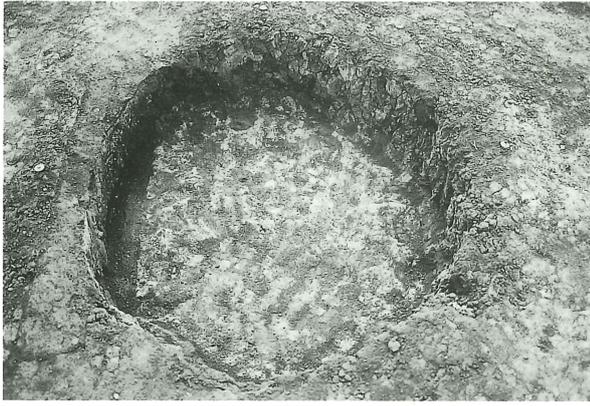
第6号土坑



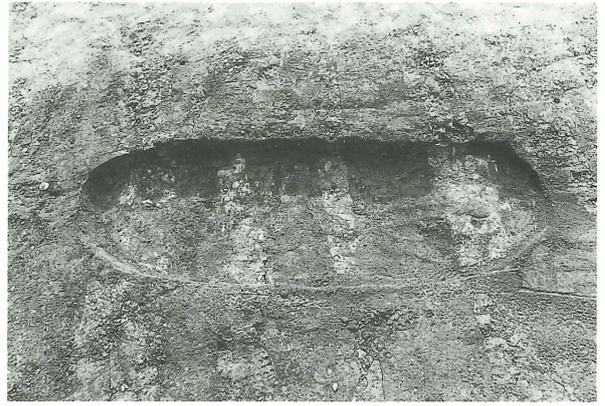
第7号土坑



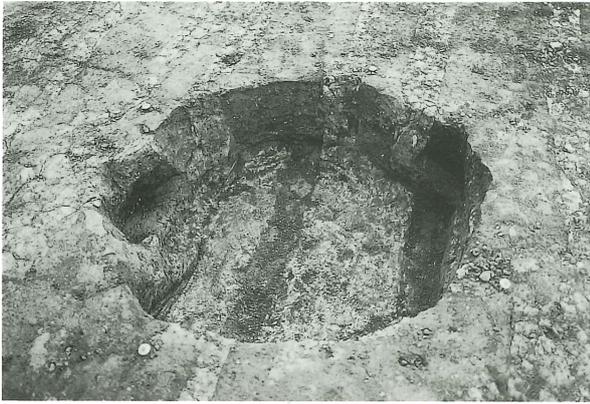
第8号土坑



第9号土坑



第10号土坑



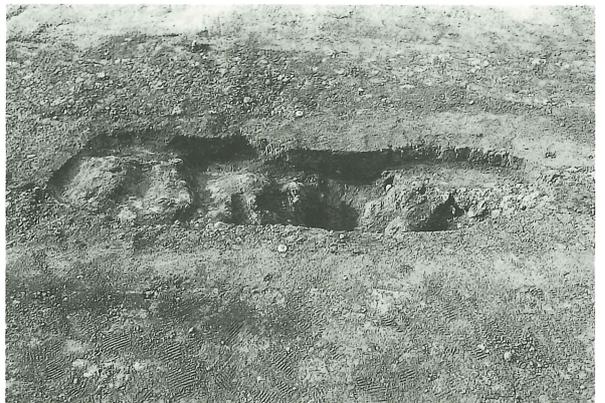
第11号土坑



第12号土坑



第16号土坑



第17号土坑



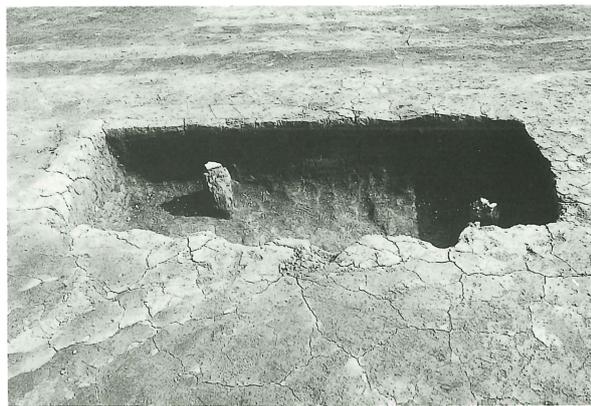
第18号土坑



第19号土坑



第20号土坑



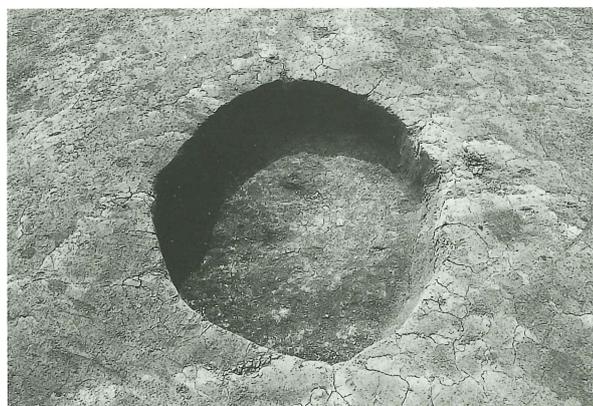
第21号土坑



第22号土坑



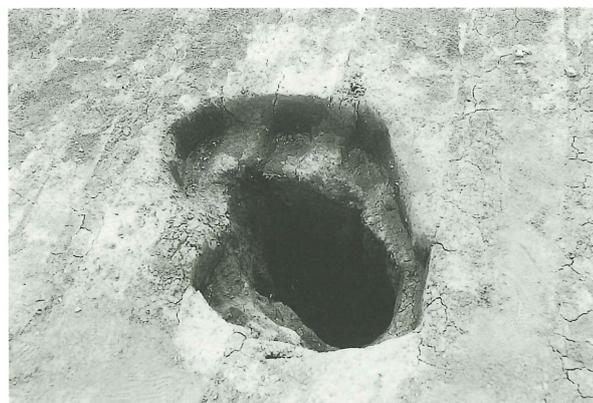
第23号土坑



第24号土坑



第25号土坑



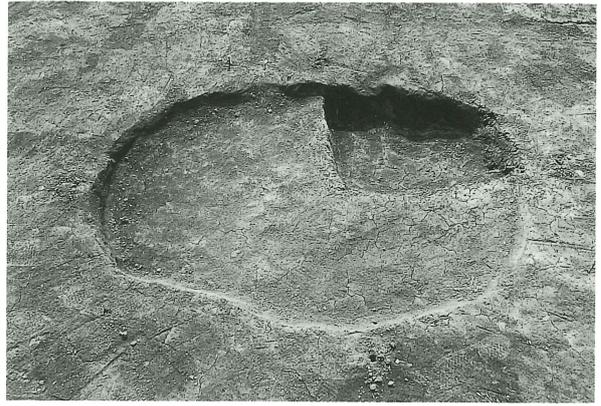
第27号土坑



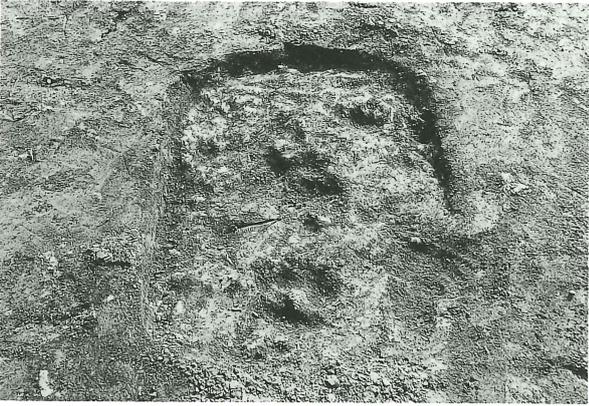
第28号土坑



第29号土壤



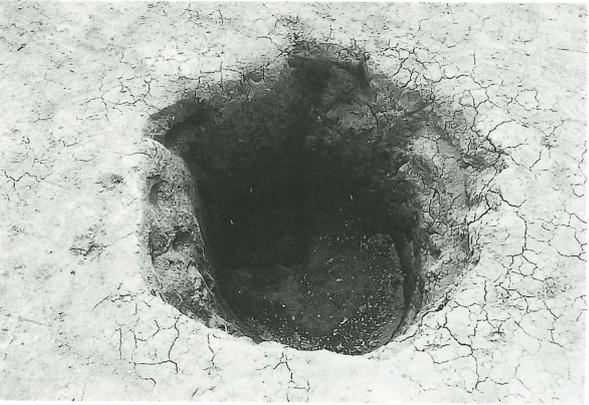
第30号土壤



第31号土壤



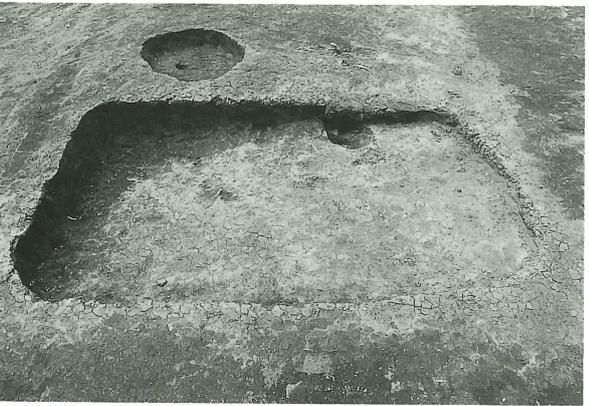
第32号土壤



第33号土壤



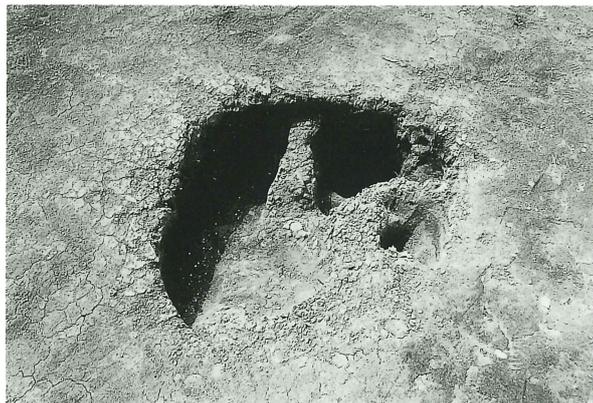
第34号土壤



第35号土壤



第36号土壤



第37号土坑



第38号土坑



第39号土坑



第40号土坑



第41号土坑



第42号土坑



第44号土坑



第45号土坑



第46号土坑



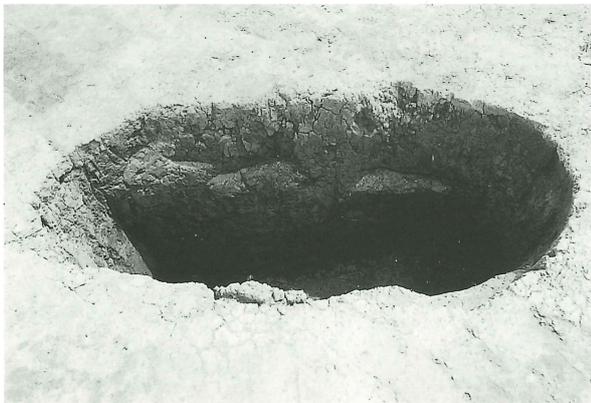
第47号土坑



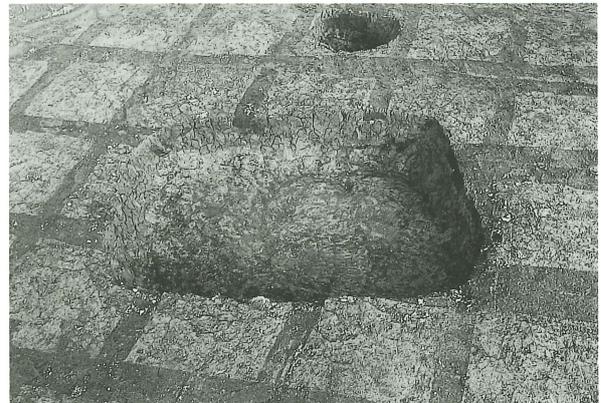
第48号土坑



第49号土坑



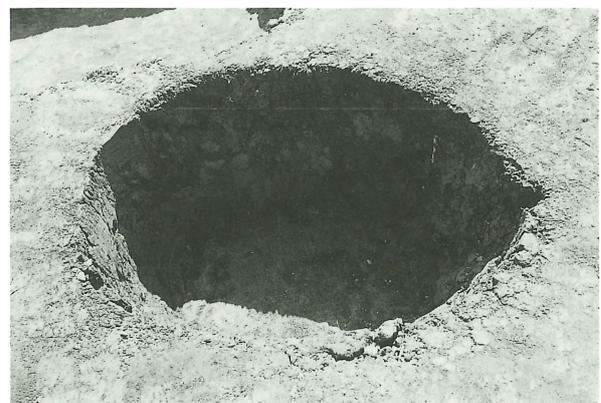
第50号土坑



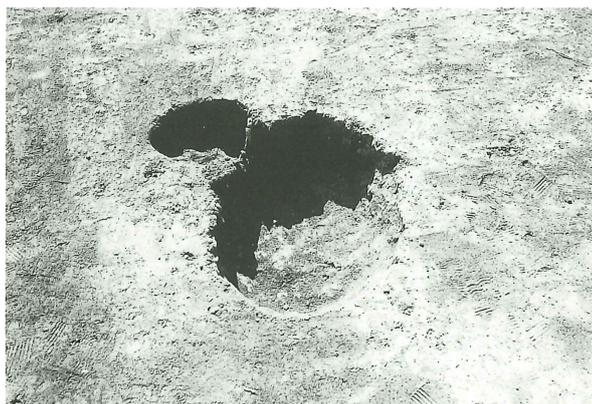
第51号土坑



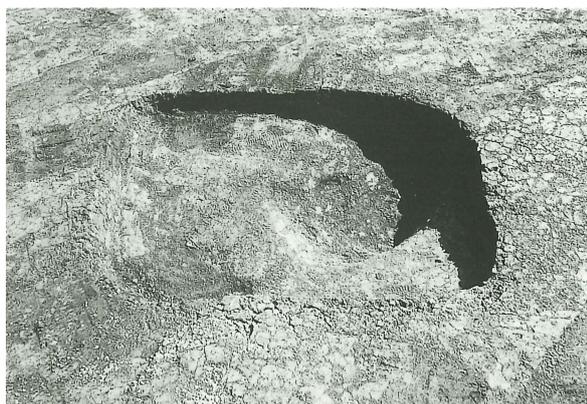
第53号土坑



第54号土坑



第55号土坑



第56号土坑



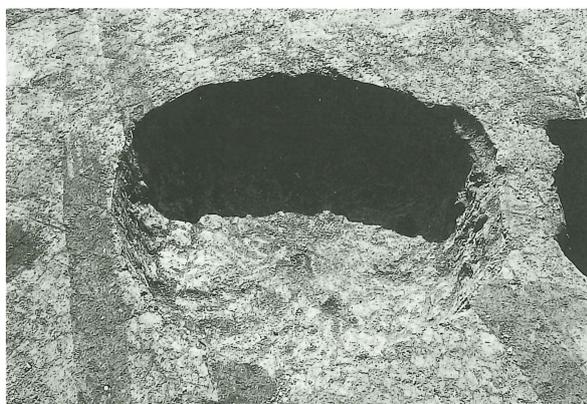
第57号土坑



第58号土坑



第59号土坑



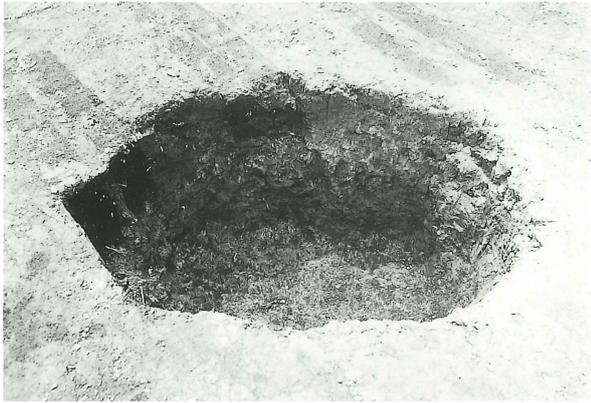
第60号土坑



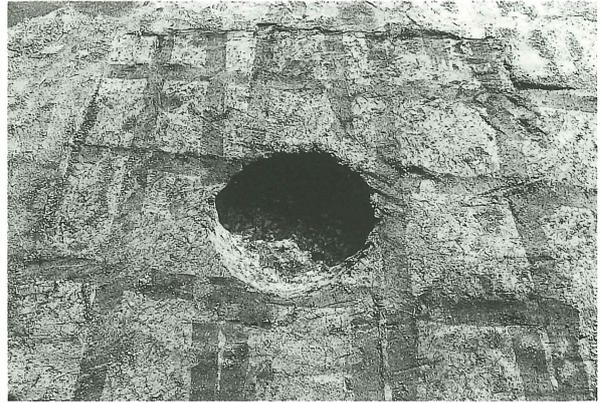
第61号土坑



第64号土坑



第66号土坑



第67号土坑



第68号土坑



第69号土坑



第70号土坑



第71号土坑



第72号土坑



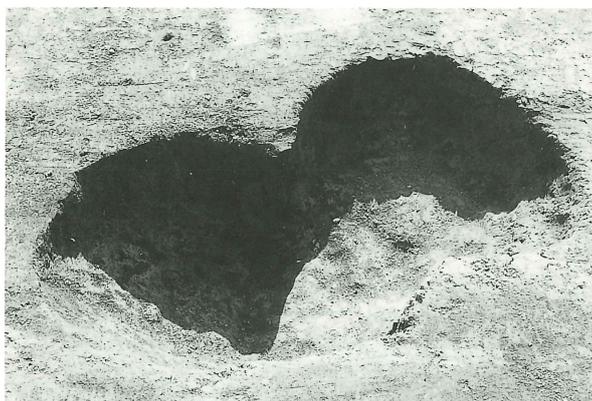
第73号土坑



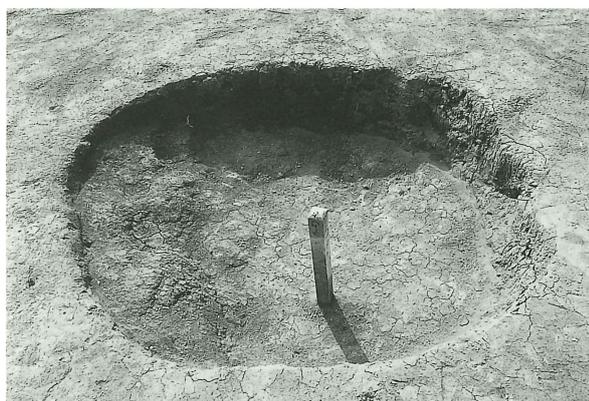
第74号土壙



第75号土壙



第76号土壙



第77号土壙



第78号土壙



第1号掘立柱建物跡



第1号溝跡



第2号溝跡



第 4 号住居跡— 1



第 4 号住居跡— 3



第 4 号住居跡— 4



第 4 号住居跡— 7



第 4 号住居跡— 10



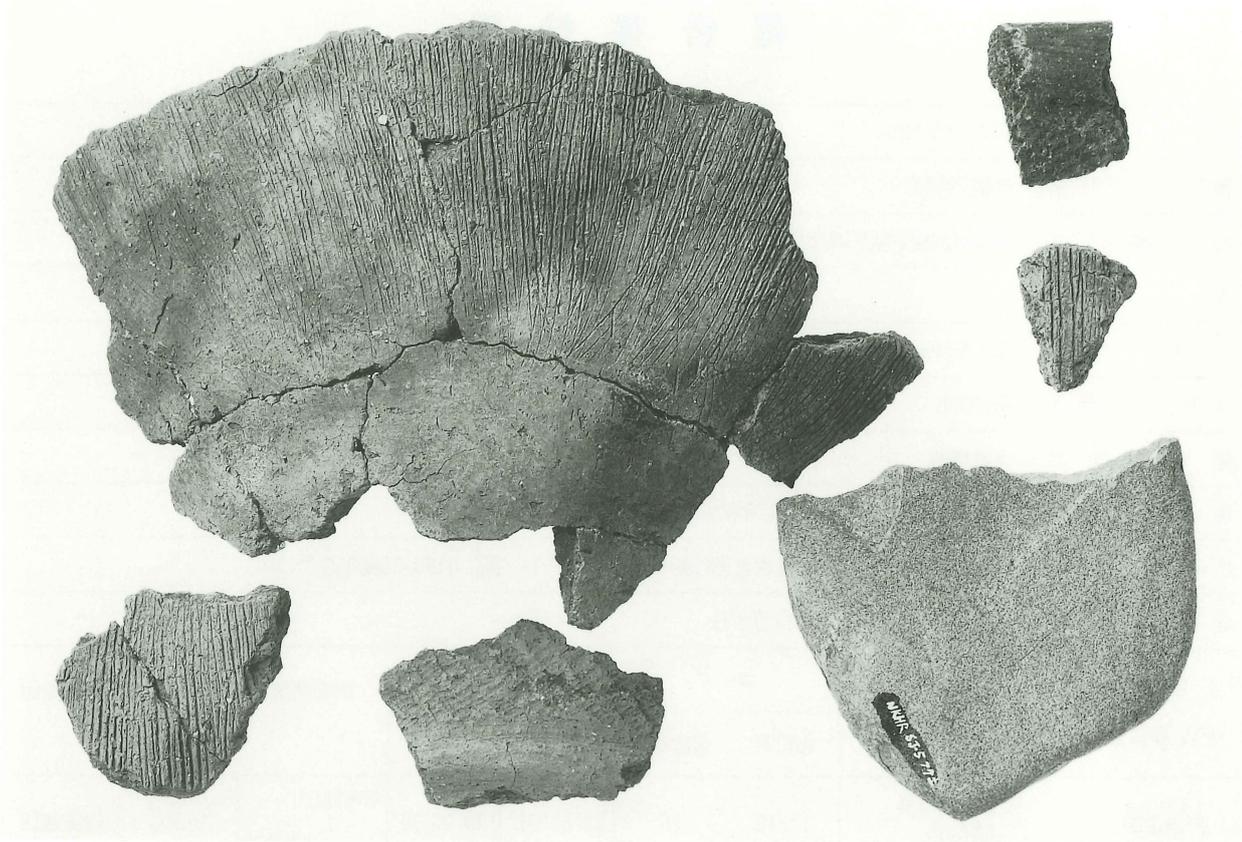
第 5 号住居跡— 2



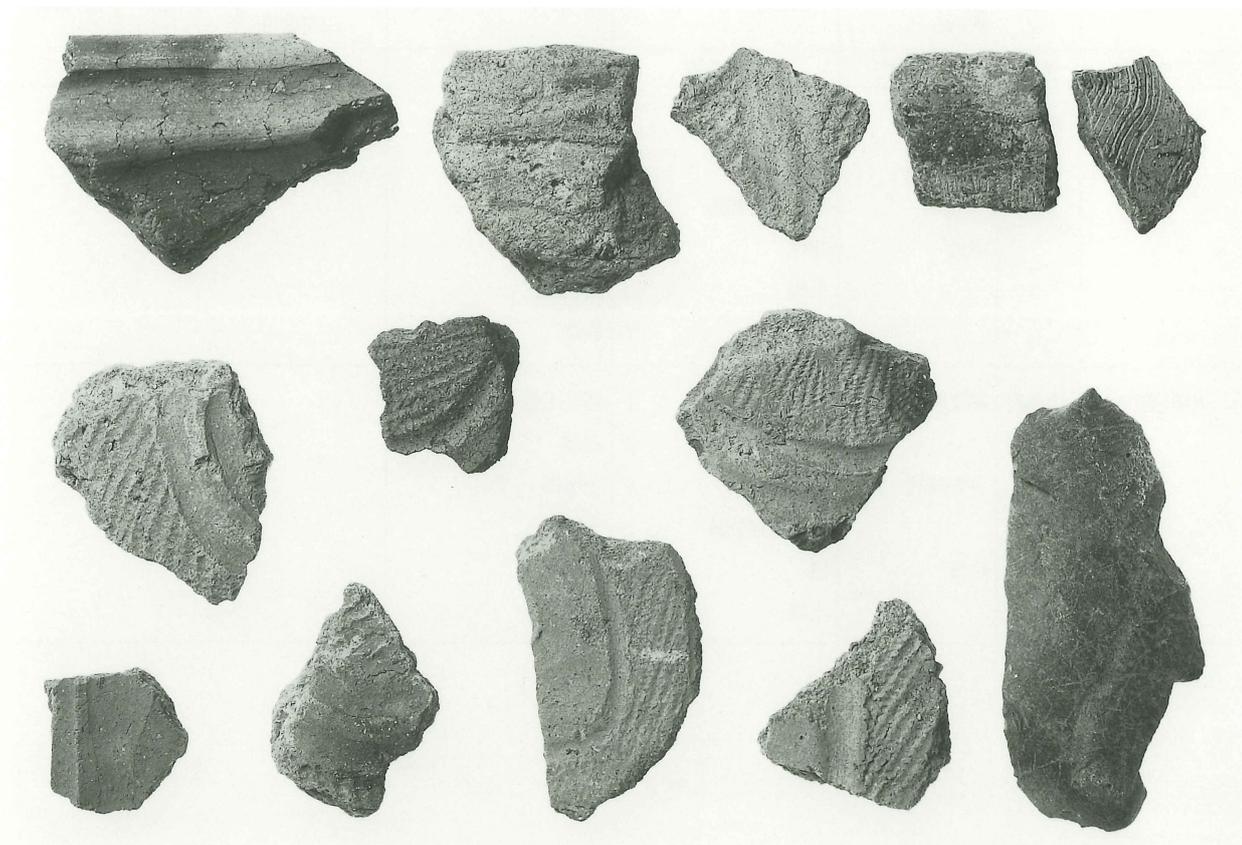
第 1 号住居跡— 5



第 4 号住居跡— 13



第5号住居跡出土遺物



遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	とぼり／なかはら								
書名	戸張／中原								
副書名	県道所沢堀兼狭山線関係埋蔵文化財発掘調査報告								
巻次									
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書								
シリーズ番号	第237集								
編著者氏名	大屋道則								
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団								
所在地	〒369-0108 埼玉県大里郡大里村船木台4-4-1 TEL 0493-39-3955								
発行年月日	西暦1999(平成11)年11月1日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "				
とぼりいせき 戸張遺跡	さいたまけん さやまし 埼玉県狭山市 さやま 狭山537	11215	26	35° 51' 56"	139° 25' 30"	19971101～ 19980131	3,500	道路建設	
なかほらいせき 中原遺跡	さいたまけん さやまし 埼玉県狭山市 さわ 沢746	11215	38	35° 51' 47"	139° 25' 42"	19980701～ 19980930	4,000	道路建設	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
戸張遺跡	集落跡	縄文時代	土壇	1	縄文土器				
		平安時代	住居跡	13	石器				
			掘立柱建物跡	10	土師器				
			中世	井戸	1	須恵器			
				土壇	11	鉄製品			
				溝	1	鉄滓			
中原遺跡	集落跡	縄文時代	住居跡	1	縄文土器				
		平安時代	落とし穴	3	石器				
			住居跡	4	土師器				
			掘立柱建物跡	1	須恵器				
		中世	溝	2	鉄製品				
			土壇	75					

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第237集

狭山市

戸張／中原

県道所沢堀兼狭山線関係
埋蔵文化財発掘調査報告

平成11年10月25日 印刷
平成11年11月1日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108 大里郡大里村船木台4-4-1
電話 0493(39)3955

印刷／誠美堂印刷株式会社